

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20

平成15年度発掘調査報告
(第2分冊)

平成16年3月

鎌倉市教育委員会



妙本寺遺跡



笠置遺跡

総 目 次

(第2分冊)

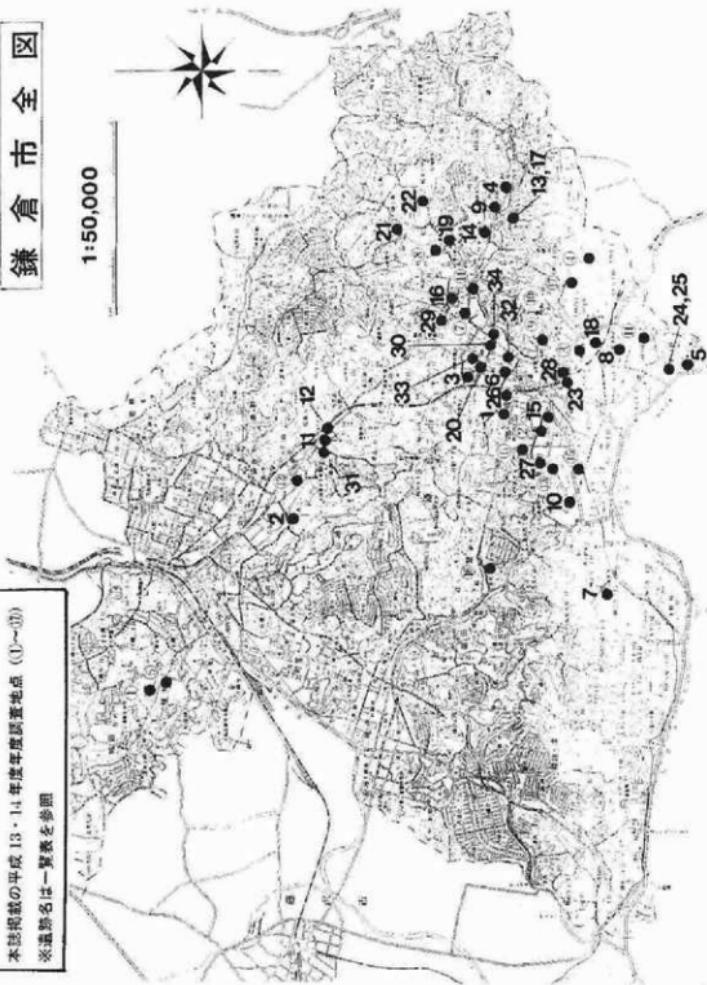
| | |
|------------------------------------|-----|
| 口絵 | I |
| 目次 | III |
| 鎌倉市全国 | V |
| 7 大倉幕府周辺遺跡群(No.49) 雪ノ下三丁目607番1地点 | |
| 第1章 遺跡の概観 | 5 |
| 第2章 検出された遺構と遺物 | 10 |
| 第3章 おわりに | 36 |
| 8 横小路周辺遺跡(No.259) 二階堂字会下323番外地点 | |
| 第1章 遺跡の位置と歴史的環境 | 59 |
| 第2章 出土した遺構と遺物 | 60 |
| 第3章 まとめ | 62 |
| 9 妙本寺遺跡(No.232) 大町一丁目1140番1外地点 | |
| 第1章 遺跡の位置と歴史的環境 | 69 |
| 第2章 調査の経過と層序 | 70 |
| 第3章 検出した遺構と遺物 | 73 |
| 第4章 まとめ | 84 |
| 10 妙本寺遺跡(No.232) 大町一丁目1140番2地点 | |
| 第1章 遺跡の位置と調査の経過 | 109 |
| 第2章 検出遺構と出土遺物 | 112 |
| 第3章 まとめ | 120 |
| 11 新善光寺跡(No.279) 材木座四丁目573番1外地点 | |
| 第1章 遺跡の位置と歴史的環境 | 128 |
| 第2章 調査の経過と層序 | 131 |
| 第3章 検出した遺構と遺物 | 132 |
| 第4章 まとめ | 132 |
| 12 台山遺跡(No.29) 鎌倉市山ノ内字宮下小路819番1外地点 | |
| 第1章 遺跡の位置と歴史的環境 | 154 |
| 第2章 調査の概要 | 157 |
| 第3章 検出遺構と出土遺物 | 159 |
| 第4章 まとめ | 165 |

| | | |
|--|-------|-----|
| 13 箕目遺跡(No.207) 箕目町330番11外地点 | | |
| 第1章 遺跡の位置と歴史的環境 | | 172 |
| 第2章 調査の概要 | | 176 |
| 第3章 検出遺構と出土遺物 | | 179 |
| 14 大倉幕府周辺遺跡群(No.49) 雪ノ下四丁目567番7地点 | | |
| 第1章 調査地点について | | 201 |
| 第2章 調査概要 | | 204 |
| 第3章 調査成果 | | 206 |
| 第4章 まとめ | | 207 |
| 15 長谷小路周辺遺跡(No.236) 由比ガ浜三丁目194番50地点 | | |
| 第1章 環境と立地 | | 218 |
| 第2章 調査の概要 | | 222 |
| 第3章 遺構と遺物 | | 224 |
| 第4章 調査成果 | | 226 |
| 16 北条政村屋敷跡(No.131) 常盤字常松下1005番2地点 | | |
| 第1章 調査地点について | | 250 |
| 第2章 調査の概要 | | 252 |
| 第3章 検出遺構と出土遺物 | | 254 |
| 第4章 まとめ | | 256 |
| 17 名越ヶ谷遺跡(No.231) 大町六丁目1708番4地点 | | |
| 第1章 環境と立地 | | 261 |
| 第2章 調査の概要 | | 264 |
| 第3章 遺構と遺物 | | 266 |
| 第4章 調査成果 | | 271 |

鎌倉市全図

1:50,000

平成15年度の緊急糞便調査地点（1～34）
本誌掲載の平成13・14年度年度調査地点（①～⑩）
※道筋名は一覧表を参照



おおくらばく ふ しょうへん い せきぐん
大倉幕府周辺遺跡群 (No.49)

雪ノ下三丁目607番 1 地点

例　　言

1. 本報告書は、神奈川県鎌倉市雪ノ下三丁目607番地1 地点における、自己用店舗併用住宅の建設に伴う国庫補助事業の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は平成13年11月8日～同年12月20日までの期間、鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は43.66m²である
3. 現地での調査体制は以下の通りである。
調査主体：鎌倉市教育委員会
調査担当：降矢順子
調査員：菊川英政
調査補助員：根本睦子、長沢保崇、松本卓也、遠藤恵理子、青木美枝子
協力機関：（社）鎌倉市シルバー人材センター
4. 整理作業及び本書の作成は以下の通りである。
挿図・図版作成：降矢順子、矢能明子
遺物実測・トレース：矢能明子、八木沼ひとみ、野村あおみ
5. 本書の執筆、編集は降矢順子が行ったが、第2章8の軟体動物遺存体については、小島奈々子が執筆した。
6. 本書の遺構、遺物の縮尺は以下の通りである。
遺構全体図 1/80、個別遺構 1/60。
遺構図の水糸高は、海拔を示す。
遺物実測は1/3、一部常滑窯については1/4、錢は1/1。
遺構図には以下のスクリーントーンを使用している。
かわらけ溜り
炭化物散布範囲
貝がら集中範囲
7. 発掘調査において鎌倉市教育委員会、また古代（弥生～古墳）の遺物についての出土品整理にあたっては、大島慎一氏（小田原市教育委員会）に御教え願った。
軟体動物遺体の同定および原稿作成にあたっては、倉持卓司氏に御教え願った。
8. 出土品、図面などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

本文目次

| | |
|-----------------------------|----|
| 第1章 遺跡の概観..... | 5 |
| 第1節 遺跡の立地と歴史的環境..... | 5 |
| 第2節 調査の経過と方法..... | 7 |
| 第3節 堆積土層..... | 8 |
| 第2章 検出された遺構と遺物..... | 10 |
| 第1節 第1面検出までの遺構と遺物..... | 10 |
| 第2節 第2面検出までの遺構と遺物..... | 11 |
| 第3節 第3面検出までの遺構と遺物..... | 13 |
| 第4節 第4面検出までの遺構と遺物..... | 19 |
| 第5節 第5面検出までの遺構と遺物..... | 24 |
| 第6節 古代以前の出土遺物..... | 32 |
| 第7節 大倉幕府周辺遺跡出土の軟体動物遺存体..... | 34 |
| 第3章 おわりに..... | 36 |

挿図目次

| | | | |
|----------------------|----|-----------------------|----|
| 図1 調査地点の位置図..... | 5 | 図19 井戸1 | 20 |
| 図2 調査地点の周辺の遺跡..... | 6 | 図20 4面全体図..... | 21 |
| 図3 調査区グリッド設定図..... | 7 | 図21 4面出土遺物..... | 22 |
| 図4 確認調査時の堆積土層..... | 8 | 図22 4面遺構出土遺物（1）..... | 23 |
| 図5 確認調査時の出土遺物..... | 8 | 図23 溝3 | 24 |
| 図6 調査区最終面・土層堆積図..... | 9 | 図24 4面遺構出土遺物（2）..... | 25 |
| 図7 1面全体図..... | 11 | 図25 4面遺構出土遺物（3）..... | 26 |
| 図8 1面までの出土遺物（1）..... | 12 | 図26 溝2 | 26 |
| 図9 1面までの出土遺物（2）..... | 13 | 図27 5面全体図..... | 27 |
| 図10 2面全体図..... | 14 | 図28 5面出土遺物（1）..... | 28 |
| 図11 2面出土遺物（1）..... | 15 | 図29 5面出土遺物（2）..... | 29 |
| 図12 2面出土遺物（2）..... | 15 | 図30 溝1 | 29 |
| 図13 2面遺構出土遺物 | 16 | 図31 5面出土遺物（3）..... | 30 |
| 図14 1号土壙..... | 17 | 図32 5面遺構出土遺物（1）..... | 31 |
| 図15 3面全体図..... | 17 | 図33 5面遺構出土遺物（2）..... | 32 |
| 図16 3面出土遺物（1）..... | 18 | 図34 古代以前の出土遺物..... | 33 |
| 図17 3面出土遺物（2）..... | 19 | 図35 周辺の調査地点との対比図..... | 36 |
| 図18 3面遺構出土遺物..... | 20 | | |

図版目次

| | | | | |
|------|----------------------|----------------------|-----------------------|------------|
| 図版1 | 1 1面全景 | 2 1面全景 | 3 1面鎌倉石列 | 4 1面近世基礎石列 |
| | 5 2面全景 | 6 2面出土遺物 | 7 2面出土遺物(鯨骨) | 8 2面全景 |
| 図版2 | 1 2面土壤1 | 2 2面溝2断面 | 3 2面土丹薩石と遺物出土状況(かわらけ) | |
| | 4 2面かわらけ出土状況 | 5 2面検出土壙・ピット群 | | |
| | 6 3面琥珀出土状況 | 7 3面遺物出土状況(かわらけ) | | |
| | 8 3面玉砂利出土状況 | | | |
| 図版3 | 1 3面土壤161・122・ピット125 | 2 4面土壤100と出土遺物(かわらけ) | | |
| | 3 3面柱穴 | 4 4面土壤(造構219) | 5 3面全景 | |
| | 6 4面柱穴群 | 7 3面土壤147 | 8 4面全景 | |
| 図版4 | 1 3面炭化物・貝殻出土範囲 | 2 4面土壤159 | | |
| | 3 5面検出井戸址1 | 4 5面土壤出土遺物 | | |
| | 5 5面柱穴群 | 6 5面大柱穴内柱痕出土遺物(白磁) | | |
| | 7 5面出土遺物(瓦) | 8 5面全景 | | |
| 図版5 | 1 5面溝2 | 2 5面下溝2とピット群 | | |
| | 3 5面柱穴検出柱痕(北から) | 4 5面柱穴内検出礎石 | | |
| | 5 5面溝3柱穴群(東から) | 6 5面下検出溝1(東から) | 7 5面下全景(北西から) | |
| 図版6 | 貿易陶磁器 | | | 50 |
| 図版7 | 国内産陶器(1) | | | 51 |
| 図版8 | 国内産陶器(2) | | | 52 |
| 図版9 | かわらけ | | | 53 |
| 図版10 | 磨常滑・石・鉄製品 | | | 54 |
| 図版11 | 鉄製品・瓦 | | | 55 |
| 図版12 | 古代以前の遺物 | | | 56 |

表目次

| | | |
|----|-----------|----|
| 表1 | 出土遺物観察表 | 37 |
| 表2 | 出土遺物種別点数表 | 42 |
| 表3 | 出土遺物種別点数表 | 44 |

第1章 遺跡の概観

第1節 遺跡の立地と歴史的環境

本遺跡は、鶴岡八幡宮入り口前より、県道金沢・鎌倉線を東に進み、筋違橋交差点を50m程東金沢方面へ進んだところに位置している。神奈川県遺跡台帳・大倉幕府周辺遺跡群（No.49）として包括されている地域の西端の部分にある。

「大倉（大蔵）」の名は『吾妻鏡』等の資料で大倉船荷として散見され、地域総称として南北は瑞泉寺辺りから滑川まで、東西は鶴岡八幡宮から朝比奈切通しまでとされる。治承4年（1180年）石橋山での挙兵後、鎌倉に入った源頼朝が居館を新築しこの付近に幕府を開いたことから大倉幕府と呼ばれた。嘉祐元年（1225年）の焼失で幕府が若宮大路東側に移転されるまで、鎌倉の中核であり、周囲には執政期間の政所が置かれ多くの御家人・被官の屋敷地などもあったと推定される。また、本地点一帯は、滑川右岸に広がる沖積低地上に立地し早くから拓けていた場所である。南御門遺跡（第2図-14）で検出された弥生時代中期から、後期の竪穴住居址群、古墳時代後期の濠流路（第2図-21）平安時代末期の土塹墓（第2図-2）など中世以前の遺構・遺物も数多く検出されている。

中世においては、源頼朝が幕府を開いた地として知られ大倉幕府は調査地点の東側東西約280m、南北220mが範囲とされている。

文献史料などによると、幕府内には寝殿、対屋、大御所、小御所、常御所、また東西南北に門がついていたであろうと考えられているが、調査において現段階で、唯一南東角隅の調査地点（第2図-21）でも中世前期の遺構は明らかにされていない。



図1 調査地点の位置図



図2 調査地点の周辺の遺跡

●調査地点 大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下三丁目607番1地点

- | | |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 1. 鶴岡八幡宮境内 直会殿用地 | 11. 大倉幕府周辺道路群 雪ノ下四丁目620番5地点 |
| 2. 鶴岡八幡宮境内 錦合国宝館用地 | 12. 大倉南御門遺跡B地点 |
| 3. 鶴岡八幡宮境内 研修道場用地 | 13. 大倉南御門遺跡C地点 |
| 4. 鶴岡八幡宮境内 遺跡（源平茶屋跡地） | 14. 大倉南御門遺跡A地点 |
| 5. 政所跡 雪ノ下三丁目988番地点 | 15. 大倉幕府周辺道路群 雪ノ下三丁目607番外地点 |
| 6. 政所跡 雪ノ下三丁目987番1・2地点 | 16. 大倉幕府周辺遺跡群 二附堂字佐柄36番1地点 |
| 7. 北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目H395番地点 | 17. 大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下大倉耕地565番4地点 |
| 8. 政所跡 雪ノ下三丁目966番1地点 | 18. 政所跡 |
| 9. 政所跡 雪ノ下三丁目965番1地点 | 19. 政所跡 |
| 10. 大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下三丁目H1606番1地点 | 20. 北条高時邸跡 小町三丁目H426番3地点 |
| | 21. 大倉幕府周辺道路群 雪ノ下字大倉耕地569番1地点 |

大倉幕府は嘉禄元年（1225年）12月に焼失し、若宮大路の東側へ移転している。大倉幕府の執政期間である政所、調査地点西側の筋違橋を渡った辺りと推定されている。同範囲内では、庁屋（政所）、公文所・問注屋・御倉などの存在が知られるが、幕府跡と同様に未確認であり、わずかに南辺と東辺で行われた発掘調査（第2図5-6-8-9）の成果から南辺を土塁で東辺を柵（板塀？）で囲んでいたことが判明した。政所も大倉幕府とともに移転していると考えられる。

幕府と政所に挟まれた地域では、筋違橋に接する北東側（第2図-10）で調査が行われている。西側を西御門川に沿っていた柵列と溝で囲み、南側を土塁（築地？）と溝で囲んだ大規模な屋敷地が存在したものと推測され、相前後する時期には主軸方位の異なる東西方向の区画溝が数条検出されている。時期は、13-15世紀に渡るものである。

南御門遺跡（第2図13-14）では、現在の六浦路（県道、金沢・鎌倉線）から10m程南で14世紀代の屋敷地が検出されている。

調査地点の西側にある筋違橋は、文永2年（1265年）3月に鎌倉での商業地の一つとして「小町屋、売買設」の許可された場所である。

鎌倉が衰微する15世紀以降では、遺跡地周辺に係わる文献史料もなく、検出された井戸址・土壙・溝・材などで、建物址を含む遺跡の全体像、生活の様相を検討していくのは不十分であり、調査にかかるすべての者が同一目的・意識をもって取り組むことにより、明らかにされることは多いと考える。

第2節 調査の経過と方法

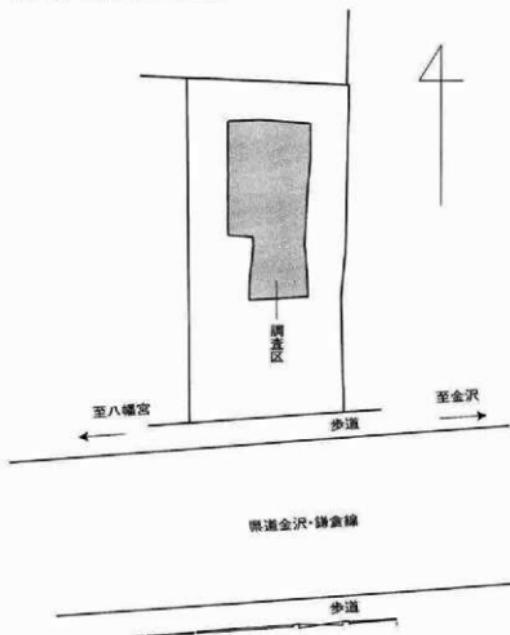


図3 調査区グリッド設定図

調査は個人住宅店舗併用の宅地造成に伴う事前調査として、約44m²の敷地を対称に平成13年11月8日より表土掘削を開始し、40日の予定で調査を開始した。事前の試掘調査の結果から、比較的浅いところ（現地表下60cm）のところで中世遺構面・遺物が確認された。

この試掘の結果、埋蔵文化財の記録保存が必要であると認められた。この試掘結果をもとに本調査を実施する運びとなった。調査区が近隣と接触していたため、危険が生じる事を恐れ周囲を東西2m、南北2mを残し、調査を設定した。

調査は現地表下約60cmを重機に依り掘削し、人力により精査遺構確認を行って進めて行った。

調査方法として、4級基準点E122 ($X = -75372.455$, $Y = -24656.791$) を支点とし、3級基準点53208 ($X = -7$, $Y = -24708.360$) を見返り、調査区外西部に調査原点 ($X = -75356.000$, $Y = -24663.000$) と、真北にY値の同じ見返り点の2点を設定した。

これを基準に調査原点を ($x = 0$, $Y = 0$) とし、南北方向をX径、東西方向をY径として2m四方のグリッドを組み、機械測量と併用して調査を進めて行った。調査は平成13年12月20日に終了した。

第3節 堆積土層

本地点で確認された堆積土層は5面である。1面掘削面は現地表下40cmすべて人為的な埋め土であり、近世擾乱層である。ゆえに確認できた中世生活面は4枚である。また5面の一部で検出された遺構

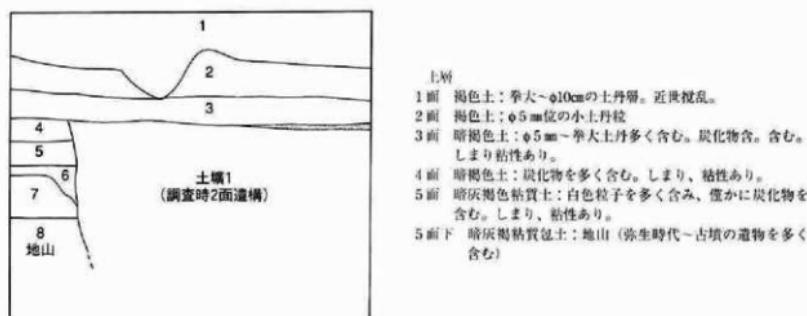


図4 確認調査時の堆積土層

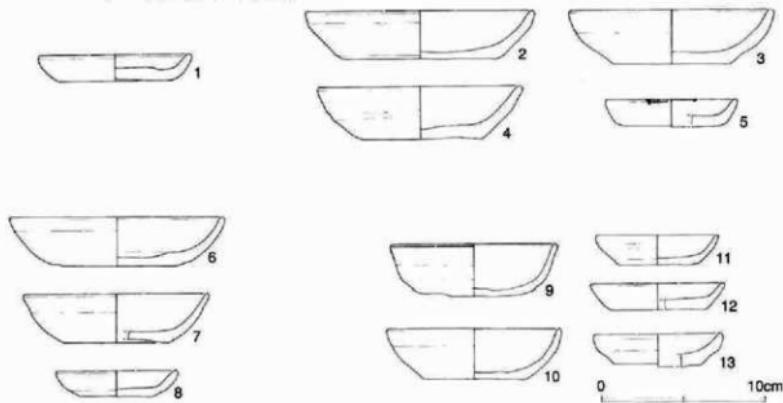


図5 確認調査時の出土遺物

の中で溝1。P141・P155・P157・P158・P159・P174・P196は5面で検出された他の遺構よりわずかな時間差があるものと思われる。堆積土層図については面の捉え方が調査時と同一であったため確認調査時のものを使用している。

年代観は、1面は震災後の近世整地層、2面は中世後期、3面は造成は弱いが14世紀から15世紀前半

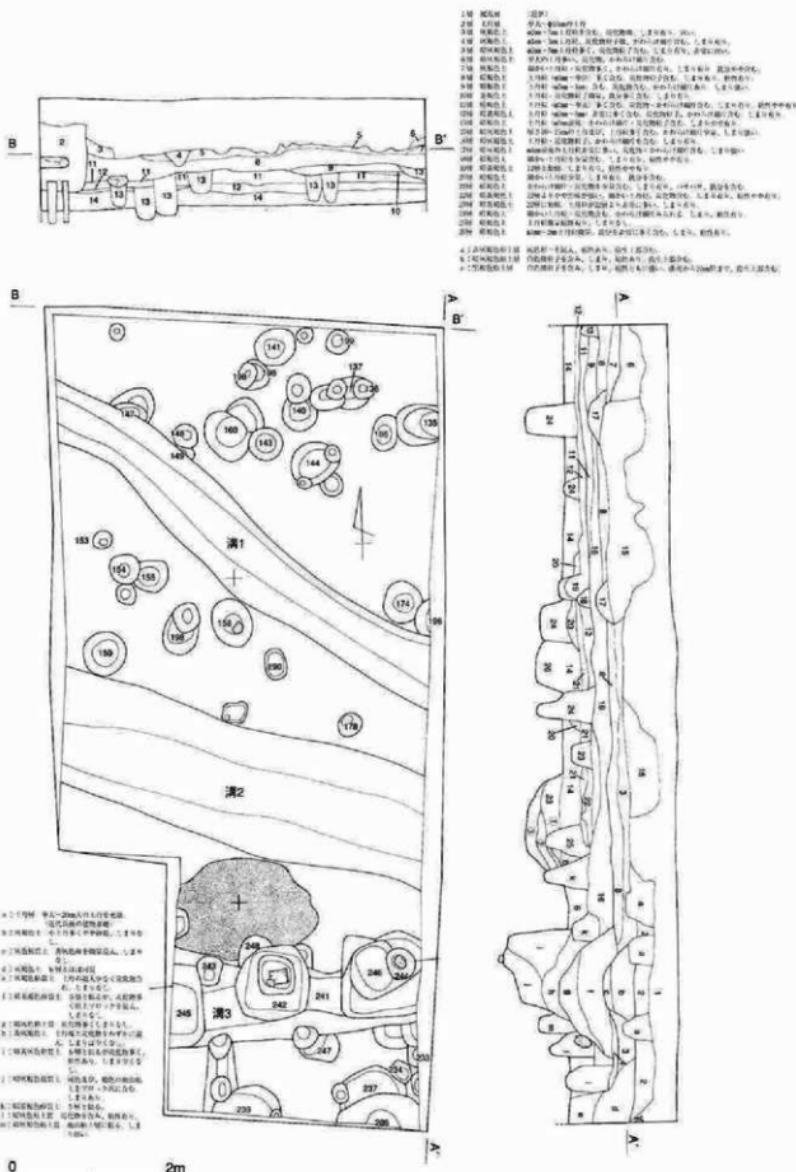


図6 調査区最移面・土層堆積図

代、4面は14世紀中頃、5面は14世紀前半から13世紀中葉と考えたい。

確認調査時における出土遺物（第5図1～13）

確認調査時に出土したかわらけの重量1,280gである。そのうち実測点数13点である。その中の9を除いて1～13は糸切り底のかわらけ皿である。

1はかわらけ皿小（調査時の2面土壌1）より出土。2～4はかわらけ皿大で、3は完形品である。

5はかわらけ皿小、灯明皿としての使用痕あり。1～2面より出土。6はかわらけ皿大、7はかわらけ皿中、8はかわらけ皿小で3面より出土。9は黒縁瓦器碗で完形。10はかわらけ皿中、11～13はかわらけ皿小で、11は完形品4面より出土。13は体部外側に腰をもち内湾気味に立ち上がり13世紀前～中頃のものと思われる。

第2章 検出された遺構と遺物

本調査で検出した遺構は、掘削深度（地表下1.2m）までの間に中世遺構面を4枚とらえることができた。1面までは近現代の擾乱を帯びた面がほとんどで、わずかに北西隅に倉の基礎と思われる礎石が残っているにすぎない。

また調査中に全ての遺構近代以降の擾乱土壤、ピット、整理層の一部などに遺構番号を付したため、遺構番号には欠番が生じている。また各面に伴うか疑わしいものも含め図化した。遺物については、実測可能な遺物が出土している遺構のみのものを記す。

なお、試掘調査で遺構1として捉えたものを、本調査ではこれを2面の土壌1として取り扱った。遺物については舶載陶磁器、国産陶器（常滑、瀬戸、渥美、備前）、かわらけ皿、瓦、金属製品（釘、スラグ）、銭、骨、貝などが整理箱27箱出土している。

以下それぞれの遺構と遺物について述べる。

近世倉1、掘立柱建物の柱穴、礎石建物の礎石3個、溝4条、溝状遺構3条、土壌6基、井戸1基、大形柱穴5穴（内3穴は布堀りと思われる）、ピット多数である。柱穴・ピットについては多数検出されたが、並びは不明である。また各面に伴うか疑わしいものもふくめて図化した。

第1節 1面検出までの遺構と遺物

（1）遺構

調査区西隅より、近世の倉と思われる鎌倉石敷の土台が伴う基礎部分が検出された。上層は近世の擾乱により壊されていた。礎石は南北に1列5石並ぶ。芯柱より約50cm間隔で、石の大きさは確認できる範囲で直径45～50cmを測る。周辺は土丹により堅く焼き締められた地盤がなされている。建物の主たる部分が西側の調査区外に延びるため様相は捉えることができなかった。検出された礎石の大きさからみてかなり造りのしっかりした建物（倉）と思われる。

（2）出土遺物（第8図）・（第9図14～26・第9図27～39）

14は瀬戸の御皿底部、15は常滑窯の口縁部、16は常滑捏ね鉢口縁部、17は糸切りかわらけ皿の大、18は糸切りかわらけ皿小、19は軒丸瓦（巴文）、20は刀子、21は土製品で不明で、22は銭で寛永通宝、23は常滑窯口縁部、24は磨常滑、25は常滑窯口縁部、26は銭で大觀通寶である。

27は青磁蓮弁文碗体部から底部にかけて、28は常滑窯口縁部、29は常滑窯底部、30・31はかわらけ皿大、32～36はかわらけ皿小である。その中で35・36は打ち欠き痕あり。37は土製品で鏹、38は軒丸瓦（巴文）、39は石製品で温石である。

第2節 2面検出の遺構と遺物

(1) 遺構

土壤 1

東側部分がわずかに調査区外にのびる。試掘時の遺構に当たる。掘り込み面は 3 層である。上層は搅乱により壊されていると思われる。確認面までの規模は長径 2.55m・短径 1.85m・深さ 75cm を測る。平面形は橢円形で隅丸を呈す。床面は地山を掘り込んでいる。主軸の方位は N-12°-E 方向を示す。

ピット 3

1 面の搅乱層により南側部分を切られている。掘り込み面は 3 層である。確認面での規模は長径 0.72m・短径 0.3m・深さ 22cm を測る。平面形は橢円形を呈する。

ピット 4

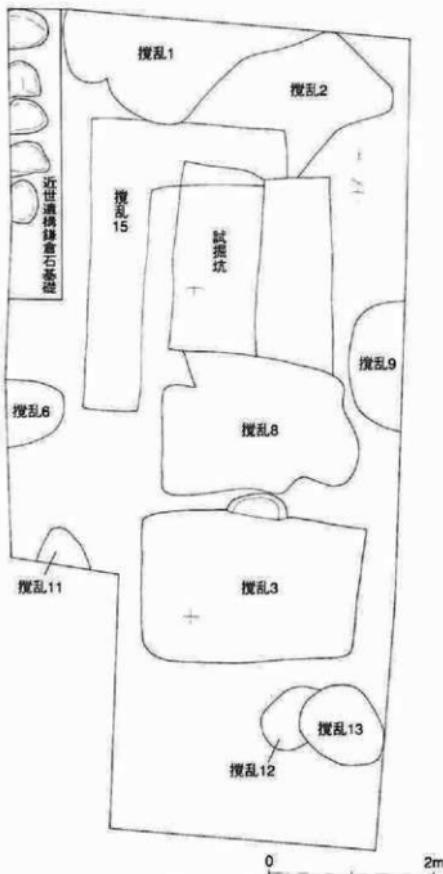


図 7 1面全体図

北側を調査区により切られている。確認面での規模は長径 1.05m・短径 0.25m・深さ 17cm を測る。平面形は浅い不整形を呈する。

ピット 6

調査区北東側に位置する。確認面での規模は長径 0.3m・短径 0.35m・深さ 2.9cm を測る。平面形は円形を呈する。

ピット 7

調査区北東側に位置する。確認面での規模は長径 0.25m・短径 0.25m・深さ 32cm を測る。平面形は円形を呈する。

ピット 8

調査区北東側に位置する。確認面での規模は長径 0.25m・短径 0.25m・深さ 22cm を測る。平面形は円形を呈する。6・7・8号ピット例の規則性はない。

ピット 9

調査区東側に位置する。1号土壤を切っている。確認面での規模は長径 0.50m・短径 0.45m・深さ 75cm を測る。平面形はほぼ円形を呈する。

ピット 13

調査区中央付近に位置する。掘り込み面は 3 層である。確認面での規模は長径 0.4m・短径 0.35m・深さ 30cm を測る。平面形は橢円形を呈する。

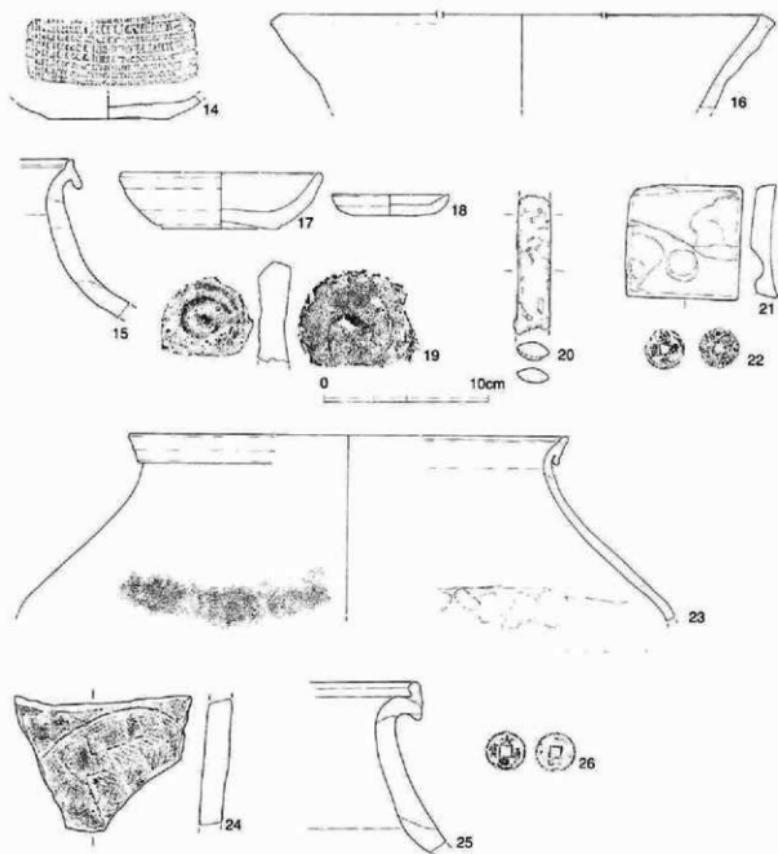


図8 1面までの出土遺物(1)

(2) 2面出土遺物 (第11図40~57)・(第12図58~76)・(第14図77~119)

40は青磁折縁鉢口縁部、41・42は山茶碗窯捏ね鉢体部～底部。43は常滑捏ね鉢体部～底部、44は土器質鉢型手焼き口縁部、45～55は糸切り底のかわらけ皿である。45～47はかわらけ皿大、48～55はかわらけ皿小で、51は打ち欠き痕あり、55は穿孔あり、56土製品蓋？、57は錠前である。58～87は土壤1出土の遺物である。58～73は糸切りかわらけ皿である。58は異形かわらけ、59～65、67はかわらけ皿大で、63は灯明皿として使用。66はかわらけ皿中、68～73はかわらけ皿小で、68は他の物より古い。74～76は銭である。74は皇宋通寶、75は熙寧元寶、76は元祐通寶である。

77は青磁劃花文底部、78は白磁口兀皿口縁部、79は白磁碗体部～底部、80～82は瀬戸入子口縁部、83は山茶碗窯捏ね鉢口縁部、84は常滑壺口縁部、85～89は常滑壺口縁部、90～102はかわらけ皿である。90は手づくねかわらけ皿大、91～94は糸切りかわらけ皿大、95・96は手づくねかわらけ皿小、97～102は糸切りかわらけ皿小である。103は輪羽口、104～106は銭で104は治平元寶、105は元祐通寶、106は紹

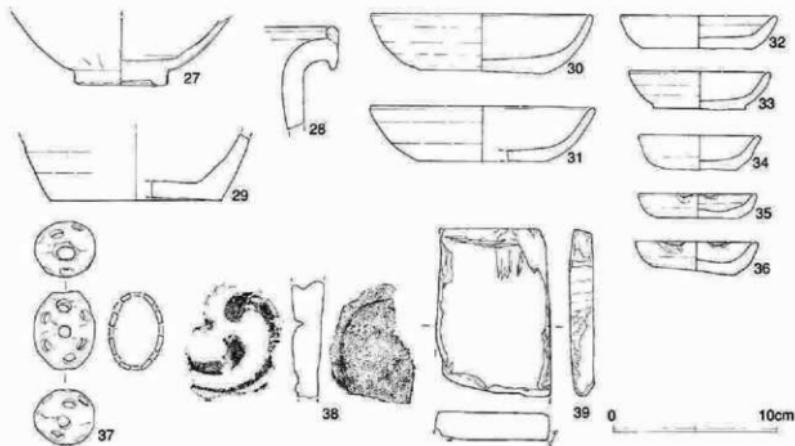


図9 1面までの出土遺物(2)

聖元寶である。107~112は土壙1、113~119はピット9の出土。107は青磁折縁鉢口縁部。108~112はかわらけ皿小で打ち欠き痕あり、灯明皿として使用。119はコースター状の極小かわらけ皿である。

第3節 3面検出の遺構と遺物

(1) 遺構

井戸1

調査区中央付近の西側寄りで検出された。掘り込み面は、3面に土壙が重なるようにあったのではっきりしないが、この面として取り扱った。

井戸の掘り方は確認面での規模は長径7.5mで円形に近い平面形を呈し、中以下では、一辺0.8m、前後の隅丸方形を呈している。下底面は確認面から約1.8mの深さを持つ。井戸の掘り方は地山を掘り込み、木枠を持たない素掘りである。確認面1.5mのところで湧水が出る。覆土上層では特に確認面では拳大の土丹塊が多く投げ込まれており遺物に色々と混入していた。

土壙16

調査区北側中央付近に位置する。北側部分を調査区で切られている。確認面での規模は長径0.7m、短径0.25m、深さ11cmを測る。平面形はおそらく梢円形と思われる。

土壙17

調査区北側に位置する。確認面での規模は長径0.75m、短径0.55m、深さ26cmを測る。土壙の西側下部に25cm×25cmのピット状の堀込みが伴うがこの遺構とは別のものと思われる。平面形は梢円形を呈する。主軸方位はN-40°-W方向を示す。

土壙18-1

調査区中央よりやや西寄りの北側方向に位置する。この土壙は3穴切り合って一番新しい。確認面での規模は、長径0.7m、短径0.45m、深さ34cmを測る。平面形は梢円形を呈する。主軸方位はN-2°-W方向を示す。

ピット18-2

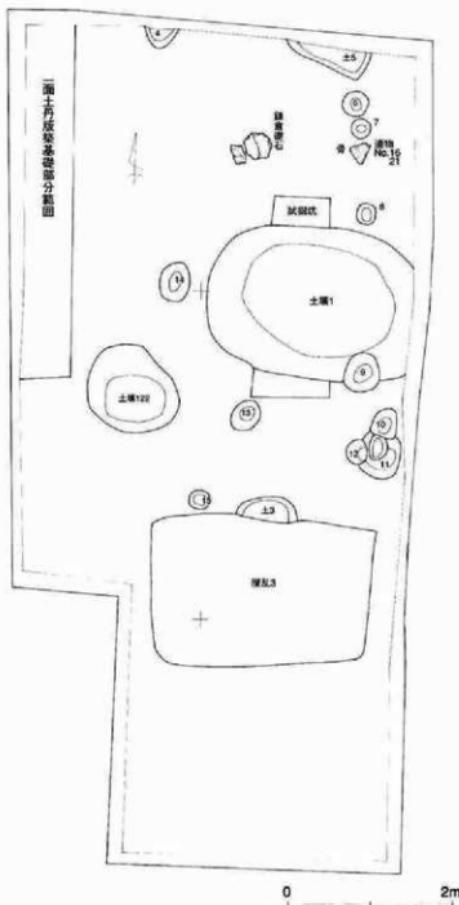
18-1の北側に位置する。掘り込み面は一層である。確認面での規模は長径0.5m、短径0.3m、深さ28cmを測る。平面形は梢円形を呈する。18-1より古い。

ピット18-3

18-1より西側部分に位置し、本ピットの方が古い。確認面での規模長径0.25m、短径0.2m、深さ13cmを測る。

柱穴19

調査区北側の西側寄りに位置する。柱穴中に礎板を伴う。確認面での規模は長径0.28m、短径0.28m、深さ15cmを測る。掘立柱建物の柱穴と思われる。



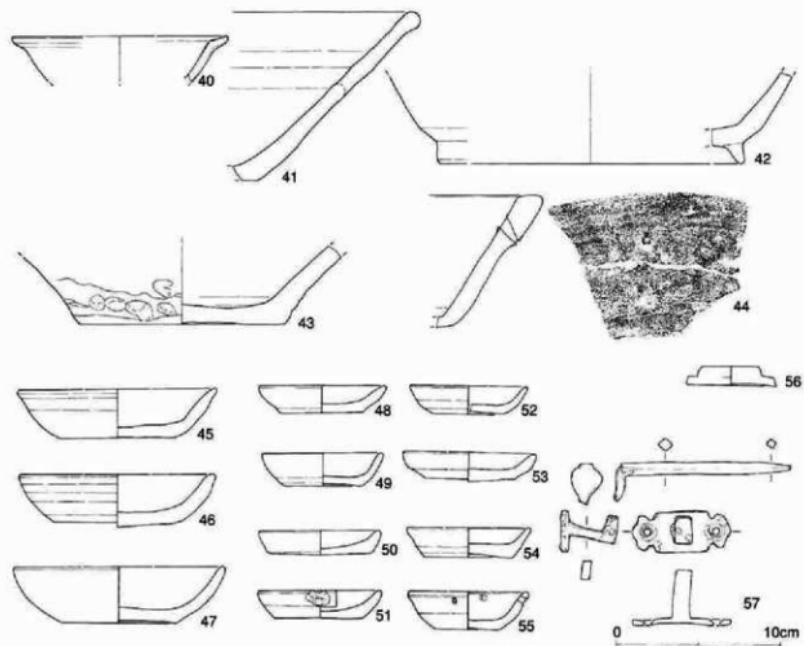


図11 2面出土遺物（1）

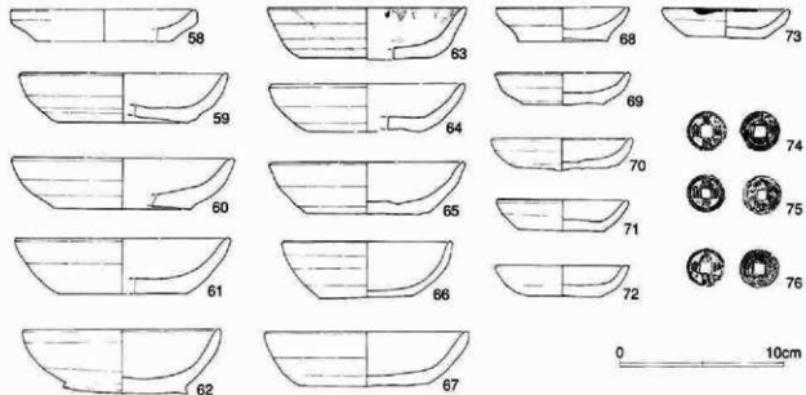


図12 2面出土遺物（2）

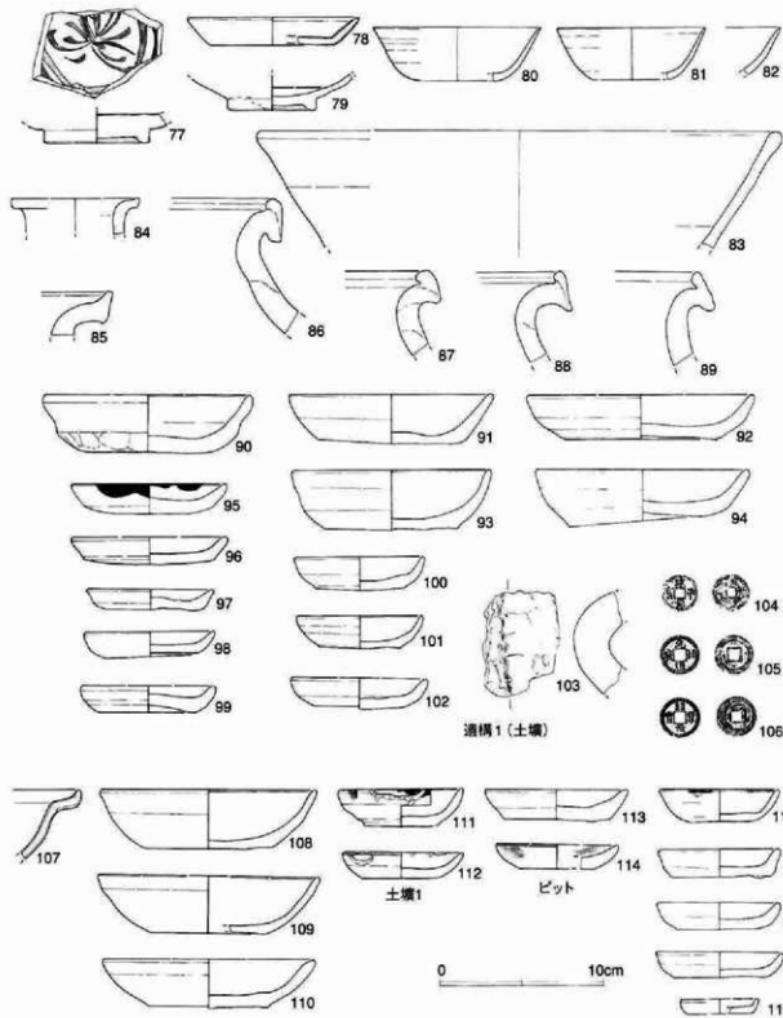


図13 2面造構出土遺物

中にピット状の掘り込みは掘立柱建物の柱穴と思われる。

柱穴32

調査区東側中央近くに柱穴30の南側に位置する。確認面の規模は長径0.6m、短径0.4m、深さ48cmを測る。方形堅穴の柱穴と思われる。

柱穴34

柱穴32の南下に位置する。確認面での規模は長径0.35m、短径0.3m、深さ15cmを測る。

柱穴36

調査区東側に位置し、東側部分を調査区外で切られてい る。確認面での規模は、長径0.3m、短径0.25m、深さ58 cmを測る。

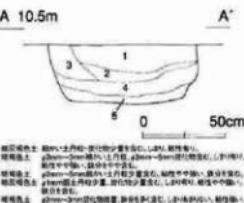
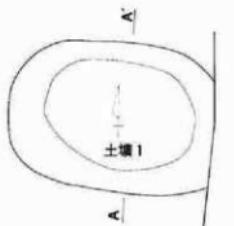


図14 1号土壤

柱穴37

調査区東側の柱穴36の北側に位置する。確認面での規模は、長径0.25m、短径0.28m、深さ19cmを測る。

土壤61

調査区の西側中央部分で検出された。擾乱により南側を切られ、北側をピットを切っている。確認面での規模は、長径0.8m、短径0.5m、深さ26cmを測る。主軸方位はN-63°-E方向を示す。

土壤66

調査区西側部分で検出され、南側を調査区外で切られている。土壤61の南側部分にあたる。確認面での規模は、長径1.25m、短径0.5m、深さ23cmを測る。主軸方位はN-48°-W方向を示す。

土壤123

調査区北側寄りで西側の土壤100の真横に検出された。確認面での規模は長径1.2m、短径0.95m、深さ15cmを測る。主軸方位はN-41°-W方向を示す。

土壤105

調査区の西側に位置し、1面近世倉に壊され西側部分を切られている。確認面での規模



図15 3面全体図

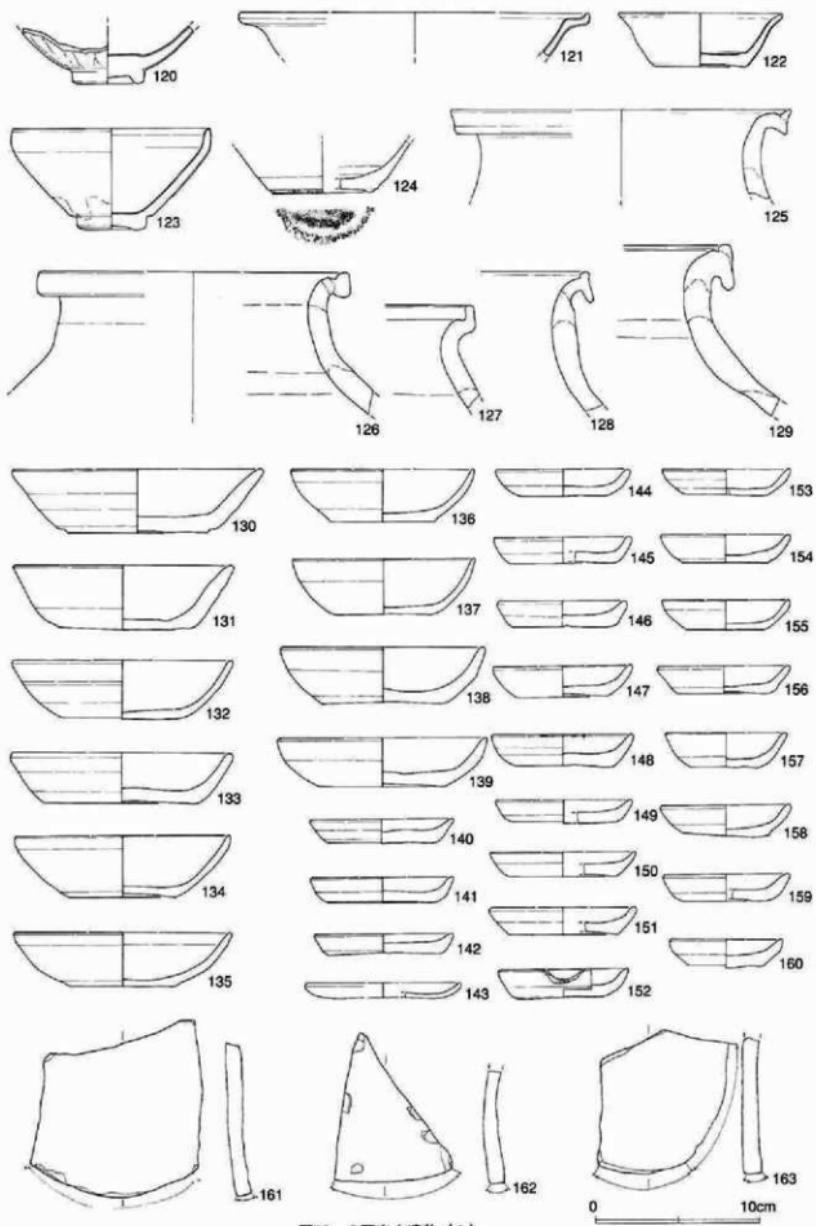


圖16 3面出土遺物（1）

は長径0.45m、短径0.4m、深さ23cmを測る。覆土中の上層には拳大の土丹塊がつまりその下層からは炭化物混じりの土層がみられた。平面形態は不正楕円形を呈する。主軸方位はN-42°-E方向を示す。

土壙200

調査区の南東隅に検出された。確認面での規模は長径1.15m、短径0.65m、深さ72cmを測る。下面は検出出来なかった。ボーリング棒で確認したところ、1m以上下に深さをもつものと思われる。もしかすると井戸の可能性も考えられる。平面形態はほぼ円形に近い。主軸方位はN-5°-W方向を示す。

溝状造構2

調査区の北東隅に位置する。北側東側は調査区により切られ、北側は東側調査区外へのびる。

確認面での長径1.5m、短径0.25m、深さ10cmを測る。主軸方位はN-5°-W方向を示す。

ピット110

調査区中央付近西側寄りに検出され井戸1を切っている。確認面での規模は長径0.4m、短径0.38m、深さ10cmを測る平面形態はほぼ円形を呈する。

(2) 出土の遺物 (第16図120~163)・(第17図164~168)

120は青磁蓮弁文体部～底部、121は青磁折縁鉢口縁部、122は白磁口元皿、123は瀬戸天目碗、124は山茶碗体部から底部、125～127は常滑壺口縁部、128・129は常滑甌口縁部、130～160は糸切り底かわらけ皿である。130～135、138、139はかわらけ皿大、130・131のかわらけ皿大は新しく上層よりの混入と思われる。136・137はかわらけ皿中、140～160はかわらけ皿小である。142は13世紀後半で143は薄手である。152は打ち欠き、161～163は磨常滑である。

164・165は石製品の砥石で産地は鳴滝Ⅲ、166は琥珀、167・168は銭である。167は開元通寶、168は天祐通寶である。

3面遺構出土の遺物 (第18図169~177)

遺構18の169は小形のコースター。遺構20の170はかわらけ皿小。遺構26の171はかわらけ皿小。遺構52の172はかわらけ皿大、遺構53の173はかわらけ皿小。遺構62の174は常滑窯口壺口縁部。遺構63の175は伊勢系土鍋口縁部。遺構66の176は常滑壺口縁部、177は硯の破片。

第4節 4面検出の遺構と遺物

(1) 遺構

柱穴112

調査区の中央付近で検出され、南東隅の柱穴111と接している。掘込みは長径0.3m、短径0.3m、深さ36cmを測る。掘込み面の形態は方形を呈す。

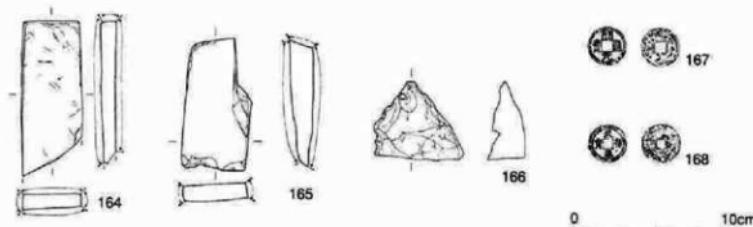


図17 3面出土遺物 (2)

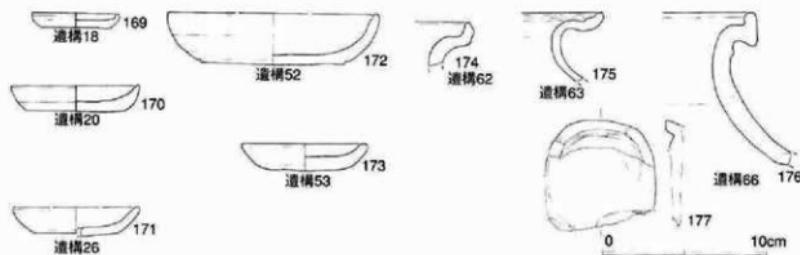


図18 3面造構出土遺物

溝3

溝3は溝4と同様のところから検出され、溝4に切られている。確認面での規模は長径3.05m、短径1.1m、深さ45cmを測る。断面形はゆるやかなV字形を呈する。主軸方位はN-86°-E方向を示す。

溝4

調査区南側を東西に走る溝で、東壁の土層で確認すると2次期ある。溝3は4を切っている。溝4の造構部分のはほとんどは東側の調査区外にのびる。確認面での規模は長径3.2m、南北0.8m、深さ30cmを測る。溝の断面はV字形を呈する。主軸方位はN-83°-E方向を示す。

ピット76・78

調査区の北東隅に検出された。ピット76・78は切り合い関係にあり、76の方が古い。76は底面に石が2個数いており、確認面での規模は、長径0.45m、短径0.3m、深さ20cmを測る。78は長径0.3m、短径0.25m、深さ20cmを測る。

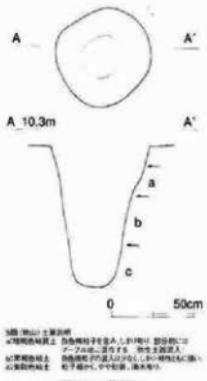


図19 井戸1

ピット94

調査区北側端に位置する。柱穴は調査区により北側を切られている。確認面での規模は長径25cm、短径15cm、深さ20cmを測る。掘込み面の形態は円形を呈する。

柱穴95

調査区北側に位置する。確認面での規模は長径40cm、短径32cm、深さ18cmを測る。掘込み面の形態は細くて深い方形を呈する。

土壙100

調査区北側寄りで検出された。柱穴102に切られている。確認面での規模は長径0.85m、短径0.7m、深さ21cmを測る。平面形態は不整形な梢円形を呈する。覆土中に炭化物を多く含んでいた。主軸方位はN-3°-E方向を示す。

柱穴102

調査区の北側寄りで検出され土壙100を切っている。底面に石を置いてある。確認面での規模は長径0.4m、短径0.25m、深さ32cmを測る。平面形態は梢円形を呈する。ピット76との間隔が約2.1mであり関連があると思われる。

ピット106・107・108

調査区の中央付近の西側部分に位置する。ピット106・107は切り合い関係にあり、107の方が古い。確認面での規模は106の確認面での規模は、長径0.52m、短径0.4m、深さ60cmを測る。107の確認面での規模は、長径0.45m、短径0.4m、深さ10cm、を測る。それぞれの平面形態はほぼ円形を呈する。

ピット114、115

調査区の中央付近で検出され切り合い関係にあり、115の方が古い。確認面での規模は、114は長径0.45m、短径0.4m、深さ46cm、115は長径0.2m、短径0.2m、深さ23cmを測る。平面形態はほぼ円形を呈する。

柱穴125

調査区の中央よりに位置し、井戸1に切られている確認面での規模は長径0.4m、短径0.35m、深さ53cmを測る。平面形態は方形を呈する。

柱穴132

調査区の北側に位置する。確認面での規模は長径0.45m、短径0.4m、深さ54cmを測る。平面形態は深くて方形を呈する。

柱穴133

調査区の北側に位置する。確認面での規模は長径0.65m、短径0.6m、深さ60cmを測る。平面形態は深く大形の方形を呈する。

柱穴139

調査区の北側に位置する。確認面での規模は長径0.65m、短径0.45m、深さ62cmを測る。底面に8×12cmほどの硬化面あり。平面形態は深くて大きな方形を呈する。

柱穴144

調査区の北側に位置する。確認面での規模は長径0.6m、短径0.5m、深さ45cmを測る。平面形態は深くて方形を呈する。

柱穴158

調査区西側に位置する。確認面での規模は長径0.55m、短径0.55m、深さ46cmを測る。柱穴の南側部分に礎板の圧痕あり。平面形態は方形を呈する。

柱穴178

調査区の中央に位置する。確認面での規模は長径0.35m、短径0.3m、深さ33cmを測る。柱穴の上層に貝殻の碎片が入っていた。平面形態は方形を呈する。

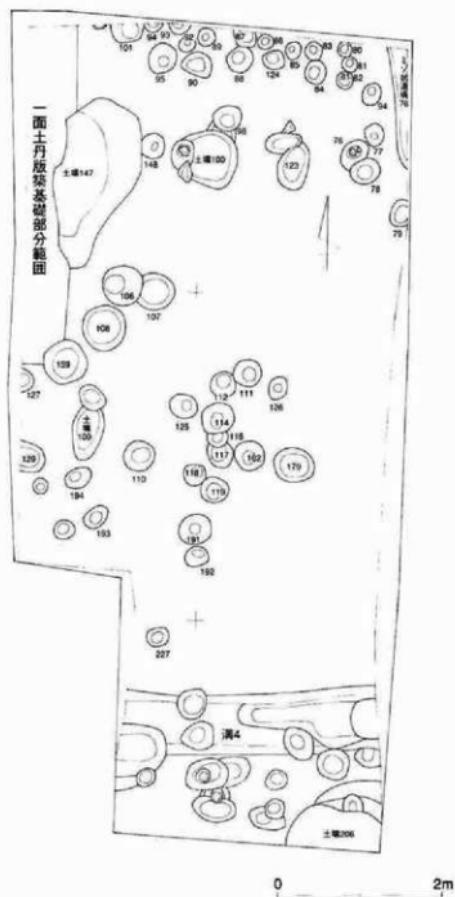


図20 4面全体図

柱穴188

調査区の中央部分に位置する。確認面の規模は長径0.45m、短径0.45m、深さ30cmを測る。柱穴内に炭化物が多く含まれていた。確認面での形態は方形を呈する。

土壌206

調査区南東隅で検出。柱穴237を切っている。当所は井戸と思い掘り下げていったが、その結果湧水もなく、断面緩やかな丸味をもつ土壌と判断。確認面での規模は長径1.05m、短径0.5m、深さ53cmを測る。平面形態は、橢円形を呈する。

(2) 出土遺物

図21-178～188は2面出土遺物。178は山茶碗窯系捏ね鉢胴部～底部。179・180は常滑窯口縁部、181は常滑捏ね鉢口縁部にススが付着し灯明皿として使用、185は内折れかわらけ皿でコースター状を呈している、186・187はかわらけ皿小。188は字瓦である。

造構89の189は伊勢系土鍋口縁部。造構94の190はかわらけ皿小。造構100の191は手づくねかわらけ皿小。造構105の192・193は常滑窯口縁部、194は手づくねかわらけ皿小、195はかわらけ皿大、196は平瓦。造構106の197は手づくね白かわらけ皿であり、灯明皿としての使用痕あり。造構108の198は常滑窯口縁部、199は平瓦。造構114の200は手づくねかわらけ皿小。造構115の201はかわらけ皿大。造構123の202は常滑窯口縁部～胴部、203は胴部～底部、204はかわらけ皿小。造構132の205は手づくねかわらけ皿大。造構151の206は手づくねかわらけ皿小。

造構161の207は青磁櫛搔文皿底部、208は瀬戸脚付き大皿底部、209～215は糸切りかわらけ皿である。209・210はかわらけ皿大、211～214はかわらけ皿小、215は極小かわらけ皿あり、上層の混入と思われる。216～218は瓦で、216は丸瓦、217・218平瓦である。

造構182の219は内折れかわらけ皿でコースター状の小である。

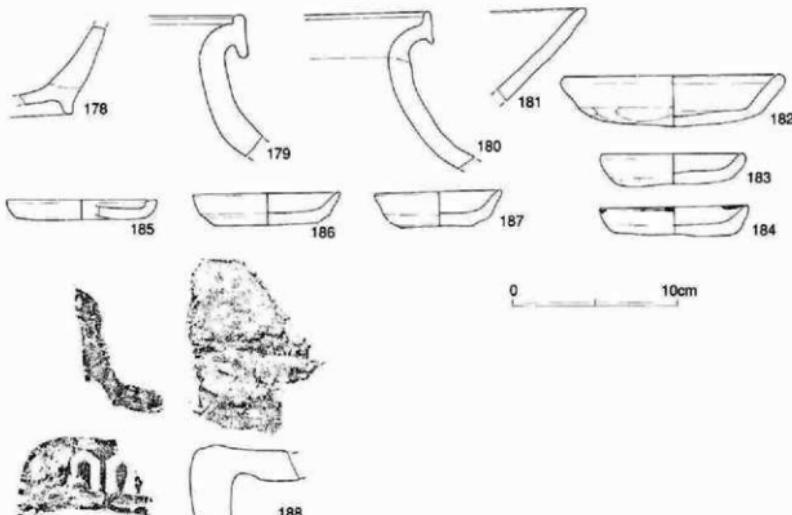


図21 4面出土遺物

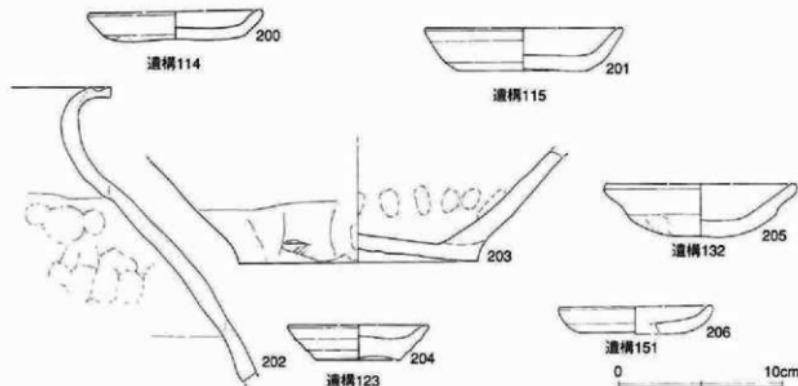
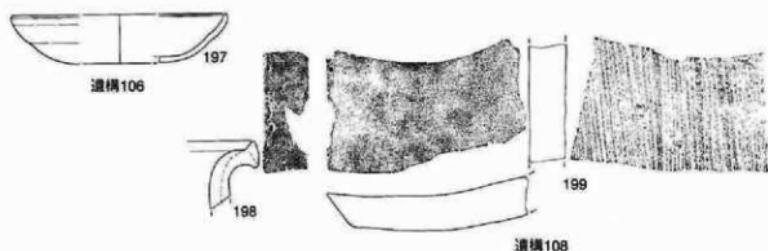
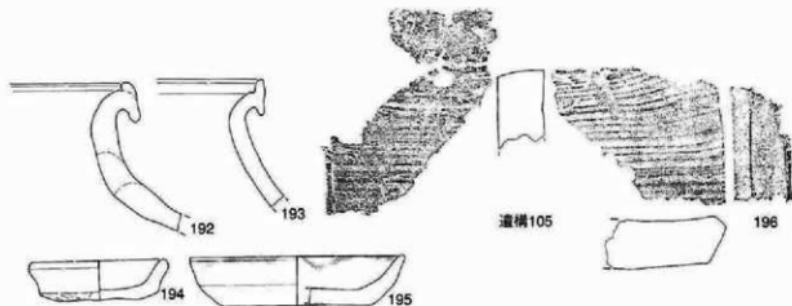
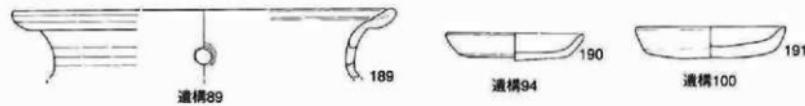


图22 4面遗構出土遺物 (1)

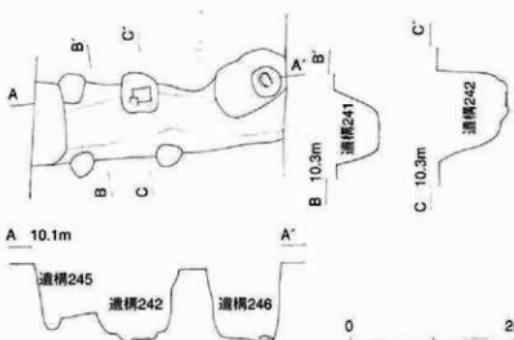


図23 溝3

236は景德元寶、237は祥符元寶、238は景祐元寶、239～242は皇宋通寶、243は治平元寶、244～246は熙寧元寶、247～249は元豐通寶、250は海東通寶、251・252は紹聖元寶、253は大觀通寶、254は政和通寶、255は淳熙元寶、256は慶元通寶の計29枚が出土している。

第5節 5面検出の遺構と遺物

(1) 遺構

柱穴155

調査区の北西側に位置する。確認面での規模は長径40cm、短径40cm、深さ47cmを測る。堀込み面の平面形態は、深くて方形を呈する。

柱穴135

調査区の北東隅に位置する。確認面での規模は長径55cm、短径50cm、深さ52cmを測る。柱穴の底面に約11cm×15cmの礎板痕あり。平面形態は大形で深く方形を呈する。

柱穴138

調査区北東側に位置する。確認面での規模は長径62cm、短径50cm、深さ46cmを測る。柱穴の底面は小さく方形であるが、平面形態は大形で深く方形を呈する。

柱穴237

調査区南東隅で検出。土壤206に切られている。底はほぼ平坦で壁は垂直で下端近くがややオーバーハング気味に立ち上がる。確認面での規模は長径80cm、短径35cm、深さ46cmを測る。平面形態は、方形を呈する。

柱穴242

調査区南側で検出。3号溝を切る。245・246と同様、大形の方形の柱穴である。柱穴内に貝殻混入(4面構成土)が流入。下部に拳大の礎があり、根固めの礎と思われる。確認面での規模は長径95cm、短径90cm、深さ85cmを測る。

柱穴245

調査区南側で検出され西側を調査区で切られ、3号溝を切る。大形の柱穴で貝殻が混入(4面構成土)。下部に拳大の礎があり、根固めの礎と思われる。確認面での規模は長径110cm、短径40cm、深さ61.5cmを測る。平面形態は隅丸方形を呈する。

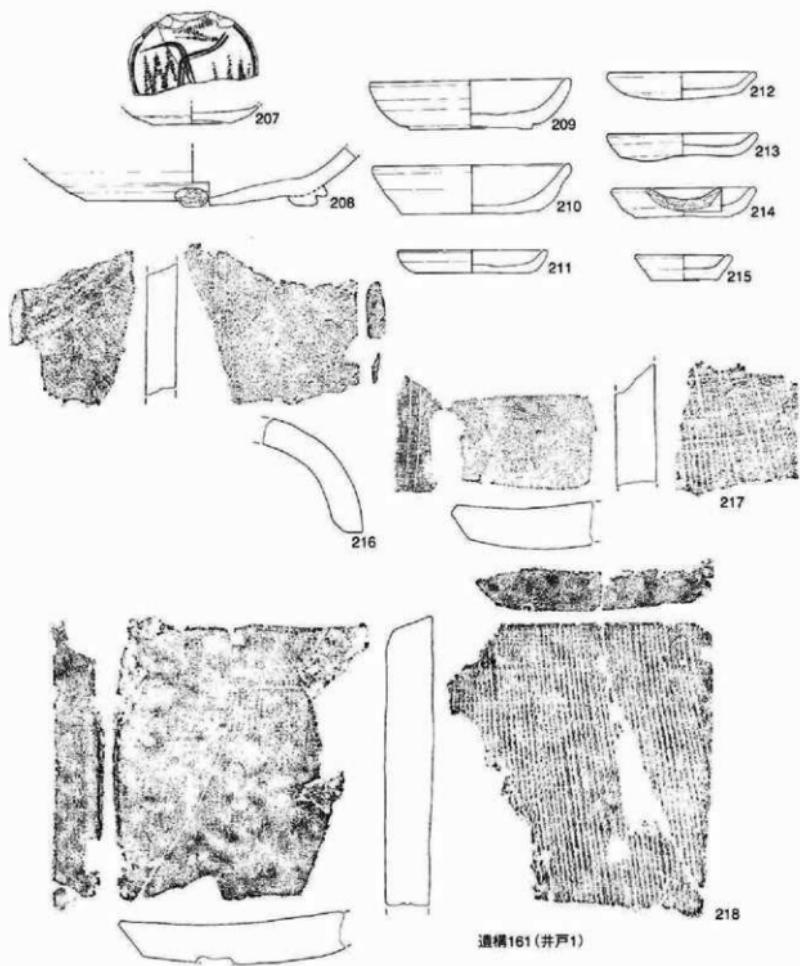
遺構207の220は山茶碗窯捏ね鉢底部である。

遺構210の221は上製品脚部分、222は石製品温石で切断痕がある。

遺構215の223は鉢形手焼り口縁部～底部、224～226はかわらけ皿。224はかわらけ皿中。227は石製品砥石で産地は鳴滝産である。

遺構219土壤の228は銭で治平元寶である。

2m 229～256は銭である。229と230は開元通寶、231・232は?元重寶、233至道元寶、234・235は咸平元寶、



造構161(井戸1)

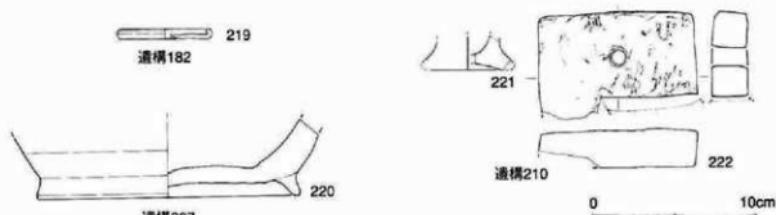


図24 4面造構出土遺物(2)

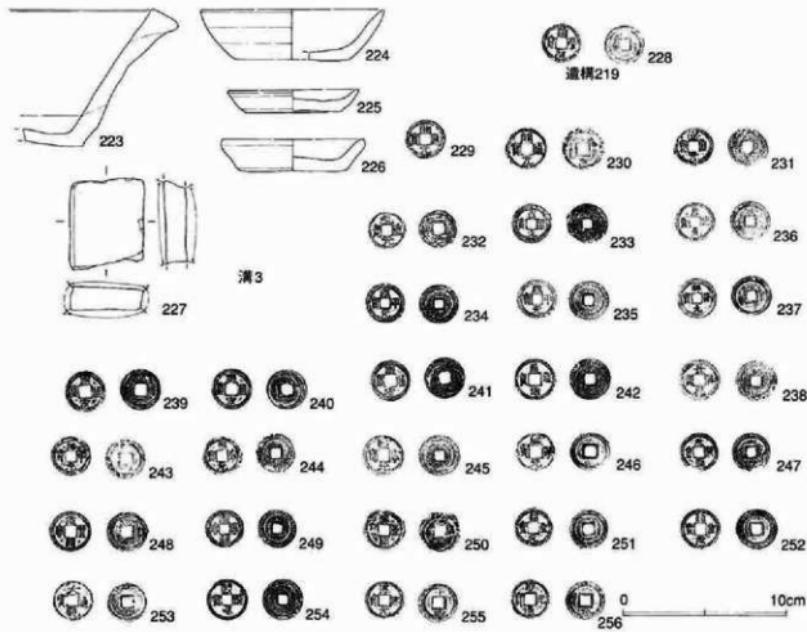


図25 4面遺構出土遺物（3）

溝1（第30図）

3本の溝中の調査区北側で検出された。東西方向の溝である。2号溝同様、中世地山面を掘込んで造られている。壁面は緩やかにカーブをもち立ち上がる。確認面での規模は長さ4.8m、最大幅0.9m、深さ45cmを測る。平面形態は逆台形を呈する。主軸方位はN-29°-E方向を示す。

溝2（第31図）

調査区中央近くで検出された東西方向の溝である。地山面を掘込んで造成されている。壁面は緩やかに立ち上がる。確認面での規模は長さ4.6m、幅0.9m、最大深さ60.5cmを測る。平面形態は逆台形を呈する。主軸方位はN-68°-Wを示す。

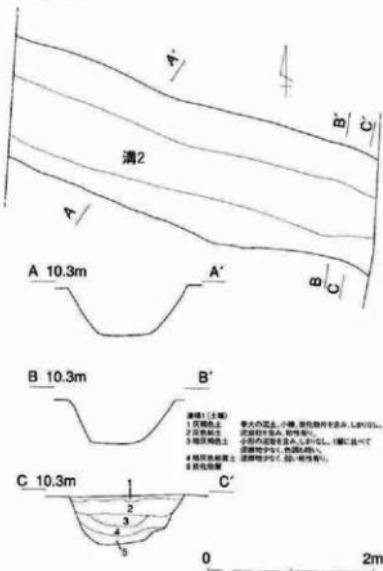


図26 溝2

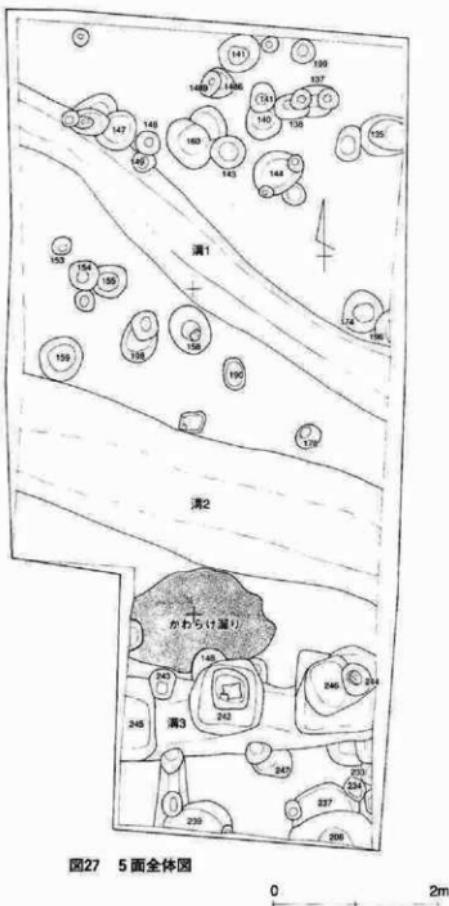


図27 5面全体図

0 2m

遺構241の299・300は手づくねかわらけ皿大である。

遺構242の301鉄製品で針状のもの。

遺構244の302は青磁櫛搔文碗である。

遺構246の303は手づくねかわらけ皿大である。

5面遺構出土遺物（2）(第33図304~323)

304~318の遺物はかわらけ皿である。288~290は手づくねかわらけ皿大、307は黒縁瓦器碗、308・309・310は手づくねかわらけ皿小、311~320はかわらけ皿小、318は打ち欠き痕あり。320はコースター。

(2) 出土遺物 (第27図257~278・第28図279~282・第29図283~287)

257・258は青磁蓮弁文碗体部、259は浮文青白磁皿、260・261は山茶碗窓捏ね鉢、262~276はかわらけ皿で、262はかわらけ皿大で穿孔あり。263はかわらけ皿大、264~274はかわらけ皿小、271はこの面に伴わぬい物である。279~280は瓦である。279は軒丸瓦、280は軒平瓦である。281は石製品で温石、282は磨常滑である。

283はかわらけ皿大である。

284はかわらけ皿小である。

285・286は瓦で、285は男瓦、286は平瓦である。287は金属製品で壺金である。

遺構出土遺物(1)(第32図288~303)

遺構139の288はかわらけ皿古手13世紀初め。

遺構148の289は手づくねかわらけ皿小である。

遺構152の290は字瓦である。

遺構158の291は手づくねかわらけ皿大である。

遺構171・172の292・293は鉢津である。

遺構182の294は打製石斧である。

遺構190の295は手づくねかわらけ皿大である。

遺構194の296は男瓦である。

遺構196の297・298は13世紀前~中期のかわらけ皿小である。

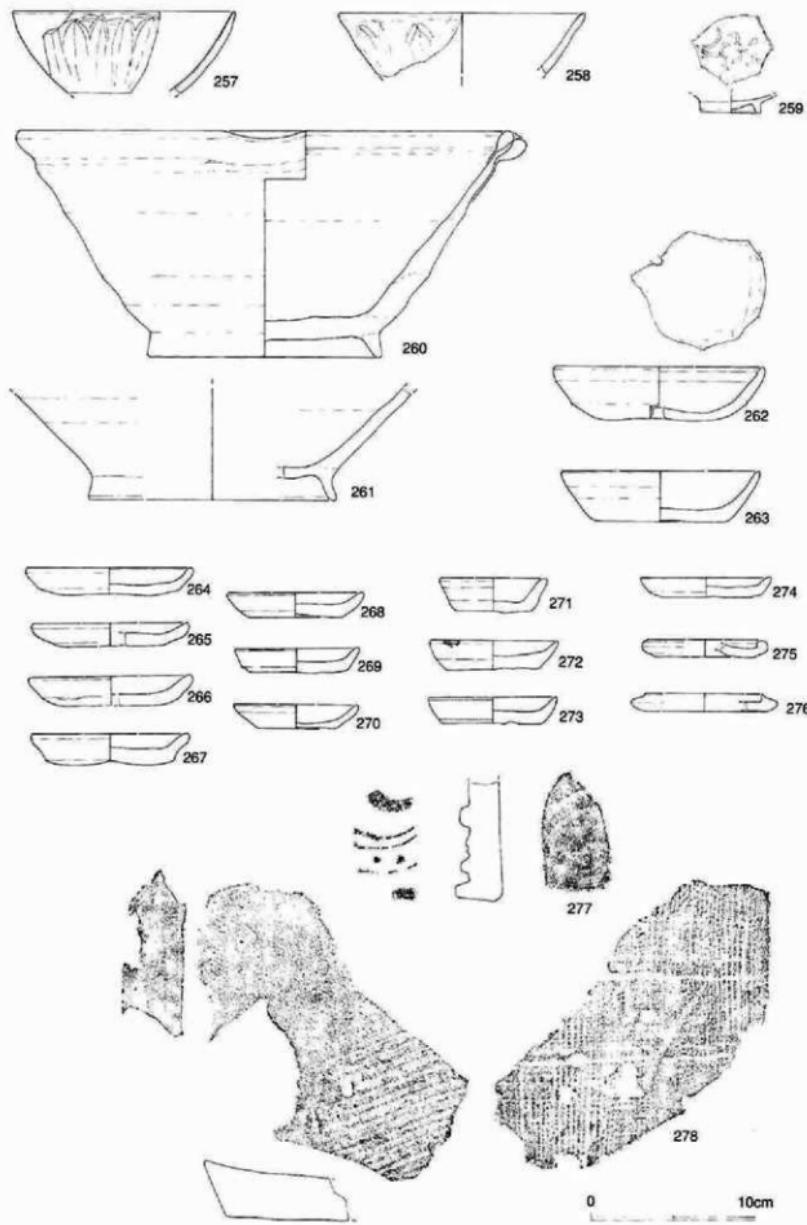


図28 5面出土遺物 (1)

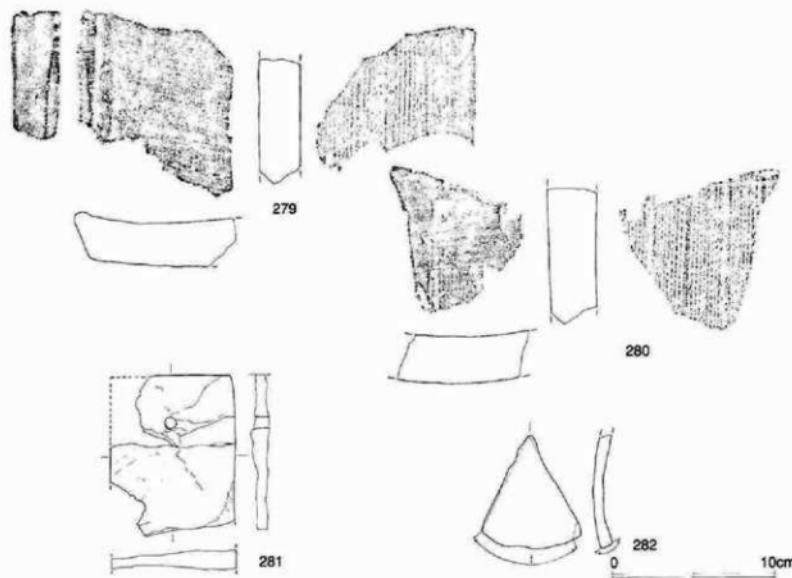


図29 5面出土遺物(2)

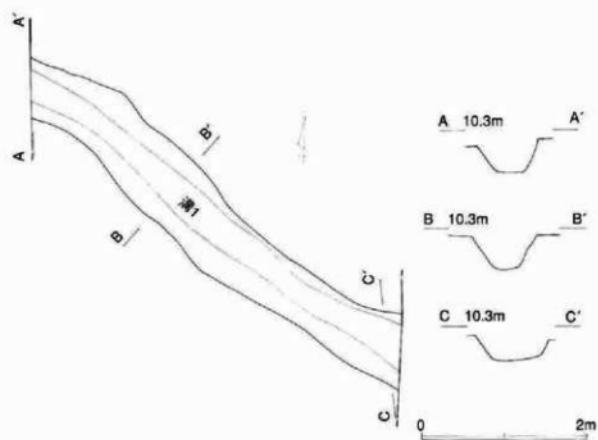
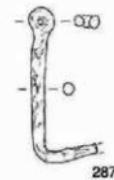
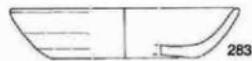


図30 溝1



289



293



0 10cm

图31 5面出土遗物 (3)

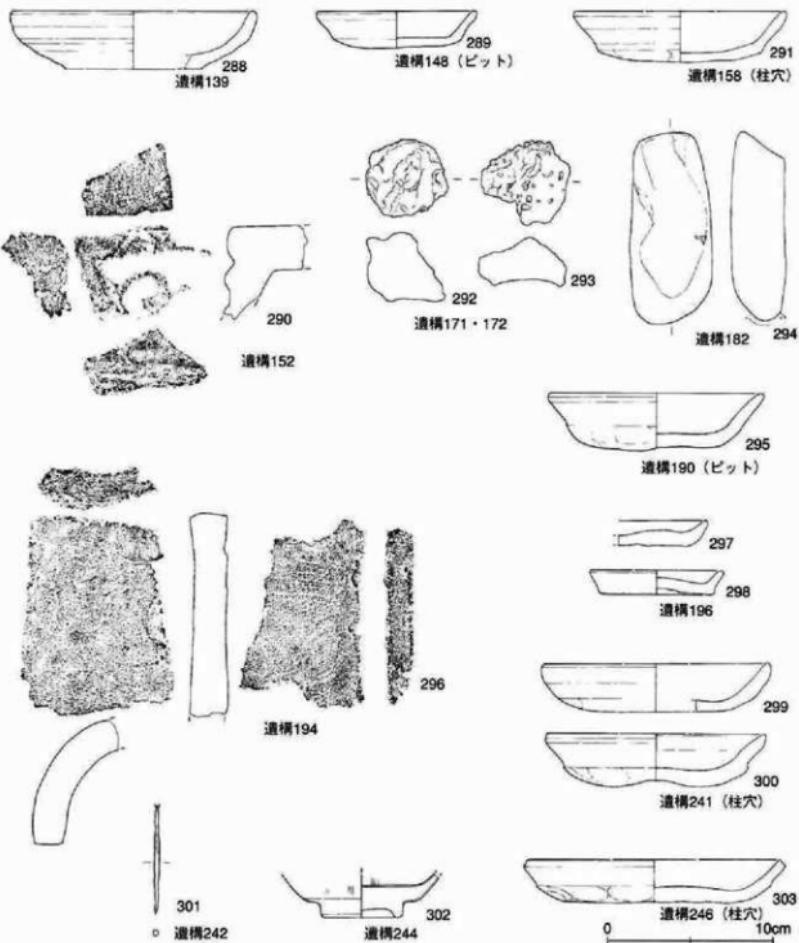


図32 5面造構出土遺物（1）

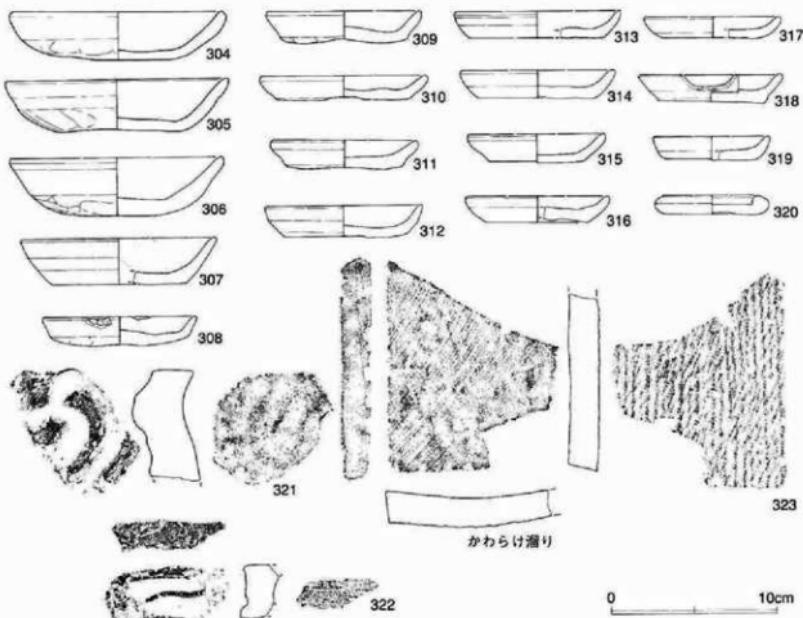


図33 5面造構出土遺物（2）

321～323は瓦である。321軒丸瓦、322は宇瓦、323は平瓦である。これらの遺物はかわらけ溜まりより出土。

第6節 古代以前の出土遺物（第34図1～18・図版12）

本遺跡から出土した古代以前の遺物は、中世地山面ないし、地山を掘り込んだ遺構より出土したものである。出土総点数107点で、土器片で・全般的に弥生時代中期宮ノ台期に属するもので、わずかに後期の遺物が出土している。また、古代と思われるものが数点出土している。以下に図下した資料を記す。

第34図1は単純口縁の壺の口縁部である。後期のものと思われる。2は壺の肩部である。肩部に斜綱文が施され、器面はよく磨かれ、前面に赤彩が施されている。3は大型の壺の肩部である。斜綱文の下端を2条の沈線で区画する。4は外來系の壺である。肩状文が櫛齒状工具により施されている。5は壺の外反する口縁部である。口唇部直下に2個の穿孔を有する。6は壺の胴部であり磨きが施され、上端に傾斜する直線を施す。おそらく横位浮綱文。7は大型の壺である。器壁が厚く内外面にハケ調整がされる。8は胴部片で斜綱文。2条単位の櫛齒工具で斜格子文を加え、綱文模様を竹管状工具で区画している。9は壺の口縁部で内外面ともにハケ調整が施される。口唇部に竹管状工具による刺突が加えられる。

10は壺の口縁部で内外面ともにハケ調整が施され、口唇部に竹管状工具による刺突が加えられる。

11は壺の口縁部で内外面ともにハケ調整が施される。口唇部に棒状工具による斜位のキザミが施される。12は壺の口縁部で内外面にハケ調整が施される。口唇部に鋭利な工具で斜位にキザミが施される。

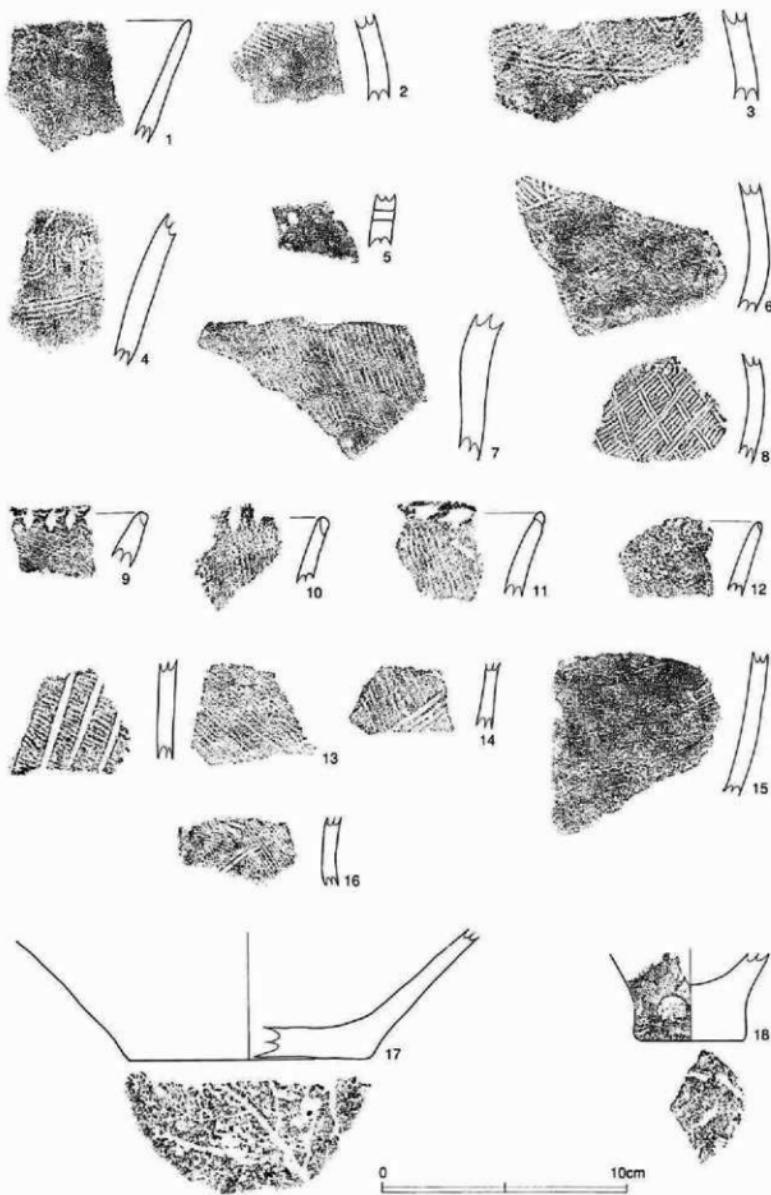


図34 古代以前の出土遺物

13は壺の頸部でハケ調整の後、櫛歯状工具による連続する斜傾の沈線が施される。14は壺の頸部でハケ調整の後、櫛歯状工具による傾斜する直線が施される。15は壺の胴部である。16は内外面ハケ調整の後、波状の沈線を施す。17は壺の底部である。器外面は斜め方向のハケ調整が施され、底部からほぼ直線的に開く器形を呈し、底部に木葉痕を残す。内面は丁寧にナデが施され、胎土は他の土器と異なり、砂粒を含まず良好焼成されている。外來系か？18は宮ノ台式期の壺の底部である。厚みがあり突出する形態と思われる。底部木葉痕？以上のように本遺跡から出土した弥生時代中期から後期の遺物を観察すると、宮ノ台式の資料がほとんどである。また、幅をもぢながら宮ノ台式の全般に渡る資料が見られる。鎌倉市街地では、雪ノ下の南御門遺跡、大倉幕府周辺遺跡群の出土例も見られるように宮ノ台式を通じて継続的な周辺に当該時期の集落がもっと広い範囲で展開するものと思われる。

第7章 大倉幕府周辺遺跡出土の軟体動物遺存体

1.はじめに

大倉幕府周辺遺跡の調査では、古代末から14世紀中頃にかけての遺構・生活面等から、軟体動物遺存体が出土した。以下では、これらの内容について報告を行う。

2.出土軟体動物遺存体の概要（表1・2・3）

本遺跡からは、腹足綱3種・二枚貝綱4種の合計7種の、最小個体数で18個体の軟体動物遺存体が出土した（表1・2）。種名が確認された種として、サザエ、アカニシ、ツキヒガイ、ハマグリ、チョウセンハマグリの5種がある。これらは、各遺構・生活面等から、1～7個体ずつ出土した。

大きさでは、傾向等は把握できなかったものの、サザエで殻径85mm前後、ハマグリで殻高45mm前後を示す資料があった（表3）。

観察された事項としては、まず、サザエとアカニシで欠損した個体が確認されたことがある（表3）。サザエでは口唇部を、アカニシでは殻軸以外を欠損した個体が各2個体認められた。また、表土掘削出土サザエ1個体については、上記の破損に加え、長径11.3mmの穿孔痕が認められた。

3.考察

今回出土した遺存体は数が少なく、組成等は明らかにすることができなかった。しかし、確認された種は、ツキヒガイを除いては、鎌倉市内の中世に属する他の遺跡から頻繁に出土する種であること、採集環境も同様に共通する内容であることを指摘できる。

表2 出土軟体動物遺存体の個体数一覧

| 種名 種名 | 腹足綱 | 二枚貝綱 |
|---------------------------|---|---|
| サザエ サザエ サザエ (有棘) | ササニシ アカニシ キウジ (殻・ 有棘無棘 不明) | ツハハハ キマママ ヒググリ ガリリ イ R L L |
| 出土地点 | | |
| 5面 柱穴 | 1 | + |
| 4面～5面 一括 | 5 + | |
| 4面 かわらけ溜り | 1 | 2 |
| 2面 土壌1 | | 1 |
| 1面 混乱6 | | 1 |
| 表土掘削 | 2 | 1 |

表1 大倉幕府周辺遺跡出土の軟体動物遺存体の種名一覧

| 腹足綱 GASTOROPODA |
|---|
| ニシキウズガイ科 Family Trochidae |
| ニシキウズガイ科の一種 Trochida gen. et sp. indet. |
| リュウテン科 Family Trochidae |
| サザエ Turbo cornutus LIGHTFOOT, 1786 |
| アクガイ科 Family Muricidae |
| アカニシ Rapana venosa (VALENCIENNES, 1846) |
| 二枚貝綱 BIVALVIA |
| イタヤガイ科 Family Pectinidae |
| ツキヒガイ Amusium Japonicum (GMELIN, 1791) |
| マルスダレガイ科 Family Veneridae |
| ハマグリ Meretrix lissoria (RODING, 1798) |
| ハマグリ属の一種 Maretix sp |

| 種名 | 出土地点 | 殻高mm | 殻長mm | 備考 |
|-------------|--------------------|--------|--------------|--|
| サザエ(殻・有棘) | 表土掘削 | 99.6 | 85.1 88.2 | 口唇部を欠損 殻頂と口唇部を欠損、長径11.3mm・短径3.9mmの孔がある |
| サザエ(殻) | 5面 柱穴 | | | |
| サザエ(殻) | 4面 かわらけ溜り | 40.2 | 36.6 | |
| ニシキウズガイ科の一種 | 4面～5面 | — | — | |
| | | — | — | |
| | | — | — | |
| | | — | — | |
| アカニシ | 4面～5面 4面 かわらけ溜り | — — | — — | 殻軸の一部と体層より上部の一部が残存、殻頂を欠損 殻軸の一部と体層より上部の一部が残存、殻頂を欠損 |
| ツキヒガイL | 土壌1 | — | — | |
| ハマグリR | 4面 かわらけ溜り | 45.9 | — | 4面かわらけ溜まり出土の左殻とペアリングが可能 |
| ハマグリL | 4面 かわらけ溜り | 45.9 | — | 4面かわらけ溜まり出土の左殻とペアリングが可能 |
| ハマグリ属の一種R | 1面 混乱6 | — | — | |
| 二枚貝綱種不明 | 4面から5面 | — | — | |

※1 一印は計測不可を示す

※2 腹足綱では殻径の値を、二枚貝綱では殻長の値を記す

※3 長径の値を示す

※4 短径の値を示す

第3章 おわりに

本調査で検出した遺構は掘立柱建物・柱穴多数、礎石建物・礎石3、溝4条、井戸1基、土壙大形柱穴5穴（うち3穴は布掘？）などであり、およそ4時期の生活面を確認・調査した。その結果、最下面では、中世基盤層（第35図）D・Eが見つかり、近隣地点との対比から溝Eが新発見と判った。

また調査区南側にある大形柱穴は1辺約1m四方程の方形の掘り方をもち、鎌倉市街でも類例のない大規模な遺構であると考えられる。溝Cと重複するが布掘り遺構であったかは、検討をする。

遺構の年代観は13世紀中頃～15世紀代と考える。又、本遺跡から出土した弥生時代中期から後期の遺物をみると、幅をもちながらも宮ノ台式全般に渡る資料がみられる。市街地では南御門遺跡、大倉幕府周辺遺跡群の出土例にも見られるように、宮ノ台式を通じて継続的に周辺に当該時期の集落がもっと広い範囲で展開するものと思われる。

参考・引用文献

「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9」 第3分冊 鎌倉市教育委員会1993

「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10」 第1分冊 鎌倉市教育委員会1994

「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14」 第2分冊 鎌倉市教育委員会1998



図35 周辺の調査地点との対比図

出土遺物法量表

| 図版No. | 遺物No. | 面 | 種別 | 器種 | 口径 | 底径 | 器高 | 備考 |
|-------|-------|------|------|------|--------|--------|--------|------|
| 確認調査 | | | | | | | | |
| 図5 | 1 | 土壤1 | かわらけ | 皿 | (9.2) | 6.8 | 1.6 | |
| 図5 | 2 | 土壤1 | かわらけ | 皿 | (13.7) | 9.2 | (3.0) | |
| 図5 | 3 | 土壤1 | かわらけ | 皿 | 12.3 | 7.15 | 3.2 | |
| 図5 | 4 | 土壤1 | かわらけ | 皿 | 12.2 | (7.2) | 3.3 | |
| 図5 | 5 | 土壤1 | かわらけ | 皿 | (8.0) | (5.5) | (1.65) | 打明皿 |
| 図5 | 6 | 3 | かわらけ | 皿 | 13. | 6.8 | 3. | |
| 図5 | 7 | 3 | かわらけ | 皿 | (11.2) | (6.5) | (3.0) | |
| 図5 | 8 | 3 | かわらけ | 皿 | (7.3) | (4.5) | (1.6) | |
| 図5 | 9 | 4 | かわらけ | 皿 | 10.0 | 7.4 | 3.2 | 黒縁瓦器 |
| 図5 | 10 | 4 | かわらけ | 皿 | 10.4 | 6.2 | 3.1 | |
| 図5 | 11 | 4 | かわらけ | 皿 | 7.4 | 4.6 | 1.8 | 完形 |
| 図5 | 12 | 4 | かわらけ | 皿 | (8.1) | (5.8) | (1.6) | |
| 図5 | 13 | 4 | かわらけ | 皿 | (7.7) | (5.6) | (2.0) | |
| 1面まで | | | | | | | | |
| 図8 | 14 | 1面まで | 瀬戸 | 鉢皿 | — | — | (7.2) | |
| 図8 | 15 | 1面まで | 常滑 | 壺 | — | — | — | |
| 図8 | 16 | 1面まで | 常滑 | 捏鉢 | (41.0) | — | — | |
| 図8 | 17 | 1面まで | かわらけ | 皿 | 12.0 | 7.2 | 3.5 | |
| 図8 | 18 | 1面まで | かわらけ | 皿 | 7.0 | 4.6 | 1.8 | |
| 図8 | 19 | 1面まで | 瓦 | 軒丸 | 1.55 | | | |
| 図8 | 20 | 1面まで | 鉄製品 | 刀子革羽 | (8.5) | 2.15 | 1.2 | |
| 図8 | 21 | 1面まで | 土製品 | 土鈴 | 7.0 | 7.1 | 1.15 | |
| 図8 | 23 | 1面まで | 常滑 | 壺 | 53.8 | — | — | |
| 図8 | 24 | 1面まで | 常滑 | 磨常滑 | | | 1.5 | |
| 図8 | 25 | 1面まで | 常滑 | 壺 | — | — | — | |
| 図9 | 27 | 1面まで | 青磁 | 連弁文碗 | — | — | (4.8) | |
| 図9 | 28 | 1面まで | 常滑 | 壺 | — | — | — | |
| 図9 | 29 | 1面まで | 常滑 | 壺 | — | — | (10.5) | |
| 図9 | 30 | 1面まで | かわらけ | 皿 | 13.35 | 7.85 | 3.7 | |
| 図9 | 31 | 1面まで | かわらけ | 皿 | (13.8) | (7.8) | (3.4) | |
| 図9 | 32 | 1面まで | かわらけ | 皿 | (9.4) | (6.7) | (2.05) | |
| 図9 | 33 | 1面まで | かわらけ | 皿 | (8.5) | (5.6) | 2.4 | |
| 図9 | 34 | 1面まで | かわらけ | 皿 | 7.15 | 4.45 | 2.15 | |
| 図9 | 35 | 1面まで | かわらけ | 皿 | 7.1 | 5.2 | 1.5 | 打ち欠き |
| 図9 | 36 | 1面まで | かわらけ | 皿 | 7.2 | 5.0 | 2.0 | 打ち欠き |
| 図9 | 37 | 1面まで | 土製品 | 土鈴 | 4.8 | 3.7 | 3.3 | |
| 図9 | 38 | 1面まで | 瓦 | 軒丸 | | | 1.7 | |
| 図9 | 39 | 1面まで | 石製品 | 温石 | (10.3) | 7.0 | 1.7 | |
| 2面 | | | | | | | | |
| 図11 | 40 | 2面 | 青磁 | 鉢 | (13.0) | — | — | |
| 図11 | 41 | 2面 | 山茶碗窯 | 捏鉢 | — | — | — | |
| 図11 | 42 | 2面 | 山茶碗窯 | 捏鉢 | — | (16.0) | — | |
| 図11 | 43 | 2面 | 常滑 | 捏鉢 | — | 12.5 | — | |
| 図11 | 44 | 2面 | 手焼り | 鉢形 | — | — | — | 土器質 |
| 図11 | 45 | 2面 | かわらけ | 皿 | (12.0) | (6.8) | 3.0 | |
| 図11 | 46 | 2面 | かわらけ | 皿 | (11.6) | (7.8) | (3.2) | |
| 図11 | 47 | 2面 | かわらけ | 皿 | (12.7) | (6.8) | 3.4 | |
| 図11 | 48 | 2面 | かわらけ | 皿 | 7.5 | 5.0 | 1.65 | |
| 図11 | 49 | 2面 | かわらけ | 皿 | 7.2 | 4.7 | 2.0 | |
| 図11 | 50 | 2面 | かわらけ | 皿 | 7.2 | 6.0 | 1.5 | |
| 図11 | 51 | 2面 | かわらけ | 皿 | 7.3 | 5.3 | 1.7 | 打ち欠き |

| | | | | | | | | |
|------|-----|-----|------|-----|---------|---------|--------|----------|
| 図11 | 52 | 2面 | かわらけ | 皿 | (7.0) | (4.3) | (1.7) | |
| 図11 | 53 | 2面 | かわらけ | 皿 | (7.85) | (5.4) | (1.8) | |
| 図11 | 54 | 2面 | かわらけ | 皿 | 7.4 | 5.4 | 1.8 | |
| 図11 | 55 | 2面 | かわらけ | 皿 | (7.15) | (4.0) | (2.3) | 穿孔 |
| 図11 | 56 | 2面 | 土製品 | 蓋 | 外径5.5 | | 1.15 | |
| 図11 | 57 | 2面 | 銅製品 | | (掛)10.8 | 0.55 | 0.55 | |
| | | | | | (受)2.5 | 0.35 | 6.0 | |
| 図12 | 58 | 2面 | かわらけ | 皿 | (11.1) | (8.1) | (1.95) | |
| 図12 | 59 | 2面 | かわらけ | 皿 | (12.5) | (8.0) | (3.0) | |
| 図12 | 60 | 2面 | かわらけ | 皿 | (13.4) | (8.3) | (3.1) | |
| 図12 | 61 | 2面 | かわらけ | 皿 | (13.0) | (7.8) | (3.4) | |
| 図12 | 62 | 2面 | かわらけ | 皿 | 11.9 | 7.6 | 3.9 | 完形 |
| 図12 | 63 | 2面 | かわらけ | 皿 | (12.0) | (8.1) | (3.2) | 灯明皿 |
| 図12 | 64 | 2面 | かわらけ | 皿 | (12.8) | (8.7) | (3.2) | |
| 図12 | 65 | 2面 | かわらけ | 皿 | (11.6) | (7.4) | 3.2 | |
| 図12 | 66 | 2面 | かわらけ | 皿 | 10.15 | 5.7 | 3.5 | |
| 図12 | 67 | 2面 | かわらけ | 皿 | (12.25) | 7.8 | 3.3 | |
| 図12 | 68 | 2面 | かわらけ | 皿 | (8.0) | (5.5) | (2.1) | |
| 図12 | 69 | 2面 | かわらけ | 皿 | (8.0) | (5.0) | (1.9) | |
| 図12 | 70 | 2面 | かわらけ | 皿 | 8.4 | 5.5 | 2.0 | |
| 図12 | 71 | 2面 | かわらけ | 皿 | 7.8 | 5.25 | 1.9 | |
| 図12 | 72 | 2面 | かわらけ | 皿 | 8.0 | 4.5 | 1.95 | |
| 図12 | 73 | 2面 | かわらけ | 皿 | 7.5 | 4.65 | 1.7 | 灯明皿 |
| 2面造構 | | | | | | | | |
| 図13 | 77 | 土坑1 | 青磁 | 碗 | — | 6.0 | — | 割花文 |
| 図13 | 78 | 土坑1 | 白磁 | 皿 | 10.4 | 7.5 | 1.7 | 口丸 |
| 図13 | 79 | 土坑1 | 白磁 | 碗 | — | 5.0 | — | |
| 図13 | 80 | 土坑1 | 瀬戸 | 入子 | (10.0) | (5.5) | (3.3) | |
| 図13 | 81 | 土坑1 | 瀬戸 | 入子 | (8.9) | (4.8) | (3.2) | |
| 図13 | 82 | 土坑1 | 瀬戸 | 入子 | — | — | — | |
| 図13 | 83 | 土坑1 | 山茶碗窓 | 程鉢 | (31.7) | — | — | |
| 図13 | 84 | 土坑1 | 常滑 | 壺 | (7.7) | — | — | |
| 図13 | 85 | 土坑1 | 常滑 | 壺 | — | — | — | |
| 図13 | 86 | 土坑1 | 常滑 | 壺 | — | — | — | |
| 図13 | 87 | 土坑1 | 常滑 | 壺 | — | — | — | |
| 図13 | 88 | 土坑1 | 常滑 | 壺 | — | — | — | |
| 図13 | 89 | 土坑1 | 常滑 | 壺 | — | — | — | |
| 図13 | 90 | 土坑1 | かわらけ | 皿 | (12.5) | 7.0 | 3.5 | 手づくね |
| 図13 | 91 | 土坑1 | かわらけ | 皿 | 12.25 | 8.7 | 3.0 | |
| 図13 | 92 | 土坑1 | かわらけ | 皿 | (13.7) | 9.4 | 2.7 | |
| 図13 | 93 | 土坑1 | かわらけ | 皿 | 11.9 | 8.05 | 3.7 | |
| 図13 | 94 | 土坑1 | かわらけ | 皿 | 1.9 | 8.0 | 3.5 | 歪みあり |
| 図13 | 95 | 土坑1 | かわらけ | 皿 | 9.3 | 5.7 | 18.0 | |
| 図13 | 96 | 土坑1 | かわらけ | 皿 | (9.2) | (6.6) | (1.7) | 手づくね |
| 図13 | 97 | 土坑1 | かわらけ | 皿 | 7.5 | 5.8 | 1.25 | |
| 図13 | 98 | 土坑1 | かわらけ | 皿 | 7.8 | 5.55 | 1.6 | |
| 図13 | 99 | 土坑1 | かわらけ | 皿 | (8.0) | (5.9) | (1.65) | |
| 図13 | 100 | 土坑1 | かわらけ | 皿 | 7.6 | 5.4 | 1.9 | |
| 図13 | 101 | 土坑1 | かわらけ | 皿 | 7.55 | 5.0 | 2.0 | |
| 図13 | 102 | 土坑1 | かわらけ | 皿 | (8.1) | (5.2) | (1.9) | |
| 図13 | 103 | 土坑1 | 鋳造製品 | 輪羽口 | 外径(6.4) | 孔径(2.6) | | |
| 図13 | 107 | 土坑2 | 青磁 | 鉢 | — | — | — | |
| 図13 | 108 | 土坑2 | かわらけ | 皿 | 13.1 | 7.75 | 3.6 | |
| 図13 | 109 | 土坑2 | かわらけ | 皿 | (12.6) | (7.3) | (3.0) | |
| 図13 | 110 | 土坑2 | かわらけ | 皿 | (13.4) | (7.0) | (3.5) | |
| 図13 | 111 | 土坑2 | かわらけ | 皿 | 7.4 | 4.5 | 2.3 | 打ち欠き、灯明皿 |
| 図13 | 112 | 土坑2 | かわらけ | 皿 | 7.2 | 4.7 | 1.6 | 打ち欠き、灯明皿 |

| | | | | | | | | |
|-----|-----|------|------|------|--------|-------|--------|-------|
| 図13 | 113 | 柱穴9 | かわらけ | 皿 | 8.4 | 6.5 | 1.9 | |
| 図13 | 114 | 柱穴 | かわらけ | 皿 | (7.3) | (4.6) | (1.5) | |
| 図13 | 115 | 2面 | かわらけ | 皿 | 7.25 | 3.7 | 2.0 | 灯明皿 |
| 図13 | 116 | 2面 | かわらけ | 皿 | 7.15 | 6.0 | 1.7 | |
| 図13 | 117 | 2面 | かわらけ | 皿 | 7.25 | 4.9 | 1.65 | |
| 図13 | 118 | 2面 | かわらけ | 皿 | 7.6 | 5.5 | 1.6 | |
| 図13 | 119 | 2面 | かわらけ | 皿 | (4.6) | (3.9) | (0.9) | |
| | | 3面 | | | | | | |
| 図16 | 120 | 3面 | 青磁 | 連弁文碗 | — | 4.0 | — | |
| 図16 | 121 | 3面 | 青磁 | 折縁鉢 | (21.4) | — | — | |
| 図16 | 122 | 3面 | 白磁 | 口元皿 | (10.0) | 5.5 | 3.3 | |
| 図16 | 123 | 3面 | 瀬戸 | 天目茶碗 | 12.0 | 4.2 | 6.3 | |
| 図16 | 124 | 3面 | 山茶碗窓 | 碗 | — | (6.0) | — | |
| 図16 | 125 | 3面 | 常滑 | 壺 | (20.8) | — | — | |
| 図16 | 126 | 3面 | 常滑 | 壺 | (18.4) | — | — | |
| 図16 | 127 | 3面 | 常滑 | 壺 | — | — | — | |
| 図16 | 128 | 3面 | 常滑 | 壺 | — | — | — | |
| 図16 | 129 | 3面 | 常滑 | 壺 | — | — | — | |
| 図16 | 130 | 3面 | かわらけ | 皿 | (15.2) | (8.6) | 4.9 | |
| 図16 | 131 | 3面 | かわらけ | 皿 | (12.7) | (6.8) | 3.4 | |
| 図16 | 132 | 3面 | かわらけ | 皿 | (13.2) | (7.5) | (3.6) | |
| 図16 | 133 | 3面 | かわらけ | 皿 | (13.2) | (9.3) | (3.1) | |
| 図16 | 134 | 3面 | かわらけ | 皿 | (13.0) | (6.5) | (3.75) | |
| 図16 | 135 | 3面 | かわらけ | 皿 | (13.2) | (6.4) | (3.3) | |
| 図16 | 136 | 3面 | かわらけ | 皿 | (11.0) | 6.4 | 3.2 | |
| 図16 | 137 | 3面 | かわらけ | 皿 | (11.0) | 5.7 | 3.4 | |
| 図16 | 138 | 3面 | かわらけ | 皿 | 12.3 | 7.6 | 3.45 | |
| 図16 | 139 | 3面 | かわらけ | 皿 | (12.6) | (7.8) | 3.0 | |
| 図16 | 140 | 3面 | かわらけ | 皿 | (8.6) | (6.6) | 1.45 | |
| 図16 | 141 | 3面 | かわらけ | 皿 | (8.6) | (6.4) | (1.5) | |
| 図16 | 142 | 3面 | かわらけ | 皿 | 8.4 | 6.8 | 1.3 | |
| 図16 | 143 | 3面 | かわらけ | 皿 | (9.3) | (7.4) | (1.0) | |
| 図16 | 144 | 3面 | かわらけ | 皿 | (8.0) | 5.0 | 1.65 | |
| 図16 | 145 | 3面 | かわらけ | 皿 | (8.3) | (6.4) | (1.6) | |
| 図16 | 146 | 3面 | かわらけ | 皿 | 7.6 | 5.65 | 1.6 | |
| 図16 | 147 | 3面 | かわらけ | 皿 | (8.3) | (5.5) | (1.9) | |
| 図16 | 148 | 3面 | かわらけ | 皿 | 8.45 | 6.25 | 2.0 | |
| 図16 | 149 | 3面 | かわらけ | 皿 | (8.2) | (6.4) | (1.45) | |
| 図16 | 150 | 3面 | かわらけ | 皿 | (8.8) | (6.4) | (1.5) | |
| 図16 | 151 | 3面 | かわらけ | 皿 | (8.7) | (6.6) | (1.65) | |
| 図16 | 152 | 3面 | かわらけ | 皿 | 7.9 | 4.8 | 1.8 | 打ち欠き |
| 図16 | 153 | 3面 | かわらけ | 皿 | (7.6) | (5.1) | (1.55) | |
| 図16 | 154 | 3面 | かわらけ | 皿 | (7.8) | (5.2) | 1.7 | |
| 図16 | 155 | 3面 | かわらけ | 皿 | (7.6) | (4.9) | 1.85 | |
| 図16 | 156 | 3面 | かわらけ | 皿 | (7.9) | (5.6) | (1.65) | |
| 図16 | 157 | 3面 | かわらけ | 皿 | (7.2) | (4.2) | (2.1) | |
| 図16 | 158 | 3面 | かわらけ | 皿 | 7.65 | 5.2 | 2.0 | |
| 図16 | 159 | 3面 | かわらけ | 皿 | (7.6) | (5.0) | (1.65) | |
| 図16 | 160 | 3面 | かわらけ | 皿 | (6.8) | 4.6 | 1.75 | |
| 図16 | 161 | 3面 | 常滑 | 磨常滑 | 10.85 | 10.6 | 1.2 | |
| 図16 | 162 | 3面 | 常滑 | 磨常滑 | 9.1 | 7.2 | 1.0 | |
| 図16 | 163 | 3面 | 常滑 | 磨常滑 | 8.8 | 8.1 | 1.1 | |
| 図17 | 164 | 3面 | 石製品 | 砥石 | (9.5) | 3.7 | 1.0 | |
| 図17 | 165 | 3面 | 石製品 | 砥石 | (8.1) | 4.0 | 1.5 | |
| 図17 | 166 | 3面 | 石 | 琥珀 | 4.9 | 5.5 | 3.0 | |
| | | 3面遺構 | | | | | | |
| 図18 | 169 | 柱穴18 | かわらけ | 皿 | 5.1 | 4.2 | 0.9 | コースター |

| | | | | | | | |
|-----|-----|---------|------|------|--------|--------|----------------|
| 図18 | 170 | 柱穴20 | かわらけ | 皿 | 7.6 | 6.2 | 1.6 |
| 図18 | 171 | 26 | かわらけ | 皿 | (7.6) | (5.2) | (1.8) |
| 図18 | 172 | ピット52 | かわらけ | 皿 | (12.8) | (8.7) | (3.2) |
| 図18 | 173 | 柱穴53 | かわらけ | 皿 | 7.4 | 4.6 | 1.7 |
| 図18 | 174 | 土坑62 | 常滑 | 壺口蓋 | — | — | — |
| 図18 | 175 | 63 | 伊勢系 | 土鍋 | — | — | — |
| 図18 | 176 | 土坑66 | 常滑 | 壺 | — | — | — |
| 図18 | 177 | 土坑66 | 石製品 | 硯 | (6.9) | 6.7 | — |
| | | 4面 | | | | | |
| 図21 | 178 | 4面 | 山茶碗窓 | 捏鉢 | — | — | — |
| 図21 | 179 | 4面 | 常滑 | 壺 | — | — | — |
| 図21 | 180 | 4面 | 常滑 | 壺 | — | — | — |
| 図21 | 181 | 4面 | 常滑 | 捏鉢 | — | — | — |
| 図21 | 182 | 4面 | かわらけ | 皿 | (13.1) | 7.6 | 3.1 |
| 図21 | 183 | 4面 | かわらけ | 皿 | 8.6 | 5.45 | 2.0 |
| 図21 | 184 | 4面 | かわらけ | 皿 | 8.9 | 6.7 | 1.8 灯明皿 |
| 図21 | 185 | 4面 | かわらけ | 皿 | (9.1) | (5.2) | (1.7) 内折れコースター |
| 図21 | 186 | 4面 | かわらけ | 皿 | 8.8 | 6.5 | 1.9 |
| 図21 | 187 | 4面 | かわらけ | 皿 | 7.6 | 4.35 | 2.1 |
| 図21 | 188 | 4面 | 瓦質 | 字瓦 | | 2.4 | |
| | | 4面造構 | | | | | |
| 図22 | 189 | ピット89 | 伊勢系 | 土鍋 | (23.3) | — | — |
| 図22 | 190 | ピット94 | かわらけ | 皿 | (8.2) | (5.6) | (1.7) |
| 図22 | 191 | 土坑100 | かわらけ | 皿 | 8.95 | 4.95 | 1.9 |
| 図22 | 192 | 105 | 常滑 | 壺 | — | — | — |
| 図22 | 193 | 105 | 常滑 | 壺 | — | — | — |
| 図22 | 194 | 105 | かわらけ | 皿 | (8.1) | (4.4) | 2.4 |
| 図22 | 195 | 105 | かわらけ | 皿 | (13.0) | (9.0) | (3.0) 灯明皿 |
| 図22 | 196 | 105 | 瓦 | 平瓦 | | 2.7 | |
| 図22 | 197 | 土坑106 | かわらけ | 皿 | (13.0) | (5.0) | (3.0) 白かわらけ灯明皿 |
| 図22 | 198 | 土坑108 | 常滑 | 壺 | — | — | — |
| 図22 | 199 | 土坑108 | 瓦 | 平瓦 | | 2.1 | |
| 図22 | 200 | 土坑114 | かわらけ | 皿 | (10.4) | (4.6) | (1.7) |
| 図22 | 201 | ピット115 | かわらけ | 皿 | (12.0) | (7.9) | 2.6 |
| 図22 | 202 | 土坑123 | 常滑 | 壺 | — | — | — |
| 図22 | 203 | 123 | 常滑 | 捏鉢 | — | 14.6 | — |
| 図22 | 204 | 123 | かわらけ | 皿 | (8.4) | (5.0) | 2.15 |
| 図22 | 205 | 132 | かわらけ | 皿 | (11.4) | (4.0) | (3.2) |
| 図22 | 206 | 151 | かわらけ | 皿 | (9.1) | (6.8) | (1.7) |
| 図24 | 207 | 161(井戸) | 青磁 | 橿播文皿 | — | 4.7 | — |
| 図24 | 208 | 161(井戸) | 瀬戸 | 脚付皿 | — | (13.2) | — |
| 図24 | 209 | 161(井戸) | かわらけ | 皿 | (12.1) | 7.5 | 3.1 |
| 図24 | 210 | 161(井戸) | かわらけ | 皿 | 11.85 | 8.5 | 3.0 |
| 図24 | 211 | 161(井戸) | かわらけ | 皿 | (8.9) | (6.8) | 1.4 |
| 図24 | 212 | 161(井戸) | かわらけ | 皿 | 8.85 | 3.75 | 1.7 |
| 図24 | 213 | 161(井戸) | かわらけ | 皿 | 9.0 | 4.8 | 1.7 |
| 図24 | 214 | 161(井戸) | かわらけ | 皿 | 8.5 | 6.0 | 1.75 打ち欠き |
| 図24 | 215 | 161(井戸) | かわらけ | 皿 | 5.7 | 4.0 | 1.6 |
| 図24 | 216 | 161(井戸) | 瓦 | 男瓦 | | 1.8 | |
| 図24 | 217 | 161(井戸) | 瓦 | 女瓦 | | 2.4 | |
| 図24 | 218 | 161(井戸) | 瓦 | 女瓦 | | 2.5 | |
| 図24 | 219 | 182 | かわらけ | 皿 | (5.3) | (5.5) | (0.6) 白かわらけ |
| 図24 | 220 | 207 | 山茶碗窓 | 捏鉢 | — | (16.0) | — |
| 図24 | 221 | 210 | 土器類 | | — | — | 脚 |
| 図24 | 222 | 210 | 石製品 | 温石 | (6.5) | 9.75 | 2.3 |
| 図25 | 223 | 215(溝) | 手彫り | 鉢型 | — | — | 瓦質 |
| 図25 | 224 | 215(溝) | かわらけ | 皿 | (7.8) | (5.8) | 1.45 |

| | | | | | | | |
|------|-----|---------|------|------|--------|--------|--------|
| 図25 | 225 | 215(溝) | かわらけ | 皿 | (8.5) | (6.0) | (1.95) |
| 図25 | 226 | 215(溝) | かわらけ | 皿 | (11.0) | (7.0) | (3.1) |
| 図25 | 227 | 215(溝) | 石製品 | 砥石 | (5.65) | 4.5 | 1.4 |
| 5面 | | | | | | | |
| 図28 | 257 | 5面 | 青磁 | 連弁文碗 | (13.2) | — | — |
| 図28 | 258 | 5面 | 青磁 | 連弁文碗 | (15.0) | — | — |
| 図28 | 259 | 5面 | 青白磁 | 皿 | — | 3.6 | — |
| 図28 | 260 | 5面 | 山茶碗煎 | 捏鉢 | (30.1) | (14.0) | (4.0) |
| 図28 | 261 | 5面 | 山茶碗煎 | 捏鉢 | — | (15.0) | — |
| 図28 | 262 | 5面 | かわらけ | 皿 | (12.7) | (8.2) | (3.2) |
| 図28 | 263 | 5面 | かわらけ | 皿 | (12.0) | (8.0) | 3.1 |
| 図28 | 264 | 5面 | かわらけ | 皿 | (10.0) | (4.8) | (1.6) |
| 図28 | 265 | 5面 | かわらけ | 皿 | (9.3) | (6.2) | (1.4) |
| 図28 | 266 | 5面 | かわらけ | 皿 | (9.6) | (6.0) | (1.8) |
| 図28 | 267 | 5面 | かわらけ | 皿 | (9.4) | (5.4) | (1.7) |
| 図28 | 268 | 5面 | かわらけ | 皿 | (8.15) | (5.7) | (1.5) |
| 図28 | 269 | 5面 | かわらけ | 皿 | 7.4 | 6.0 | 1.5 |
| 図28 | 270 | 5面 | かわらけ | 皿 | (7.4) | (4.7) | (1.45) |
| 図28 | 271 | 5面 | かわらけ | 皿 | (6.3) | (4.6) | 2.1 |
| 図28 | 272 | 5面 | かわらけ | 皿 | (7.7) | 5.7 | 1.85 |
| 図28 | 273 | 5面 | かわらけ | 皿 | (7.8) | (6.2) | 1.6 |
| 図28 | 274 | 5面 | かわらけ | 皿 | (7.7) | 5.6 | 1.2 |
| 図28 | 275 | 5面 | かわらけ | 皿 | (6.8) | (6.0) | (1.05) |
| 図28 | 276 | 5面 | かわらけ | 皿 | (7.1) | (7.4) | (1.1) |
| 図28 | 277 | 5面 | 瓦 | 軒丸 | | 2.9 | |
| 図28 | 278 | 5面 | 瓦 | 平瓦 | | 3.6 | |
| 図29 | 279 | 5面 | 瓦 | 平瓦 | | 2.7 | |
| 図29 | 280 | 5面 | 瓦 | 平瓦 | | 2.9 | |
| 図29 | 281 | 5面 | 石製品 | 温石 | (9.9) | 7.7 | (1.2) |
| 図29 | 282 | 5面 | 常滑 | 磨常滑 | 6.95 | 6.05 | 0.7 |
| 5面造構 | | | | | | | |
| 図31 | 283 | 5面 | かわらけ | 皿 | (13.7) | (8.9) | (3.1) |
| 図31 | 284 | 5面 | かわらけ | 皿 | (8.8) | (7.2) | (1.7) |
| 図31 | 285 | 5面 | 瓦 | 男瓦 | (23.9) | 12.5 | 2.0 |
| 図31 | 286 | 5面 | 瓦 | 平瓦 | — | 24.0 | 3.3 |
| 図31 | 287 | 5面 | 鉄製品 | 錠 | (12.4) | 1.55 | 0.75 |
| 図32 | 288 | 139 | かわらけ | 皿 | (14.6) | (8.2) | (3.6) |
| 図32 | 289 | ピット148 | かわらけ | 皿 | 9.5 | 4.2 | 2.3 |
| 図32 | 290 | 152 | 瓦 | 字瓦 | | 2.7 | |
| 図32 | 291 | 柱穴158 | かわらけ | 皿 | (12.8) | (7.0) | (3.2) |
| 図32 | 292 | 171.172 | 鉄製品 | 鉢津 | 4.8 | 5.0 | 3.9 |
| 図32 | 293 | 171.172 | 鉄製品 | 鉢津 | 5.25 | 5.5 | 2.5 |
| 図32 | 294 | 182 | 石製品 | 打製石斧 | 11.85 | 5.6 | 3.5 |
| 図32 | 295 | ピット190 | かわらけ | 皿 | 13.0 | 7.5 | 3.55 |
| 図32 | 296 | 194 | 瓦 | 男瓦 | | 2.0 | |
| 図32 | 297 | 196 | かわらけ | 皿 | — | — | — |
| 図32 | 298 | 柱穴196 | かわらけ | 皿 | (8.0) | (6.6) | 1.5 |
| 図32 | 299 | 柱穴241 | かわらけ | 皿 | (13.6) | (8.8) | (2.95) |
| 図32 | 300 | 柱穴241 | かわらけ | 皿 | (13.2) | (6.0) | (3.3) |
| 図32 | 301 | 柱穴241 | 鉄製品 | 針 | (6.7) | 0.35 | 0.35 |
| 図32 | 302 | 柱穴241 | 青磁 | 碗 | — | 4.5 | — |
| 図32 | 303 | 柱穴246 | かわらけ | 皿 | (15.3) | (8.5) | (2.6) |
| 図33 | 304 | かわらけ瀧り | かわらけ | 皿 | 12.6 | 7.7 | 3.0 |
| 図33 | 305 | かわらけ瀧り | かわらけ | 皿 | 平均13.8 | 7.4 | 3.1 |
| 図33 | 306 | かわらけ瀧り | かわらけ | 皿 | (12.8) | (6.0) | 3.6 |
| 図33 | 307 | かわらけ瀧り | かわらけ | 皿 | (11.8) | (8.2) | 2.8 |
| 図33 | 308 | かわらけ瀧り | かわらけ | 皿 | (7.2) | (5.1) | (1.8) |

| | | | | | | | | |
|-----|-----|--------|------|----|--------|-------|-------|-------|
| 図33 | 309 | かわらけ溜り | かわらけ | 皿 | (9.3) | (6.6) | (2.0) | |
| 図33 | 310 | かわらけ溜り | かわらけ | 皿 | (10.0) | 5.3 | 1.6 | |
| 図33 | 311 | かわらけ溜り | かわらけ | 皿 | (8.7) | (5.0) | (1.8) | |
| 図33 | 312 | かわらけ溜り | かわらけ | 皿 | 9.4 | 7.45 | 2.0 | |
| 図33 | 313 | かわらけ溜り | かわらけ | 皿 | (10.1) | (8.3) | (1.6) | |
| 図33 | 314 | かわらけ溜り | かわらけ | 皿 | (9.1) | (7.1) | (1.7) | |
| 図33 | 315 | かわらけ溜り | かわらけ | 皿 | (8.1) | (5.8) | (1.8) | |
| 図33 | 316 | かわらけ溜り | かわらけ | 皿 | (8.6) | (6.2) | 1.6 | |
| 図33 | 317 | かわらけ溜り | かわらけ | 皿 | (8.2) | (6.0) | (1.3) | |
| 図33 | 318 | かわらけ溜り | かわらけ | 皿 | 8.4 | 6.4 | 1.8 | 打ち欠き |
| 図33 | 319 | かわらけ溜り | かわらけ | 皿 | (7.0) | (5.6) | (1.5) | |
| 図33 | 320 | かわらけ溜り | かわらけ | 皿 | (5.6) | (5.6) | 1.15 | コースター |
| 図33 | 321 | かわらけ溜り | 瓦 | 軒丸 | | | 3.1 | |
| 図33 | 322 | かわらけ溜り | 瓦 | 字瓦 | | | 2.0 | |
| 図33 | 323 | かわらけ溜り | 瓦 | 平瓦 | | | 3.2 | |

大倉幕府 出土遺物・点数重量表

| かわらけ | A小 | B小 | B大 | C小 | C中 | C大 | D小 | D大 | E小 | E中 | E大 | コースター | 白かわらけ |
|--------|----------|-----|------|-----|-----|------|------|-------|-----|----|------|-------|-------|
| 重量(g) | 10 | 528 | 5880 | 713 | 175 | 3684 | 2327 | 26612 | 425 | 80 | 1180 | 10 | 302 |
| 総重量(g) | 100046 g | | | | | | | | | | | | |

| 貿易陶器 | 青磁 | 白磁 | 青白磁 | 彩釉 | 古代 | |
|------|------|----|-----|----|----|------|
| | | | | | 点数 | 107点 |
| 計 | 140点 | | | | | |

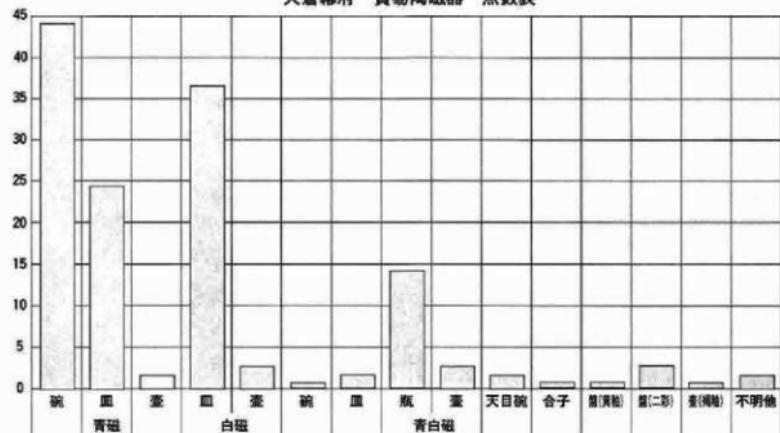
| 国産陶器 | 瀬戸 | 常滑 | 備前 | 渥美 | 信楽 | 山茶 | 褐釉 | 瓦器手培り | 羽釜 | 不明 |
|-------|---------------|-------|-----|------|-----|------|----|-------|-----|-----|
| 点数 | 5 | 905 | 11 | 23 | 1 | 111 | 1 | 53 | 43 | 8 |
| 重量(g) | 380 | 56817 | 570 | 1242 | 175 | 8385 | 50 | 5752 | 297 | 300 |
| 計 | 1161点 73968 g | | | | | | | | | |

| 瓦 | 鎧 | 字 | 男瓦 | 女瓦 | 種類不明・他 |
|-------|--------------|-----|------|-------|--------|
| 点数 | 4 | 9 | 5 | 120 | 10 |
| 重量(g) | 460 | 580 | 1570 | 16306 | 3635 |
| 計 | 148点 22551 g | | | | |

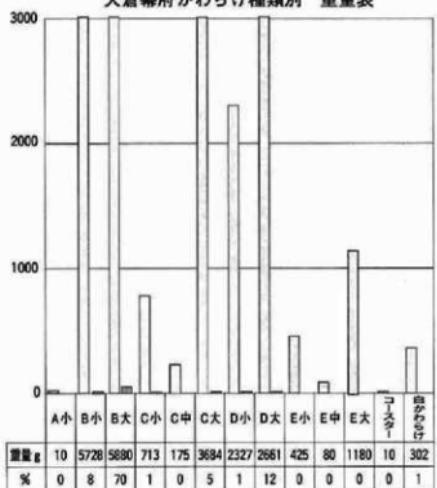
| 種別 | 砥石 | 石鍋 | 温石 | 硯 | かぶら | 琥珀 | 金属 |
|-------|-----|-----|-----|----|-----|----|-----|
| 点数 | 9 | 4 | 2 | 1 | 1 | 1 | 43 |
| 重量(g) | 615 | 145 | 120 | 60 | 1 | 65 | 643 |
| 計 | 61点 | | | | | | |

| 国版No. | 遺物No. | 面 | 造構名 | 銘貨名 | 国名 | 初鋤年 | 西暦 | 書体 | 背 | 枚数 | 欠け銭 |
|-------|-------|---|--------|-------|----|--------|------|----|----------|----|-----|
| 国8 | 22 | | 禮12 | 不明(制) | | | | 楷書 | 無背 | 1 | |
| 国8 | 26 | | | 寛永通寶 | 北宋 | 大觀元年 | 1107 | 楷書 | 無背 | 1 | |
| 国12 | 74 | 2 | | 大觀通寶 | 北宋 | 寶元元年 | 1038 | 篆書 | 無背 | 1 | |
| 国12 | 75 | 2 | | 皇宋通寶 | 北宋 | 熙寧元年 | 1068 | 篆書 | 無背 | 1 | |
| 国12 | 76 | 2 | | 熙寧元寶 | 北宋 | 元祐元年 | 1086 | 篆書 | 無背 | 1 | |
| | | | | 元祐通寶 | 北宋 | | | | | | |
| | | | | 不明 | | | | | | 1 | |
| 国13 | 104 | 2 | ピット2 | 紹聖元寶 | 北宋 | 紹聖元年 | 1094 | 篆書 | 無背 | 1 | |
| 国13 | 105 | 2 | 土坑1 | 治平元寶 | 北宋 | 治平元年 | 1064 | 楷書 | 無背 | 1 | |
| 国13 | 106 | 2 | ピット12 | 元祐通寶 | 北宋 | 元祐元年 | 1086 | 行書 | 無背 | 1 | |
| 国17 | 167 | 3 | | 開元通寶 | 唐 | 武德4年 | 621 | 隸書 | 無背 | 1 | |
| | | | | 不明 | | | | | | 1 | |
| 国17 | 168 | 3 | | 天祐通寶 | 北宋 | 天祐元年 | 1017 | 楷書 | 無背 | 1 | |
| | | 4 | | 不明 | | | | | | 1 | |
| 国25 | 237 | 4 | ピット219 | 祥符元寶 | 北宋 | 大中祥符元年 | 1009 | 楷書 | 無背 | 1 | |
| 国25 | 235 | 4 | | 治平元寶 | 北宋 | 治平元年 | 1064 | 楷書 | 無背 | 1 | |
| 国25 | 243 | 4 | | 治平元寶 | 北宋 | 治平元年 | 1064 | 篆書 | 無背 | 1 | |
| 国25 | 247 | 4 | | 元豐通寶 | 北宋 | 元豐元年 | 1078 | 篆書 | 無背 | 2 | 奉1点 |
| 国25 | 229 | 4 | | 開元通寶 | 唐 | 武德4年 | 621 | 隸書 | 無背 | 3 | |
| 国25 | 239 | 4 | | 皇宋通寶 | 北宋 | 寶元元年 | 1038 | 楷書 | 無背 | 4 | |
| 国25 | 244 | 4 | | 熙寧元寶 | 北宋 | 熙寧元年 | 1068 | 楷書 | 無背 | 3 | |
| 国25 | 234 | 4 | | 咸平元寶 | 北宋 | 咸平元年 | 998 | 楷書 | 無背 | 2 | |
| 国25 | 251 | 4 | | 紹聖元寶 | 北宋 | 紹聖元年 | 1094 | 篆書 | 無背 | 1 | |
| 国25 | 252 | 4 | | 紹聖元寶 | 北宋 | 紹聖元年 | 1094 | 行書 | 無背 | 1 | |
| 国25 | 233 | 4 | | 至道元寶 | 北宋 | 至道元年 | 995 | 行書 | 無背 | 1 | |
| 国25 | 255 | 4 | | 淳熙元寶 | 南宋 | 淳熙7年 | 1187 | 楷書 | 上「十」下「四」 | 1 | |
| 国25 | 256 | 4 | | 慶元通寶 | 南宋 | 慶元元年 | 1195 | 楷書 | 下「元」 | 1 | |
| 国25 | 253 | 4 | | 大觀通寶 | 北宋 | 大觀元年 | 1107 | 楷書 | 無背 | 1 | |
| 国25 | 238 | 4 | | 景祐元寶 | 北宋 | 景祐元年 | 1034 | 楷書 | 無背 | 1 | |
| 国25 | 247 | 4 | | 元豐通寶 | 北宋 | 元豐元年 | 1078 | 篆書 | 無背 | 1 | |
| 国25 | 232 | 4 | | ?元重寶 | 唐 | ?元元年 | 758 | 隸書 | 無背 | 1 | |
| 国25 | 236 | 4 | | 景德元寶 | 北宋 | 景德元年 | 1004 | 楷書 | 無背 | 1 | |
| 国25 | 250 | 4 | | 海東通寶 | 高麗 | 肅宗2年 | 1097 | 隸書 | 無背 | 1 | |
| 国25 | 254 | 4 | | 政和通寶 | 北宋 | 政和元年 | 1111 | 篆書 | 無背 | 1 | |

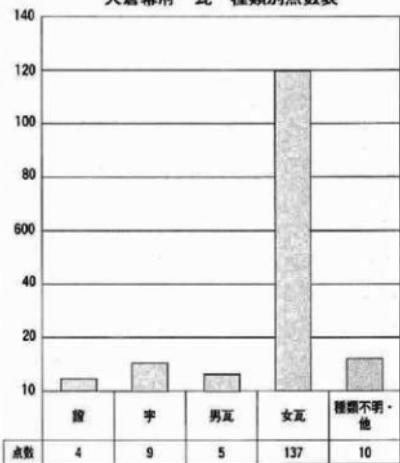
大倉幕府 貿易陶磁器 点数表



大倉幕府かわらけ種類別 重量表



大倉幕府 瓦 種類別点数表





(1) 1面全景



(2) 1面全景



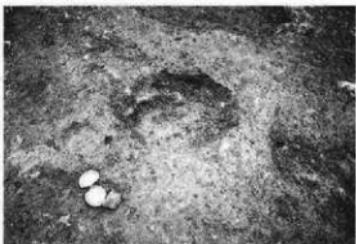
(3) 1面鎌倉石列



(4) 1面近世基礎石列



(5) 2面全景



(6) 2面出土遺物

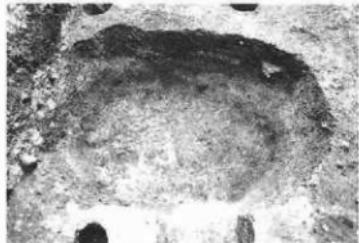


(7) 2面出土遺物(鯨骨)



(8) 2面全景

図版2



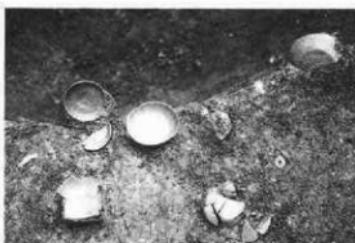
(1) 2面土壤1



(2) 2面溝2断面



(3) 2面土丹礫石と遺物出土状況 (かわらけ)



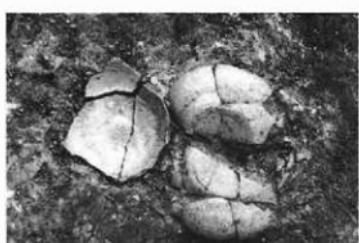
(4) 2面かわらけ出土状況



(5) 2面検出土壙・ピット群



(6) 3面琥珀出土状況



(7) 3面遺物出土状況 (かわらけ)



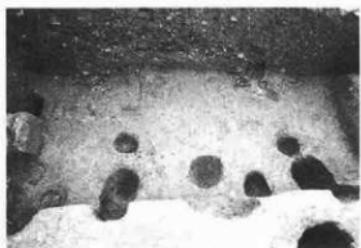
(8) 3面玉砂利出土状況



(1) 3面土壙 161・122・ビット 125



(2) 4面土壙 100と出土遺物(かわらけ)



(3) 3面柱穴



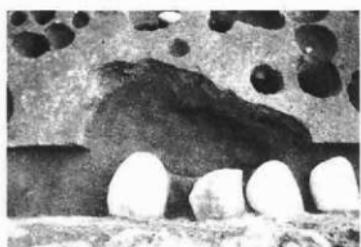
(4) 4面土壙(イコウ 219)



(5) 3面全景



(6) 4面柱穴群



(7) 3面土壙 147



(8) 4面全景

図版4



1. 3面炭化物・貝殻出土範囲



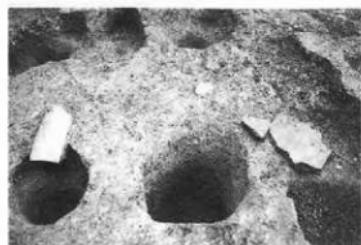
2. 4面土壙 159



3. 5面検出井戸址 1



4. 5面土壙出土遺物



5. 5面柱穴群



6. 5面大柱穴内柱痕出土遺物（白磁）



7. 5面出土遺物（瓦）



8. 5面全景

図版5



図版6



第28図-257



第28図-258



第9図-27



第16図-120



第12図-40



第13図-107



第13図-77



第31図-322



第16図-121



5面



第28図-259



第24図-207



5面
かわらけ瀬り

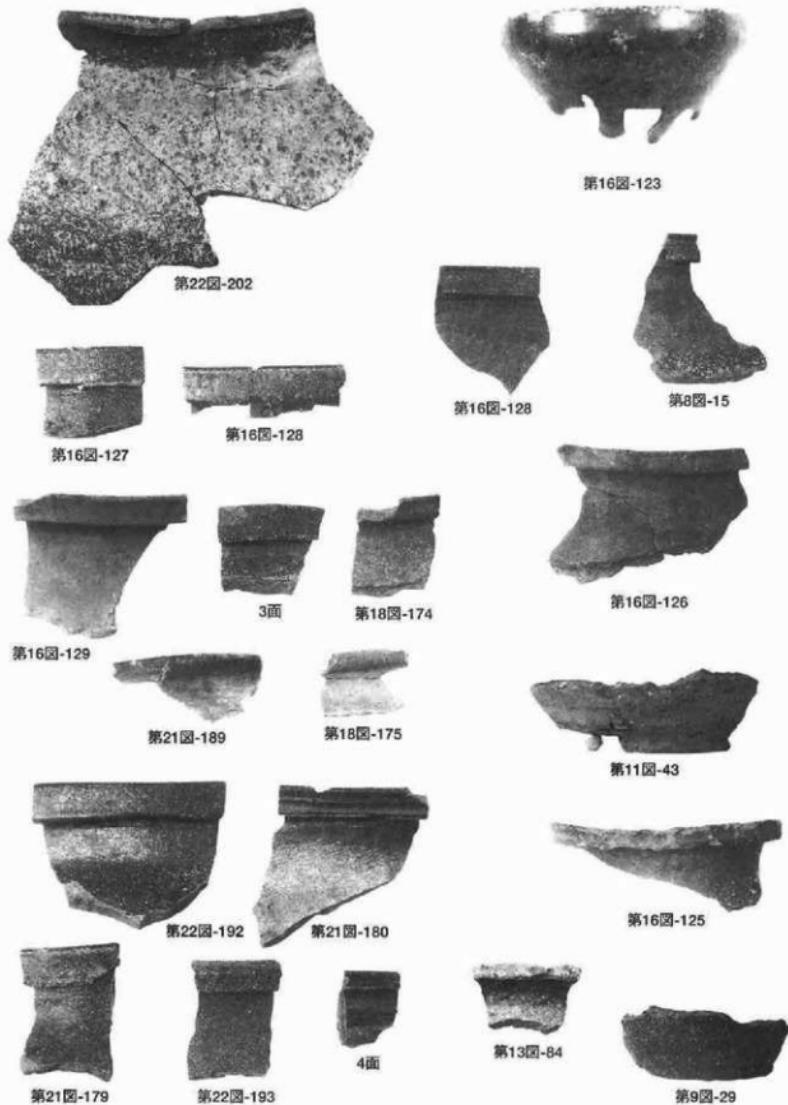


第16図-122



第13図-79

貿易陶磁器



国産陶器（1）

图版8



第8图-16



第11图-44



第11图-41



第13图-83



4面



4面



第25图-223



第28图-260



第24图-220



第8图-23



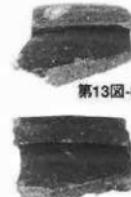
第16图-129



第8图-25



第17图-176

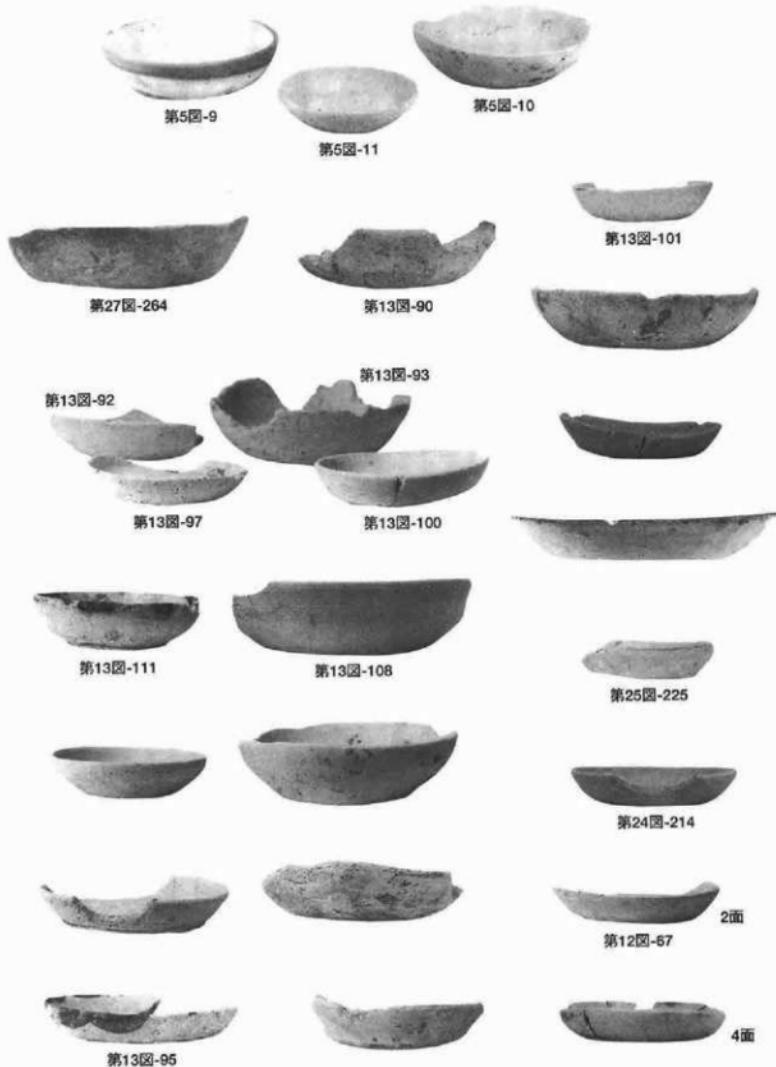


第13图-87



第13图-88

国产陶器 (2)



かわらけ

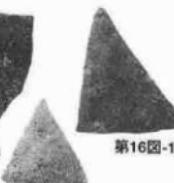
図版10



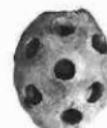
第16図-161



第16図-163



第16図-162



第9図-37



第9図-39



第18図-177



第17図-166



第24図-222



第29図-281



第32図-294



第8図-20



第17図-164



第17図-165



第25図-227



第31図-287

磨削滑・石・鐵製品

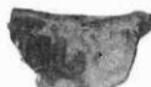


第32図-293

第32図-292



第11図-57



第21図-188



第32図-290



第8図-19



第33図-321



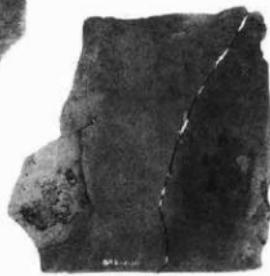
第28図-277



第9図-38



第31図-286

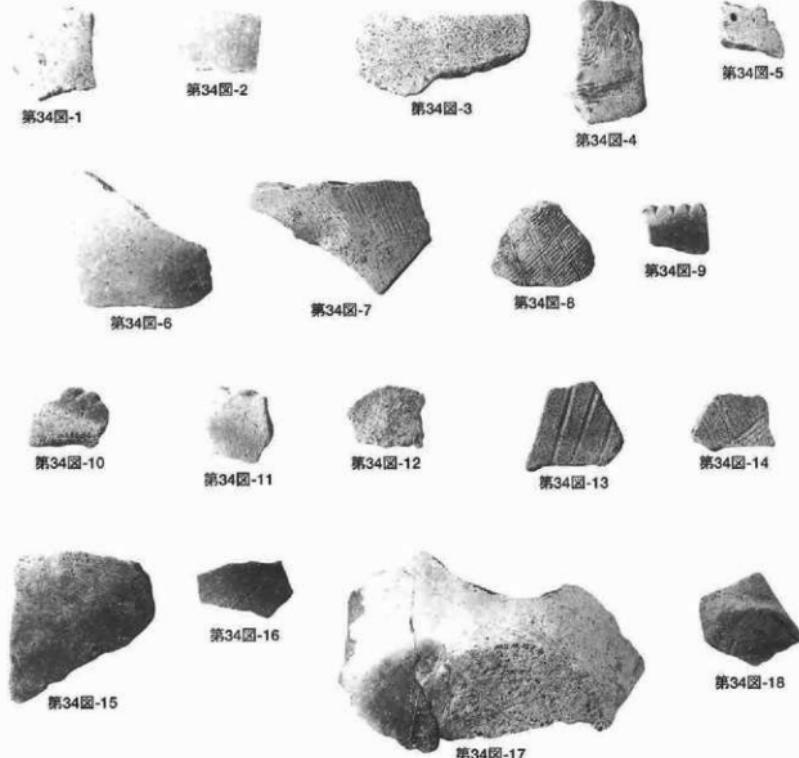


第24図-218



第31図-285

図版12



古代以前の遺物

よここうじ しょうへん いせき
横小路周辺遺跡 (No.259)

二階堂字会下323番外地点

例　　言

1. 本報は鎌倉市二階堂字会下323番外地点に所在する個人専用住宅の新築に先立ち行われた、横小路周辺遺跡（県遺跡台帳No.259）の発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は平成12年12月17日から同年12月27日にかけて、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
3. 本報使用の遺構図トレース及び遺物実測トレースは長友純子が、原稿執筆・編集は福田が行った。
4. 本報に使用した遺構全景写真・個別遺構写真は須佐仁和が、出土遺物写真は菊川泉が撮影を行った。
5. 発掘調査・整理の体制は以下の通りである。
主任調査員 福田誠（鎌倉市教育委員会嘱託） 原廣志（鎌倉市教育委員会嘱託）
調査員 菊川泉 須佐仁和 早坂伸市 本城裕
調査補助員 長友純子 猿田功一（鶴見大学）
作業員 （社）鎌倉市シルバー人材センター
6. 発掘調査資料（記録図面・写真・出土遺物）は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。

目　　次

| | |
|-----------------------|----|
| 第1章 遺跡の位置と歴史的環境 | 59 |
| 第2章 出土した遺構と遺物 | 60 |
| 第3章まとめ | 62 |
| 図1 調査地点位置図 | 59 |
| 図2 試掘地点及び調査地点 | 60 |
| 図3 全測図・土層断面図及び試掘土層断面図 | 61 |
| 図4 出土した遺物 | 62 |
| 図版1 全景及び土層断面 | 63 |
| 図版2 出土した遺物 | 64 |

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

遺跡地は鎌倉宮の北隣、覚園寺のある薬師堂ヶ谷の入り口に位置している。古代において鎌倉（郷）には郡衙がおかれ政治経済の中心地であったと考えられる。当地は隣り合う荏柄天神を中心としていたと考えられる荏草郷に含まれると考えられる。鎌倉幕府成立以前の鎌倉の様子は、中世以降に行われた大規模な土木工事等により破壊されている可能性やこの時期の調査数が少ないともあり不明な点が多い。しかし平直方の娘姫となった源頼義やその義家以降、源氏相伝の地となり源頼朝入府以降、荏草は鎌倉に組み込まれていったのかもしれない。相模国府から鎌倉、荏柄を経て抜け房総半島に抜ける、後に六浦道として整備される幹線道路が調査地の南方を東西に通る。道路沿いに、西方から御靈神社、甘繩神明神社、窟堂、荏柄天神社、杉本寺といった古い寺社が並ぶことを見ても古代より拓けていた地域であるといえる。荏柄天神参道脇の縄文土器の出土。⁽¹⁾ 南御門の弥生時代の集落。⁽²⁾ 永福寺跡の土師器、堅穴住居等周辺地域では古くから人々が居住していた。

住環境が大きく変化するのは、源頼朝が鎌倉に入り大倉に居を構えて以降になる。幕府を中心に有力御家人たちの屋敷が造られていった。また、永福寺が創建されそれに伴い二階堂大路が新たに造られた。六浦道と二階堂大路の交差点でもある大倉の辻の東側を中心に鎌倉初期の街が形成されていったと思われる。遺跡地の脇にある鎌倉宮（大塔宮）の境内は東光寺跡と伝えられている。民部大夫行光（二階堂



図1 調査地点位置図

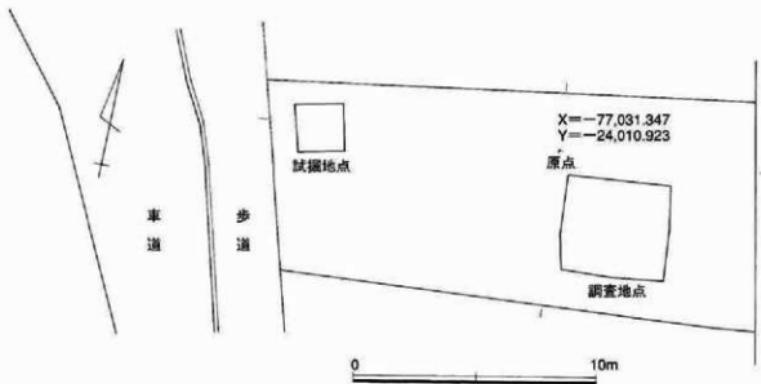


図2 試掘地点及び調査地点

氏）が承元三年（1209）永福寺脇に建てとする説と、頼朝が建久四年（1193）に永福寺傍に建立した薬師堂が当寺の前身であるとする説がある。【鎌倉事典】

また遺跡地のある薬師堂ヶ谷奥には覺園寺（開山智海心慈、開基北条貞時）がある。前身は北条義時が建てた大倉薬師堂と伝えられ鎌倉時代を通じ北条氏の厚い外護を受けた。このことを考えると遺跡地周辺もまた人々が建ち並んで賑わったであろうと想像に難くない。

参考文献

- (1) 「鎌倉市史」考古編
- (2) 「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14」「大倉幕府周辺遺跡群雪ノ下四丁目620番5地点」1998年
- (3) 「史跡永福寺跡」鎌倉市教育委員会 昭和63年度
- (4) 「鎌倉事典」白井永二編 1976年
- (5) 「鎌倉廃寺事典」貫達人 川瀬武胤著 有隣堂1980年

第2章 出土した遺構と遺物

調査にいたる経過

調査開始以前に家の耐震性を高める杭が計36本打たれてしまった。調査対象面積は杭の打たれた範囲の約72m²であるが打たれた杭の本数が多く、結果的に杭の間隔が広い場所を選び7本の杭に囲まれた4×4 m（約16m²）の調査区を設定したものである。更に調査区内から2本、計9本の杭が発見され十分な調査が出来たとは言えない状況であった。調査地は道路に接した駐車場部分と1.3m程の盛土された敷地からなる。調査に先立って駐車場部分で行われた試掘調査では、地表下2 mまで掘り下げたところ5面以上の生活面が確認され、本調査では地表から部分的に2.26mまで掘り下げ4面以上の生活面を確認した。

調査に先立ち遺構確認のため試掘調査を盛土の無い敷地北西隅で、2×2 mの四角形の試掘場を設定した。海拔14.2mの地表面下約30cmで土丹粒に混じりかわらけ片、炭が混じった包含層を確認した。約60cmと70cm下で土丹を叩き締めた造構面（1・2面）を検出した。およそ1m下で黒灰色土と土丹の混

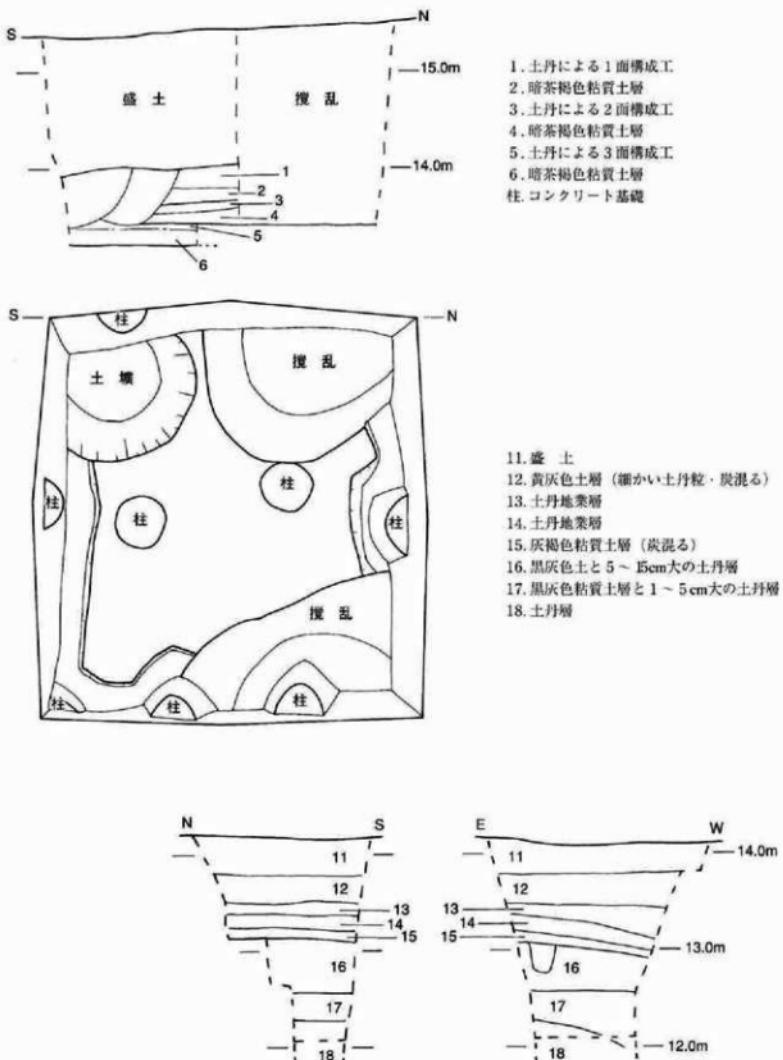


図 3 全測図・土層断面図及び試掘土層断面図

じった遺構面（3面）と柱穴を検出した。地表から2mまで掘り下げたが地山は確認されていない。3面下にも更に土丹を用いた遺構面が続いている。覚園寺がある薬師堂ヶ谷の谷筋が調査地の西側を南北に通る。この谷筋に向かい検出した遺構面はなだらかに落ち込んで行くことが観察された。

試掘調査の成果を参考に申請建物の東南、杭の間隔が広いところを選び、 4×4 mの四角形の調査地を設定した。海抜約15.5mの地表面の下約150cmまでは造成による盛土であった。掘り下げて海拔14m程で土丹を用いて叩き締めた遺構面（1面）を確認した。遺構面からは土壤が1穴検出された。検出した遺構面の下には更に土丹を叩き締めた遺構面（2・3面）が確認された。確認された各遺構面は平坦に広がっていることが観察された。

出土した遺物（図4）

図4-1は青白磁碗。透明度の高い釉が内外面に施され、内面には凸線の葉模様と条線が巡る。

2は常滑壺の体部片。小片のために体部径は不明、表面が細かく剥離しているのは熱を受けたためか。3～9はかわらけ、3は口縁部片、4～9は底部片。概ね13世紀後半～14世紀初頭のものと思われる。10は常滑捏鉢底部片。内面は使い込まれたためかつるつるに摩滅している。

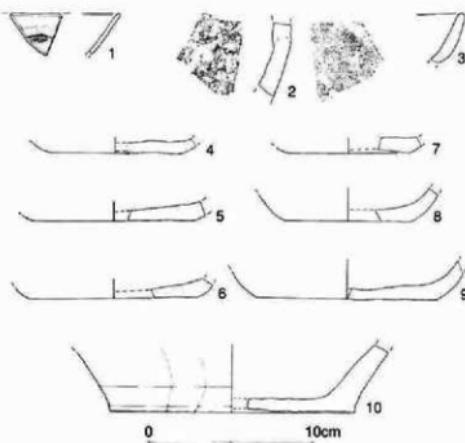


図4 出土した遺物

第3章 まとめ

遺跡の変遷、性格を述べるにはあまりにも調査範囲が限られていたため、十分な調査が出来たとは言えない状況であるが、調査事例の少ない当該当地周辺の情報と資料を得ることが出来た。鎌倉前期源頼朝が建立した永福寺へ向かう二階堂大路に近接し、「吾妻鏡」に永福寺郭内と書き表された東光寺（現鎌倉宮敷地と推定）に隣接、また覚園寺のある薬師堂ヶ谷入り口に面していることから、古くから鎌倉幕府中枢域、御家人たちの屋敷が軒を連ねていた一角であったことは想像に難くない。今後、周辺の調査が進展すれば改めて当遺跡の変遷、性格が明らかにされるものと期待するものである。



調査区全景（西から）



西壁セクション



調査区全景（南から）

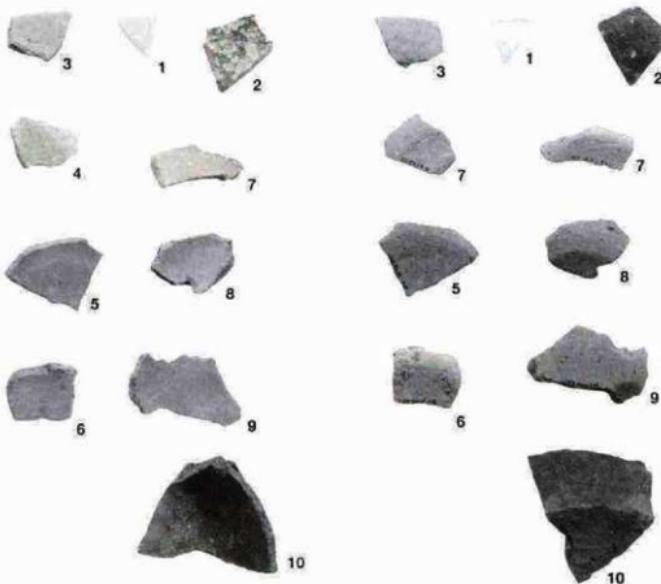


土壌1



土壌1下トレンチ

図版2



出土遺物



調査区遠景（東から）

みょうほんじいせき 妙本寺遺跡 (No.232)

大町一丁目1140番1外地点

例　　言

1. 本報は鎌倉市大町一丁目1140番1地点における宅地造成工事に伴なって実施された妙本寺遺跡（県遺跡台帳No232）の発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は平成14年1月7日から同年2月1日にかけて、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
3. 本報使用の遺構図及び遺物実測図・観察表は調査員が分担作成した。第1章・遺跡の位置と歴史的環境は菊川 泉が、第2章・調査の経過と層序、第3章・検出した遺構と遺物、第4章・まとめは福田 誠が担当し編集は福田が行った。
4. 本報に使用した遺構全景写真・個別遺構写真・出土遺物写真は福田が撮影を行った。
5. 発掘調査・整理の体制は以下の通りである。

主任調査員 福田誠（鎌倉市教育委員会嘱託）

調査員 太田美知子 石元道子 須佐直子 菊川 泉 神山晶子 須佐仁和 早坂伸市

調査補助員 古田土俊一 猿田功一 阿部潤 鈴木絵美（鶴見大学） 梅岡渙音

作業員 （社）鎌倉市シルバー人材センター

6. 発掘調査資料（記録図面・写真・出土遺物）は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。

目 次

| | |
|----------------------|----|
| 第1章 遺跡の位置と歴史的環境..... | 69 |
| 第2章 調査の経過と層序..... | 70 |
| 第3章 検出した遺構と遺物..... | 73 |
| 第4章 まとめ..... | 84 |

| | |
|---------------------------|----|
| 図1 調査地点位置図及び調査区設定図..... | 68 |
| 図2 I区1面、2区1面・2面全測図..... | 71 |
| 図3 2区3面全測図及び板溝立面図..... | 72 |
| 図4 I・II区包含層・1面の遺物..... | 74 |
| 図5 II区1・2面遺構・2面までの遺物..... | 75 |
| 図6 II区北トレンチ内の遺物..... | 76 |
| 図7 II区1溝新の遺物..... | 77 |
| 図8 II区1溝新の遺物..... | 78 |
| 図9 II区1溝新底部の遺物..... | 79 |
| 図10 II区1溝の遺物..... | 80 |
| 図11 II区3面板溝の遺物..... | 81 |
| 図12 銭..... | 82 |
| 図13 II区3面までの遺物..... | 83 |

| | |
|---------------|--|
| 表1 遺物観察表..... | |
|---------------|--|

| | |
|-------------------------|-----|
| 図版1 1面の調査..... | 91 |
| 図版2 2面の調査・1溝新の調査..... | 92 |
| 図版3 1溝古の調査..... | 93 |
| 図版4 3面の調査..... | 94 |
| 図版5 3面板溝の調査..... | 95 |
| 図版6 I・II区包含層・1面の遺物..... | 96 |
| 図版7 II区1・2面遺構・2面までの遺物 | 97 |
| 図版8 II区北トレンチ内の遺物..... | 98 |
| 図版9 1溝新の遺物と3面出土の銭..... | 99 |
| 図版10 II区1溝新～砂層の遺物 | 100 |
| 図版11 II区1溝新底部の遺物 | 101 |
| 図版12 II区3面までの遺物 | 102 |
| 図版13 II区1溝の遺物 | 103 |
| 図版14 II区3面板溝の遺物 | 104 |

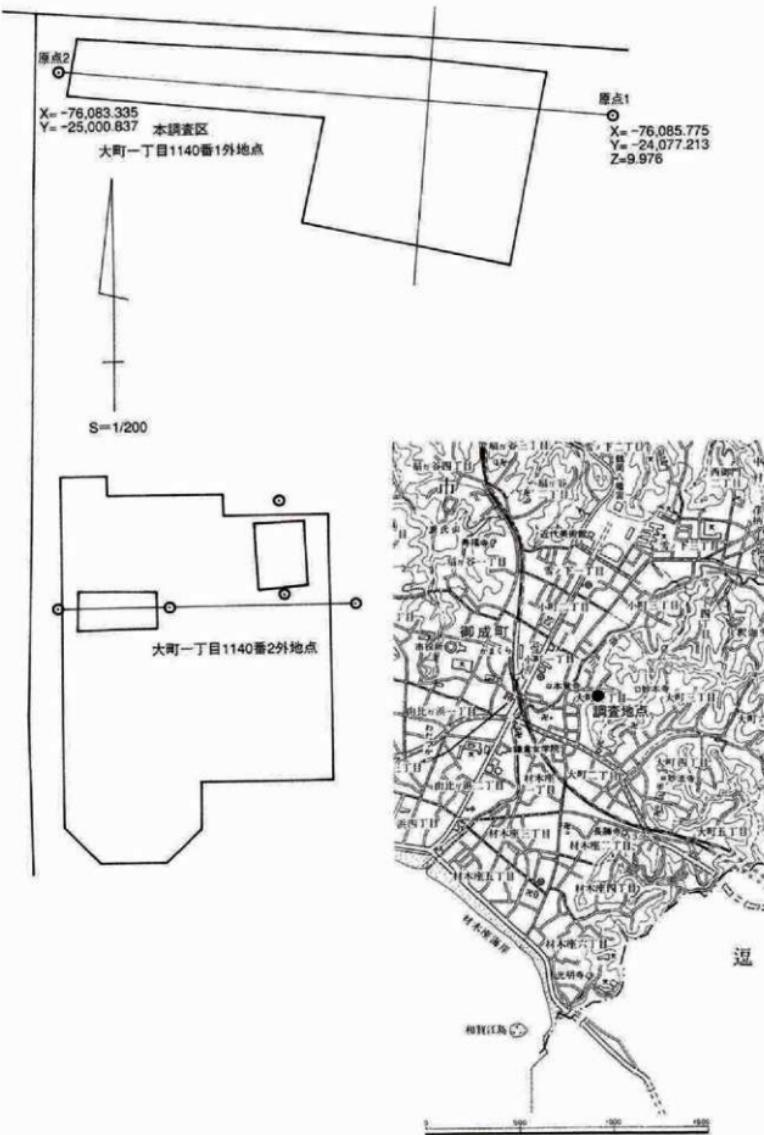


図1 調査地点位置図及び調査区設定図

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

調査地点は鎌倉市大町一丁目1140番1外に位置する。現在のJR鎌倉駅から東およそ1kmのところにあり、東西に伸びる谷、比企ヶ谷の入り口に当たる。現在は閑静な住宅地の一画で、この谷の奥には日蓮宗長興山妙本寺がある。開創は文応元(1260)年、開基は比企大学三郎能本、開山は日朗。寺の前身は比企能員ら一族の屋地と伝えられる。近世の地誌書の多くは、これが「比企谷」の地名の由来であることを伝えている。妙本寺について『新編鎌倉志』^{〔註1〕}や『新編相模風土記稿』^{〔註2〕}は十余の院家を挙げているが、現在はない。現在残っている建造物は山門・八角堂・方丈・経蔵・本堂・鐘楼・二天門・靈宝殿・祖師堂・蛇苦止堂である。

比企能員は武藏比企郡の豪族で、養母比企禪尼が頼朝の乳母であった所縁により、挙兵以来頼朝に従っていた功臣であった。『吾妻鏡』寿永元(1182)年7月12日条には、北条政子が頼家出産のため比企禪尼の宅へ入った記載が見られる。比企能員の妻は頼家の乳母となり、娘の若狭局は頼家の愛妾となつて一幡を生んだことにより、比企氏は権勢を増すこととなった。しかし、建仁3(1203)年、頼家の後継をめぐって北条氏と対立し、能員は北条時政の名越邸で謀殺された。能員の子宗能も一幡とともに北条軍に責められて、一幡の住まいでもあった比企谷の小御所で没した。残党は流刑・死罪・配流などの処分を受け、事実上比企氏はここに滅んだ。^{〔註3〕}

吾妻鏡において「比企が谷」の地名の初見は、比企氏滅亡後の承元3(1209)年5月15日条。^{〔註4〕} 神嵩・岩殿観音堂に詣でた実朝が、方違のため「女房駿河局の比企が谷の家」に立ち寄った記事である。(『駿河局』は『吾妻鏡』の記載から北条政子に近侍した女房の一人であることが知れる。)

その後この屋地がどのようにになったかは明確ではないが、妙本寺境内には現在も一幡の墓と伝えられる一幡塚がある。^{〔註5〕} また、四代將軍源頼經の妻となつた頼家の娘の屋敷「竹御所」^{〔註6〕} があったとも伝えられる。(『竹御所』の名はそのまま頼經室の名としても用いられている。)

『吾妻鏡』によれば、文応元(1260)年10月15日、北条政村の娘が比企能員の娘譖岐局の悪霊に取り憑かれるという事件が起こる。悪霊は「比企谷の土中にあるの由、言を發」し、「これを聞く人、身の毛竖つと云々。」とあり、若宮別當僧正が加持を行い、悪霊が政村の娘から離れていたのは翌月の27日であった。能員一族の死から57年後、竹御所が難産で没してから26年後のできごとではあるが、一族の怨霊が屋敷のあった比企谷に留まっていたと考える風潮は、文応年間当時においても少なからずあつたと推測できる。能員の遺子、大学三郎能本がこの地に妙本寺を開基したのもこの年である。比企能員一族滅亡後も、竹御所や能本など、一族の縁者の屋地としてこの地が使われていたのかもしれない。

ちなみに開基の比企大学三郎能本は、能員が殺害された際、京に逃れ、東寺に学び順徳院に仕えた。承久の乱の後順徳院の佐渡配流にも従い、その後鎌倉に戻って備官として用いられた。日蓮の儒學の師となり、『立正安國論』の刪正にも関わっている。やがて日蓮の法弟となり、妙本と称えた。後に日蓮から本行日学上人の名を授けられている。

谷戸の入り口には小町大路がせまり、日蓮辻説法跡と伝えられる一画もある。^{〔註7〕} 夷堂橋以南には米町・魚町といった字名が残っており、往時この周辺には町屋が広がり、商業地帯の様相を呈していたと考えられる。

当調査地点の周辺の発掘調査事例は大町一丁目1140番1の一部外地点及び大町一丁目1140番2地点^{〔註8〕}がある。

〔註1〕 貞享2(1685)年刊の地誌。延宝(1673~81)年間に徳川光圀が臣下に命じて、江ノ島・葉山

・金沢を含む鎌倉一帯の地名・旧跡・社寺の由緒沿革を調査・編纂させたもの。

【註2】相模九郡の地理誌。天保元（1830）年着手、12（1841）年脱稿。林衡を總裁に、間宮士清・三島行政ら27人の編録。

【註3】比企能員の残党は流刑・死罪になったが、妻妾と二歳の男子は安房に配された記載が建仁2年9月3日条にある。また、同日の記事に、一軒の死骸は確定することができず、焼け残った染付の小袖の残片の柄によってその死が確認されたことを伝えている。源性がこれを高野山の奥の院に納めた。袖塚の名の由来は、おそらくこの記載によるものであろう。

【註4】永享8（1436）年開創の本覚寺の前身である天台宗夷堂の名に由来する。小町大路を南下し、滑川を渡る橋。

【註5】現共同住宅。報告書未刊。概要是『神奈川県埋蔵文化財調査報告41』 平成9年度神奈川県内埋蔵文化財発掘調査一覧（平成11年3月 神奈川県教育委員会）

【註6】個人専用住宅。本報告書に掲載

参考文献

1. 白井永二編 『鎌倉事典』1976 東京堂出版
2. 『鎌倉市史』「社寺編」1959 吉川弘文館
3. 『全譜吾妻鏡』新人物往来社

第2章 調査の経過と層序

本遺跡の発掘調査は、平成14年1月7日から表土掘削及び機材の搬入を開始し、同年2月1日まで行った。周辺で行なわれた発掘調査結果を基に、重機で表土を約80~90cm掘り下げ第1面を検出した。グリッドは、現在の妙本寺参道延びる東西軸方向に平行に設定した。グリットは鎌倉市4級基準点の内D O 1058 ($X = -76,078.520$ $Y = -25,067.316$)と、D O 1059 ($X = -76,099.553$ $Y = -25,061.921$)を基準に、調査基準原点1 ($X = -76,085.775$ $Y = -24,077.213$ $Z = 9.976m$)、原点2 ($X = -76,083.335$ $Y = -25,000.837$)を設定したもので南北軸線は真北に対して $5^{\circ} 53' 49''$ 東にずれる。調査中に使用した水準点は鎌倉市3級水準点No.53204 ($L = 16.147m$)から仮原点に移動したもので、仮原点の海拔は9.976mである。

調査地は西に向かい開口する比企ヶ谷の谷口あたり妙本寺参道の南側面に接している。妙本寺参道の先、西に約170mには夷堂橋が架かりこの下を滑川が北から南に向かい流れ下っている。JR鎌倉駅まで約450m程の距離である。

調査は現地表から表土を重機で掘削し排土および調査中の残土は敷地内に山積みにした。表土は約80~90cmの厚さの盛土で調査地全体が覆われていた。調査は道路面より約80cm高い敷地の駐車場部分の切り下げと、下水管等掘削が遺構面まで及ぶ範囲であったため現地表面からおよそ-110cmまでの調査となった。調査面積は110m²である。

2月1日に器材の搬出も含め、全ての調査を終了した。検出した遺構・遺物の詳細は次章に譲る。

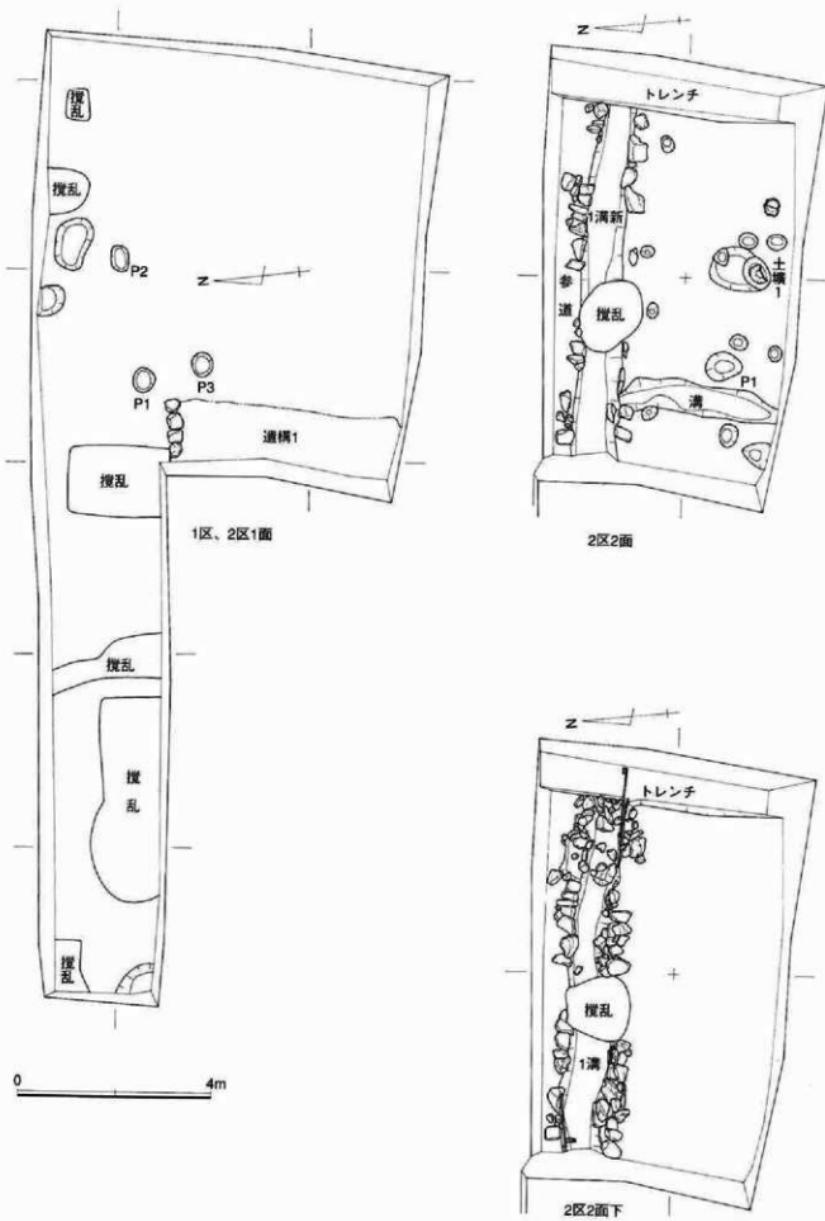
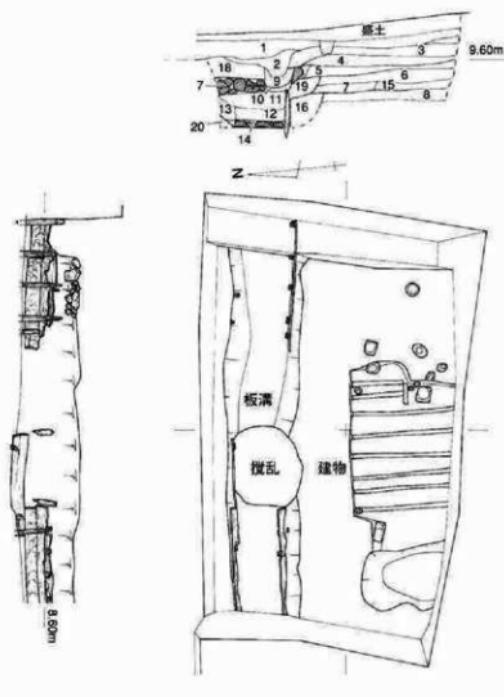
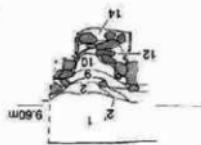


図2 1区1面、2区1面、2区2面全測図



1. 表土
 2. 淡茶灰色砂層(荒い砂と5~15cm大の土丹)
 3. 茶灰色粘質土層
 4. 明茶灰色粘質土層
 5. 茶褐色粘質土層(5cm大の土丹を含む)
 6. 淡茶褐色粘質土層
 7. 土丹による1面構成土
 8. 黒灰色粘質土層(10cm大の土丹を含む)
 9. 荒い砂と0.5~3cm大の土丹層
 10. 荒い砂と土丹粒多量に含む { 混覆土
 11. 荒い砂と20cm大までの土丹層
 12. 荒い砂と5~10cm大の土丹層
 13. 20cm大の土丹層(裏込め)
 14. 大量(平らな)土丹を散きつめ、間に荒い砂
 15. 暗灰褐色粘質土層
 16. 黑灰色粘質土層(板溝の裏込め)
 17. 土丹層(人頭大多数)
 18. 土丹層
 19. 暗茶褐色土(1溝の裏込め)
 20. 地山(青灰色粘質土層)



0 4m

図3 2区3面全測図及び板溝立面図

第3章 検出した遺構と遺物

参道脇の駐車場部分切り下げ範囲を1区、道路及び下水管等が入る範囲を2区として調査を行った。
a. 1区の調査

参道脇の溝に土砂が落ちることがないように幅約1m程の壁を残しながら、参道に沿って長さ(東西)20m、幅(南北)3mの調査区を設けた。重機を用いて表土掘削を行ったところ、ほぼ現在の道路面と同じ高さで土丹を敷き詰めた1面を確認した。駐車場部分でこれ以上の工事による掘削が行われないことをから、調査は確認した土丹を敷き詰めた1面までとした。

精査を行ったところ明らかに近代の擾乱と井戸の掘方、数個の柱穴と土壙を確認した。柱穴と土壙は遺物が無く穿たれた時期は特定できない。調査区内に広がる土丹面は2区までは広がらないことからある時期の妙本寺参道の可能性も考えられた。1面の海拔は妙本寺よりの東端で9.58m、滑川に向かう西端では9.30mと緩やかに下がっていることがわかる。

b. 2区の調査

L字形の調査地、参道に面した幅3mの1区以外の南部分を2区とした。およそ幅(東西)8m、長さ(南北)5mの大きさである。

1面

1区と同じ平坦面が広がり、この1面の海拔は約9.60mである。1区の遺構面に見られる土丹を敷き詰めた面は2区には広がらない。1区の土丹敷き面と2区の境目は東西方向に浅く窪み溝状を呈していた。2区西壁に沿って幅約1m長さ5mの範囲に大小の土丹を敷いた基壇状の遺構1を検出した。遺構1の西縁には大きめの土丹が並べられていた。土丹面は調査区外の北東方向に広がりを見せていると考えられる。遺構1から出土している遺物から15世紀代の年代が考えられる。

2面

1面の下約15cmで2面を検出した。海拔約9.45mである。1区と2区の境目、1面で確認していた東西方向の浅い溝状の窪みの下から、東西方向の1溝新を長さ約7m分検出した。溝は幅約80cm、深さ50cmの素掘りの溝である。また1面の遺構1の東側に沿って浅い素掘りの溝が1溝新に注ぎ込んでいる。2面では柱穴10個と土壙4個を検出し土壙1から鉢形が出土した。1溝新の検出により1区1面で検出した土丹面は妙本寺に向かう参道と考えられる。

1溝新を掘り下げたところ40~50cm大の土丹塊を用いて護岸されている(1溝)ことが明らかになった。便宜的に2面下と呼ぶ。溝底の海拔は東端で8.56m、西端で8.45mである。この時期の溝の深さは約70cmである。また護岸の土丹の隙間から板溝の部材が観察されたことから、土丹を用いた護岸さらに一時期古い溝が存在することが明らかになった。

1溝新と1溝内で出土した遺物から2面は14世紀後半代の年代が考えられる。

3面

2面の下約20cm、海拔約9.25mではほぼ平坦に広がる3面を検出した。2面下の1溝から南に約1m、溝に平行する建物跡を検出した。建物は東西3m、南北は不明、遺存する深さ約3~5cmの床下に転ばし根太8本の痕跡を持つ建物である。根太の上に床を張った板壁を持つ建物と思われる。護岸された土丹を取り除くと幅約1m、深さ1mあまり、側壁の土留めに板材を用いた板溝が検出された。溝底の海拔は東端で8.13m、西端で8.03m程度である。若宮大路を始め側溝の土留めに板材を用いた板溝は、市内の発掘調査で数多く検出されているが、中でも若宮大路の側溝は幅3m、深さ1.5mの規模を誇り、側

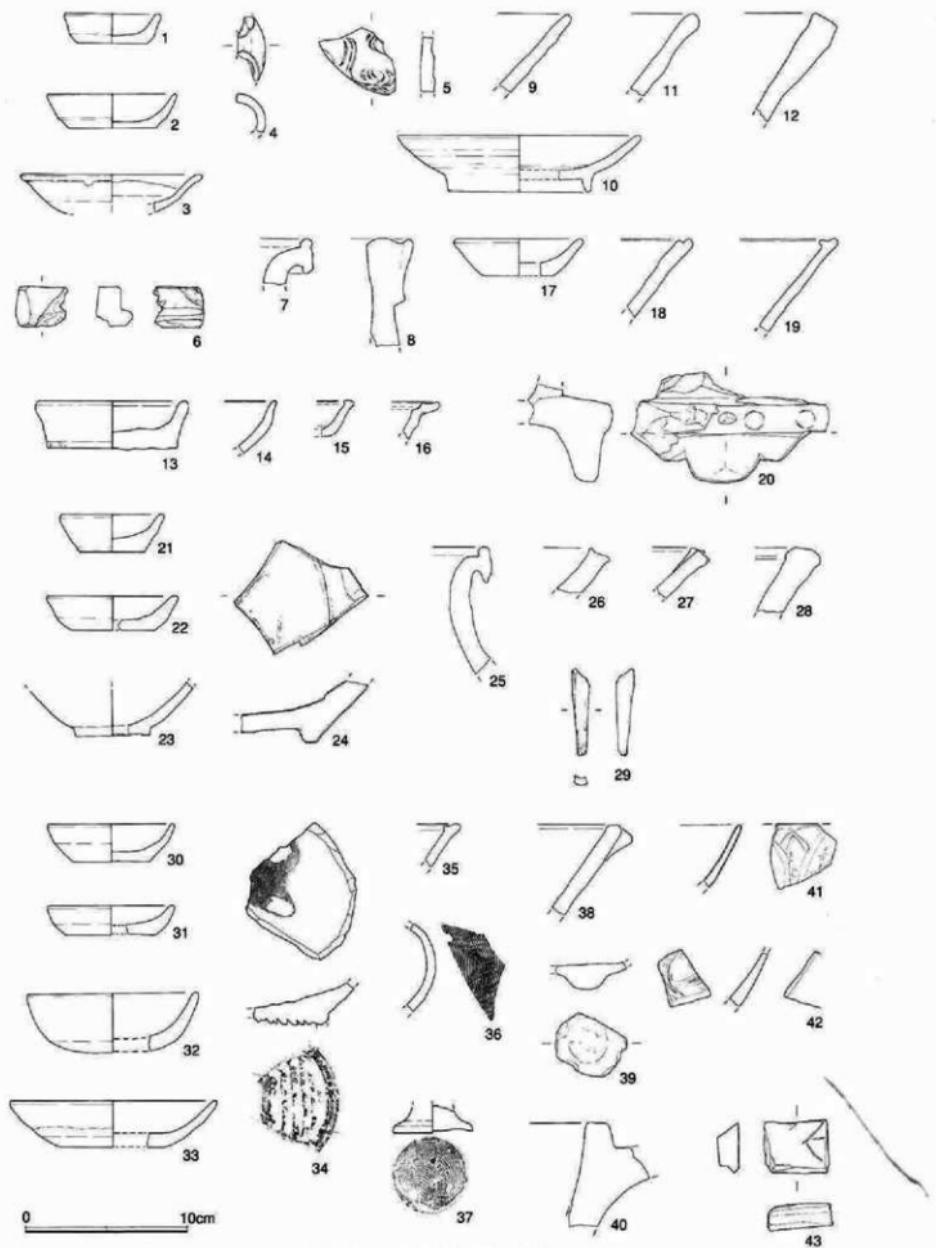


図4 I・II区包含層・1面の遺物

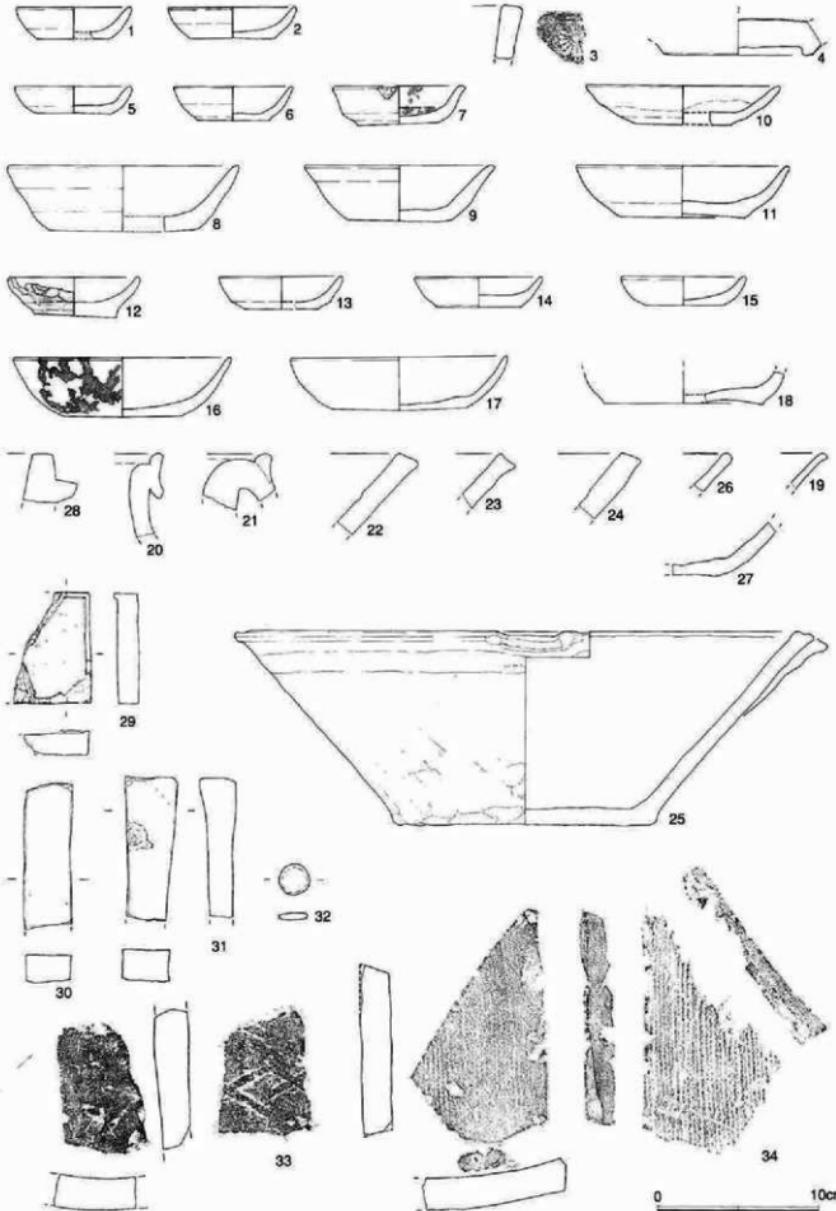


図5 I区1面造構・2面までの遺物

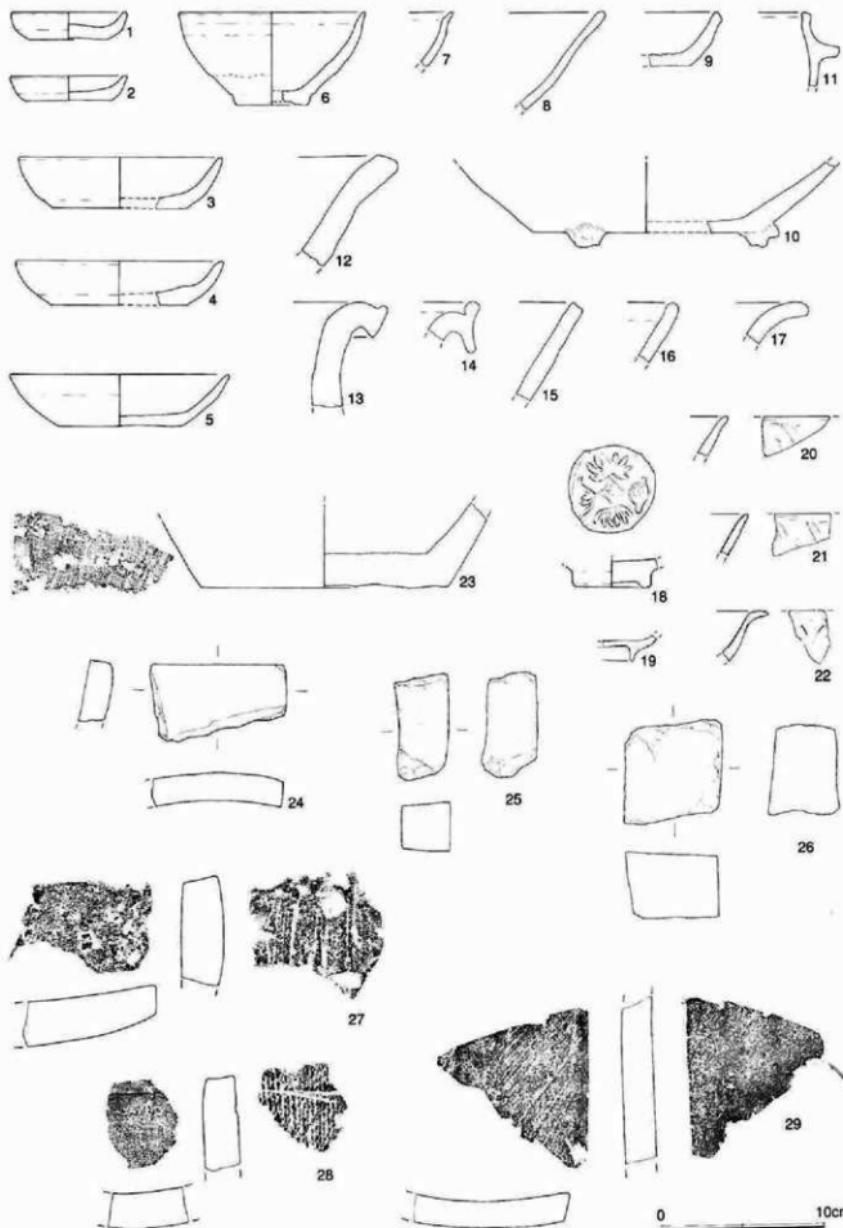


図6 II区北トレンチ内の遺物

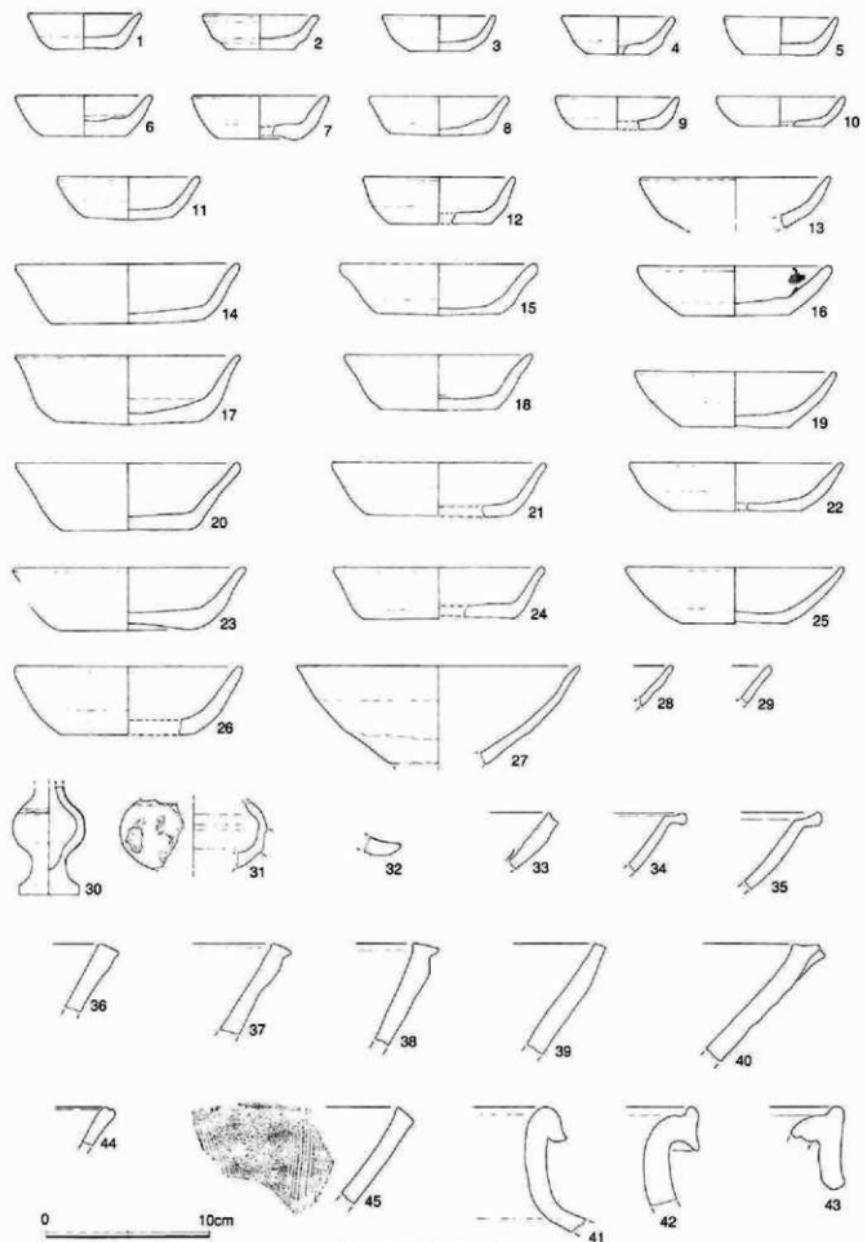


図7 II区1溝新の遺物

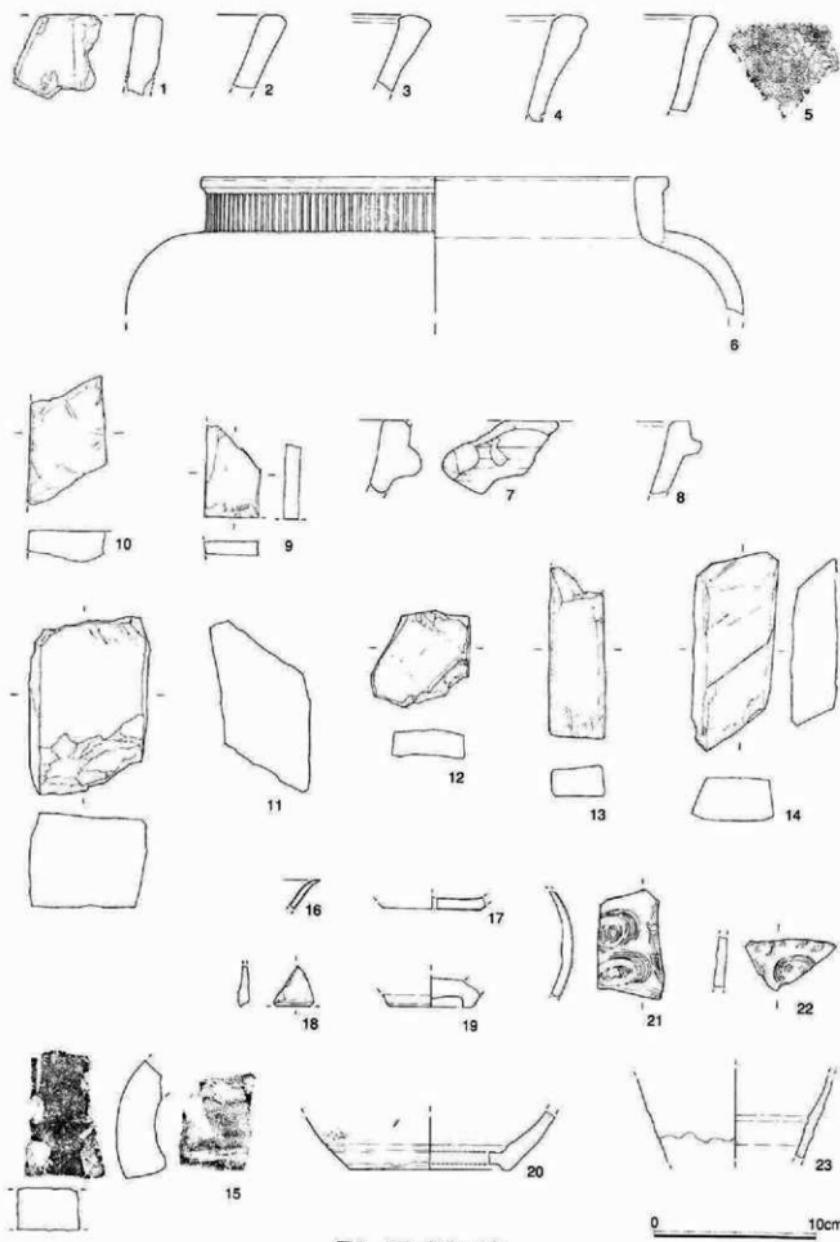


図8 III区1溝新の遺物

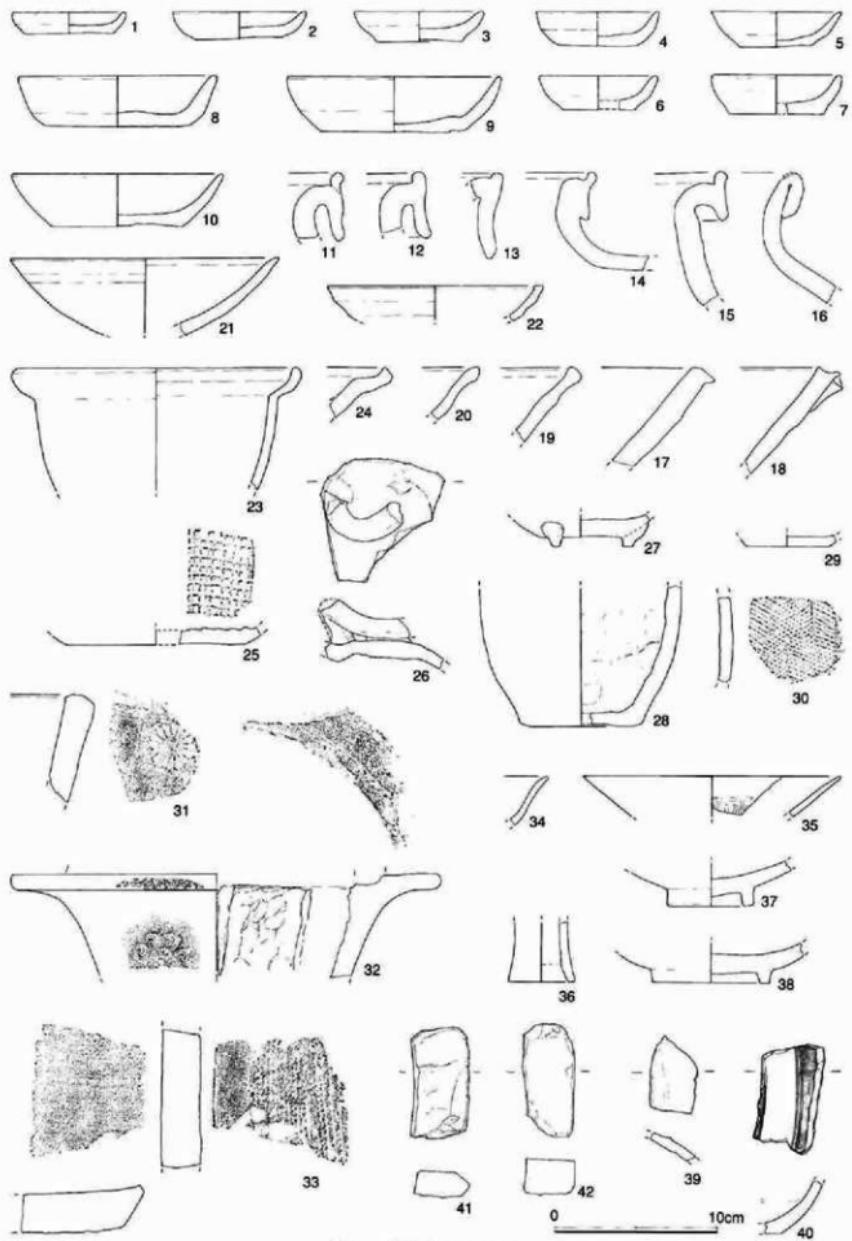


図9 II区溝新底部の遺物

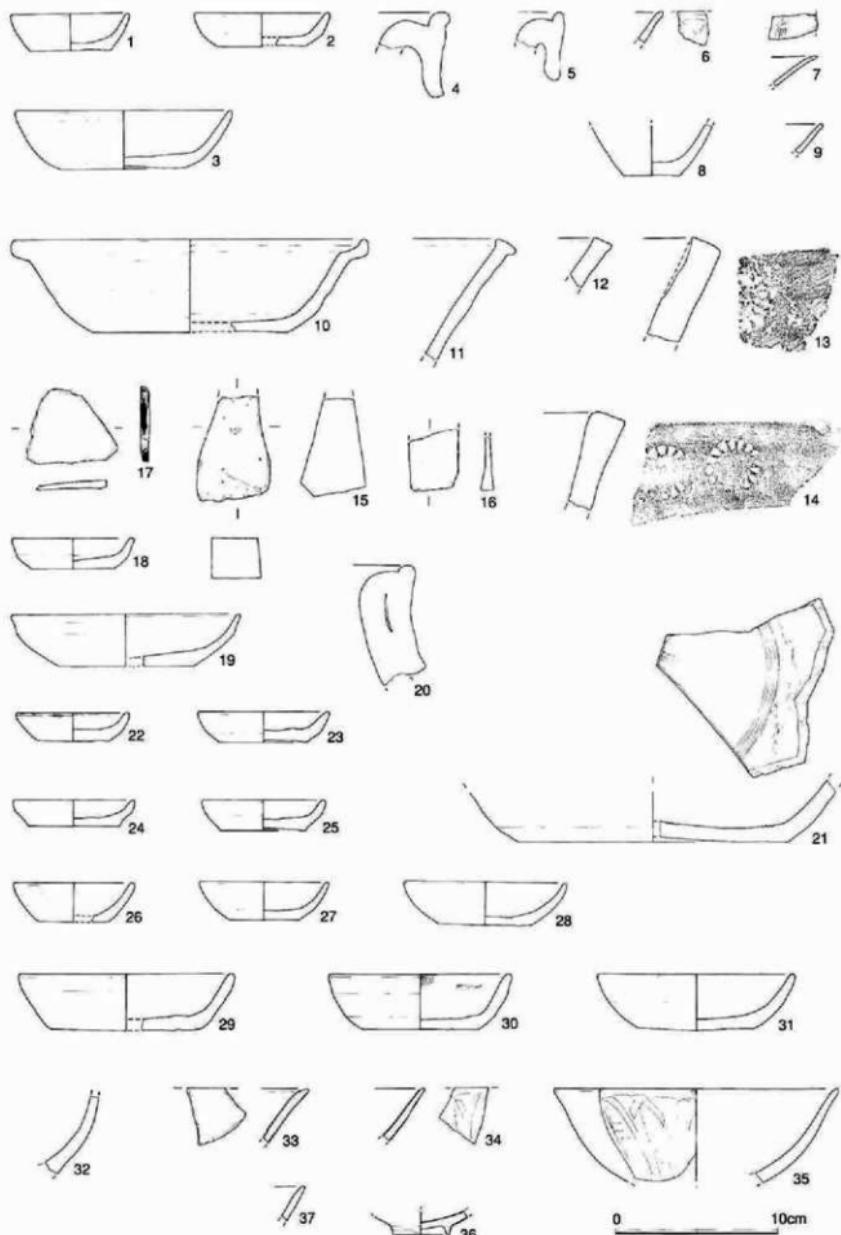


図10 II区1溝の遺物

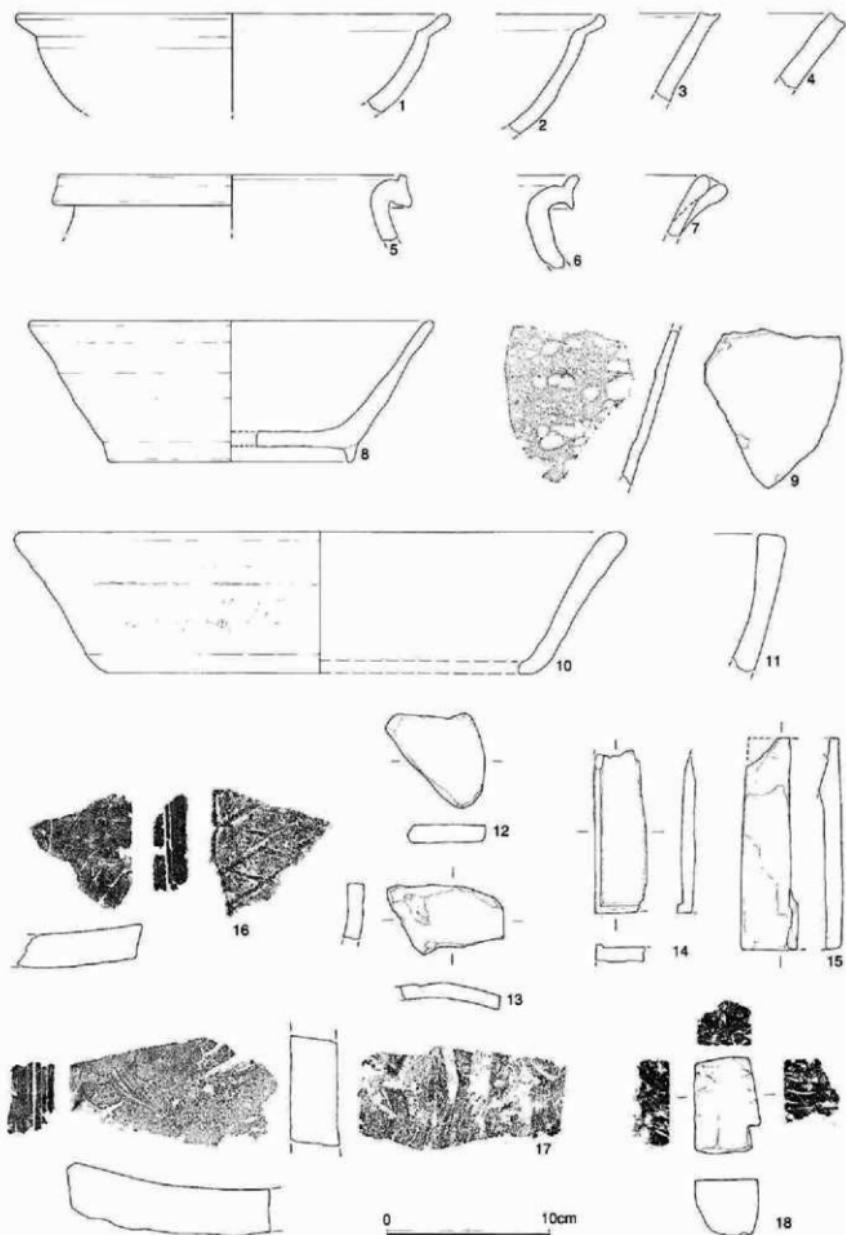


図11 II区3面板溝の遺物

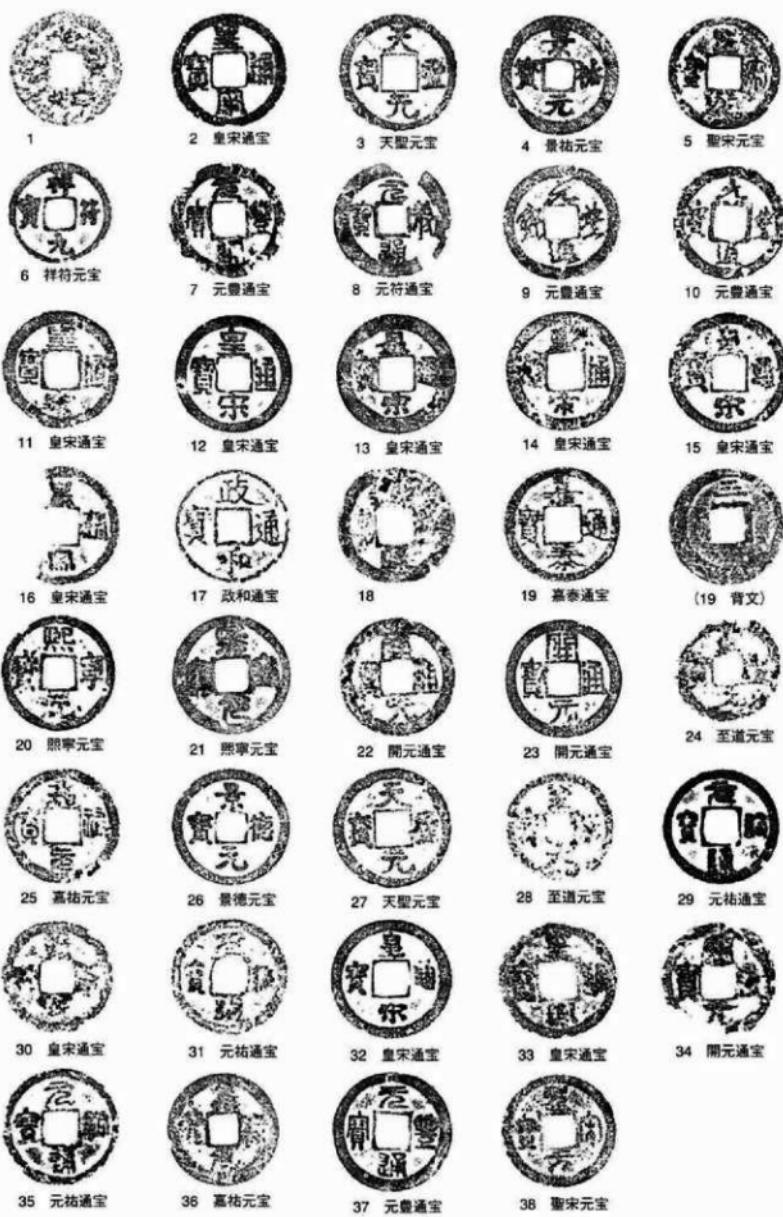


圖12 錢

板を支える東柱の上下にホゾを穿った基礎の材木を溝幅に沿わせ、その上に東柱を立て梁を入れたり引きを取ったりする手間のかかる工法を採用している。溝1に見られる工法はもっと簡単な工法で、側壁を支える東柱は直接打ち込まれている。裏込めの跡が確認されることから溝を作る際、一旦素掘りの大きめの溝を掘り、溝幅に合わせて側板を並べ東柱を側板の長さに合わせ打ち込み、裏込めを戻していくと考えられる。おそらく溝の上部には内側に倒れ込まないように梁を入れたり引きを取ったものと思われる。溝底には扁平な土丹を敷き並べていたようである。板の重なり、東柱の間隔から何度もに渡り修理が行われていると思われる。

この土留めに板材を用いた板溝内で出土した遺物から3面の時期は14世紀前半代と考えられる。

3面下

3面の下約30cm、海拔約9mで地山の上に被る黒灰色粘質土層の4面を北トレント深掘り内の土層断面で確認した。しかし宅地造成時の根切り（壊される深さ）を越えていたために面的な調査は行わなかった。更に3面の下約40cmで地表面を確認した。地表面の海拔は約8.8m。南に向かい平坦面が広がっている様であるが詳細は不明。

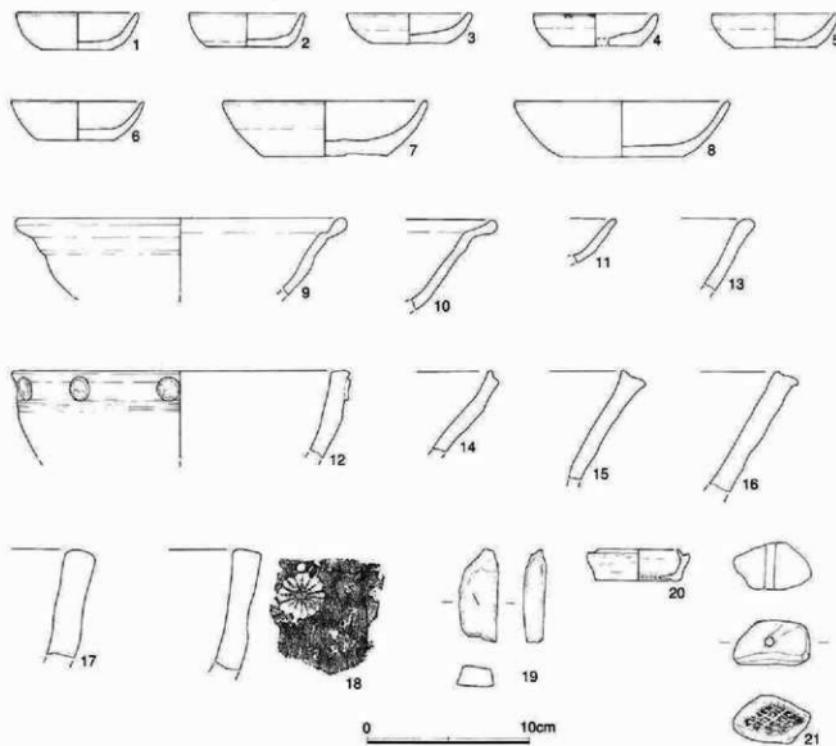


図13 II区3面までの遺物

第4章　まとめ

妙本寺創建以前の比企ヶ谷の記録を見ると『吾妻鏡』寿永元年七月十二日条、北条政子が産氣で頼朝の乳母、比企桿尼宅（比企ヶ谷の地名の由来）へ入ったことが挙げられる。後にこの地が比企能員以下一族の居館となる。比企能員は頼朝挙兵以来の功臣。妻が頼家の乳母となり、娘の若狭局が頼家の室となり一幡を生む。一幡が生まれたことにより將軍の舅として権力を増し北条氏と対立して行くことになる。建仁三（1203）年九月、頼家の病氣のさいにその後繼をめぐり北条氏と争い、北条氏討滅の企てを立てたとして比企能員は誅殺され、比企一族は一幡とともに居館があった比企ヶ谷で滅亡する。頼家は將軍を追われ伊豆に幽閉され實朝が將軍となる。比企ヶ谷の地名の初見は『吾妻鏡』建長五（1253）年12月11日条、妙本寺の創建は文応元（1260）年、比企一族滅亡から妙本寺創建まで57年間の年月が経っていることになる。この創建の年に北条正村の女が、比企ヶ谷土中にある讚岐局（比企能員の娘）の靈に惑わされた記事があるように、57年経っても比企一族滅亡の記憶が生きしく伝えられる屋地として積極的に利用されていなかったと言うことが、鎌倉時代前期・中期の遺物が少ないとから言えるのかもしれない。そして出土する遺物が14世紀以降の生活雑器を中心とした物が多いという傾向から妙本寺創建以降、境内及び周辺の土地利用が進んでいったと考えられる。

図4 I・II区包含層・1面の遺物

| 【I・II区西側包含層】 | | | 口 檻 瓶 等 |
|--------------|--------|-------|---------|
| | 長 | 高 | 器 高 |
| 1 かわらけ | 5.7 | 4.3 | 1.9 |
| 2 かわらけ | (7.9) | (5.3) | 2.2 |
| 3 船形小皿 | (11.0) | | |
| 4 青磁 | 口縁部片 | | |
| 5 白磁磁盤 | 全体部片 | | |
| 6 滑石調軸用品 | 長2.5 | 幅3.0 | 最大厚2.3 |
| 7 常滑窯 | 口縁部片 | | |
| 8 常滑窯 | 口縁部片 | | |

【I・II区西側包含層】

| | | | |
|------------|--------|-------|----------------------|
| 9 潟田大皿 | 口縁部片 | | 胎土:灰褐色 磁鐵 灰釉 輪花 |
| 10 潟田皿 | (14.9) | (6.9) | 3.5 |
| 11 山形輪楽系指鉢 | 口縁部片 | | 胎土:灰褐色 見込み全範の目状に輪はさみ |
| 12 火鉢 | 口縁部片 | | 胎土:灰褐色 長石粒多く含む粗粒 |

【I・II区西側】

| | | | |
|------------|-------|-------|------------------------------|
| 13 小かわらけ | (9.0) | 8.1 | 2.9 |
| 14 潟田皿 | 口縁部片 | | 輪鐵成形 胎土粗 地成良好 にぶい橙・雲母・白針・砂混入 |
| 15 潟田淨瓶 | 口縁部片 | | 胎土:灰褐色 磁鐵 灰釉 |
| 16 潟田黄緑深皿 | 口縁部片 | | 胎土:灰褐色 磁鐵 灰釉 |
| 17 かわらけ | (7.6) | (4.4) | 2.3 |
| 18 山形輪楽系指鉢 | 口縁部片 | | 輪鐵成形 磁鐵成好 にぶい橙・雲母・白針・カサリ繩混入 |
| 19 潟田深皿 | 口縁部片 | | 胎土:灰褐色 磁鐵 灰釉の石粒混入 |
| 20 火鉢 | 脚部片 | | 丸窓 |

【I・II区現代井戸掘方微品】

| | | | |
|---------|---------|-------|-------------------|
| 21 かわらけ | 6.4 | 3.9 | 2.3 |
| 22 かわらけ | (8.0) | (5.2) | 2.1 |
| 23 潟田平碗 | | 4.6 | |
| 24 青磁大皿 | 底部片 | | 胎土:灰褐色 磁鐵 灰釉 輪鐵成好 |
| 25 常滑窯 | 口縁部片 | | 6 b型式 |
| 26 常滑指鉢 | 口縁部片 | | |
| 27 常滑指鉢 | 口縁付1部分片 | | |
| 28 火鉢 | 口縁部片 | | 上部質 |
| 29 骨董品 | 長5.5 | 幅1.1 | 厚さ0.5 |

【I・II区】

| | | | |
|------------|--------|-------|--------------------------|
| 30 かわらけ | (7.6) | 4.8 | 2.2 |
| 31 かわらけ | (7.6) | (5.6) | 1.8 |
| 32 かわらけ | 10.3 | (5.6) | 1.8 |
| 33 潟田小輪小皿 | (12.6) | (6.3) | 2.9 |
| 34 潟田灰口皿 | 底部片 | | 胎土:灰褐色 灰釉 |
| 35 潟田黄緑深皿 | 口縁部片 | | 胎土:浅黃色 |
| 36 桐原鏡鑄文茶入 | 全体片 | | 胎土:暗褐色 磁鐵 灰釉 |
| 37 潟田花瓶 | | 4.9 | 胎土:灰褐色 灰釉 |
| 38 常滑程鉢 | 口縁片1部片 | | |
| 39 上蓋 | 脚部片 | | 胎土:灰褐色 磁鐵 灰釉 砂少量混入 器形不明 |
| 40 火鉢 | 口縁部片 | | 丸窓 内面堅厚 |
| 41 青磁造文碗 | 口縁部片 | | 胎土:灰褐色 磁鐵 色:青灰色透明 磁鐵はうすい |
| 42 青磁調文花瓶 | 全体片 | | 胎土:灰褐色 磁鐵 色:褐色 水焼している |
| 43 滑石調軸用品 | 長5.9 | 幅3.1 | 最大厚1.6 |

胎土の口縁と窓以下を切り落とし、一部柱様の割みを入れる タンブ玉製品か

図5 II区1・2面造構・2面までの遺物

| 【I・II区1面付】 | | |
|------------|-------|-------|
| | 長 | 高 |
| 1 かわらけ | (7.0) | (4.6) |
| 2 かわらけ | (7.8) | (5.3) |
| 3 火鉢 | 1口縁部片 | |

【I・II区1面付】

| | | |
|--------|--|--------------------|
| 4 青磁大皿 | | (9.3) |
| | | 胎土:灰褐色 磁鐵 色:淡緑青色透明 |

【I・II区通塗】

| | | | |
|--------|--------|-------|-----|
| 5 かわらけ | (7.0) | (4.6) | 1.7 |
| 6 かわらけ | 7.4 | 4.4 | 2.1 |
| 7 かわらけ | 7.8 | 5.0 | 2.4 |
| 8 かわらけ | (14.1) | (9.2) | 4.1 |
| 9 かわらけ | (11.6) | (6.4) | 3.5 |

【I・II区1面付】

| | | | |
|---------|--------|-------|-----|
| 10 潟田深皿 | (12.2) | (5.9) | 2.5 |
| 11 かわらけ | (13.0) | (7.6) | 3.2 |

【I・II区1面下2面まで】

| | | | |
|------------|--------|-------|--------------|
| 12 かわらけ | 8.0 | 5.1 | 2.4 |
| 13 かわらけ | (7.5) | (4.5) | 2.0 |
| 14 かわらけ | (7.8) | 5.3 | 1.9 |
| 15 かわらけ | 7.5 | 4.7 | 1.8 |
| 16 かわらけ | (13.3) | (7.3) | 3.7 |
| 17 かわらけ | (13.4) | (8.3) | 3.8 |
| 18 潟田柄付片11 | | (9.9) | 胎土:灰褐色 磁鐵 灰釉 |
| 19 潟田皿 | 口縁部片 | | 胎土:灰褐色 磁鐵 灰釉 |
| 20 常滑窯 | 口縁部片 | | 6 b型式 |

| | | | | |
|----|-------|----------------|----------|----------------------------------|
| 21 | 常滑器 | 11縫部片 | | 8型式 |
| 22 | 常滑器 | 11縫部片 | | |
| 23 | 常滑器 | 11縫部片 | | |
| 24 | 常滑器 | 11縫部片 | | |
| 25 | 常滑器 | 34.0 | 16.4 | 12.2 |
| 26 | 山茶樹空室 | 11縫部片 | | |
| 27 | 魚住器 | F型部片 | | |
| 28 | 南石製陶 | 11縫部片 | | |
| 29 | 瓦 | 長さ6.8 厚さ4.8 | 圓部絞大坪1.9 | 長方型 |
| 30 | 紙石 | 長さ8.7 幅3.0 | 厚さ1.6 | 上野産 中砥 小口は成形加工が遺存 4面使用 |
| 31 | 紙石 | 長さ9.0 幅3.3 | 最大厚2.2 | 上野産 中砥 小口は成形加工が遺存 4面使用 |
| 32 | 捲石 | 直径2.0 | 厚さ0.5 | |
| 33 | 平瓦 | 厚さ1.9 | | 船上精良 凸面斜格子押き 永福寺Ⅱ期相当 |
| 34 | 平瓦 | 厚さ2.0 | | 船上精良 斜切り瓦で、焼成後に加工 凸面斜口押き 永福寺Ⅱ期相当 |

図6 II区北トレニチ内の遺物

| | | | | | |
|----|---------|--------|--------|-------|------------------------------------|
| 1 | かわらけ | (7.0) | (4.8) | 1.7 | 輪縫成形 焼成良好 粉 白針・クサリ混入 |
| 2 | かわらけ | (7.1) | (5.3) | 1.5 | 輪縫成形 焼成良好 粉 雲母・白針・クサリ混入 |
| 3 | かわらけ | (12.4) | (8.3) | 3.2 | 輪縫成形 焼成良好 粉 雲母・白針・クサリ混入 |
| 4 | かわらけ | (12.6) | (8.4) | 2.7 | 輪縫成形 空や粗粒 粉 雲母・クサリ混入・土井・砂混入 二次焼成 |
| 5 | かわらけ | (13.4) | (7.5) | 3.2 | 輪縫成形 焼成良好 にい・粉 雲母・白針・クサリ混入 |
| 6 | 瀬戸天目碗 | (11.4) | (4.2) | 5.8 | 船上:灰白色 精緻 粉:黒釉 11縫部に輪縫を上掛け |
| 7 | 瀬戸天目碗 | 11縫部片 | | | 船上:灰白色 精緻 粉:黒釉 11縫部に輪縫を上掛け |
| 8 | 瀬戸天目碗 | 11縫部片 | | | 船上:灰白色 精緻 粉:灰釉 |
| 9 | 瀬戸天目碗 | 体部片 | | 3.4 | 船上:灰白色 精緻 粉:灰釉 |
| 10 | 瀬戸青磁深皿 | | (14.1) | | 三足付付き 船上:灰黄色 チョーク状 粉:黄釉内底ハケスリ、外体上部 |
| 11 | 伊勢系青磁 | | | | 船上:灰白色 金雲母の粒・粉:多く混入 |
| 12 | 火鉢 | 11縫部片 | | | 瓦質 11縫部に弱いみがを施す |
| 13 | 常滑器 | 11縫部片 | | | 6 b型式 |
| 14 | 常滑器 | 11縫部片 | | | 7型式 |
| 15 | 常滑器 | 11縫部片 | | | |
| 16 | 山茶樹空室 | 11縫部片 | | | |
| 17 | 瀬戸器 | 11縫部片 | | | |
| 18 | 吉田山花文柄 | | (4.4) | | 船上:灰白色 黒色粒混入 精緻 粉:淡緑色透明 |
| 19 | 吉田山文文彌 | 底部片 | | | 船上:灰白色 精緻 粉:淡緑色半透明 |
| 20 | 吉田山文文彌 | 11縫部片 | | | 船上:灰白色 精緻 粉:淡緑色透明 粉管はうすい |
| 21 | 吉田山文文彌 | 11縫部片 | | | 船上:灰白色 精緻 黒色粒混入 粉:淡緑色透明 烧割はうすい |
| 22 | 吉田山文文彌 | 11縫部片 | | | 船上:灰白色 精緻 黒色粒混入 粉:淡緑色透明 粉管は比較的はうすい |
| 23 | 清石器 | | (15.0) | | |
| 24 | 清石製調理用品 | 幅4.7 | 横6.3 | 厚さ1.7 | 鉗を切り落とし、10cmに対してもはば重直に切断 |
| 25 | 瓦石 | 長さ5.1 | 最大幅3.0 | 厚さ3.0 | 上野産 中砥 4面使用 |
| 26 | 瓦石 | 長さ5.7 | 最大幅5.7 | 厚さ4.3 | 天草産 面砥 4面使用 |
| 27 | 平瓦 | 厚さ2.7 | | | 船上精良 凸面端口押き 四面引目痕 二次焼成 永福寺Ⅱ期相当 |
| 28 | 平瓦 | 厚さ2.2 | | | 船上精良 凸面端口押き 四面引目痕 二次焼成 永福寺Ⅱ期相当 |
| 29 | 平瓦 | 厚さ1.8 | | | 船上精良 焼成が強くごく堅密 凸面なで 四面端切り板 永福寺Ⅱ期相当 |

図7 II区1溝新の遺物

| | | | | | |
|----|------|--------|-------|-----|-------------------------------|
| 1 | かわらけ | (6.8) | (3.8) | 2.1 | 輪縫成形 焼成良好 にい・粉 雲母・クサリ混入 |
| 2 | かわらけ | (6.9) | 4.2 | 2.1 | 輪縫成形 焼成良好 粉 雲母・白針混入 |
| 3 | かわらけ | (6.6) | (3.7) | 3.4 | 輪縫成形 焼成良好 粉 雲母・白針・土丹粒混入 |
| 4 | かわらけ | (6.6) | (3.8) | 2.4 | 輪縫成形 焼成良好 粉 雲母・白針・クサリ混入・土丹粒混入 |
| 5 | かわらけ | (6.8) | 4.6 | 2.4 | 輪縫成形 焼成良好 にい・粉 白針・クサリ混入 |
| 6 | かわらけ | (8.1) | 5.0 | 2.5 | 輪縫成形 焼成良好 粉 白針・白針混入 |
| 7 | かわらけ | (8.2) | (5.0) | 3.7 | 輪縫成形 焼成良好 粉 白針・クサリ混入・土丹粒混入 |
| 8 | かわらけ | (8.2) | 5.8 | 2.4 | 輪縫成形 焼成良好 粉 雲母・白針混入 |
| 9 | かわらけ | (7.4) | (5.2) | 2.0 | 輪縫成形 焼成良好 粉 白針・クサリ混入・土丹粒混入 |
| 10 | かわらけ | (7.9) | (5.3) | 3.4 | 輪縫成形 焼成良好 粉 雲母・白針・クサリ混入・土丹粒混入 |
| 11 | かわらけ | (8.4) | (5.3) | 2.7 | 輪縫成形 焼成良好 粉 雲母・白針・クサリ混入・土丹粒混入 |
| 12 | かわらけ | (9.0) | (6.4) | 2.9 | 輪縫成形 焼成良好 粉 雲母・白針・クサリ混入 |
| 13 | かわらけ | | 11.5 | | 輪縫成形 焼成良好 にい・黄粉・雲母・白針混入 |
| 14 | かわらけ | 13.2 | 9.0 | 3.6 | 輪縫成形 焼成良好 粉 白針・石英・土丹粒混入 |
| 15 | かわらけ | 12.0 | 7.6 | 3.2 | 輪縫成形 焼成良好 粉 雲母・白針・クサリ混入 |
| 16 | かわらけ | 11.8 | 6.6 | 3.2 | 輪縫成形 焼成良好 粉 雲母・白針・クサリ混入 |
| 17 | かわらけ | 12.5 | 8.6 | 4.2 | 輪縫成形 焼成良好 粉 雲母・白針・土丹粒混入 |
| 18 | かわらけ | 11.4 | 7.0 | 3.4 | 輪縫成形 焼成良好 粉 雲母・クサリ混入・土丹粒混入 |
| 19 | かわらけ | (12.2) | (6.6) | 3.4 | 輪縫成形 焼成良好 粉 雲母・白針・クサリ混入・土丹粒混入 |
| 20 | かわらけ | 12.6 | 7.6 | 4.1 | 輪縫成形 焼成良好 粉 雲母・白針・砂・土丹粒混入 |
| 21 | かわらけ | (12.6) | (8.8) | 3.3 | 輪縫成形 焼成良好 粉 雲母・混入 |
| 22 | かわらけ | (13.0) | (7.8) | 2.9 | 輪縫成形 焼成良好 にい・粉 雲母・白針・土丹粒混入 |
| 23 | かわらけ | 14.0 | 6.9 | 3.8 | 輪縫成形 焼成良好 粉 雲母・白針・混入 |
| 24 | かわらけ | (12.6) | (9.2) | 3.1 | 輪縫成形 焼成良好 粉 雲母・白針・砂・クサリ混入 |
| 25 | かわらけ | (12.2) | (6.4) | 3.4 | 輪縫成形 焼成良好 粉 雲母・白針・クサリ混入・土丹粒混入 |
| 26 | かわらけ | (12.2) | (8.2) | 4.4 | 輪縫成形 焼成良好 粉 雲母・白針・クサリ混入・土丹粒混入 |

| | | | | |
|----|---------|--------|------|----------------------------------|
| 27 | 湖口平鏡 | (17.0) | | 胎土：灰褐色 精微 砂輪 |
| 28 | 湖口平鏡 | 口縁部片 | | 胎土：灰白色 精微 砂輪 |
| 29 | 湖口平鏡大皿 | 口縁部片 | | 胎土：灰白色 精微 砂輪 |
| 30 | 湖口花瓶 | 3.6 | | 胎土：灰白色 精微 砂輪 |
| 31 | 湖口 | 体部片 | | 胎土：灰白色 精微 砂輪 印文花 香い・水生等の器形が考案される |
| 32 | 湖口酒会壺蓋 | 口縁部片 | | 胎土：灰白色 精微 砂輪 |
| 33 | 湖口瓦皿 | 口縁部片 | | 胎土：灰白色 精微 砂輪 |
| 34 | 湖口折腰皿 | 口縁部片 | | 胎土：灰白色 精微 砂輪 |
| 35 | 湖口折腰深皿 | 口縁部片 | | 胎土：灰白色 精微 砂輪 |
| 36 | 常滑鉢跡 | 口縁部片 | | |
| 37 | 常滑鉢跡 | 口縁部片 | | |
| 38 | 常滑鉢跡 | 口縁部片 | | |
| 39 | 常滑鉢跡 | 口縁部片 | | |
| 40 | 常滑鉢跡 | 口縁部口部片 | | |
| 41 | 常滑器 | 口縁部片 | 10型式 | |
| 42 | 常滑器 | 口縁部片 | 7型式 | |
| 43 | 常滑器 | 口縁部片 | 9型式 | |
| 44 | 山西碗窓系鉢跡 | 口縁部片 | | |
| 45 | 無柄鉢跡 | 口縁部片 | | |

図8 II区1溝新の遺物

| | | | |
|----|--------|--------------------|------------------------------------|
| 1 | 火鉢 | 口縁部片 | 瓦質 平面輪花 |
| 2 | 火鉢 | 口縁部片 | 土器質 二次焼成 |
| 3 | 火鉢 | 口縁部片 | 土器質 |
| 4 | 火鉢 | 口縁部片 | 土器質 空孔あり |
| 5 | 火鉢 | 口縁部片 | 土器質 外形部に菊花文のスタンプ |
| 6 | 土灰炉 | (28.6) | 瓦質 |
| 7 | 滑石製踏 | 口縁部片 | |
| 8 | 滑石製踏 | 口縁部片 | |
| 9 | 鏡 | 裏面長5.4 残存厚0.8 | 長方鏡 表側欠損 |
| 10 | 鏡 | 裏面長6.4 残存厚1.8 | 長方鏡 表側欠損 |
| 11 | 砥石 | 長さ19.6 幅7.4 厚25.8 | 天草産 亞麻 4面使用 |
| 12 | 砥石 | 長さ 3.9 幅6.1 最大厚1.5 | 鳴鹿産 住上げ風 3面使用 |
| 13 | 砥石 | 長さ10.4 幅3.5 最大厚1.9 | 鳴鹿産 住上げ風か 3面使用 蝋付有 |
| 14 | 砥石 | 長さ11.7 幅5.0 厚52.2 | 上野産 中砥 3面使用 蝋付有 |
| 15 | 丸瓦 | 厚さ2.6 | 胎土精良 水屋寺一期相当 |
| 16 | 白磁口瓦皿 | 口縁部片 | 胎土：灰白色 精緻 軸：透明 |
| 17 | 白磁口瓦皿 | (6.2) | 胎土：灰白色 精緻 軸：透明 |
| 18 | 吉田破損敷紙 | 口縁部片 | 胎土：灰白色 黒色粒混入 精緻 軸：木青色透明 |
| 19 | 吉田破 | 5.0 | 胎土：灰白色 黑色粒混入 精緻 軸：淡紫色透明 粗い貫入あり |
| 20 | 吉田破損敷紙 | 9.8 | 胎土：灰白色 黑色粒混入 精緻 軸：木青色透明 水注等とも考えられる |
| 21 | 吉田破損敷紙 | 体部片 | 胎土：灰白色 黑色粒混入 精緻 軸：木青色透明 |
| 22 | 吉田破損敷紙 | 体部片 | 胎土：灰白色 黑色粒混入 精緻 軸：木青色透明 |
| 23 | 馬輪窓 | 体部片 | 胎土：灰白色 精緻 軸：暗赤褐色 |

図9 II区1溝新底部の遺物

| | | | | |
|----|---------|-------------|-------|---|
| 1 | かわらけ | (6.8) (5.5) | 1.3 | 椎體成形 燐成良好 にぶい黄褐色 雲母・白針・カサリ混入 |
| 2 | かわらけ | 8.0 | 5.4 | 1.7 椎體成形 燐成良好 粉 雲母・白針・カサリ混入 上丹混入 |
| 3 | かわらけ | (8.0) | (5.2) | 1.9 椎體成形 斜十稜 燐成良好 粉 雲母・白針・カサリ混入 部底に貫通しない孔あり |
| 4 | かわらけ | (7.4) | (4.8) | 2.2 椎體成形 燐成良好 粉 雲母・白針・カサリ混入 |
| 5 | かわらけ | 8.0 | 4.4 | 2.3 椎體成形 燐成良好 にぶい黄褐色 雲母・白針・カサリ混入 |
| 6 | かわらけ | (7.0) | (4.4) | 2.1 椎體成形 燐成良好 にぶい黄褐色 雲母・白針・カサリ混入 |
| 7 | かわらけ | (7.7) | (5.9) | 2.4 椎體成形 燐成良好 粉 雲母・白針・カサリ混入 |
| 8 | かわらけ | 12.0 | 8.8 | 3.1 椎體成形 燐成良好 粉 雲母・白針・カサリ混入 |
| 9 | かわらけ | 14.2 | 9.0 | 3.4 椎體成形 燐成良好 粉 雲母・白針・カサリ混入 |
| 10 | かわらけ | 12.9 | 8.0 | 3.3 椎體成形 燐成良好 粉 雲母・白針・カサリ混入 |
| 11 | 常滑器 | 口縁部片 | 8型式 | |
| 12 | 常滑器 | 口縁部片 | 8型式 | |
| 13 | 常滑器 | 口縁部片 | 8型式 | |
| 14 | 常滑器 | 口縁部片 | 8型式 | |
| 15 | 常滑器 | 口縁部片 | 7型式 | |
| 16 | 常滑器 | 口縁部片 | 10型式 | |
| 17 | 常滑鉢跡 | 口縁部片 | | |
| 18 | 常滑鉢跡 | 口縁部口部片 | | |
| 19 | 山西碗窓系鉢跡 | 口縁部片 | | |
| 20 | 山西碗窓系鉢跡 | 口縁部片 | | |
| 21 | 湖口平鏡 | (12.8) | | 胎土：灰白色 精微 反輪 |
| 22 | 湖口平鏡 | (12.2) | | 胎土：灰褐色 精微 反輪 |
| 23 | 湖口折腰片11 | (17.0) | | 胎土：灰白色 精微 反輪 二次焼成 |
| 24 | 湖口折腰深皿 | 口縁部片 | | 胎土：灰白色 精微 反輪 反輪 |
| 25 | 湖口折腰 | 底部片 | | 胎土：灰白色 砂輪 一次焼成 |
| 26 | 湖口酒会壺蓋 | 底部及び腹手部片 | | 胎土：灰白色 黑輪 草木文のハラ書き |
| 27 | 湖口香炉 | (4.9) | | 胎土：灰白色 精微 反輪 |

| | | | |
|-----------|------------|-------|--|
| 28 潮干型 | | (7.5) | 胎土：灰白色、精微 灰釉 |
| 29 潮干小底 | | 5.1 | 胎土：灰白色、精微 内底に軋付着 |
| 30 魚作类型 | 全体部 | | 被物形焼き |
| 31 小鉢 | 口縁部片 | | 瓦質 平面輪花 外底部に菊花文のスタンプ |
| 32 小鉢 | 最大径 (25.4) | | 瓦質 背部上面に毫毛・唐草文、側面スタンプは意匠不明 体部に菊花・巴文のスタンプ |
| 33 平皿 | 厚2.4 | | 胎土精緻 内面輪印押 瓷胎等一期相当 |
| 34 白磁口元皿 | 11時部片 | | 胎土：灰白色 精微 前：透明 |
| 35 白磁口盤 | 11時部片 | | 胎土：白色 精微 軸：水青色透明 型作り 残存部内面に墨文 |
| 36 白磁碗 | | (4.1) | 胎土：白色 精微 軸：水青色透明 型作り 残存部内面に墨文 |
| 37 青磁碗 | | (5.3) | 胎土：灰白色 精微 軸：水青色透明 型作り 残存部内面に墨文 |
| 38 青磁碗 | | 7.2 | 胎土：灰白色 精微 軸：水青色透明 型作り 残存部内面に墨文 |
| 39 白磁碗 | 解剖片 | | 胎土：灰白色 精微 前：水青色透明 内部の茶葉・水苔等と考えられる |
| 40 二段盤 | 下体部片 | | 胎土：にぼい根・紗をもぐる心粗筋・残存部は絵繪(白磁色部分)と透明釉 |
| 41 潜石製陶用品 | 長26.8 厚3.4 | 厚さ1.5 | 潜石製陶の口縁・下体部を切り落としたもの 未製品か |
| 42 砂石 | 長26.9 厚3.2 | 厚さ2.2 | 天草産 砂石 3面使用 |

図10 II区1溝の遺物

| | | | | |
|-----------|--------------|--------|-----|---------------------------------------|
| 1 かわらけ | 17.2 | 5.0 | 2.3 | 輪錐成形 燐成良好 植：雲母・白針・クサリ繩混入 内面及び外体上部に煤付着 |
| 2 かわらけ | (8.3) | (5.3) | 2.1 | 輪錐成形 燐成良好 植：雲母・白針・クサリ繩・上丹混入 |
| 3 かわらけ | (13.2) | 7.5 | 3.6 | 輪錐成形 燐成良好 植：雲母・白針・クサリ繩混入 |
| 4 雷道器 | 11時部片 | | | 8型式 |
| 5 雷道器 | 11時部片 | | | 8型式 |
| 6 青磁蓮弁文碗 | 11時部片 | | | 胎土：灰白色 精微 軸：水青色透明 |
| 7 青白磁碗 | 11時部片 | | | 胎土：白色 精微 軸：水青色透明 内面雷文 型作り |
| 8 小皿 | | 3.1 | | 施釉・切削器 内面灰釉か 二次焼成 |
| 9 美濃碗 | 11時部片 | | | 胎土：白色 精微 |
| 10 潜石井筒深皿 | (21.4) | (11.9) | 5.7 | 胎土：淡青色 精微 軸：坂輪 |
| 11 雷道器 | 11時部片 | | | |
| 12 雷道器 | 11時部片 | | | |
| 13 小鉢 | 11時部片 | | | 瓦質 平面輪花 外底部に菊花文のスタンプ |
| 14 小鉢 | 11時部片 | | | 瓦質 外底部に菊花文のスタンプ |
| 15 砂石 | 長さ6.5 最大幅5.1 | 最大幅4.2 | | 天草産 砂石 4面使用 |
| 16 砂石 | 長さ3.7 最大幅3.0 | 最大幅0.8 | | 鳴海産 仕上砥 2面使用 |

【II区1溝トレンチ内】

| | | | | |
|-----------|------------|--------|-----|----------------------------------|
| 17 磁石 | 長さ4.5 幅5.6 | 最大厚0.7 | | 鳴海産 仕上砥 2面使用 番面に溝を走っている箇所あり |
| 18 かわらけ | (7.4) | (5.1) | 1.9 | 輪錐成形 燐成良好 植：雲母・白針・クサリ繩・妙混入 |
| 19 かわらけ | (13.9) | (8.3) | 3.2 | 輪錐成形 燐成良好 植：雲母・白針・クサリ繩・上丹混入 |
| 20 雷道器 | 11時部片 | | 9型式 | |
| 21 潜石井筒深皿 | | (36.6) | | 胎土：灰白色 精微 軸：坂輪ハケヌリ 内底に軸の目状の線跡さあり |

【II区3面窯】

| | | | | |
|-----------|--------|-------|-----|--------------------------------------|
| 22 かわらけ | 6.8 | 4.2 | 1.8 | 輪錐成形 燐成良好 上2.5%黄褐 雲母・白針・妙混入 口縁に煤付着 |
| 23 かわらけ | (8.0) | 5.4 | 1.9 | 輪錐成形 燐成良好 上2.5%黄褐 雲母・白針・妙混入 |
| 24 かわらけ | 7.3 | 5.5 | 1.6 | 輪錐成形 燐成良好 上2.5%黄褐 雲母・白針・クサリ繩混入 |
| 25 かわらけ | 7.5 | 5.3 | 1.9 | 輪錐成形 燐成良好 上2.5%黄褐 雲母・白針・クサリ繩・妙混入 |
| 26 かわらけ | (7.4) | (4.2) | 2.4 | 輪錐成形 燐成良好 上2.5%黄褐 雲母・白針・クサリ繩・妙混入 |
| 27 かわらけ | 7.8 | 4.2 | 2.5 | 輪錐成形 燐成良好 上2.5%黄褐 雲母・白針・クサリ繩混入 |
| 28 かわらけ | (9.8) | 5.8 | 2.6 | 輪錐成形 燐成良好 上2.5%黄褐 雲母・白針・クサリ繩・妙混入 |
| 29 かわらけ | (13.0) | (9.3) | 3.5 | 輪錐成形 燐成良好 上2.5%黄褐 雲母・白針・クサリ繩混入 |
| 30 かわらけ | (11.0) | (7.0) | 3.4 | 輪錐成形 燐成良好 異なる黄褐・雲母・白針・クサリ繩・土丹混入 内底有り |
| 31 かわらけ | (12.0) | (7.2) | 3.5 | 輪錐成形 燐成良好 植：雲母・白針・クサリ繩混入 |
| 32 黑釉盤 | 全体片 | | | |
| 33 青磁碗 | 11時部片 | | | 胎土：白色 黑色粒混入 精微 軸：淡緑色透明軸付は無い 内面落弁文か |
| 34 青磁蓮弁文碗 | 11時部片 | | | 胎土：灰白色 精微 軸：淡緑色透明 繩跡は薄い |
| 35 青磁蓮弁文碗 | (17.4) | | | 胎土：灰白色 精微 軸：暗緑色或明 |
| 36 青磁碗 | | 3.4 | | 胎土：灰白色 精微 軸：水青色不透明 |
| 37 白磁口皿類 | 11時部片 | | | 胎土：白色 精微 軸：透明 |

図11 II区3面板溝の遺物

| | | | |
|-----------|---------------|--------|-----------------------|
| 1 潜石井筒深皿 | (26.2) | | 胎土：浅黄褐 精微 灰釉 |
| 2 潜石井筒深皿 | 11時部片 | | 胎土：浅黄褐 精微 灰釉 |
| 3 雷道器 | 11時部片 | | |
| 4 雷道器 | 11時部片 | | |
| 5 雷道器 | (21.0) | | 6 a型式 |
| 6 雷道器 | 11時部片 | | 6 b型式 |
| 7 山田被窓系器 | 11時部片 | | |
| 8 山田被窓系器 | (21.5) | (14.2) | 8.7 |
| 9 雷道器 | 全体片 | | 二次焼成 |
| 10 小鉢 | (36.8) | (26.2) | (8.6) |
| 11 小鉢 | 11時部片 | | 瓦質 平面輪花 |
| 12 潜石製陶用品 | | | 鍋の底部 体部を切り落としたもの 未製品か |
| 13 潜石製陶用品 | | | 鍋の体部 未製品か |
| 14 陶 | 残存長9.9 残存幅3.2 | 残存厚0.9 | 方錐、尖頭尖鋸 |

| | | |
|-------|-------------------------|--------------------------|
| 15 岩 | 丸存鉢12.0 狹存鉢13.5 狹存鉢14.4 | 方観 表裏欠損 |
| 16 扇瓦 | 厚さ2.2 | 軒上：精良 凸面斜格子叩き 水屋等1期相当 |
| 17 扇瓦 | 厚さ3.1 | 軒上：やせ組 凸面斜格子叩き 鶴岡八幡宮7清相当 |
| 18 砖石 | 長さ5.7 幅大約4.1 幅大約3.5 | 天草産 磁磚：2面使用 |

図12 銭

(寸法の単位はmm 重さの単位はg)

| No. | 種類 | 時代 | 初期 | 晩期 | 字体 | 外様外径 | 外様幅 | 内部徑 | 方穿外径 | 方穿内径 | 外縁径 | 重さ | 由上地点・層位 |
|---------|----|------|----|----|----|------|-----|------|------|------|-----|-----|----------|
| 1 不明 | | | なし | | 篆書 | 24.2 | 2.8 | 18.4 | | 7.4 | 1.4 | 2.3 | I区東側1面土 |
| 2 天保通宝 | 北宋 | 1078 | なし | | 篆書 | 24.2 | 2.6 | 19.8 | 8.0 | 6.9 | 1.3 | 2.5 | II区北側レシナ |
| 3 天保元宝 | 北宋 | 1023 | なし | | 篆書 | 21.5 | 2.6 | 20.8 | 8.1 | 6.9 | 1.4 | 3.6 | II区3面まで |
| 4 乾祐元宝 | 北宋 | 1034 | なし | | 篆書 | 25.0 | 2.8 | 19.6 | 7.7 | 6.1 | 1.1 | 2.7 | * |
| 5 聖宋元宝 | 北宋 | 1101 | なし | | 篆書 | 23.6 | 2.0 | 19.8 | 7.7 | 6.9 | 1.1 | 2.4 | * |
| 6 乾祐元宝 | 北宋 | 1068 | なし | | 篆書 | 21.9 | 1.8 | 18.5 | 7.3 | 6.3 | 1.2 | 2.2 | * |
| 7 乾祐通宝 | 北宋 | 1078 | なし | | 篆書 | 24.4 | 2.5 | 19.2 | 8.5 | 6.8 | 1.4 | 2.8 | * |
| 8 乾祐通宝 | 北宋 | 1078 | なし | | 篆書 | 21.7 | 3.9 | 18.0 | 7.9 | 5.9 | 1.5 | 2.9 | II区建物覆土 |
| 9 乾祐通宝 | 北宋 | 1078 | なし | | 行書 | 24.4 | 2.9 | 19.9 | 8.1 | 6.9 | 1.1 | 2.4 | * |
| 10 乾祐通宝 | 北宋 | 1078 | なし | | 行書 | 23.6 | 2.6 | 18.3 | 9.0 | 7.3 | 1.2 | 2.5 | * |
| 11 皇宋通宝 | 北宋 | 1039 | なし | | 篆書 | 24.5 | 2.8 | 19.3 | 8.7 | 7.2 | 1.1 | 2.4 | * |
| 12 皇宋通宝 | 北宋 | 1039 | なし | | 篆書 | 24.5 | 2.3 | 19.8 | 7.3 | 7.0 | 1.2 | 2.7 | * |
| 13 皇宋通宝 | 北宋 | 1039 | なし | | 篆書 | 25.1 | 3.5 | 17.9 | 7.8 | 7.0 | 1.2 | 3.5 | * |
| 14 皇宋通宝 | 北宋 | 1039 | なし | | 篆書 | 25.0 | 3.2 | 19.7 | 8.7 | 7.3 | 1.4 | 2.7 | * |
| 15 皇宋通宝 | 北宋 | 1039 | なし | | 篆書 | 25.1 | 2.9 | 20.2 | 8.4 | 6.8 | 1.3 | 3.4 | * |
| 16 皇宋通宝 | 北宋 | 1039 | なし | | 篆書 | 24.5 | 2.4 | 20.7 | 8.5 | 7.3 | 1.2 | 1.9 | * |
| 17 政和通宝 | 北宋 | 1111 | なし | | 篆書 | 23.7 | 1.0 | 21.8 | 8.3 | 6.3 | 1.6 | 2.7 | * |
| 18 不明 | | | なし | | 篆書 | 24.4 | 3.2 | 18.7 | 7.4 | 7.5 | 1.0 | 1.9 | * |
| 19 乾祐通宝 | 南宋 | 1201 | なし | | 篆書 | 24.4 | 2.4 | 19.9 | 8.5 | 7.3 | 1.1 | 2.8 | * |
| 20 黑字元宝 | 南宋 | 1068 | なし | | 篆書 | 24.0 | 2.1 | 20.2 | 8.0 | 6.0 | 1.8 | 5.1 | * |
| 21 黑字元宝 | 北宋 | 1068 | なし | | 篆書 | 24.8 | 2.6 | 20.4 | 8.2 | 7.0 | 1.3 | 3.0 | * |
| 22 圓通通宝 | 唐 | 621 | なし | | 篆書 | 21.3 | 2.6 | 18.2 | 8.0 | 6.6 | 1.4 | 2.8 | * |
| 23 圓通通宝 | 唐 | 621 | なし | | 篆書 | 24.6 | 2.4 | 20.0 | 7.8 | 6.6 | 1.4 | 3.3 | * |
| 24 圓通通宝 | 北宋 | 995 | なし | | 行書 | 23.3 | 2.7 | 18.1 | 7.9 | 6.5 | 1.4 | 1.9 | * |
| 25 祐祐元宝 | 北宋 | 1056 | なし | | 篆書 | 24.1 | 2.6 | 19.4 | 8.4 | 6.9 | 1.3 | 3.1 | * |
| 26 泰祐元宝 | 北宋 | 1004 | なし | | 篆書 | 24.6 | 2.7 | 20.3 | 6.9 | 6.2 | 1.1 | 2.8 | * |
| 27 乾祐元宝 | 北宋 | 1023 | なし | | 篆書 | 25.1 | 2.7 | 20.3 | 8.4 | 6.9 | 1.3 | 3.6 | * |
| 28 乾祐元宝 | 北宋 | 995 | なし | | 篆書 | 23.8 | 2.2 | 18.6 | 6.7 | 5.2 | 2.2 | 3.4 | I溝新・砂層 |
| 29 乾祐通宝 | 北宋 | 1086 | なし | | 篆書 | 24.0 | 2.1 | 20.0 | 8.7 | 7.1 | 1.0 | 2.1 | * |
| 30 皇宋通宝 | 北宋 | 1039 | なし | | 篆書 | 23.7 | 2.6 | 18.9 | 7.6 | 6.8 | 1.4 | 2.8 | I溝新底部 |
| 31 乾祐通宝 | 北宋 | 1086 | なし | | 行書 | 24.5 | 2.3 | 19.7 | 8.3 | 7.2 | 1.1 | 2.1 | * |
| 32 皇宋通宝 | 北宋 | 1039 | なし | | 篆書 | 25.0 | 2.7 | 19.9 | 8.2 | 7.0 | 1.2 | 2.8 | II区新溝 |
| 33 皇宋通宝 | 北宋 | 1039 | なし | | 篆書 | 24.2 | 2.4 | 19.7 | 8.6 | 7.8 | 1.2 | 2.1 | * |
| 34 圓通通宝 | 唐 | 621 | なし | | 篆書 | 23.8 | 2.4 | 19.2 | 7.5 | 6.9 | 1.3 | 2.4 | * |
| 35 元祐通宝 | 北宋 | 1096 | なし | | 篆書 | 24.2 | 2.0 | 20.2 | 7.8 | 6.6 | 1.5 | 3.6 | * |
| 36 熙祐元宝 | 北宋 | 1056 | なし | | 篆書 | 23.4 | 2.9 | 17.4 | 7.5 | 6.2 | 1.2 | 3.1 | 拂溝 |
| 37 元祐通宝 | 北宋 | 1078 | なし | | 篆書 | 25.1 | 2.6 | 19.9 | 8.1 | 6.6 | 1.2 | 4.2 | * |
| 38 圓通元宝 | 北宋 | 1101 | なし | | 篆書 | 23.4 | 2.4 | 19.6 | 7.9 | 6.5 | 1.3 | 3.3 | * |

註) 遺物の編年及び歴代名称は「慨説中興の上源・周鑄經」(中興土器研究会編1195年貞祐社)による。此の編年は「国指定史跡水原寺跡跡物庫・考察報告」(平成14年鎌倉市教育委員会)による。

図13 II区3面までの遺物

| | | | | | | | | | |
|------------|-----------|-------|-------|------|--------|--------------|---------|--------|------|
| 1 かわらけ | (7.3) | (4.3) | 2.3 | 輪健成形 | 燒成良好 | 上:青白・粗 | 雲母・白鉢 | クサリ窯 | 鉢混入 |
| 2 かわらけ | (7.2) | (5.0) | 2.1 | 輪健成形 | 黒色 | 青母・白鉢 | 白鉢 | クサリ窯 | 二次焼成 |
| 3 かわらけ | (7.6) | (4.6) | 1.9 | 輪健成形 | 好成良好 | にせい黄褐 | 青母・白鉢 | クサリ窯 | |
| 4 かわらけ | (7.5) | (5.7) | 2.0 | 輪健成形 | 燒成良好 | にせい黄褐 | 青母・白鉢 | クサリ窯 | 二次焼成 |
| 5 かわらけ | (7.8) | (5.2) | 2.1 | 輪健成形 | 燒成良好 | にせい黄褐 | 青母・白鉢 | クサリ窯 | 二次焼成 |
| 6 かわらけ | 8.2 | 4.8 | 2.4 | 輪健成形 | 燒成良好 | にせい黄褐 | 青母・白鉢 | クサリ窯 | 二次焼成 |
| 7 かわらけ | (12.5) | 7.7 | 3.4 | 輪健成形 | 燒成良好あり | 青母・白鉢 | クサリ窯 | クサリ窯混入 | |
| 8 かわらけ | (13.0) | (7.5) | 3.4 | 輪健成形 | 燒成良好 | 青母・白鉢 | クサリ窯混入 | 口縁に焼付着 | |
| 9 脈口引締深皿 | (22.1) | | | 胎上: | 白色 | 精緻 | 灰釉 | | |
| 10 脈口引締深皿 | | | | 胎上: | 淡黄色 | 精緻 | 灰釉 | | |
| 11 脈口引締小皿 | | | | 胎上: | 淡黄色 | 精緻 | 灰釉 | | |
| 12 脈口鉢 | (18.8) | | | 胎上: | 淡白色 | 精緻 | 灰釉 | | |
| 13 山茶輪空系桿鉢 | | | | 内面 | 李青断頭 | 粗 | 胎 | | |
| 14 白滑程鉢 | | | | 内面 | 李青断頭 | 粗 | 胎 | | |
| 15 當頭程鉢 | | | | 内面 | 李青断頭 | 粗 | 胎 | | |
| 16 當頭程鉢 | | | | 内面 | 李青断頭 | 粗 | 胎 | | |
| 17 灰鉢 | | | | 足質 | 手作輪花 | | | | |
| 18 灰鉢 | | | | 足質 | 手作輪花 | 外底部に薔薇文のスタンプ | 17と同一個体 | | |
| 19 灰石 | 長さ5.7 | 幅2.3 | 厚さ1.3 | 馬鹿壺 | 仕上鉢 | 2面使用 | | | |
| 20 古石質合子 | (4.9) | (5.4) | (1.9) | 胎上: | 白色 | 黑色絞り釉 | 精緻 | 軸:青色透明 | |
| 21 過石質スタンプ | 印幅1.0×2.1 | | | 割り | 麦又 | 穿孔あり | | | |



1. JR鎌倉駅方面を望む



2. 1面全景



3. 造構1



4. 1区土丹面



5. 2区1面



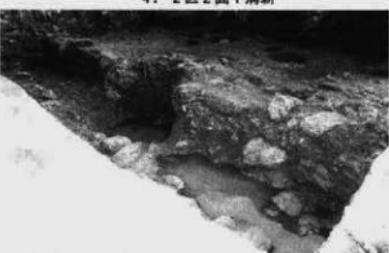
6. 造構1



7. 作業風景

1面の調査

図版2



2面の調査・1溝新の調査



1. 2区2面下1溝



3. 2面下1溝東から



4. 2面下1溝西から



2. 2区2面下1溝



6. 2面下全景



5. 2面下全景



7. 1溝北から



8. 1溝古の調査
1溝古の調査

図版4



1. 3面建物



2. 3面全景西から



3. 3面全景東から



4. 建物根太の様子



5. 3面建物



6. 3面全景



7. 3面全景

3面の調査



1. 板溝断面



3. 板溝側板と打ち込まれた東柱



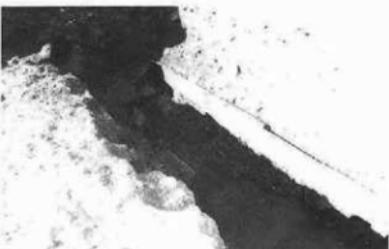
2. 板溝断面



4. 板溝北から

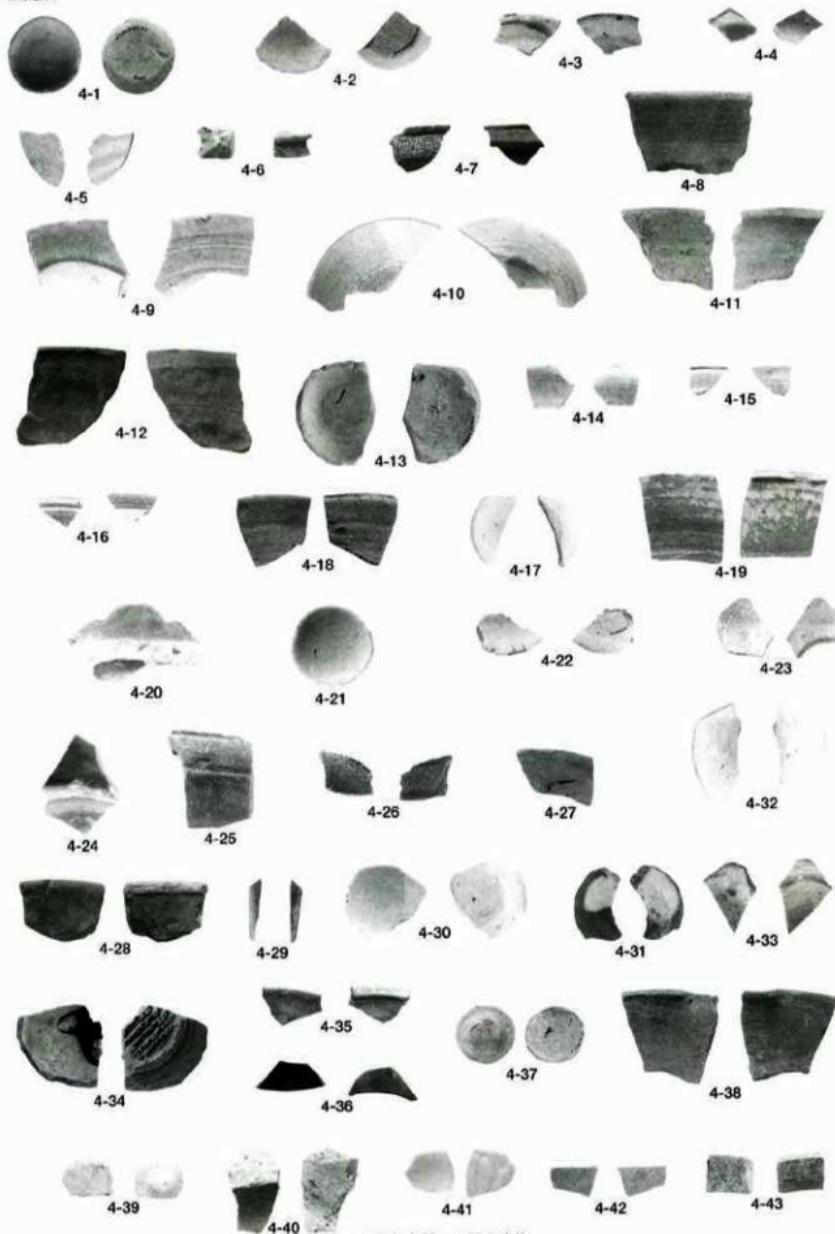


3. 板溝東から

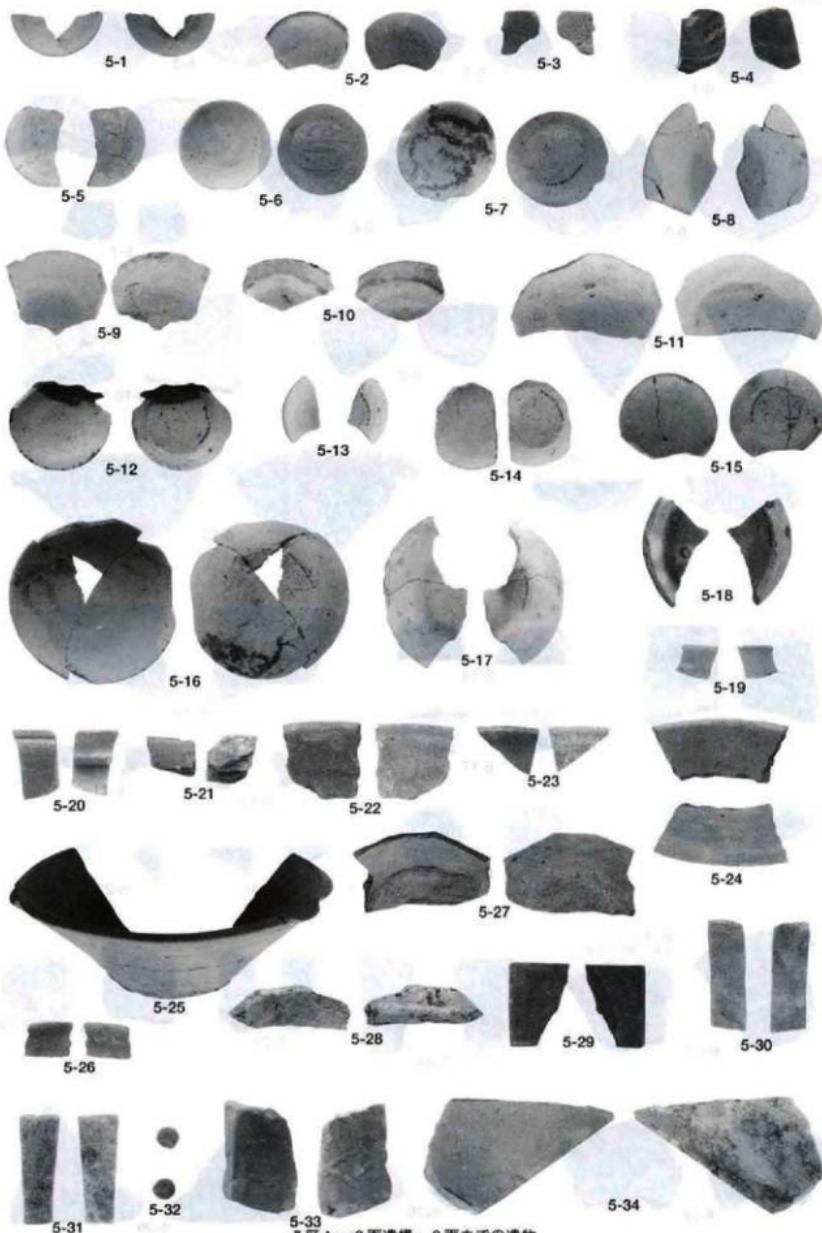


3. 板溝西から

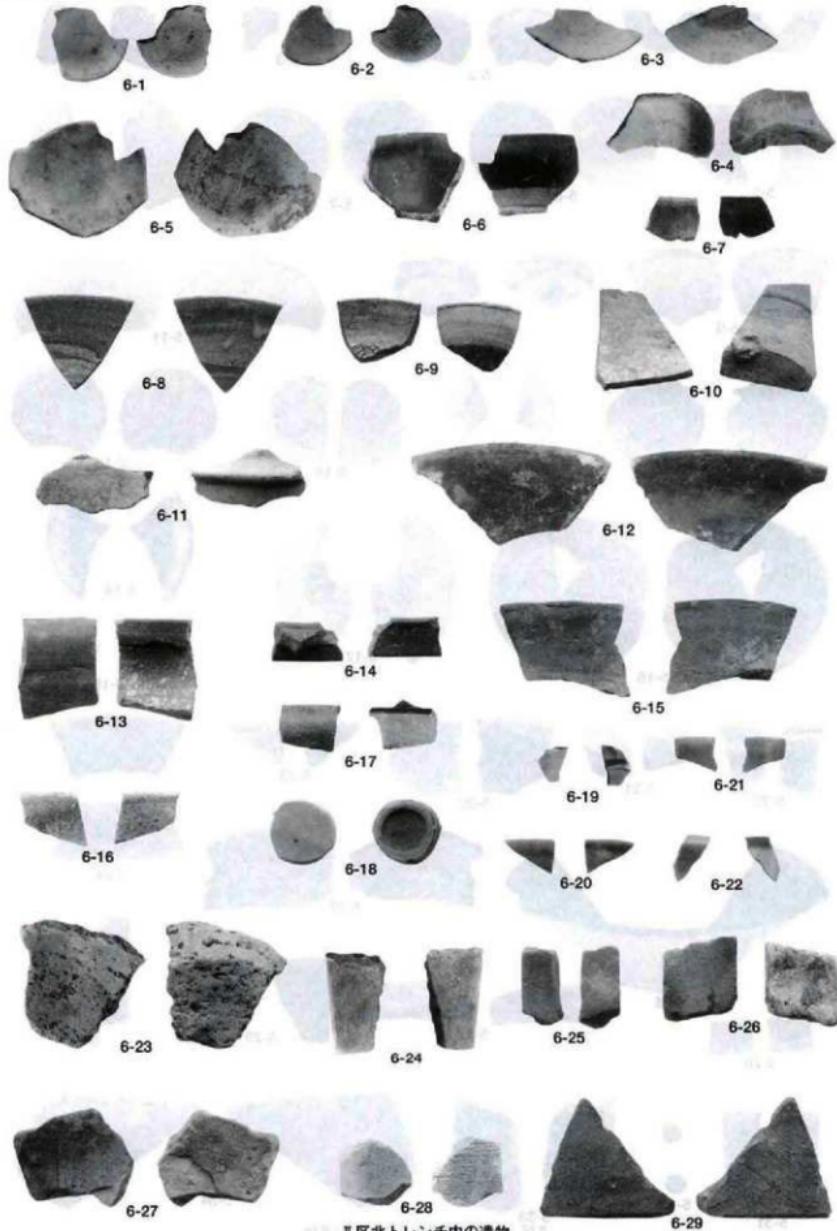
図版6



I・II区包含層・1面の遺物



図版8



II区北トレーン内の遺物

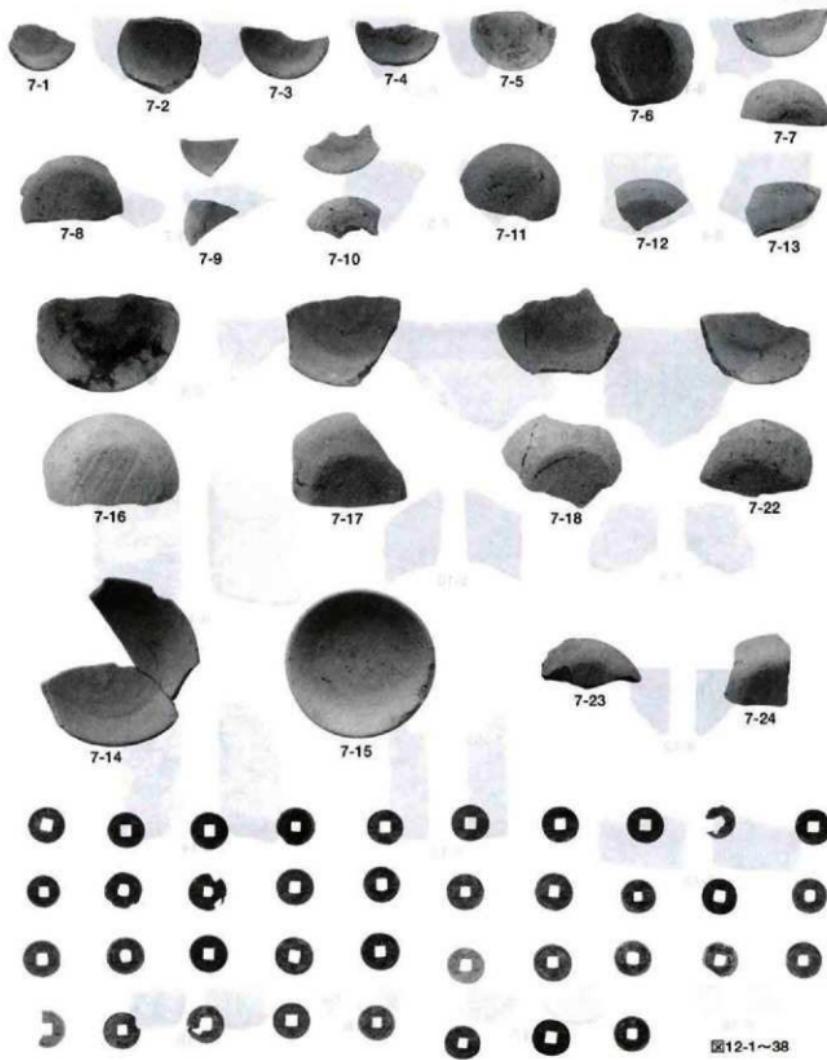
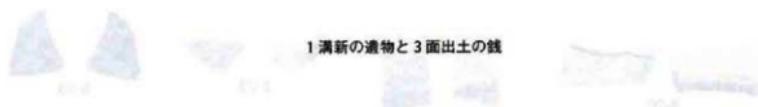
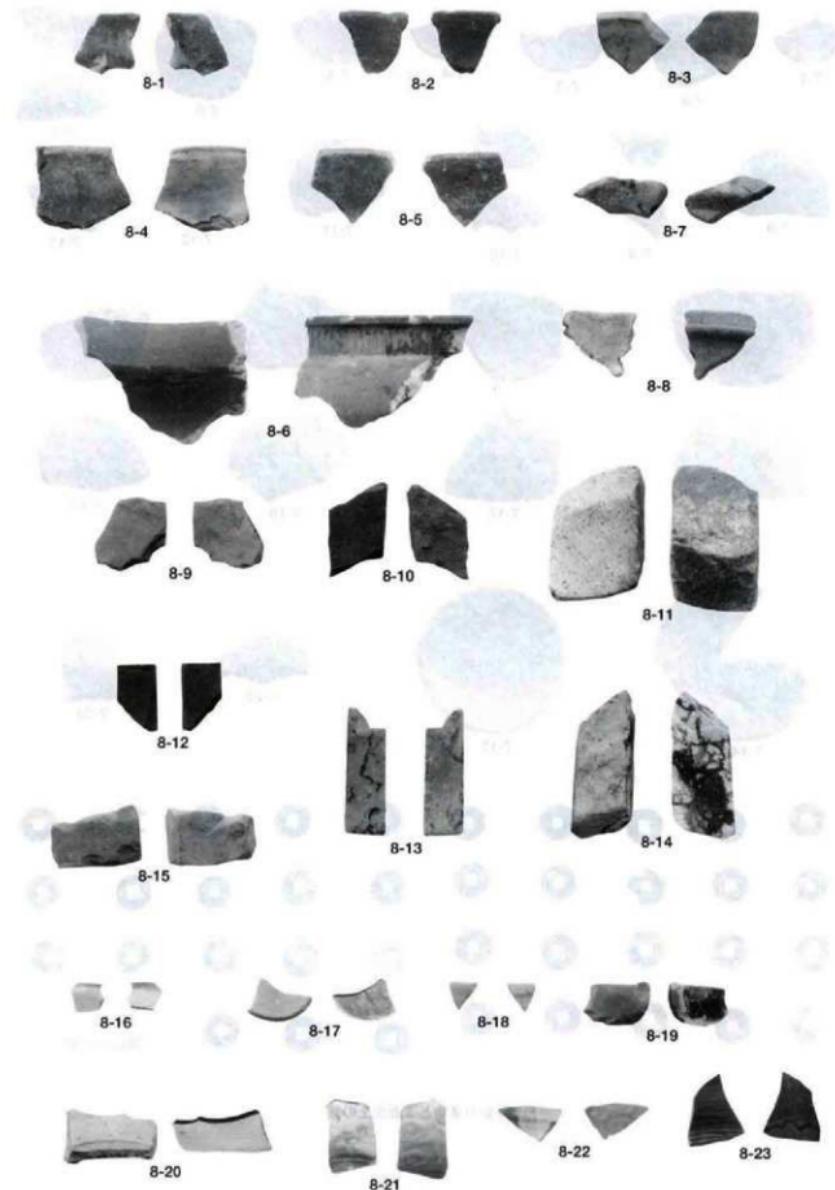


図12-1~38

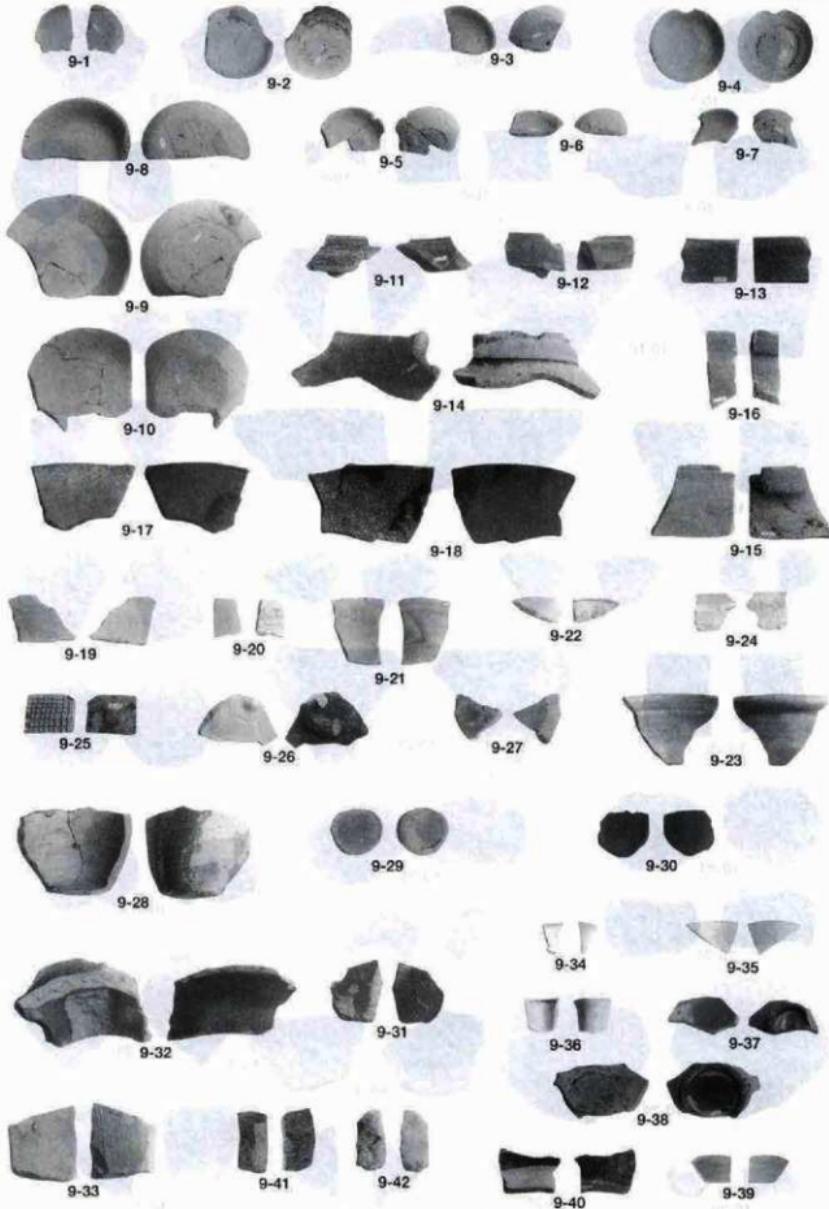
1 満新の遺物と3面出土の銭



図版10

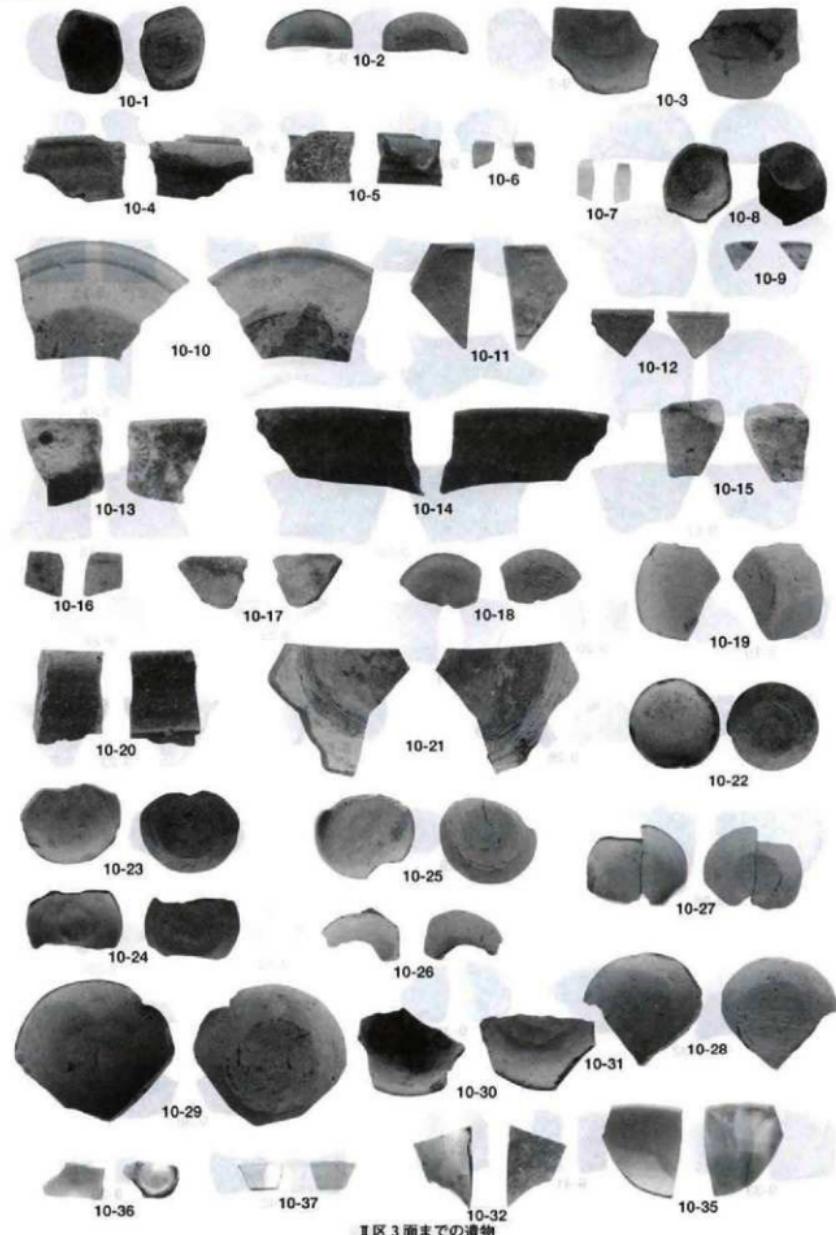


Ⅱ区1溝新～砂層の遺物



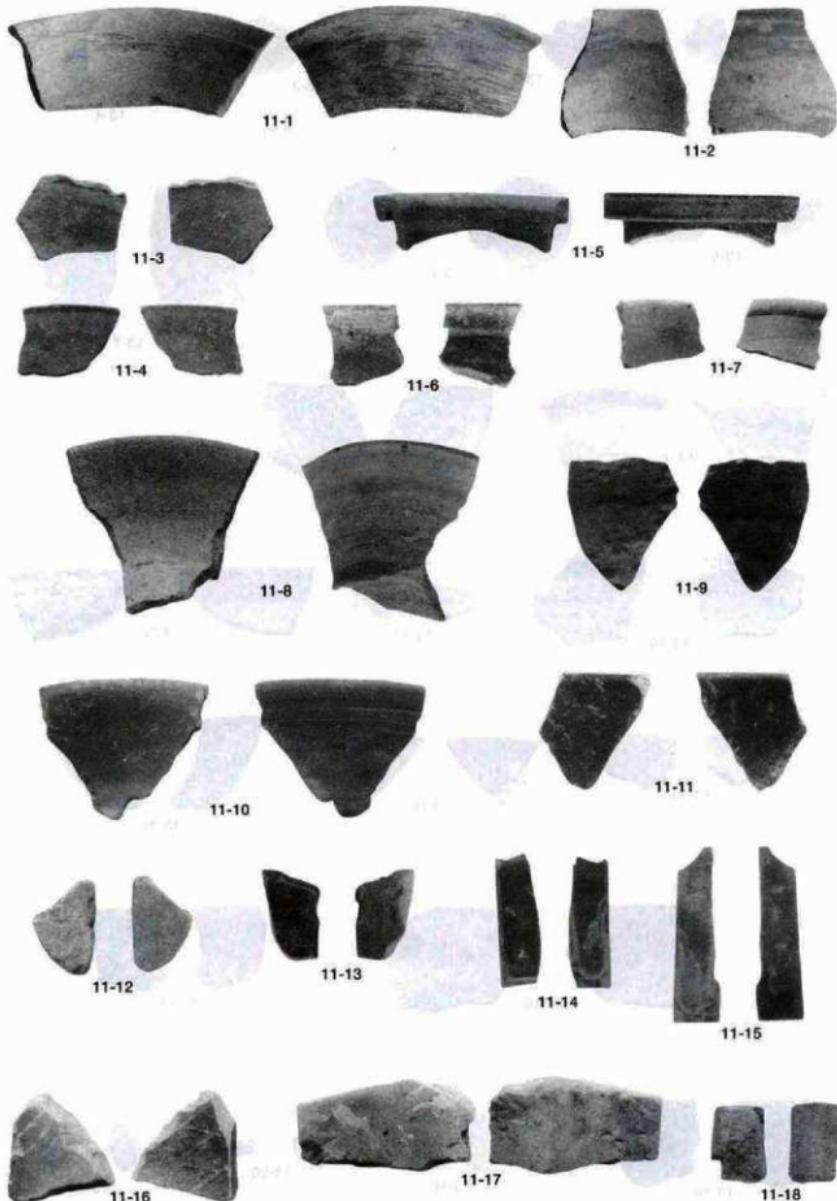
II区1 溝新底部の遺物

図版12



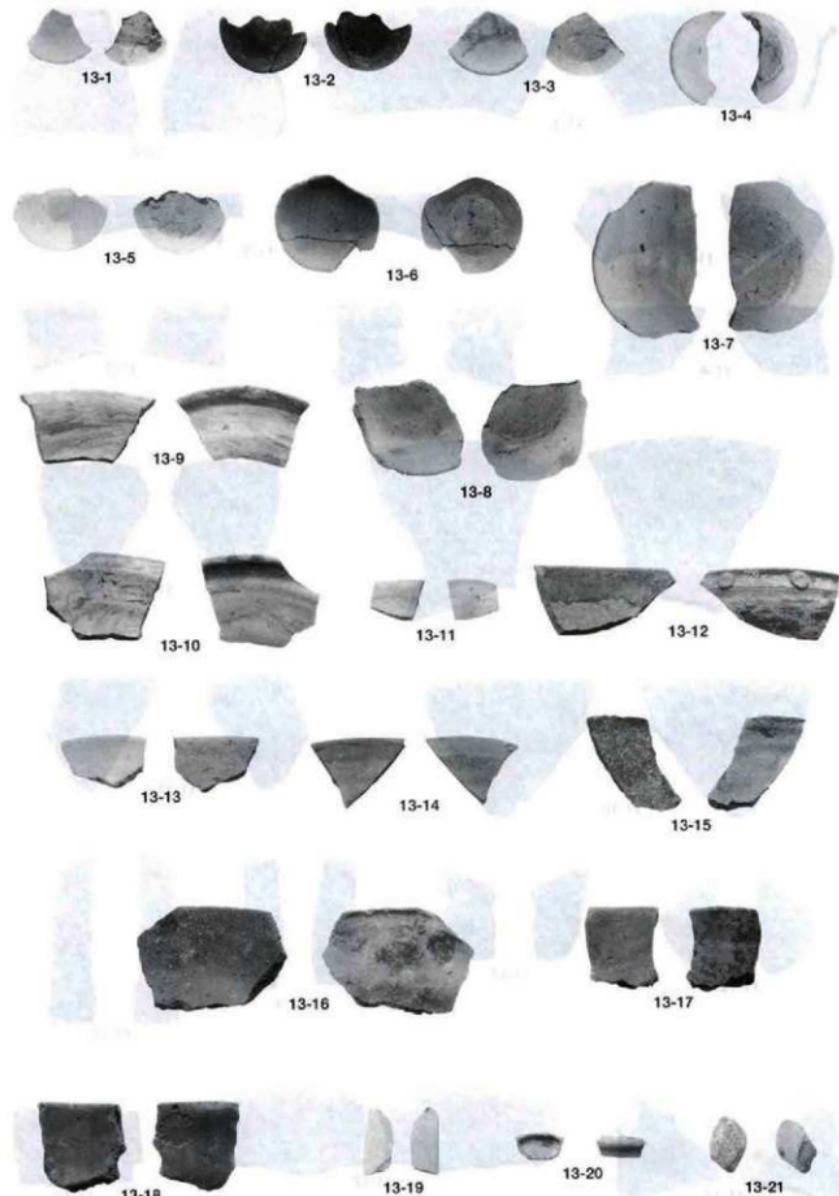
II区3面までの遺物

図版13



II区I溝の遺物

図版14



I区 3 面板溝の遺物

みょうほんじいせき
妙本寺遺跡 (No.232)

大町一丁目1140番 2 地点

例　　言

1. 本報は、妙本寺遺跡（No.232）の所在する遺跡内の鎌倉市大町一丁目1140番2地点における個人専用住宅の新築に伴う緊急調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成14年9月17日～同年9月26日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査体制は、以下の通りである。

調査担当者：原 廣志

調査員：須佐直子、太田美知子、須佐仁和、早坂伸市、中川建二、梅岡渙音

調査補助員：宇都洋平、高橋拓也、野崎美帆、山口正紀（鶴見大学生）、銘苅春也、橋本和之、原 考史（国士館大学生）

調査作業員：糞田孝善、杉浦永章、町田義一（社）鎌倉市シルバー人材センター

協力機関名：（社）鎌倉市シルバー人材センター、鎌倉考古学研究所、東国歴史考古学研究所

4. 本報の執筆は、第1章を須佐直子、第2章を原、第3章については調査員協議のもと原が稿を草した。また挿図作成には太田、早坂、中川、梅岡、宇都、野崎、山口、原（考）、橋本が行なった。
5. 本報掲載の写真は、全景・個別遺構を原、須佐（直）があたり、出土遺物を須佐（仁）が撮影した。
6. 発掘調査における出土遺物・図面類・写真などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
7. 本報の凡例は、以下の通りである。

・図版縮尺 全測図：1／80

遺構図：1／20、1／40

遺物図：1／3

・遺構図版 遺構のレベルは海拔標高の数値を示している。

・遺物図版 一・一・一は釉薬の範囲を示す。黒塗りは燈明皿に付着した油煙煤を表現している。

8. 現地調査及び資料整理においては、多くの方々からご助言、並びにご援助を賜った。記して感謝の意を表します（敬称略、五十音順）。

秋山哲雄、大三輪龍彦、岡 陽一郎、小野正敏、河野慎知郎、菊川 泉、小林康幸、斎藤慎一

佐藤仁彦、汐見一夫、宗基秀明、宗基富貴子、田代郁夫、玉林美男、塚本和弘、継 実、手塚直樹
福田 誠、松尾宣方、馬淵和雄、桃崎祐輔

目 次

| | |
|-----------|-----|
| 例 言 | 106 |
| 目 次 | 107 |

本 文 目 次

| | |
|-----------------------|-----|
| 第1章 遺跡の位置と調査の経過 | 109 |
| 1. 遺跡の位置 | 109 |
| 2. 調査の経過 | 109 |
| 第2章 検出遺構と出土遺物 | 112 |
| 1. 第1トレンチの遺構・遺物 | 112 |
| 2. 第2トレンチの遺構・遺物 | 116 |
| 第3章 まとめ | 120 |

挿 図 目 次

| | |
|------------------------|-----|
| 図1. 調査地点周辺図 | 108 |
| 図2. 調査区位置図 | 110 |
| 図3. 第1トレンチ | 113 |
| 図4. 第1トレンチ北壁土層堆積 | 114 |
| 図5. 第1トレンチ出土遺物 | 114 |
| 図6. 第2トレンチ土壙 | 117 |
| 図7. 第2トレンチ出土遺物 | 118 |

遺 物 觀 察 表

| | |
|-------------------------|-----|
| 表1. 第1トレンチ出土遺物観察表 | 115 |
| 2. 第2トレンチ出土遺物観察表 | 119 |

写 真 図 版

| | |
|-----------------------------|-----|
| 図版1 a. 第1トレンチ第1面（西から） | 121 |
| b. 第1トレンチ第2面（西から） | 121 |
| c. 第1トレンチ第2面（北から） | 121 |
| 図版2 a. 第1トレンチ第3面（西から） | 122 |
| b. 第1トレンチ北壁堆積土層 | 122 |
| c. 第2トレンチ第2面（北から） | 122 |
| d. 第2トレンチ第3面（北から） | 122 |
| e. 第2トレンチ中世地山（北から） | 122 |
| f. 第2トレンチ南壁土層堆積 | 122 |
| 図版3 a. 第1トレンチ出土遺物 | 123 |
| b. 第2トレンチ出土遺物 | 123 |

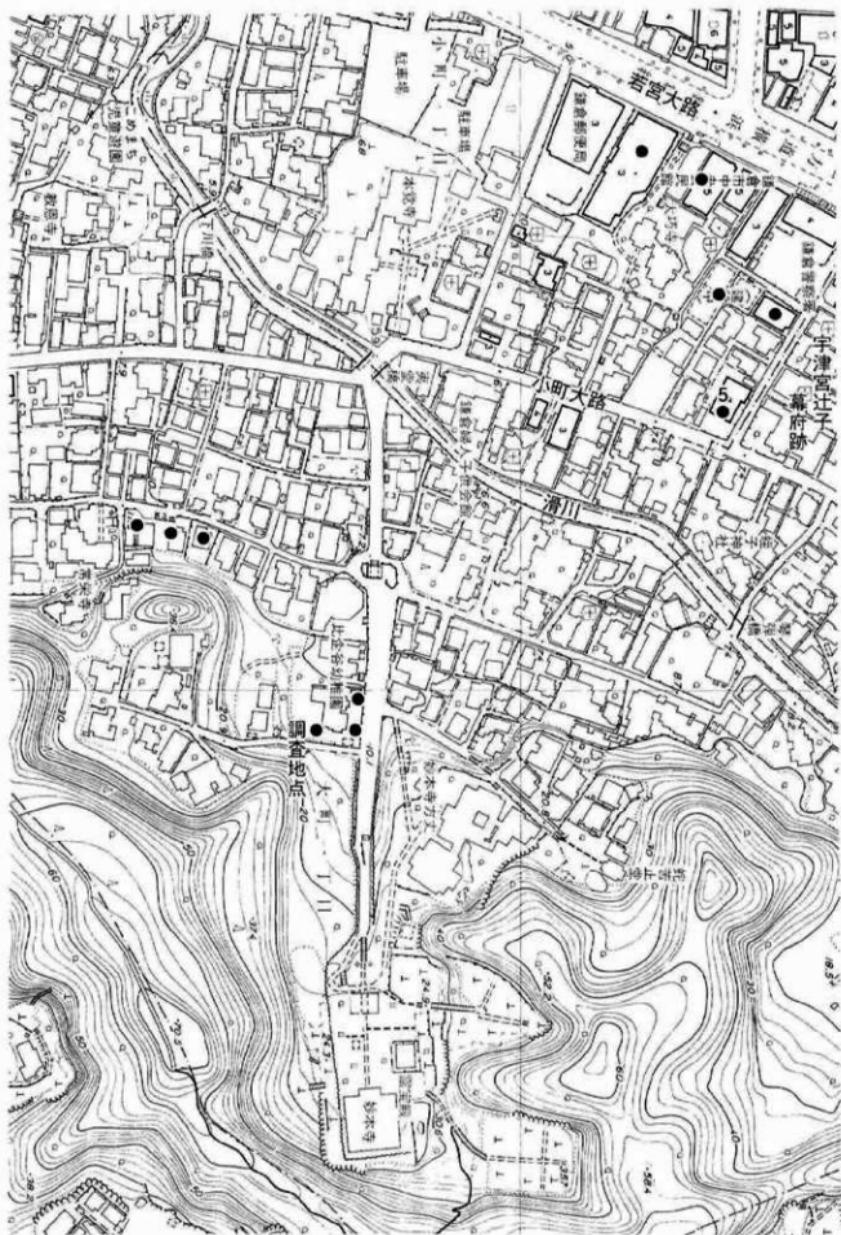


図1 調査地点周辺図

第1章 遺跡の位置と調査の概要

1. 遺跡の位置

妙本寺遺跡は、若宮大路を中心軸として広がる鎌倉平野部の東端山裾に立地し、滑川の左岸に展開する谷戸の中の比企ヶ谷に位置し、背後に丘陵の崖面が迫っている。この丘陵は南を大町大路に限られ、東の名越へと続いている。鎌倉駅から南東方へ約500mのところにあり、西側を走る小町大路側に開口した東西に伸びる谷戸の入口近くにあたり、現在は閑静な住宅地で地番は鎌倉市大町一丁目1140番2に所在している。調査地付近の現地表面の海拔は10m前後であり、小町大路付近（同6m前後）から東に向かって高くなっている。中世基盤層とされる黒褐色粘質土の上面レベルで比較すると、約200m北西に位置した地点5で6.6m前後であり、滑川左岸に形成された微高地東端部の一角を占めていることがわかる。ところで小町大路と交差した滑川に架かる夷堂橋を渡ると「おうめさま」として人々に信仰されている本覚寺（日蓮宗、山号妙嚴山）がある。妙本寺の惣門前から小路を南へ進んだ左手に妙本寺の末寺として創建された常榮寺（ほたもち寺）あり、また現在では惣門から北へ辿ると200m程で左に折れ、琴弾橋を経て小町大路に合流してしまう小路しかないが、かつては北行したまま滑川と山裾の間を抜けて宝戒寺近くまで通じていたようである。

比企ヶ谷の谷戸奥には、鎌倉時代に創建されたと伝える日蓮宗本山の長興山妙本寺があり、調査地点を含めて周辺は妙本寺の旧境内域にあたる。寺伝によると、開山は日朗、開基は比企大学三郎能本、文応元（1260）年に開創と云う。寺の前身は、地名が由来を示すようにこの一帯が比企氏の屋敷地で建仁三（1203）年九月、比企一族が滅亡した地とも伝えられている。

本地点のすぐ西を南北に走る小町大路は、南東側に展開する大町・米町・和賀江や北・東側にあたる気和飛坂（化粧坂）・須地賀江橋（筋造橋）・大倉辻などの「町屋」の多くを連結しており、鶴岡八幡宮付近の政治中枢域から貿易港和賀江（飯島津）へ至る中世からの幹線道路であり経済的動脈を成していた。

2. 調査の経過

当該地は妙本寺遺跡（県遺跡台帳N o.232）の中に位置する鎌倉市大町一丁目1140番2地点における個人専用住宅の建設を含む宅地造成工事によって創出された敷地の一角にあたる。平成14年8月に当該地において事前相談がなく地盤の改良工事が実施されていた状況が判明したため、施行業者に対して工事の一時中断を要請して急遽、建築主と施行業者と文化財保護の措置に付いて協議を行なった。その結果、ただちに文化財保護法に基づく届出手続きをを行い、平成14年9月17日から現地での発掘調査を開始することになった。

調査は、建物基礎がすでに構築されていた関係から多くの困難を伴うこととなったが、建物基礎の範囲内で造構が破壊されていない狭小な面積を対象に実施された。平成14年9月17日よりまず第1トレンチの表土を重機によって掘削することから始められ、続いて第2トレンチの調査を実施した。その結果、第1・2トレンチは共に鎌倉時代中期～末期にかけて4時期の中世生活面と、それに伴う造構・遺物が発見された。同年9月26日までの間に必要な記録作成を行ない、無事に現地調査を終了することができた。調査期間中の経過については、以下のように調査日誌の抜粋を記すことにする。

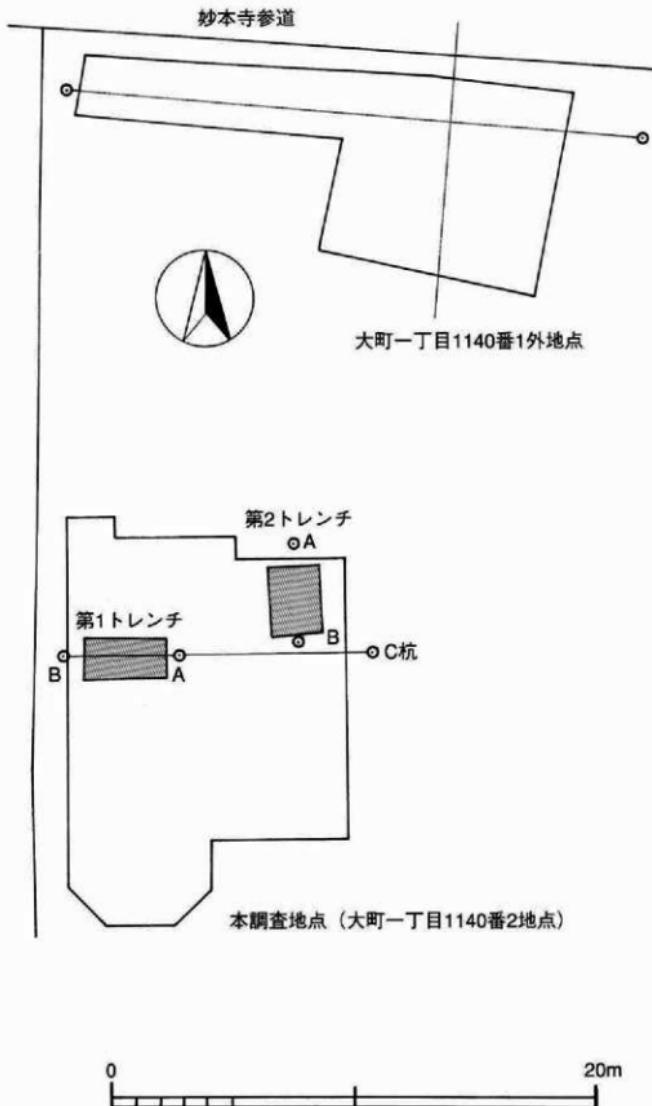


図2 検査区位置図

調査日誌抄

- 9月17日 第1トレンチ調査開始。機材搬入。トレンチを設定し、重機による表土掘削。
- 19日 第1面の造構検出及び全景写真撮影。測量用基準杭を設定、原点レベルを調査区内に移動。
- 20日 第2面の調査終了。全景写真撮影、全測図作成。
- 21日 第3面の調査終了。全景写真撮影、全測図作成。
- 22日 第3面下のトレンチ調査（中世地山面）を実施。写真撮影、全測図・調査区壁土層堆積図の作成。
第1トレンチ調査終了。
- 24日 第2トレンチの重機による表土掘削。第1面の調査終了。全景写真撮影、全測図作成。
- 25日 第2面の調査終了。全景写真撮影、全測図作成。第3面の検出開始。
- 26日 第3面及び同面下のトレンチ調査（中世地山面）を実施。全景写真撮影、全測図・調査区壁土層堆積図の作成。現地調査終了し、関係各方面に発掘調査を終了したとの旨を連絡し、機材撤収。

調査地点の経緯は、北緯 $[35^{\circ} 18' 50"]$ 東經 $[139^{\circ} 33' 32"]$ である。また海拔標高の原点移動については、若宮大路段葛の二ノ鳥居近くに設けられた三角水準点（N o. 15637 : L = 6.168m）から調査地のC杭上に仮水準点を移動した。文章中及び挿図に記載されているレベル数値は、すべてこれを基準にした海拔標高を示している。

第2章 検出遺構と出土遺物

1. 第1トレンチの遺構・遺物

第1トレンチ（図2～4）は、建築範囲内の西側北寄りの位置に建物基礎を避ける形で東西3.5m×南北2.5mの規模で設定した。本トレンチの土層堆積は、図4に示したように現地表下50cm前後の表土（1層）を除去すると、小型の土丹塊を碎いて突き固めた地業（2層）が確認され、この上面を第1面とした。現地表下約1.1mで上部に暗茶褐色土を貼った厚さ35～45cm前後の地業層（4層）が表出されたので第2面とした。さらに第2面構築土を掘り下げるとき、現地表下約1.5mで上面に中・小土丹塊が点在した第3面が確認された。第3面以下の調査については、工事掘削深度の根切底の関係から北壁際に東西方向でトレンチを入れて確認を行なった。その結果、現地表下約1.9mで無遺物で非常に縮まりある黒褐色粘質土の中世基盤層が検出された。

以上のように4時期の生活面が確認され、それに伴って各面から検出した遺構は、土壙・柱穴などがあり、出土遺物にはかわらけ・舶載器・瀬戸や常滑窯製品、金属製品などがみられた。

a. 第1面（図3～5、図版1・3）

第1面は、海拔標高9.90m前後ではほぼ平坦な生活面を構成しており、土壙1基、柱穴7口などの遺構を検出した。

土壙：土壙1は北西隅で確認され、大半が調査区外に拡っている。一部をP1に壊されている。確認された規模は、東西70cm以上・南北80cm以上・深さ35cm程度を測り、円形形状を呈したものと考えられる。覆土はかわらけ小片・炭化物を多く含んだ縮まりのない茶褐色粘質土である。

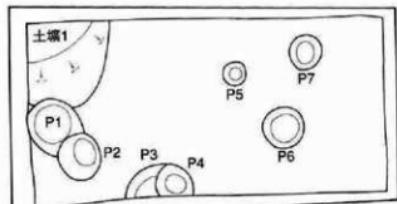
柱穴：P1は平面が楕円形を呈し、東西径50cm・南北径40cm・深さ40cmを測る。P2はP1を壊して掘られたもので円形を呈し、径40cm・深さ30cmである。P3・4は調査区外に拡がり、土層観察から後者が新しい。確認された規模はP3が径40cm以上・深さ30cm、P4が径30cm・深さ35cmである。P5は規模が径20cm・深さ25cmで円形を呈する。P6は規模が径35cm・深さ35cmで円形を呈し、底面はほぼ平坦になる。P7はやや楕円形を呈し、規模が径30cm前後・深さ30cmである。

出土遺物は（図5-1～10、図版3上段）、1～4が面上から出土した資料である。1が青磁碗、2が角棒状の鉄製品で用途不明、3がロクロ成形かわらけ大皿、4が瀬戸四耳壺の肩部と思われるものである。5・6は土壙1から出土したもので、5がロクロ成形かわらけ小皿、6が常滑捏鉢である。7～10は柱穴から出土したもので、7（P1）が北宗銭、8（P2）が青磁折腰皿、9（P3）が常滑窯口壺、10（P6）が瀬戸鉢である。

b. 第2面（図3～5、図版1・3）

第2面は、海拔標高9.40m前後ではほぼ平坦な生活面を構成しており、検出した遺構は土壙2基、柱穴1口である。

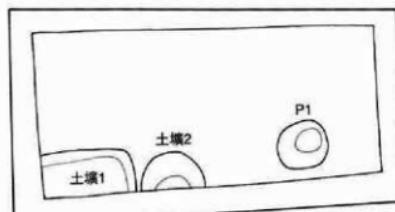
土壙：土壙1は南西隅で確認され、調査区外に拡っている。確認された規模は、東西80cm以上・南北40cm以上・深さ30cm程度を測り、楕円形状を呈したものと考えられる。覆土は土丹粒・かわらけ小片・炭化物を多く含んだ縮まりのない暗褐色粘質土である。土壙2は南側が調査区外に拡がっており、確認された規模は東西55cm・南北30cm以上・深さ20cm程度で断面摺鉢形を呈する。



▲第1面

A
●

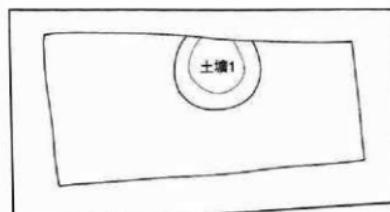
B
●



A
●

B
●

▲第2面



A
●

B
●

▲第3面



▼第3面下トレンチ

B
●

A
●

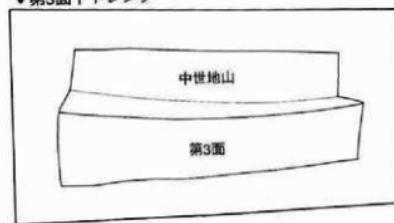


図3 第1トレンチ

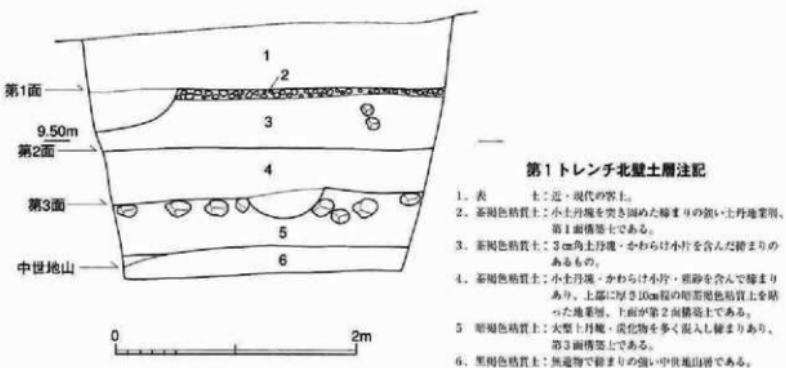


図4 第1トレンチ北壁土層図

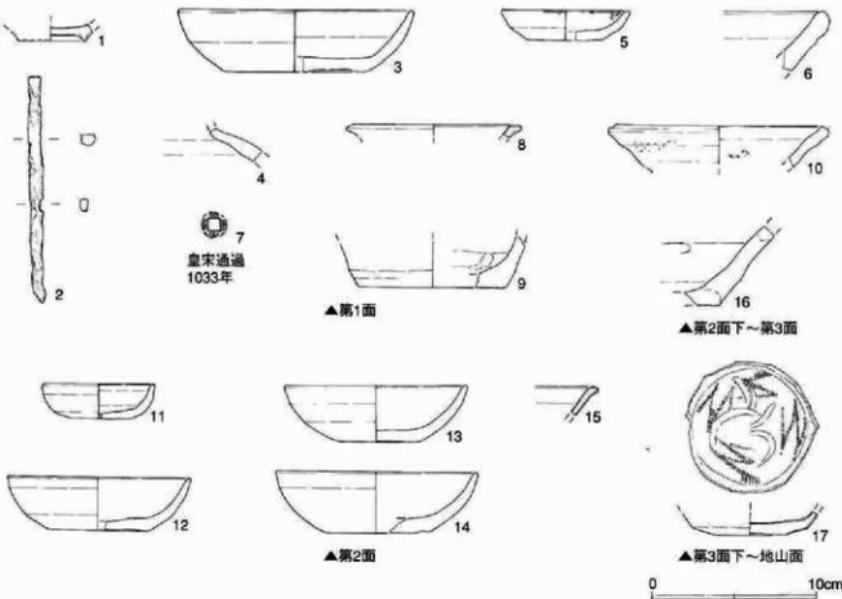


図5 第1トレンチ出土遺物

柱穴：柱穴1は円形を呈し、径30cm・深さ25cm程である。底面に腐蝕の進んだ鐵板と覺しき痕跡が認められた。

出土遺物は（図5-11～15、図版3上段）、11～14が第1面下～第2面から出土した資料でロクロ成形かわらけの小・中・大皿、15が白磁端反碗である。

c. 第3面（図3～5、図版1・2・10）

第3面は、海拔標高9.0m前後で東側がやや高く西に向かって緩やかに傾斜した生活面である。検出した遺構は土壌1基だけである。

土壤：土壌1は北端中央寄りで確認され、調査区外に拡張している。確認された規模は、東西径75cm・南北径65cm以上・深さ25cm程を測り、梢円形状を呈したものと考えられる。覆土は土丹粒・かわらけ小片・粗砂（鎌倉石を碎いたもの）を多く含む縮まりのない茶褐色粘質土である。図示できる遺物は出土していない。

ところで第3面の調査終了した後、北壁に沿って幅60cm・深さ70cm程のトレンチを入れて中世地山を確認した。この上面の海拔標高は8.60m前後である。

表1 第1トレンチ出土遺物観察表

| 団・番号 | 種類 | 法量(a:口徑b:底徑c:高) | 成形・特徴（文様・軸部・胎土・赤地・焼成など） | 備考(遺構・その他) |
|------|--------|---------------------------|--------------------------------|------------|
| 5-1 | 青磁 瓢 | 底部片 b:4.0cm | 無文 淡緑色不透明高台内施釉疊付露筋 灰白色 織密 | 1面下 龍泉窯系 |
| 2 | 鉄製品 | 長さ(13.8cm)幅6-9mm厚さ7mm | 断面多角形の棒状 用途不明 | * |
| 3 | かわらけ | a:14.3cm b:8.8cm c:3.7cm | 外底余切痕ロクロ 明黄色黑色微砂・雲母・赤色粒 | * |
| 4 | 瀬戸 四耳壺 | 肩部片 | 輪積み技法 オーリア灰白 灰華 灰黃白色 織密 | * |
| 5 | かわらけ | a:(7.7)cm b:4.4cm c:1.7cm | 外底余切痕ロクロ 橙色黑色微砂・雲母・赤色粒・白針 | 1面 土壌1 |
| 6 | 常滑 握鉢 | 口縁部小片 | 灰白色砂・長石粒粗胎 常滑片口鉢II類 | * |
| 7 | 銅鏡 | 皇宋通宝 | 北宋錢 初鋤年 1038年 割開を切り加工 | *P1 |
| 8 | 青磁 斜腹皿 | a:(9.9)cm | 口縁部端反状 淡緑色半透明 灰白色黑色微砂緻密 | *P2 龍泉窯系 |
| 9 | 常滑 烏口壺 | b:(8.8)cm | 輪積み技法 砂口底 砂黒色表面褐色 砂粒・長石粒や粗胎 | *P3 |
| 10 | 瀬戸 鉢皿 | a:(12.6)cm | 内面に御刀刻み 灰綠色 灰釉刷毛塗り 黃灰白色微砂堅緻 | *P6 |
| 11 | かわらけ | a: 6.7cm b:3.6cm c:2.1cm | 外底余切痕ロクロ 橙色黑色微砂・雲母・赤色粒 | 1面下～2面 |
| 12 | かわらけ | a:11.2cm b:6.0cm c:3.4cm | 外底余切痕ロクロ 橙灰色黑色微砂・雲母・赤色粒 | * |
| 13 | かわらけ | a:11.3cm b:5.2cm c:3.5cm | 外底余切痕ロクロ 橙色黑色微砂・赤色粒・白針・土丹粒 | * |
| 14 | かわらけ | a:12.3cm b:6.4cm c:3.7cm | 外底余切痕ロクロ 橙色黑色微砂・赤色粒・白針・土丹粒 | * |
| 15 | 白磁 瓢 | 口縁部片 | 端反口縁 灰白色透明灰白色緻密 | 2面 土壌1 |
| 16 | 常滑 握鉢 | 底部片 | 内面摩滅痕 暗灰色粗砂粒・石粒 常滑片口鉢 類 | 2面下～3面 |
| 17 | 青磁 瓢 | b:4.4cm | 内面拂拭文・劃花文 灰褐色透明 外底露胎 灰色堅緻 同安窯系 | 3面下～地山面 |

2. 第2トレンチの遺構・遺物

第2トレンチ（図6・7）は、建築範囲内の東隅寄りの位置に建物基礎を避ける形で南北約3.0m×東西約2.5mの規模で設定した。本トレンチの土層堆積は、図6に示したように現地表下40cm前後の表土（1層）を除去すると、第1トレンチでは確認できなかった拳大の土丹と中世かわらけの細片を交えた締まりのない茶褐色粘質土が堆積していた（2層）。その下の3層も同様に拳大の土丹塊を多量に交えた茶褐色粘質土あるが締まりの強い地業層であった。この状況より、3層上面を第1面として捉えられた。現地表下約1.1mにおいて厚さ10~15cm前後で暗褐色粘質土の地業層（5層）が表出されたので第2面とした。さらに第2面構築土を掘り下げるとき、現地表下約1.3mで殆んど間層を挟まずに確認されたのが第3面（6層）である。6層の上面では土丹塊を突き固めた地業が一部で確認された。

第3面以下の調査については、工事掘削深度の根切底の関係から南壁際に東西方向でトレンチを入れて確認を行なった。その結果、現地表下約1.5mで無遺物で非常に締まりある黒褐色粘質土の中世基盤層を検出した。

以上のように4時期の生活面が確認され、それに伴って各面から検出した遺構は土壙・柱穴・鎌倉石切石などがある。出土遺物にはかわらけ、船載磁器、瀬戸・常滑窯製品、土・石製品などがみられた。

a. 第1面（図6~7、図版2・3）

第1面は、海拔標高9.85m前後ではほぼ平坦な生活面に整地しているが、南半部の上面には土丹が突き固められ版築層が確認され丁寧な生活面の作出が行なわれていた。この面で検出した遺構は土壙1基、柱穴4口などである。

土壙：土壙2は北西隅で確認され、調査区外に拡っており、一部をP8により壊されている。確認された規模は、東西径100cm以上・南北径90cm以上・深さ40cm程を測り、梢円形を呈したものと考えられる。覆土はかわらけ小片・炭化物を多く交えた締まりのない茶褐色粘質土である。土壙3は西壁調査区外に拡がっており、確認された規模は南北径75cm・東西径45cm以上・深さ約30cmで梢円形を呈するものと考えられる。覆土はかわらけ小片・炭化物が多く、2cm角土丹を少量交えた締まりない茶褐色弱粘質土である。

柱穴：P8は平面がほぼ円形を呈し、径50cm・深さ約40cmを測る。P9は円形を呈し、径40cm・深さ15cmと浅い掘り方もつ。P10は梢円形を呈し、径35cm・深さ35cmである。この他、トレンチ南半部の範囲で確認された破碎土丹を突き固めた版築面上にやや偏平な土丹塊が不規則に集合した様子が認められたが、現状ではどのような性格をもつかは把握することができなかった。

出土遺物は（図7-1~8、図版3下段）、この面の遺構に伴う図示可能なものは認められず、遺物包含層及び面上から出土した資料だけである。1~3はロクロ成形かわらけ大・小皿、4が白かわらけ、5が瀬戸入子、6が常滑窯鉢、7・8が砥石と火打石である。

b. 第2面（図6・7~24、図版2・3）

第2面は、海拔標高9.35m前後ではほぼ平坦な生活面に整地が行なわれていた。この面で検出した遺構は土壙2基、柱穴3口である。

土壙：土壙2は東壁調査区外に拡っており、一部をP2により壊されている。確認された規模は、東西径70cm以上・南北径70cm・深さ15cm程であり、断面が浅い皿状を呈した梢円形のものと考えられる。

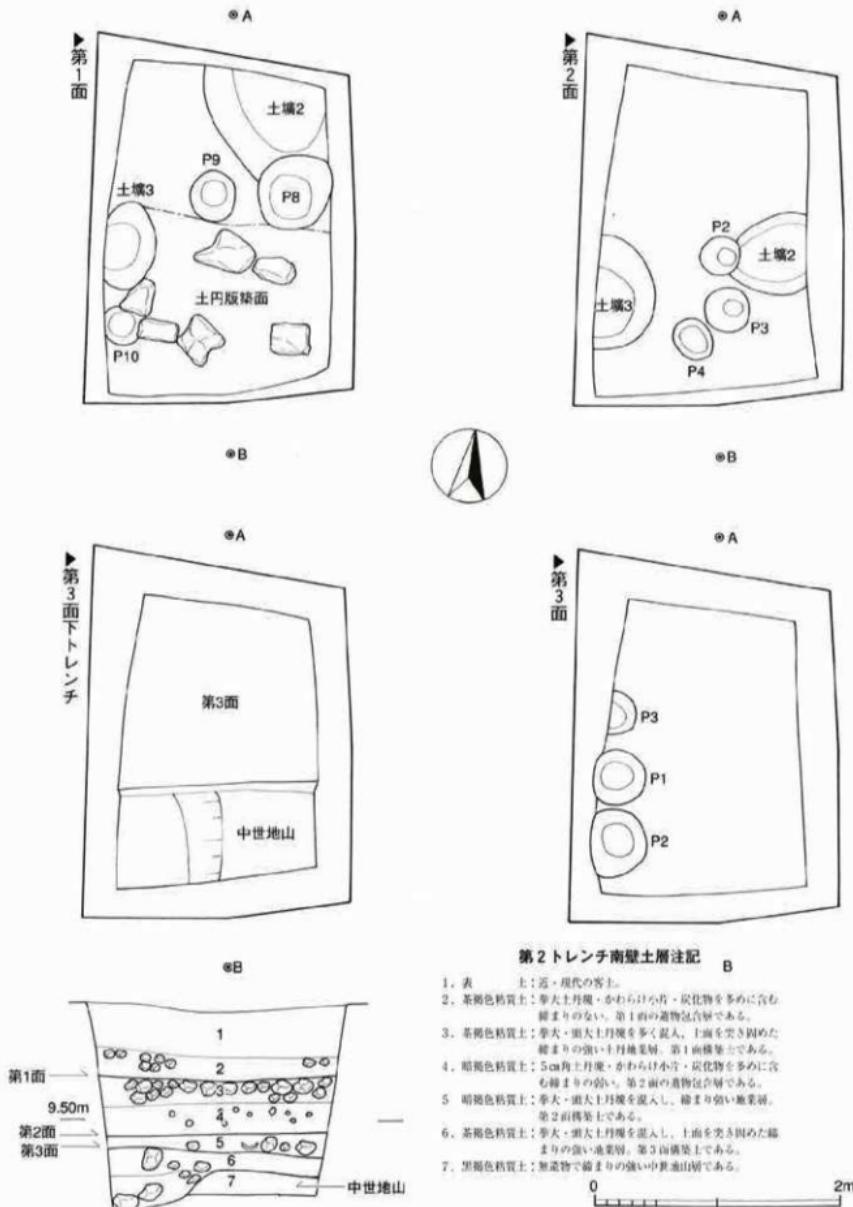


図6 第2トレンチ

覆土はかわらけ小片・炭化物を多く交えた縮まりのない暗褐色弱粘質土である。土壌3は西壁調査区外に拡がっており、確認された規模は南北径95cm・東西径50cm以上・深さ約20cmで楕円形を呈するものと考えられる。覆土はかわらけ小片・炭化物を多く交えた縮まりのない茶褐色弱粘質土である。

柱穴：P 2は円形を呈し、径30cm・深さ約35cmである。P 9も円形を呈し、径40cm・深さ25cmと浅い掘り方もつ。P 4はやや楕円形を呈し、径35cm・深さ30cmで底面に腐蝕した礎板の痕跡が認められた。出土遺物は（図7-9～19、図版3下段）、9～16は面上から出土した資料である。9～11がロクロ成形かわらけ小皿、12が青磁碗、13が白磁碗、14・16が常滑捏鉢、15がかわらけ加工の土製円盤である。17・19がロクロ成形かわらけ小皿（土壌2・P 4）、18が青白磁梅瓶（P 3）である。

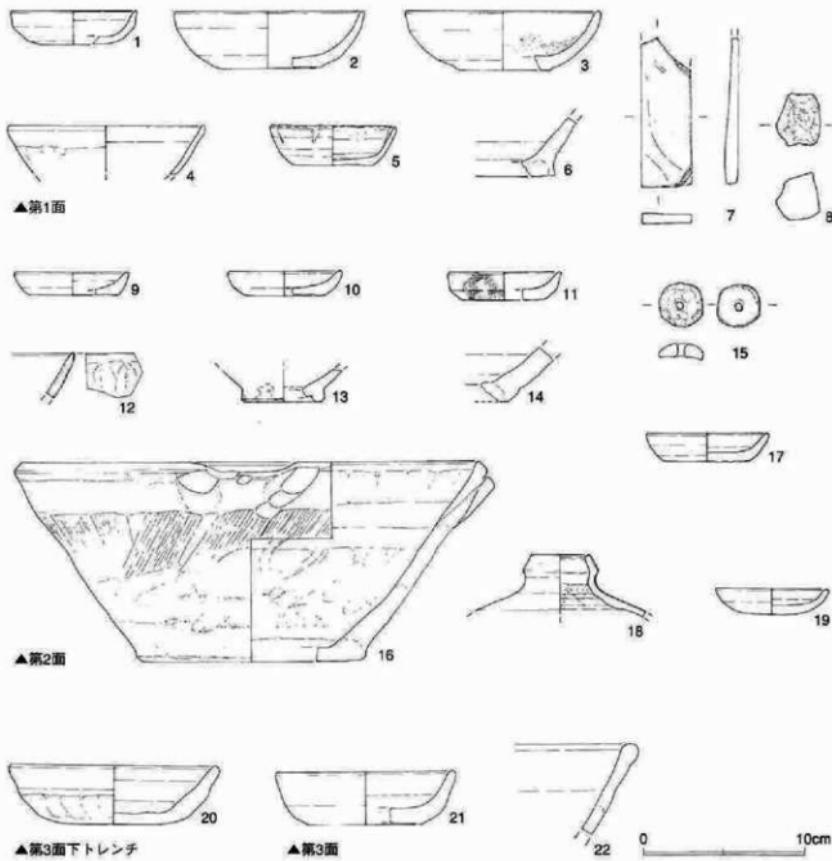


図7 第2トレンチ出土遺物

c. 第3面 (図6・7、図版2・3)

第3面は、海拔標高9.0m前後で東側がやや高く西に向かって緩やかに傾斜した生活面である。検出した遺物は柱穴3口だけである。

柱穴：柱穴は西端調査壁沿いで確認され、一部調査区外に拡張している。確認された柱穴1～3は、東西径30～50cm・南北径40～55cm以上・深さ25cm前後を測り、楕円形形状を呈したものである。覆土は土丹粒・かわらけ小片・粗砂（鎌倉石を碎いたもの）を多く含む締まりのない茶褐色粘質土である。図示できる遺物は出土していない。

出土遺物は（図7-20-22、図版3下段）、21・22は3面上から出土したロクロ成形かわらけ・常滑捏鉢である。20は手捏ね成形のかわらけ大皿である。

ところで第3面の調査終了した後、南壁に沿って幅80cm、深さ30～50cmのトレンチを入れて中世地山を確認した。この上面の海拔標高は8.75m前後であり、トレンチ西半部に土壤状の落ち込みを確認した。

表2 第2トレンチ出土遺物観察表

| 図・番号 | 種類 | 法量(a:幅b:底径c:高さ) | 成形・特徴（文様・輪郭・粘土・赤土・焼成など） | 参考(遺物・その他) |
|------|--------|----------------------------|---------------------------------|------------|
| 7-1 | かわらけ | a:7.8cm b:3.9cm c:2.4cm | 外底糸切痕ロクロ 暗黄褐色黒色微細・白針 | 1面上 |
| 2 | かわらけ | a:11.6cm b:6.0cm c:3.5cm | 外底糸切痕ロクロ 橙色黒色微細・雲母・白針 | * |
| 3 | かわらけ | a:11.8cm b:5.7cm c:3.7cm | 外底糸切痕ロクロ 暗灰褐色黒色微細・白針・上昇線 るつばか | * |
| 4 | 白かわらけ | a:22.0cm | 外面指痕明灰白色微砂緻密 | * |
| 5 | 瀬戸 入子 | a:7.6cm b:4.8cm c:2.4cm | 口縁八弁輪花 外底ヘラ削り 口縁部に降灰釉 灰白色微砂緻密 | * |
| 6 | 常滑 捺鉢 | 底部片 | 内面摩滅痕 暗灰色粗砂粒・石粒 常滑片口鉢 頭 | * |
| 7 | 砥石 | 長さ9.1cm 幅3.0cm 厚さ0.8cm | 仕上研 磨礪面 粗板岩製 両端面に刃物痕有り 浅黄褐色 | * |
| 8 | 火打石 | 長さ3.1cm 幅2.7cm厚さ 2.8cm | チャート系 各面に打撃痕有り 暗灰～灰褐色 一部再火の痕跡 | * |
| 9 | かわらけ | a:7.0cm b:5.5cm c:1.4cm | 外底糸切痕ロクロ 橙色黒色微細・雲母・赤色粒 | 1面下～2面 |
| 10 | かわらけ | a:5.9cm b:5.0cm c:1.4cm | 外底糸切痕ロクロ 明黄褐色灰色黒色微細・白針 | * |
| 11 | かわらけ | a:6.9cm b:5.2cm c:1.7cm | 外底糸切痕ロクロ 橙色黒色微細・白針・赤色粒 燐明皿 | * |
| 12 | 青磁 瓶 | 口縁部片 | 外面端部弁文 明綠色半透明厚手に施釉明灰白色黒色微砂緻密 | * |
| 13 | 白磁 瓶 | b:14.5cm | 口丸碗 断面四角高台 本白色不透明豊口～高台内端部 灰白色微密 | * |
| 14 | 常滑 捺鉢 | 底部片 | 内面摩滅痕 茶灰色粗砂粒 内面降灰釉 常滑片口鉢 頭 | * |
| 15 | 土製 円盤 | 径2.8cm 厚さ8mm 孔径5mm | かわらけ体部を円盤状に加工中央小孔 橙褐色微細・白針・赤色粒 | * |
| 16 | 常滑 捺鉢 | a:29.2cm b:13.6cm c:12.3cm | 片口外底砂目底輪積技法 橙色 黑色微砂・長石粒粗筋 | * |
| 17 | かわらけ | a:7.5cm b:5.4cm c:1.7cm | 外底糸切痕ロクロ 黄褐色黑色微細・雲母・白針 | 2面 土壌2 |
| 18 | 青白磁 梅瓶 | a:3.6cm | 口縁～肩部片 本青色透明薄手の旋輪 白色黑色微砂堅緻 | * P3 |
| 19 | かわらけ | a:6.9cm b:3.5cm c:1.6cm | 外底糸切痕ロクロ 橙色黒色微細・雲母・白針 | * P4 |
| 20 | かわらけ | a:12.7cm b:11.6cm c:3.6cm | 手捏成形 橙色 黑色微細・雲母・白針・赤色粒 | 2面下～3面 |
| 21 | かわらけ | a:11.2cm b:7.1cm c:3.1cm | 外底糸切痕ロクロ 橙色黒色微細・雲母・白針・赤色粒 | 3面上 |
| 22 | 常滑 捺鉢 | 口縁部片 | 明褐色薄枝・長石粒粗筋 常滑片口鉢 I期 | * |

第3章　ま　と　め

今回の現地調査は、既に建物基礎工事が完成した状況で実施された為、建物基礎から安全な後退距離を確保しつつ、調査区の設定位置や調査によって発生する堆土の処理問題を考慮して作業を進めなければならなかった。さらに高い建物基礎を避けながらの作業は危険を伴う点など多くの困難を抱えての現地調査でもあった。従って、ごく限られた面積の中の調査であったため、調査成果から得られた情報はおのずと限られたものである。ここでは各面の年代観について若干述べてまとめたい。

本調査地点は、比企氏の屋敷と伝えられる跡地に建立された妙本寺の旧境内地と推定され、比企ヶ谷戸内の開口部に位置している。先に発掘調査が実施されていた本地点北で妙本寺参道側にあたる大町一丁目1140外地点（図2）の調査成果から予想では比企一族に係る屋敷跡や妙本寺に関連する遺構の検出が期待された。しかしながら、上記のような事情により調査区は極めて狭小な範囲にならざるを得ず平面的な造構の拡がりを確認することは難しいので第1・2トレンチの調査において検出された中世生活面の概要を以下に記すことしたい。

第1面：この面は海拔標高9.90mで土丹版築を施してほぼ平坦な生活面に整地され、土壤・柱穴などの遺構が検出された。遺構や面上包含層に伴う遺物は、かわらけがロクロ成形の薄手丸深型が主体で概ね14世紀中頃までに納まるものと考えられる。

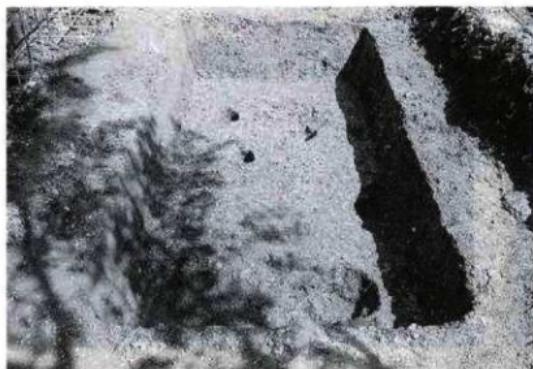
第2面：この面は海拔標高9.40m前後で弱い地盤によりほぼ平坦な生活面に整地され、土壤・柱穴などの遺構が検出された。遺構や面上包含層に伴う遺物は、出土遺物の組成から概ね13世紀末葉頃と考えられる。

第3面：この面は海拔標高9.00m前後で上面に鎌倉石の破碎粒を敷いて生活面であり、土壤・柱穴などの遺構が検出された。出土遺物の組成から概ね13世紀中～後葉頃と考えられる。

第3面下（中世地山）：第3面で調査時で工事掘削深度の根切底に達していたので、トレンチを入れて中世地山の確認を実施した。中世地山は海拔標高8.65m前後で検出され、第2トレンチから土壤の落ち込みが検出された。遺構や面上包含層に伴う遺物は、出土遺物の組成から概ね13世紀前半頃と考えられる。

【引用・参考文献】

- 宗基秀明 1998「中世都市鎌倉の初期かわらけ」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』日本中世土器研究会
宗基秀明 2002「鎌倉出土の14世紀代かわらけ」「かながわの中世～鎌倉から小田原へ～一土器様相を中心として」神奈川考古学会 平成13年度考古学講座
宗基富貴子 1996「鎌倉・今小路西遺跡（御成小学校）の瀬戸窯製品について一古瀬戸前期から後期までの出土様相ー」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 第4輯』
服部実喜 1994「南武藏・相模における中世の食器類（2）－中世前期の様相ー」『神奈川考古第30号』神奈川考古同人会
松尾剛次 1993「中世都市鎌倉の風景」吉川弘文館

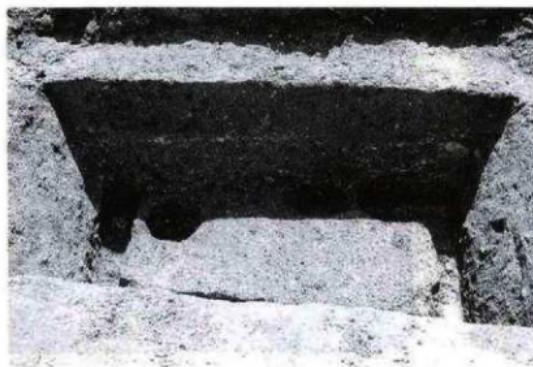


◀ a. 第1トレンチ第1面（西から）

▶ b. 第1トレンチ第2面（西から）

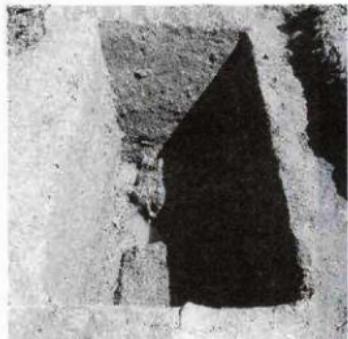


◀ c. 第1トレンチ第2面（北から）



妙本寺第1トレンチ

図版2



▲a. 第1トレンチ第3面（西から）



▲b. 第1トレンチ北壁土層堆積



▼c. 第2トレンチ第2面（北から）



▼d. 第2トレンチ第3面（北から）



▼e. 第2トレンチ地山トレンチ（北から）



▼f. 第2トレンチ南壁土層堆積



▲a. 第1トレンチ出土遺物



▲b. 第2トレンチ出土遺物

しんぜんこうじあと
新善光寺跡 (No.279)

材木座四丁目573番 1 外地点

例　　言

1. 本報は鎌倉市材木座四丁目573番1外地点に所在する個人専用住宅の新築に先だち行われた、新善光寺跡（県遺跡台帳№279）の発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は平成14年1月7日から同年2月2日にかけて、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
3. 本報使用の遺構図及び遺物実測図・観察表は調査員が分担し、原稿執筆・編集は福田が行った。
4. 本報に使用した遺構全景写真・個別遺構写真・出土遺物写真は福田が撮影を行った。
5. 発掘調査・整理の体制は以下の通りである。

主任調査員 福田誠（鎌倉市教育委員会嘱託） 原廣志（鎌倉市教育委員会嘱託）

調査員 石元道子 本城裕

調査補助員 猿田功一 阿部潤（鶴見大学）

作業員 （社）鎌倉市シルバー人材センター

6. 発掘調査資料（記録図面・写真・出土遺物）は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。

目 次

| | |
|-----------------------|-----|
| 第1章 遺跡の位置と歴史的環境 | 128 |
| 第2章 調査の経過と層序 | 131 |
| 第3章 検出した遺構と遺物 | 132 |
| 第4章 まとめ | 132 |

| | |
|-------------------------|-----|
| 図1 遺跡地点位置図 | 128 |
| 図2 第1面・第2面全測図 | 129 |
| 図3 第3面全測図と北壁土壙断面図 | 130 |
| 図4 第1・第2面出土遺物 | 133 |
| 図5 第2面～第3面出土遺物 | 134 |
| 図6 第2面～第3面出土遺物 | 135 |
| 図7 第2面～第3面出土遺物 | 136 |
| 図8 第2面～第3面出土遺物 | 137 |
| 図9 第3面瓦溜り出土遺物 | 138 |
| 図10 第3面瓦溜り出土遺物 | 139 |
| 図11 第3面・トレンチ出土遺物 | 140 |

表1 遺物観察表

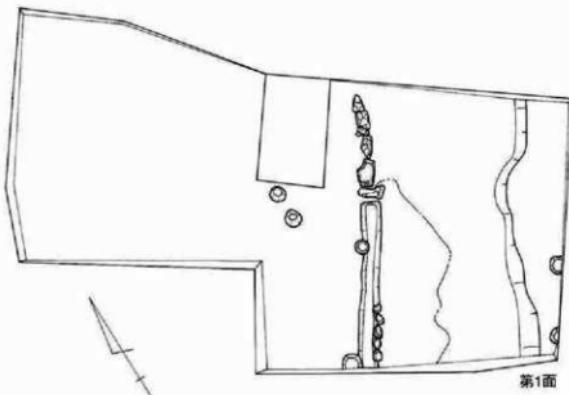
| | |
|------------------------|-----|
| 図版1 遺跡遠景と第1面・第2面 | 145 |
| 図版2 第2面・第3面 | 146 |
| 図版3 第3面と瓦出土状況 | 147 |
| 図版4 出土した遺物 | 148 |
| 図版5 出土した遺物 | 149 |

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

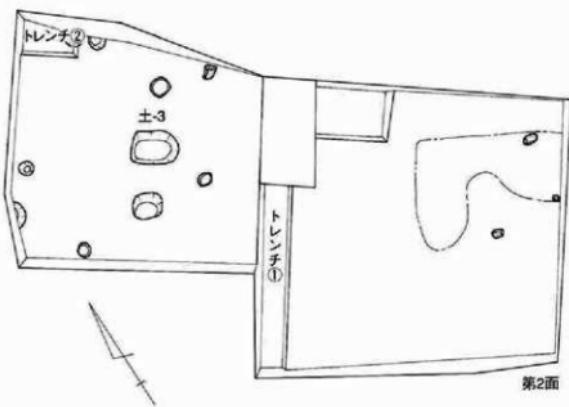
遺跡地は相模湾に面した鎌倉の沖積平野を取り囲む標高100m前後の丘陵の東方、辯ヶ谷に位置する。この谷は約600万年前の新生代第三紀に形成された凝灰砂岩と泥岩が浸食作用で削られ形作られたものである。縄文時代前期の海進期（約5,000～6,000年前）には、海面が現在より約10m近く上昇し入り込んだ海水により鎌倉湾が形成され、現在の鶴岡八幡宮付近まで海岸線が迫っていたと考えられる。縄文時代後期の海退期（約4,000年前）よりしだいに平野部分の陸地化が進み、弥生時代（約2,000年前）にはさらに乾燥がすすみ、海岸線付近では堆積した砂によって砂丘が形成されていった。砂丘の背後（北側）にはラグーン（後背湿地）が形成され、旧市内を流れる最大の河川である滑川をはじめ逆川、二階堂川、扇川、佐助川などが流れ込んでいた。このころから砂丘や河川によって作られた自然堤防上に点々と人々が居住を始めたと考えられている。奈良時代には鎌倉郡の郡衙（郡役所）が置かれ、政治経済の重要な位置を占めていたと考えられる。平安期の鎌倉は、源頼義が石清水八幡宮を勧請した元八幡宮、八幡太郎義家の生まれた甘繩の館、亀ヶ谷の義朝の居館等の存在が知られ、源頼朝が鎌倉に入る1180年以前から源氏相伝の地であった。



図1 遺跡地点位置図



第1面



第2面

0 5m

図2 第1面、第2面全測図

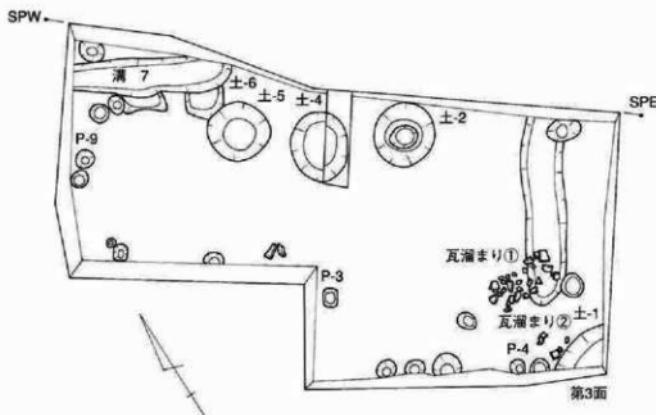


図 3 第3面全測図と北壁土層断面図

調査地点は辯ヶ谷、材木座四丁目に所在し谷間奥には枝分かれした小さな支谷が開けている。遺跡名の新善光寺はこの谷にあったと伝えられている三つの寺院(最宝寺No.248、崇寿寺No.284、新善光寺No.279)の一つを遺跡名としている。最宝寺は谷の入口付近、高御藏にあったと伝えられている。現在横須賀市野比にある最宝寺の寺伝によると、源頼朝が扇ガ谷に創建したものを建久六年(1195)辯ヶ谷に遷したものという。享徳年間まで辯ヶ谷にあり、後に野比に移ったと考えられている。崇寿寺は元享元年(1321)北条高時の創建、開山は南山土雲。應永三十一年(1424)まで存在していたが位置は不明である。新善光寺は調査地点のある谷戸が新善光寺跡と伝えられ、現在葉山町上山口にある新善光寺はこれが遷ったものと考えられる。初めて新善光寺の名前が見えるのは、仁治三年(1242)六月十五日亥刻、執權北条泰時が六十歳で亡くなった時で、新善光寺智尊上人が念佛を勤めたとある。葉山に遷った時期は「風土記稿」によると天正十八年(1590)頃と考えられている。

今回の調査地点は新善光寺跡と伝えられる一角で、周辺では急傾斜地崩壊対策工事に伴う発掘調査が数カ所で行われている。

(福田 誠)

崇寿寺 山号金剛、釋宗。元享元年(1321)北条高時開創、開山は南山土雲。

最宝寺 現横須賀野比『風土記稿』に山号五明山高御藏 清土真宗 京西六条本願寺末といい、寺伝では「建久六年弁ヶ谷鎌倉材木庄村属に寺を移し、薬師を本尊となす、此頃は天台宗なり」

新善光寺 宗旨未詳 現葉山町上山口 「北条九代記」北条泰時が死んだとき、新善光寺智尊上人が念佛を勤めている。

参考文献

『鎌倉廢寺事典』 貫達人・河副武胤編 有隣堂 1980年

『鎌倉市史』『社寺編』 鎌倉市教育委員会 吉川弘文館 1959年

第2章 調査の経過と層序

本遺跡の発掘調査は、住宅の建設に先立って平成14年1月8日から表土掘削及び機材の搬入を開始し、同年2月2日まで行われた。調査面積は45.00m²である。確認調査の結果を基に、重機で表土を約40~50cm掘り下げ第1面を検出した。グリッドは、建築予定範囲の東西軸方向にあわせて設定した。グリッドは市内4級基準点の内C001(X=-77,270.231 Y=-24,925.990)と、C002(X=-77,271.606 Y=-24,954.148)を基準に、調査基準原点1(X=-76,166.946 Y=-24,846.141)、原点2(X=-76,162.128 Y=-24,853.348)を設定したものである。

使用した仮水準点は、市内3級基準点No.53412(海拔5.699m)から移動したもので海拔は24.078mである。南北グリッドラインより西に32°36'50"が真北である。

調査は調査範囲を2分割した片側(1区)から表土を重機で掘削し、排土は敷地内(2区)に山積みにした。2区の調査時には1区を埋め立て更に余った分を上に山積みにしたものである。調査地は南に向かって開口する弁ヶ谷の新善光寺推定地内に位置する。2月2日に埋め戻しおよび器材の搬出も含め、全ての調査を終了した。検出した遺構・遺物の詳細は次章に譲る。

東西に細長い調査区の中央から西側では地表面から約80cmで岩盤面となる。東側では地表面が緩やかに谷中央に向かい落ち込んでゆく。このため西側では2面、東側では3面の調査となった。西側の2面(岩盤面)は東側の2~3面になる。

第3章 検出した遺構と遺物

第1面

海拔は西端23.60～東端23.30m。地表から-20～50cm。西から東、谷戸中央に向かい緩やかに落ち込んでいる。調査区東端から西に約3m地点、土丹と鎌倉石切石を南北方向に据えた列とこれの抜き跡と見られる幅30cm、長さ3m程の溝を検出した。調査区のはば中央から西側では2面と同一面を使用している。

第2面

海拔は23.20m。地表から-64cm。調査区東端から約3m、1面で確認した土丹と鎌倉石列、抜き取り溝の範囲で東側に玉砂利面が広がることが確認された。土壙1穴と柱穴8を検出している。

第3面

海拔は23.15～22.90m。地表から-94cm。西側は岩盤面となっている。土壙4と柱穴17、溝状の落込みを2本検出している。3つの土壙はいずれも直径約1m、深さ50～70cmの素掘りの遺構である。調査区東端近くで瓦溜りを検出した。男瓦・女瓦が比較的まとまって出土したものである。

第4章 まとめ

明確な建物跡は検出されなかったが、土丹と鎌倉石の石列を境に広がる玉砂利面や瓦溜りの検出から、この場所が新善光寺境内で近くに瓦葺きの建物があったと推測される。瓦は鎌倉Ⅱ期からⅢ期にあたるもので、創建年代がわからない新善光寺が初めて記録に現れる仁治三年（1242）を考えると範疇に収まっている。

谷戸を取り囲む山際にはやぐらが多く穿たれており、急傾斜地の防災工事で調査が行われている。中でも昭和62年度に行われた発掘調査でやぐらとは異なり、山裾をコの字状に掘り窪め宝篋印塔を主体とした石塔群や写經石・白磁四耳壺を伴う火葬墓が発見されている。この火葬墓は幅3.7m、奥行1.7mの範囲で写經石が敷き詰められ、その直下から2間×1間の玉垣状の遺構と元代の白磁四耳壺が出土している。年代は併せて出土しているかわらけから14世紀中頃と考えられた。この火葬墓の構造は格式ある火葬式に則ったものであることが推測されることから、この谷戸内にそれ相応の寺院の存在をうかがい知ることが出来よう。瓦葺きの建物の存在が推測されたことは一定の成果である。

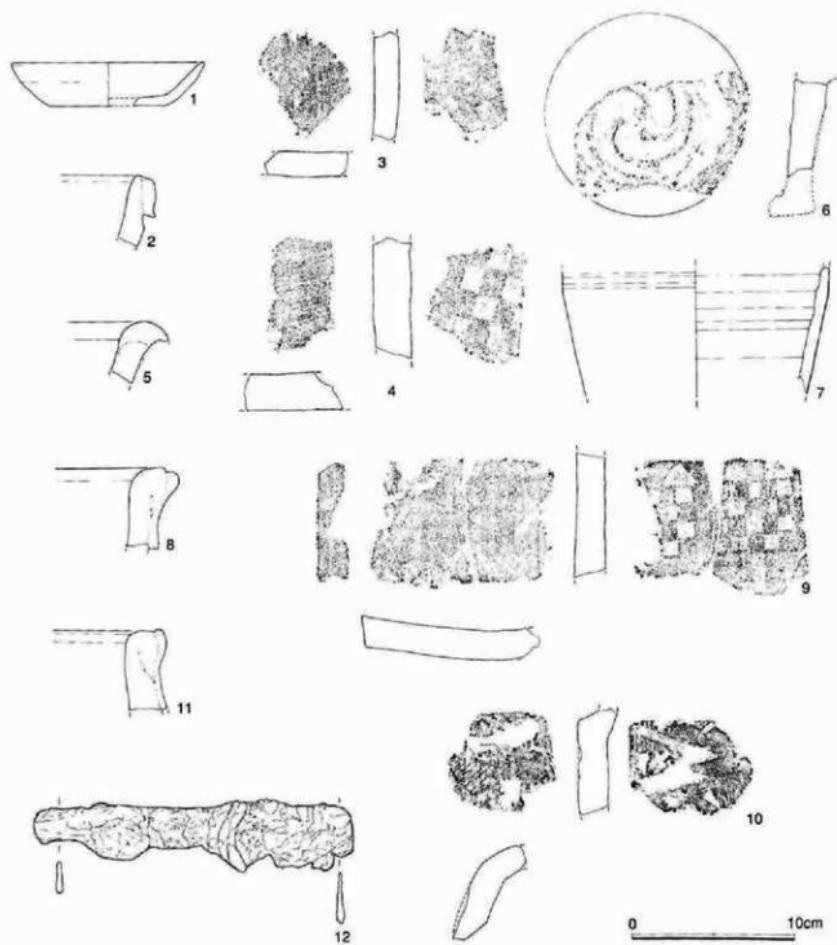


図4 第1面・第2面出土遺物

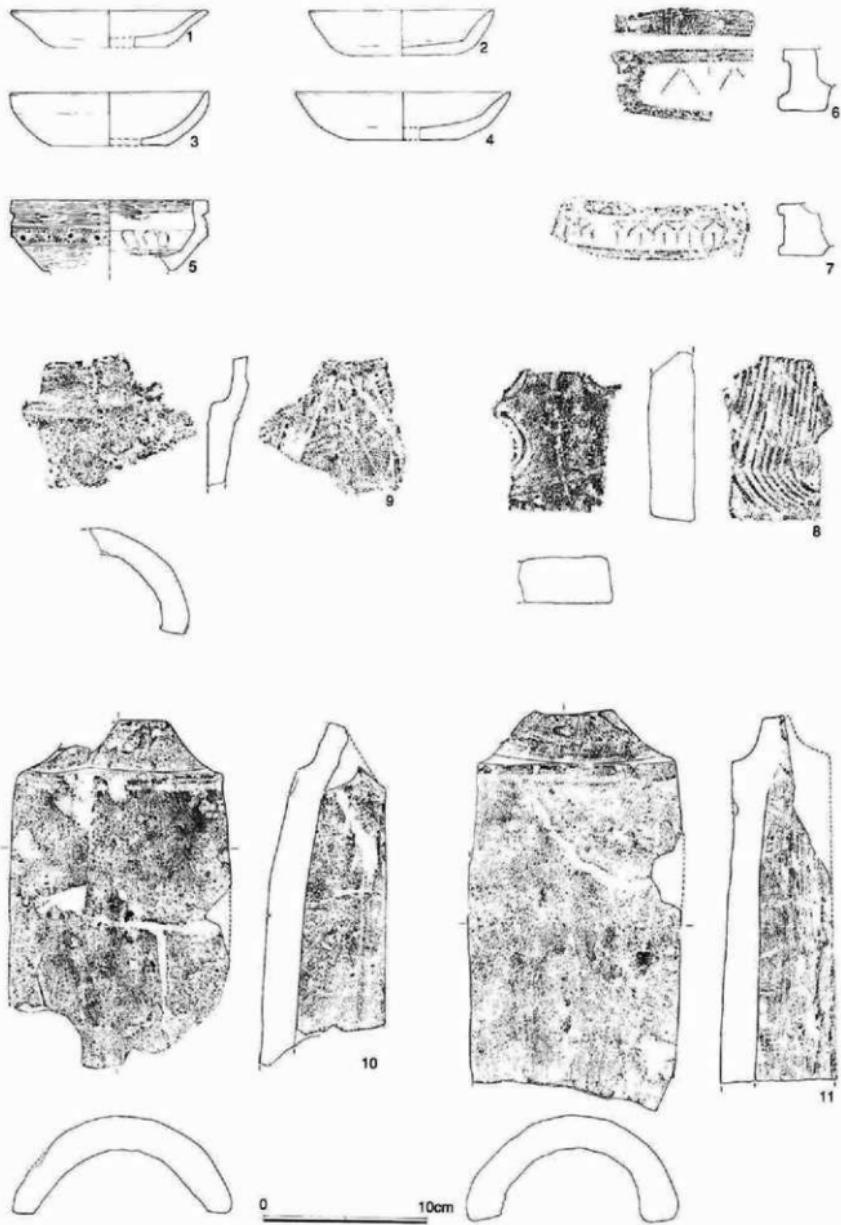


図5 第2面～第3面出土遺物

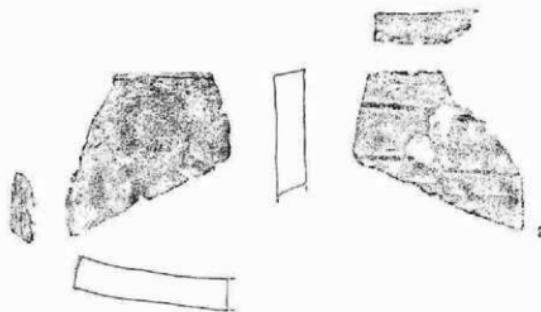
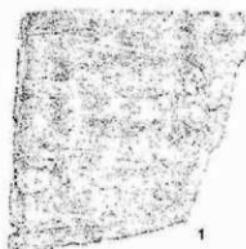
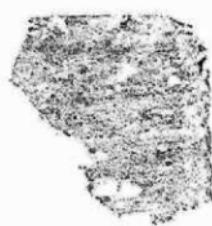
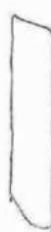


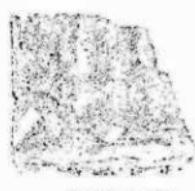
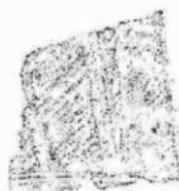
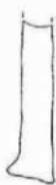
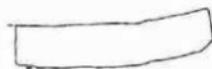
図6 第2面～第3面出土遺物



1



2



3

0 10cm

图7 第2～第3面出土遗物

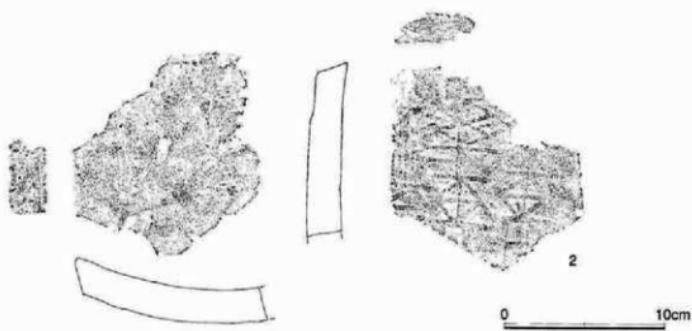


図8 第2面～第3面出土遺物

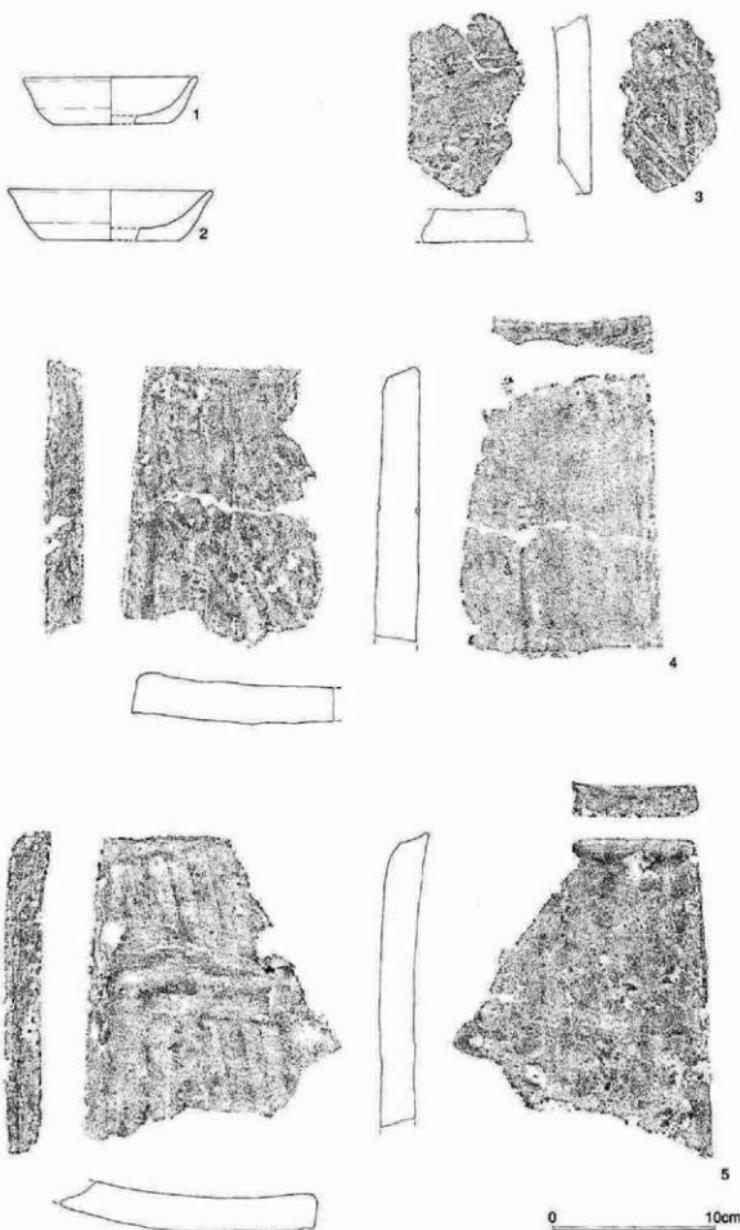


図9 第3面瓦瀬り出土遺物

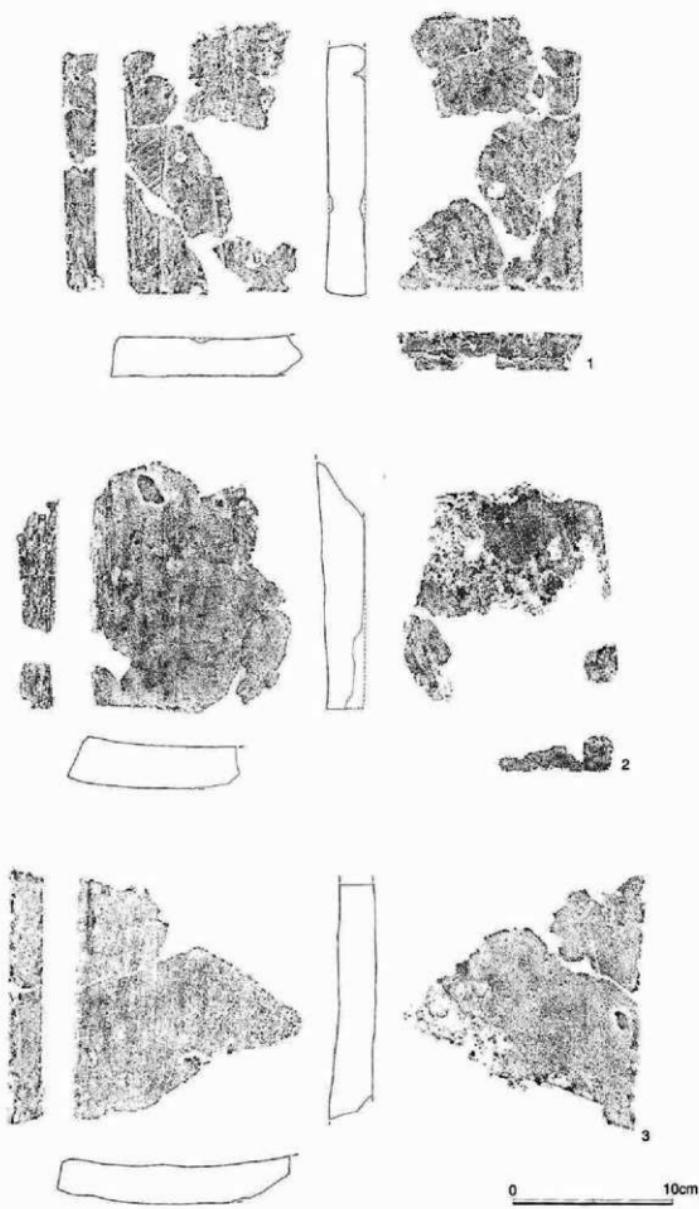


図10 第3面瓦溜り出土遺物

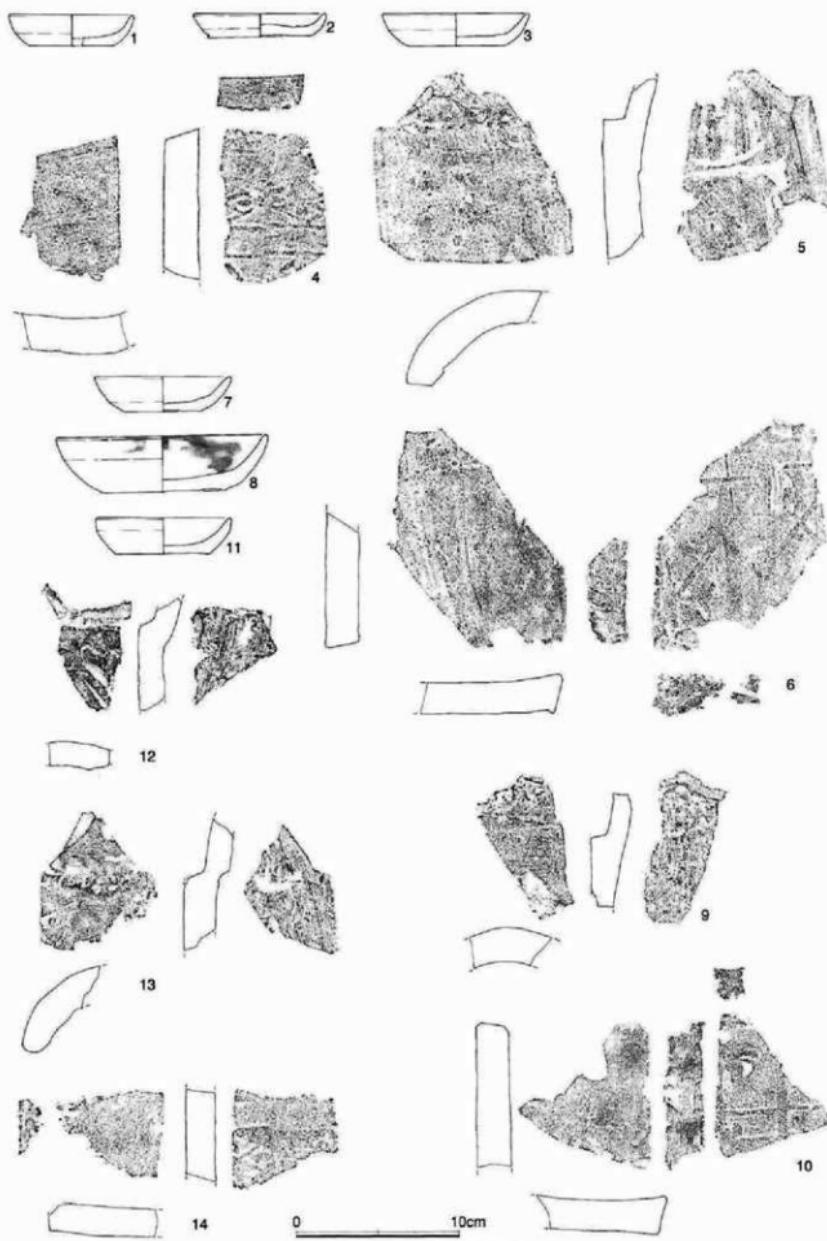


図11 第3面・トレンチ出土遺物

遺物観察表

図4

単位はcm ()は推定値

| No. | 器種・種別 | 口径 | 底径 | 器高 | 成形・特徴 | 出土地点・層位 |
|-----|-------|-------------------|-------|-----|--|--------------|
| 1 | かわらけ | (11.8) | (7.0) | 2.7 | 輪轆成形、色は橙色、胎土は精良、雲母・白針含む | I区1面 |
| 2 | 常滑甕 | — | — | — | 胎土は精良、色は灰色で焼き縮まる、縁帶部 | I区1面 |
| 3 | 女瓦 | 厚1.6、残幅5.2、残長5.8 | | | 胎土は精良1mm大の砂粒含み色は灰白色、叩き目は市松 | I区1面 |
| 4 | 女瓦 | 厚2.9、残幅5.5、残長7.5 | | | 胎土は3mm大の石粒を含み割れ口はザックリし、色は淡橙色 叩き目は市松 | I区1面～2面 |
| 5 | 常滑甕 | — | — | — | 胎土は精良、色は暗灰色で焼き縮まる、縁帶部 | I区1面～2面 |
| 6 | 鎧瓦 | 瓦当径(13.0)内区径18.2 | | | 胎土は1mm大の砂粒を多く含み、我口はザックリし、色は灰白色 瓦当文様は團線を伴う左回りの巴文 珠文は21個 | I区1面～2面 |
| 7 | 瀬戸 | — | — | — | 胎土は精良で灰白色 四耳壺胴部 軸は暗緑色 | II区2面 |
| 8 | 常滑甕 | — | — | — | 胎土は精良で長石を多く含む 縁帶部 | II区2面 |
| 9 | 女瓦 | 厚1.9、残幅10.8、残長8.0 | | | 胎土は精良、白粒を含み色は赤灰色 叩き目は市松 | II区2面 |
| 10 | 男瓦 | 厚1.8、残幅6.5 | | | 胎土は精良で1mm大の砂粒、白粒を含み色は灰白色 側面の面取り幅が広い | II区2面 |
| 11 | 常滑甕 | — | — | — | 胎土は精良で長石を多く含み暗灰色 縁帶部 | II区2面 土壤3 |
| 12 | 鉄製刀子 | 残長19.6、幅3.1、残厚0.4 | | | | |

図5

| No. | 器種・種別 | 口径 | 底径 | 器高 | 成形・特徴 | 出土地点・層位 |
|-----|-------|--------|-------|-----|---------------------------------|---------|
| 1 | かわらけ | (11.8) | (7.0) | 2.8 | 輪轆成形、色は橙色、胎土は精良、雲母・白針含む | I区2～3面 |
| 2 | かわらけ | (11.2) | (6.4) | 3.4 | 輪轆成形、色は橙色、胎土は精良、雲母・白針含む | I区2～3面 |
| 3 | かわらけ | (12.2) | (7.0) | 3.3 | 輪轆成形、色は橙色、胎土は精良、雲母・白針含む | I区2～3面 |
| 4 | かわらけ | (13.0) | (6.6) | 2.9 | 輪轆成形、色は橙色、胎土は精良、雲母・白針含む | I区2～3面 |
| 5 | 瓦質香炉 | (12.0) | — | — | 外面及び内面内側まで器表面は炭素吸着・磨き 胎土は精良、灰白色 | I区2～3面 |

| No. | 器種・種別 | 口径 | 底径 | 器高 | 成形・特徴 | 出土地点・層位 |
|-----|-------|-------------------------------|----|----|--|---------|
| 6 | 宇瓦 | 内区幅2.5、上外区幅0.9、下外区幅0.8、顎面幅3.1 | | | 陽刻上向劍頭文、胎土は3mm大の小石粒、白粒多く割れ口はザックリ 色は黄橙色 | I区2~3面 |
| 7 | 宇瓦 | 内区幅1.9、上外区幅0.6、下外区幅0.5、顎面幅2.7 | | | 陽刻上向劍頭文、胎土は1mm大の小石粒を多く含む 色は灰白色 表面は黒灰色 | I区2~3面 |
| 8 | 鬼瓦 | 厚2.8、残幅8.0、残長10.1 | | | 胎土は精良で1mm大の砂粒を多く含む 色は灰白色 表面は黒灰色 裏面は笠ナデ | I区2~3面 |
| 9 | 男瓦 | 厚2、残幅8、玉縁長2.6 | | | 胎土は2~5mm大の石粒を多く含む 色は浅黄橙色 表面は黒灰色 | I区2~3面 |
| 10 | 男瓦 | 径(13.4)、厚2.1、残長20.4、玉縁長2.9 | | | 胎土は5mm大の石粒を多く含む 色は浅黄橙色 表面は黒灰色 | I区2~3面 |
| 11 | 男瓦 | 径(12.5)、厚2、残長24.2、玉縁長2.7 | | | 胎土は5mm大の石粒を多く含む 色は灰白色 表面は黒灰色 | I区2~3面 |

図6

| No. | 器種・種別 | 口径 | 底径 | 器高 | 成形・特徴 | 出土地点・層位 |
|-----|-------|-------------------|----|----|---|---------|
| 1 | 女瓦 | 厚2.3、残幅11.8、長28.3 | | | 胎土は5mm大の石粒多く含み割れ口はザックリ 色は明黄灰色 側面は丸く仕上げる | I区2~3面 |
| 2 | 女瓦 | 厚1.8、残幅10.5、残長9.0 | | | 胎土は1mm大の砂粒を多く含み焼き縮まる 色は淡赤橙色 | I区2~3面 |
| 3 | 女瓦 | 厚1.9、残幅5.7、残長5.3 | | | 胎土は1mm大の砂粒を多く含み焼き縮まる 色は灰白色 表面は灰色 | I区2~3面 |

図7

| No. | 器種・種別 | 口径 | 底径 | 器高 | 成形・特徴 | 出土地点・層位 |
|-----|-------|--------------------|----|----|---|---------|
| 1 | 女瓦 | 厚2.3、残幅15.0、長14.5 | | | 胎土は5mm大の石粒多く含み割れ口はザックリ 色は灰白色 側面端は丸く仕上げる | I区2~3面 |
| 2 | 女瓦 | 厚2.6、残幅11.5、残長12.5 | | | 胎土は5mm大の石粒を多く含みザックリ 色は灰白色 側面端は丸く仕上げる | I区2~3面 |
| 3 | 女瓦 | 厚2.0、残幅11.0、残長10.5 | | | 胎土は3mm大の石粒を多く含みザックリ 色は黄橙色 側面端は丸く仕上げる | I区2~3面 |

図8

| No. | 器種・種別 | 口径 | 底径 | 器高 | 成形・特徴 | 出土地点・層位 |
|-----|-------|--------------------|----|----|--|---------|
| 1 | 女瓦 | 厚2.3、残幅10.5、長12.0 | | | 胎土は5mm大の石粒多く含み割れ口はザックリ 色は灰白色 側面端は丸く仕上げる | I区2~3面 |
| 2 | 女瓦 | 厚2.1、残幅10.0、残長10.9 | | | 胎土は1mm大の砂粒を多く含み焼き縮まる 色は灰色 側面端は丸く仕上げる 叩きは斜め格子に「丁」 | I区2~3面 |

図9

| No. | 器種・種別 | 口径 | 底径 | 器高 | 成形・特徴 | 出土地点・層位 |
|-----|-------|--------------------|-------|-----|---------------------------------------|----------|
| 1 | かわらけ | (10.4) | (7.0) | 2.9 | 輦轆成形、色は橙色、胎土は精良、雲母・白針含む | I区3面瓦溜まり |
| 2 | かわらけ | (12.4) | (8.4) | 3.1 | 輦轆成形、色は橙色、胎土は精良、雲母・白針含む | I区3面瓦溜まり |
| 3 | 女瓦 | 厚2.4、残幅11.2、残長7.5 | | | 胎土は1cm大小の小石を含み、割れ口はザックリ 色は灰白色 表面は淡黄色 | I区3面瓦溜まり |
| 4 | 女瓦 | 厚2.4、残幅12.2、残長17.5 | | | 胎土は3mm大小の小石を多く含み割れ口はザックリ 色は黄橙色 表面灰黄橙色 | I区3面瓦溜まり |
| 5 | 女瓦 | 厚2.1、残幅15.8、残長18.5 | | | 胎土は5mm大小の小石を多く含み割れ口はザックリ 色は浅黄橙色 表面黒褐色 | I区3面瓦溜まり |

図10

| No. | 器種・種別 | 口径 | 底径 | 器高 | 成形・特徴 | 出土地点・層位 |
|-----|-------|--------------------|----|----|--|----------|
| 1 | 女瓦 | 厚2.1、残幅15.5、長11.5 | | | 胎土は3mm大小の石粒多く含み割れ口はザックリ 色は黄橙色 側面端は丸く仕上げる | I区3面瓦溜まり |
| 2 | 女瓦 | 厚2.7、残幅12.6、残長15.5 | | | 胎土は5mm大小の石粒を多く含みザックリ 色は浅黄橙色 側面端は丸く仕上げる | I区3面瓦溜まり |
| 3 | 女瓦 | 厚2.2、残幅14.2、残長15.5 | | | 胎土は3mm大小の石粒を多く含みザックリ 色は明黄褐色 側面端は丸く仕上げる | I区3面瓦溜まり |

図11

| No. | 器種・種別 | 口径 | 底径 | 器高 | 成形・特徴 | 出土地点・層位 |
|-----|-------|-------------------|-------|-------|--|----------|
| 1 | かわらけ | (7.4) | (5.0) | 1.9 | 輦轆成形、色は橙色、胎土は精良、雲母・白針含む | I区3面土壌2 |
| 2 | かわらけ | 8.0 | 6.4 | 1.4 | 輦轆成形、胎土は精良、雲母・白針と5mm大小の小石粒混じる 色は橙色 | I区3面土壌2 |
| 3 | かわらけ | (8.8) | 5.8 | 2.0 | 輦轆成形、胎土は精良雲母・白針を含む 色は橙色 | II区3面土壌5 |
| 4 | 女瓦 | 厚2.2、残幅6.2、残長9.1 | | | 胎土は5mm大小の石粒を含み割れ口はザックリし、色は淡赤橙色 叩き目は不明 | II区3面土壌5 |
| 5 | 男瓦 | 厚2.1、残幅8.5、残長11.1 | | | 胎土は1mm大小の小石粒を含み焼き縮まる、色は淡橙色 側面の面取り幅が広い | II区3面土壌5 |
| 6 | 女瓦 | 厚2.0、残幅8.5、残長14.0 | | | 胎土は1mm大小の砂粒を多く含み、割れ口はザックリし、色は灰白色 側面端は丸く仕上げる 叩き目は斜め格子 | II区3面土壌5 |
| 7 | かわらけ | (8.2) | 4.6 | (2.1) | 輦轆成形 胎土は精良で雲母・白針を含む 色は橙色 | II区3面土壌6 |
| 8 | かわらけ | 12.8 | 7.4 | 3.4 | 輦轆成形 胎土は精良で雲母・白針を含む 色は橙色 | II区3面ピット |

| No. | 器種・種別 | 口径 | 底径 | 器高 | 成形・特徴 | 出土地点・層位 |
|-----|-------|------------------|-----|-----|---------------------------------------|------------------|
| 9 | 男瓦 | 残長8.8、玉縁長2.7 | | | 胎土は5mm大の小石粒を含み割れ口はザックリ、色は灰白色 表面は明黄褐色 | I区2~3面 トレンチ1 |
| 10 | 女瓦 | 厚2.1、残幅8.2、残長8.6 | | | 胎土は精良で1mm大の砂粒、色は灰白色 呼き目は正格子 | I区2~3面 トレンチ1 |
| 11 | かわらけ | 8.2 | 5.6 | 2.2 | 辘轳成形 胎土は精良で雲母・白針を含む 色は橙色 | II区2~3面 トレンチ2 |
| 12 | 男瓦 | 厚1.5、残長6.8 | | | 胎土は精良で1mm大の砂粒を含む 色は灰色 表面は黒灰色 | II区2~3面 トレンチ2 |
| 13 | 男瓦 | 厚2.0、残長8.5 | | | 胎土は1mm大の砂粒を多く含む 色は灰白色 表面は灰色 | II区2~3面 トレンチ2 |
| 14 | 女瓦 | 厚1.8、残幅6.3、残長5.2 | | | 胎土は5mm大の砂粒を多く含む、割れ口はザックリし、色は灰白色表面は黒灰色 | II区2~3面 トレンチ2 |



調査地点付近 S62年度調査地点を望む



調査地点近景（西から）



I区第1面全景（北から）



I区第2面全景（北から）



II区第2面全景（北から）



I区第2面全景（西から）



II区第2面全景（西から）

遺跡遠景と第1面・第2面

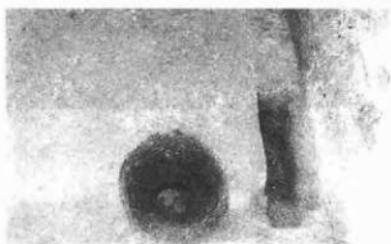
図版2



I区第2面出土 縫倉石と常滑窯破片（東から）



I区第2面全景（南から）



I区第3面 土壌2（北から）



I区最終トレンチ（西から）



I区第3面全景（北から）



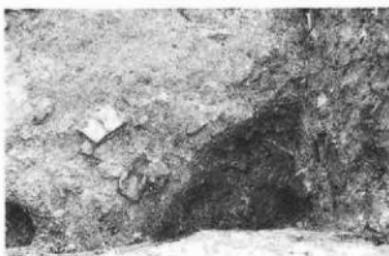
I区第3面全景（西から）



I区第3面全景（西から）



I区 北壁土層断面（南から）



I区第3面 瓦溜まりと土壤1（南から）



II区第3面全景（西から）



I区第3面 瓦溜まり1（南から）



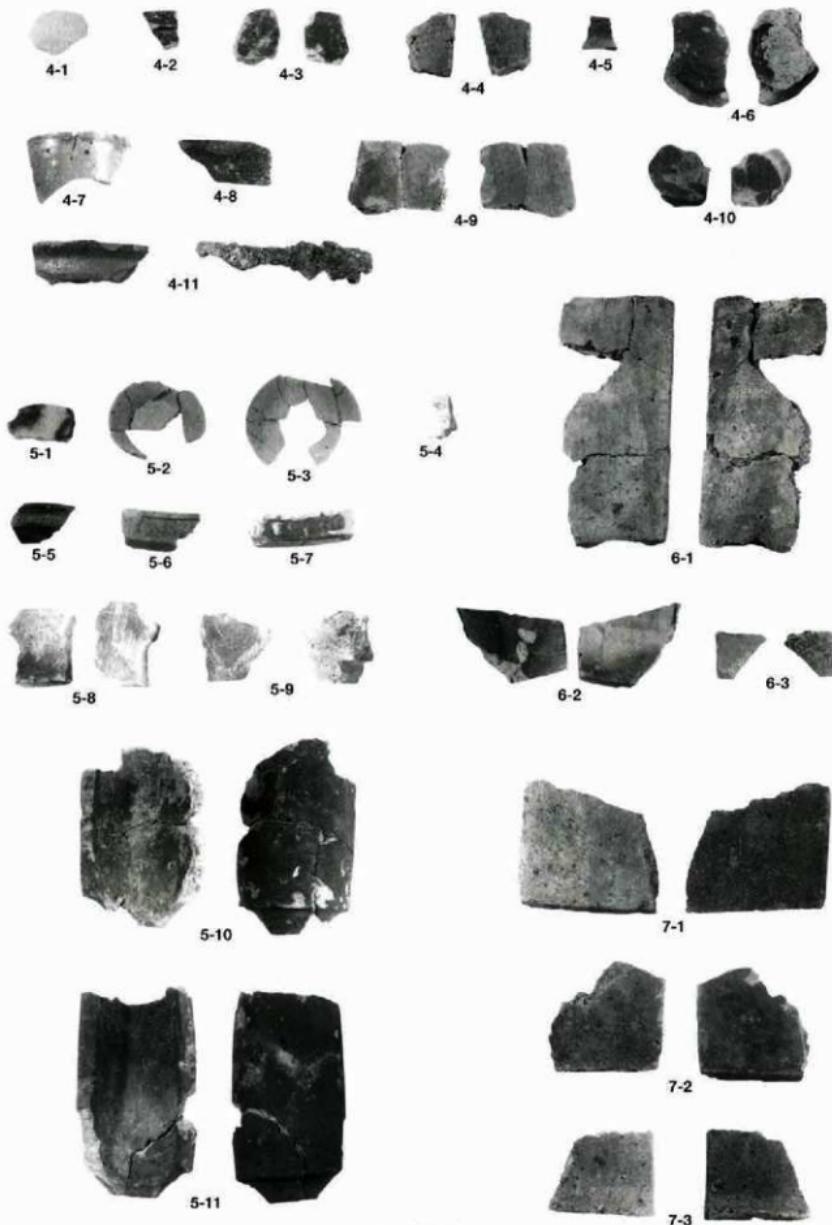
II区第3面全景（西から）



I区第3面 瓦溜まり1（南から）

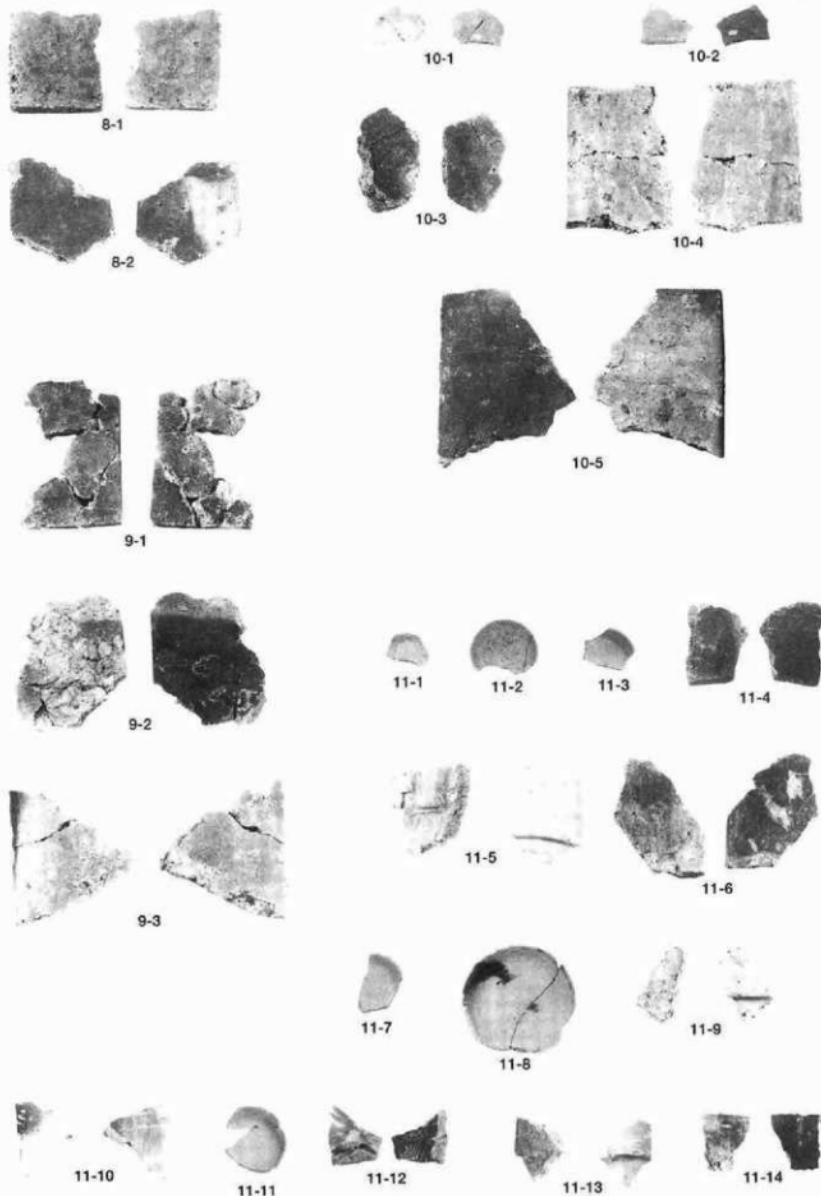
第3面と瓦出土状況

図版4



出土した遺物

図版5



だいやま い せき
台山遺跡 (No.29)

鎌倉市山ノ内字宮下小路819番 1 外地点

例　　言

- 1 本報は、台山遺跡（No.29）に所在する鎌倉市山ノ内字宮下小路819番1外地点における個人専用住宅（擁壁及び車庫）の建設に伴う緊急調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成14年4月1日から同年4月19日にかけて実施された。
- 3 調査体制は以下の通りである。
調査担当者 原 康志
調査員 伊丹まだか・松原康子・須佐仁和・早坂伸市
調査作業員 山崎一男・清水光一・安斎三男
- 4 本報の執筆、編集は調査担当者の指導の下に伊丹が行なった。
- 5 本報掲載の写真は造構を原が、遺物を伊丹が撮影した。測量軸の設定は須佐・早坂が行なった。
- 6 本報の凡例は以下の通りである。
 - ・図版縮尺 全個図：1／80 個別造構図：1／60 遺物：1／3
 - ・造構図版 造構図に示したレベル数値は海拔標高の数値を表す。
 - ・本文中で報告している各遺物の法量の単位はcm。（ ）で示した数値は復元実測の数値。
- 7 出土遺物のうち、古代の遺物は菊川英政氏（鎌倉考古学研究所）にご教授を賜った。
- 8 発掘調査および出土品整理にあたっては、以下の諸氏・機関にご教授・ご協力を賜った。
馬淵和雄・石元道子・鎌倉考古学研究所・（社）鎌倉市シルバー人材センター（順不同・敬称略）
- 9 発掘調査における出土遺物・図面などの調査資料は、一括して鎌倉市教育委員会が保管している。

目 次

| | |
|-----------------------|-----|
| 第1章 遺跡の位置と歴史的環境 | 154 |
| 第2章 調査の概要 | 157 |
| 第3章 検出遺構と出土遺物 | 159 |
| 第4章 まとめ | 165 |

挿図目次

| | |
|---------------------------------|-----|
| 図1 遺跡地周辺図 | 156 |
| 図2 調査区設定図 | 157 |
| 図3 第1・2・3面遺構全測図・調査区壁堆積土層図 | 158 |
| 図4 第1面ピット列個別遺構図・遺構出土遺物 | 160 |
| 図5 第1面構成土出土遺物 | 162 |
| 図6 第2面ピット列個別遺構図・遺構出土遺物 | 162 |
| 図7 第2面構成土出土遺物 | 163 |
| 図8 第3面遺構出土遺物 | 163 |
| 図9 表土出土遺物 | 164 |

図版目次

| | |
|--------------------------|-----|
| 図版1 調査地全景（第1面～第3面） | 166 |
| 図版2 出土遺物 | 167 |

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

本遺跡地は、JR横須賀線北鎌倉駅の北西約500mの鎌倉市山ノ内819番1・2地点に所在する。鎌倉市域は発達した丘陵地形によって、滑川水系の旧鎌倉地域、神戸川水系の津・腰越地域、柏尾川水系の大船・梶原地域に分けられるが、本調査地点は柏尾川流域に属しその支流の小袋川によって形成された小袋谷戸に面した台山の北東斜面に位置する。地質的には新第三紀浦郷層を基盤とし、上部には関東ローム層が堆積している。調査地北側、谷戸中央を小袋谷川に平行して山ノ内道（現在の主要地方道横浜鎌倉線）が走っている。この山ノ内道は武藏から鎌倉市域に入る主要な道であり、谷戸奥には鎌倉七口の内、鶴岡八幡宮上方に通じる巨福呂坂・武藏大路及び今小路に通ずる亀谷坂が配される。調査地の北東には尾根の両側を切り落とし、崖壁状を呈する個所があり防墾であったと推され、調査地南に位置する光照寺辺は弘安5年（1282）に鎌倉に入ろうとした一遍が、北条時宗の命により制止され、野宿をして布教活動を行なったとされる地である。中世前期において、調査地を含む山ノ内は鎌倉の外縁であるとともに北の境界域として重要な性格を持っていた地であったと考えられる。また、建保元年（1213）に北条義時の所領となり、幕府滅亡に至まで北条氏の私領であった事も山ノ内が鎌倉の防衛上の必要な拠点であった事を物語っている。中世後期には山ノ内上杉の居館が所在した。

又、山ノ内には多くの寺院が建立されている。現存する寺としては、建長寺・長寿寺・淨智寺・東慶寺・円覚寺・光照寺があるが、現在は廃寺になってしまった寺には心平寺・保寧寺・安国寺・徳泉寺・正法寺・禪興寺・最明寺・國恩寺・正觀寺・長勝寺・十王堂・東溪院がある。

本遺跡地の南に接する光照寺・東溪院について簡単に述べる。光照寺は、時宗。開山は一向、開基不詳。本尊阿弥陀如来像は正長二年（1429）以前の造立といわれる。もと清浄光寺末。境内に正中二年（1325）銘の板碑がある。現在は本堂・庫裏・日限地蔵堂・山門等がある。かつては明和七年（1770）当寺二十五世洞雲院弥阿子岱代に造られた小鐘があった。東溪院は延宝八年（1680）、豊後国大野郡原城主中川久清が娘のためにたてた位牌堂だったが、明治五年に廃絶。かつての東溪院の本尊・山門は光照寺に移されている。

台山遺跡ではこれまでに11件の発掘調査が実施され、縄文から中世・近世初期に至までの遺構・遺物が発見されている。

地点2は中世以降と考えられる溝2条が検出されている。地点3は中世の遺構とともに古墳時代から平安時代・中世の遺物が出土している。地点4は弥生時代後期の竪穴住居址1軒と時期不明の竪穴住居址1軒が検出されている。地点5は弥生後期の竪穴住居址1軒と時期不明の竪穴住居址5軒が検出された。地点6では弥生後期の遺構が発見されている。地点7は東京大学文化人類学教室が学術調査として調査した。弥生時代後期・古墳時代後期の竪穴住居址を1軒ずつ検出している。地点8は弥生時代後期の竪穴住居址4軒と古墳時代前期の竪穴住居址1軒、中期土坑・後期竪穴住居址2軒、掘立柱建物址1棟、奈良時代竪穴住居址1軒が検出され、遺物は縄文時代から中世に至までの遺物が確認されている。地点9は古墳時代のピット2穴を検出し、弥生時代から中世にいたる遺物を確認している。地点10～12（付近の字名を加えて「台山藤源治遺跡」としている）は、北鎌倉女子学園の校舎建設に伴い、三次にわたる調査が行なわれた。地山はハーフドームであるが、中世期の削平によってそれ以前の時期の遺構はかなり削られていた。地点10は第1次調査である。中世期の造成によって、大きく削平を受けているが、縄文時代の土坑（陥れ穴）、弥生時代の竪穴住居址18軒（中期2軒・後期11軒・時期不明5軒）、古墳時代の竪穴住居址13軒（前期4軒・中期1軒・後期4軒・時期不明4軒）、土坑、ピット、平

安時代の堅穴住居址 5軒、溝 1条、土坑、ピット。中世では道路状遺構と、14~16世紀に比定される遺物が発見されている。第1次調査では中世以前、弥生時代中期後半に出現した集落が奈良時代の空白期を挟み平安時代まで存続する事を確認した。中世以降は遺物の出土量は僅かとなり衰退していく。地点11は第2次調査である。調査面積が狭かった事や、後世に削平を受けていたために遺存状態は良好ではなかった。縄文時代では早期~前期と考えられる陥し穴が2基、弥生時代後期の堅穴住居址1軒、古代の堅穴住居址1軒（8世紀後葉~9世紀）が検出された。中世では、遺構の検出は出来なかつたが、14~16世紀に比定される遺物が出土している。遺物は縄文時代から江戸時代後半にいたるまでの遺物を確認している。地点12は第3次調査である。第1次調査の北東に接する。上下2段の平坦面からなり、下段の段築は中世期の造成である。弥生時代後期後半~古墳時代前期の堅穴住居址1軒、古墳時代中期後半の堅穴住居址2軒、後期の堅穴住居址2軒、平安時代前期の堅穴住居址1軒、時期不明の堅穴住居址1軒が検出された。中世では、切岸を伴う段築・欄列・ピットを検出し、14~15世紀代に比定される遺物が出土している。

発掘調査の成果から、小袋谷戸の東側丘陵上、及び丘陵斜面に縄文時代から、古代にかけての集落の形成されていった状況が明らかになっているが、中世以降の谷戸内の様相は捉えられていない。建長寺・円覚寺・東慶寺といった寺社内の発掘調査以外では、山ノ内道沿いの調査例は少なく、報告もなされていないため、具体的な状況は明らかになっていない。

参考文献

- 『鎌倉市史』考古編 赤星直忠1953年 吉川弘文館
『鎌倉市史』社寺編 貢達人1953年 吉川弘文館
『鎌倉事典』白井永二編1976年 東京堂出版
『鎌倉廢寺事典』貢達人・川副武胤1980年 有隣堂
『日本歴史地名大系』第14巻「神奈川県の地名」鈴木栄三・鈴木良一監修 1984年 平凡社
『鎌倉市文化財総合目録』 地質・動物・植物編1986年
「台山遺跡」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1」斎木秀雄他昭和60年 鎌倉市教育委員会
「台山遺跡」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4」玉林美男他昭和63年 鎌倉市教育委員会
「台山遺跡」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8」大上周三平成4年 鎌倉市教育委員会
「台山遺跡」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13第1分冊」野本賢二平成9年 鎌倉市教育委員会
「台山遺跡」若松美智子他平成10年 台山遺跡発掘調査団
「台山遺跡」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15第2分冊」若松美智子他平成11年 鎌倉市教育委員会
「台山遺跡」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17第2分冊」維実平成13年 鎌倉市教育委員会
「山ノ内清明井戸」「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報」I 1983年鎌倉市教育委員会
『としよりのはなし』1971年 鎌倉市教育委員会



図1 遺跡地周辺図

第2章 調査の概要

1 調査の経過

本調査は個人専用住宅建設にあたり、擁壁及び車庫が建設される部分について発掘調査を実施した。調査地は西に丘陵を背負って現在の住居が建設されている。住居の東側には一段下がって細い小道が走っている。住居と道路の標高差は約250cmであった。事前の確認調査の成果から、地表下約240cmに至るまでは現代の埋土、および耕作土であることを確認していたため施工業者によって、重機による表土掘削を行なった。その後、手掘りで調査を進めた。調査地内で堆土を処理する都合から調査地の約2/3を調査区とし、残り1/3を堆土置場とした。調査地は湧水量が多いため、土砂の流失を危惧して四方を大走り状に残し、長軸約750cm、短軸約260cmに調査区を設定した。調査区内には、側溝・水抜き塹を設け、調査区内の冠水を防いだ。現代理土を除去した調査開始前の地表レベルは19.0mであり、調査地前の東側を走る道路とはほぼ同レベルである。調査期間は平成14年4月1日から同年4月19日。調査対象面積は12.00m²である。

2 測量軸の設定(図2)

検出造構の記録は、鎌倉市道路管理課が設置した3級基準点・4級基準点を基点にして設定した。4級基準点<K143>と<K144>を結ぶ延長線上に任意の点P1を設定し、調査区の東西方向に、ほぼ平行になるように任意の点P2を設定した。P1からP2方向に1mの点aを起点にP1・P2を結ぶラインに直行するように軸線を延ばし、軸線の延長上に点P3・P4を設定し測量の基本軸とした。測量点と鎌倉市4級基準点との関係は図2に示した通りである。またそれぞれの国土座標値についても図2を参照して頂きたい。挿図上の方位はすべて真北を示している。

レベル原点は鎌倉市3級基準点43303(標高35.325m)を調査区内に移動した。従って、文章中および挿図のレベル数値はすべて海拔高で示している。

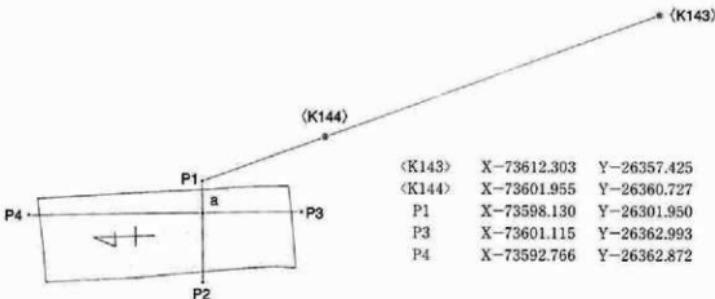
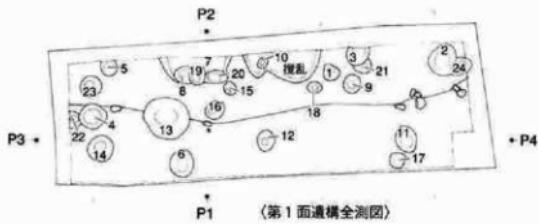
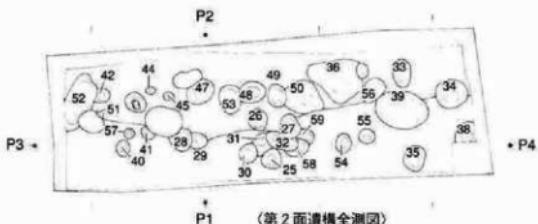


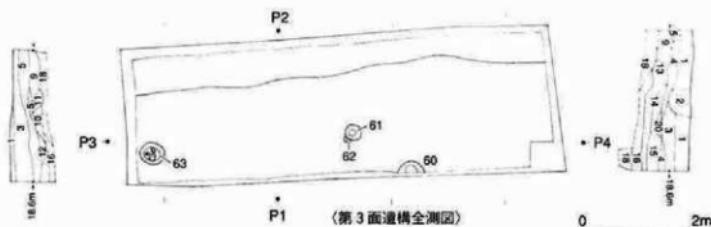
図2 調査区設定図



（第1面造構全測図）



（第2面造構全測図）



（第3面造構全測図）

1. 暗褐色土 粘性あり。炭化物・軽石含む。中世遺物包含層。
2. 暗褐色土 炭化物・土丹含む。造構含土。
3. 暗褐色土 土丹地業面。
4. 暗褐色弱粘質土 炭化物・小土丹・軽石を含む。硬くしまる。
5. 暗褐色弱粘質土 褐鉄を含む。硬くしまった含土。
6. 暗褐色弱粘質土 しまりない。造構含土。
7. 暗褐色弱粘質土 しまりない。造構含土。
8. 暗褐色弱粘質土 しまりない。造構含土。
9. 明褐色弱粘質土 硬くしまる。
10. 明褐色弱粘質土 砂質土混入。しまり弱い。
11. 暗褐色弱粘質土 土丹粒・砂質土を含む。
12. 明褐色粘土 しまりない。造構含土。
13. 明褐色弱粘質土 褐鉄・炭化物・土丹粒を含む。
14. 暗褐色弱粘質土 炭化物少量含む。しまりない。
15. 暗褐色弱粘質土 砂質土・玉砂・炭化物・褐鉄を含む。
16. 暗褐色弱粘質土 有機質土混入。
17. 暗褐色弱粘質土 砂質土・土丹粒を含む。ややしまりあり。
18. 黄褐色土 褐鉄が全体に含まれ、硬くしまる。
19. 暗褐色弱粘質土 砂質土を含む。造構含土。
20. 暗褐色弱粘質土 砂質土・炭化物を含む。

図3 第1・2・3面造構全測図・調査区壁堆積土層図

第3章 検出遺構と出土遺物

調査区は、現在建物の建っている敷地東側に一段下がった調査地前の道路とほぼ同レベルである。本調査と並行して行なわれた敷地内の庭園造営作業中に、現地表レベルから約0.5m下で、岩盤が検出されている。狹小な面積での調査ではあったが、3面にわたる遺構面を検出した。

本調査で発見した遺構の遺構番号は、遺構発見時のプランに対して付してあり、必ずしも番号の新旧が遺構の新旧を表すものではない。以下、発見した順に遺構・遺物の説明を加える。

1 第1面の遺構と出土遺物（図3・4）

第1面は、重機によって現代理土・耕作土を除去した後、海拔約18.80mで検出した。発見した遺構は土坑2基・ピット22穴である。第1面で検出した遺構は含土を観察すると2時期に分けられる。第1面上層の遺構と考えられる遺構は含土内に炭化物を多く含む。また、第1面の遺構含土には褐鉄が多く含まれる。しかし、同一面上で検出し、出土遺物が少ないために時期差が不明なため、2時期に分けて遺構を提示していない。

第1面の構成土は炭化物を含む褐色弱粘質土。図3に示した全測図で、点線で示したラインから西側は、調査区上面が褐鉄を含んで硬化していた。点線の東側は、緩やかな傾斜を示していた。このラインに沿って、不整形な砂質凝灰岩を数個検出しており土留めであった可能性も考えられる。また、ピット列をこのラインに沿って検出している。実測遺物が出土した遺構と、ピット列のみ個別に報告した。

出土遺物は実測できた遺物の他に、破片で青磁草瓶1点・青磁蓮弁文碗3点・白磁水滴1点・白磁皿3点・褐釉壺1点・瀬戸四耳壺1点・瀬戸碗1点・瀬戸折縁皿2点・瀬戸縁釉小皿1点・瀬戸褐釉碗1点・瀬戸白磁碗1点・瀬戸擂鉢1点・瀬戸御皿2点・常滑壺20点・ロクロ成型かわらけ（大）8点・ロクロ成型かわらけ（小）131点・手焼り1点・用途不明鉄製品1点・砥石1点・チャート1点・土師器壺17点・土師器高杯1点・須恵器器形不明3点が出土している。

遺構10（図3）

ピットである。平面で幅17cm×18cm、深さ7cmを測る。含土は褐色弱粘質土。砂質土、褐鉄を含む。第1面上層の遺構である。

出土遺物（図4）

1は弥生壺・胴部片。器壁が厚く、やや大振りな器形になると思われる。色調は淡橙色を呈し、砂粒を含む精緻な胎土。外面横方向の櫛描き。豎位の線刻が残る。内面ハケメ。

遺構23（図3）

ピットである。平面で幅37cm×36cm、深さ33cmを測る。含土は暗褐色弱粘質土。褐鉄、微量の炭化物を含む。第1面上層の遺構である。

出土遺物（図4）

2は青磁無文碗。内面、口縁部口づくり以下は施釉されていない。外面口縁部下1.5cmで、段が整形される。胎土は灰色を呈し堅緻。

ピット列<遺構2・遺構16・遺構18>（図4）

ピット間の芯芯距離は245cm・292cmを割り規則性は感じられないが、調査区西側、硬化した面上に点線で示したラインに沿って検出したピットであるため、列として提示した。それぞれのピットは同様の含土を示す。暗褐色弱粘質土。褐鉄・砂質土・微量の炭化物を含む。第1面上層の遺構である。出土遺物はない。

ピット列<遺構11・遺構12・遺構14>（図4）

ピット間の芯芯距離は230cm・185cmを測る。上記のピット列同様に規則性は感じられないが、調査区東側、点線で示したラインに沿った緩やかな傾斜面で検出したピット列であるため、列として提示した。それぞれの遺構は同様の含土を示す。茶褐色弱粘質土。砂質土・微量の炭化物を含む。第1面の遺構である。出土遺物はない。

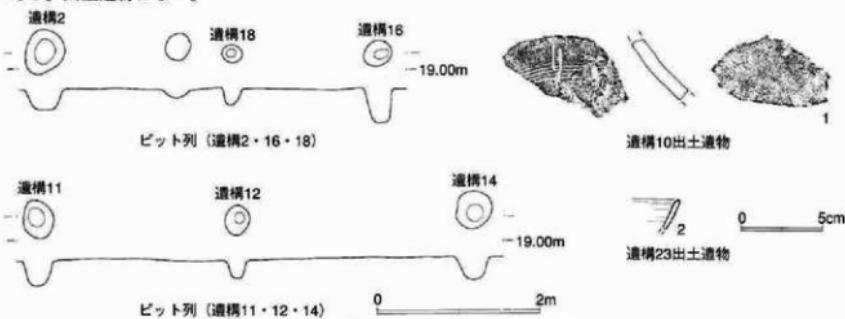


図4 第1面ピット列個別遺構図・遺構出土遺物

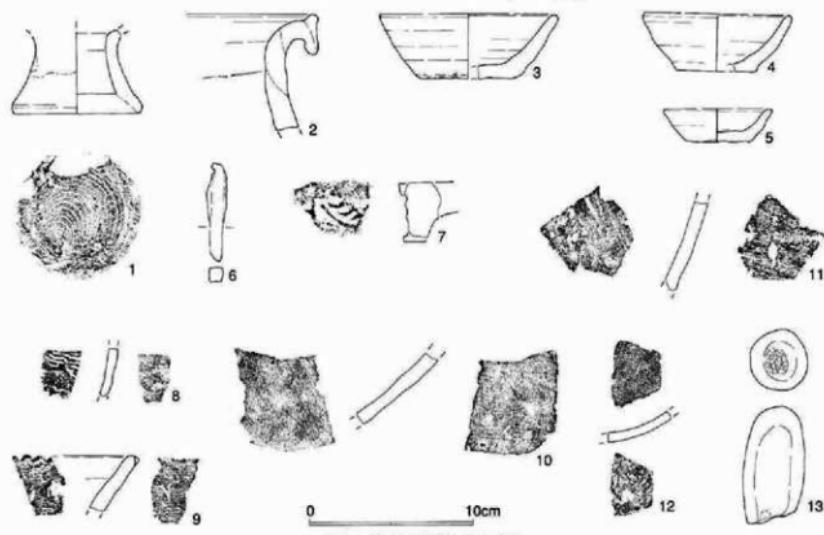


図5 第1面構成土出土遺物

第1面構成土出土遺物（図5）

第1面構成土は褐色粘質土。炭化物・小土丹・軽石・褐鉄が含まれ、硬く締まる。以下は第1面遺構検出後、第2面に至までに出土した遺物である。

1は瀬戸華瓶。中期Ⅲ。底部回転糸切り。底径7.8cm。2は常滑窯口縁部片。胎土、小石粒が混じり粘性低い。3～5はロクロ成型かわらけ。3は底部回転糸切り、スノコ痕あり。内底ナデあり。胎土橙色を呈し、小石粒が混じる。口径(10.9)cm・底径(6.6)cm・器高(3.9)cm。4は底部回転糸切り、スノコ痕あり。内底ナデあり。胎土橙色を呈し貝状骨針、雲母を含む。口径(9.0)cm・底径(4.8)cm・器高(3.5)cm。5は底部回転糸切り、スノコ痕あり。内底ナデあり。胎土橙色を呈し、貝状骨針、雲母を含む。口径6.4cm・底径4.0cm・器高2.0cm。6は鉄製品釘。長さ(5.4)cm・幅(0.8)cm・厚さ(0.8)cm。7は宇瓦。白色粒の混入しない精緻な胎土。瓦頭、内区の文様は宝相華文か？8は弥生壺。傾き不明。9は弥生甕。内外面ナデ。口唇部に刻みが入る。10は土師器甕。内外面ハケメ。胎土淡褐色を呈し、雲母含む。古墳前期。11は土師器甕。外面・内面ともにヘラ削り。古墳後期。12は土師器杯、底部。外面ヘラ削り。赤彩の可能性あり。13は敲石。片端面敲き痕。7.2cm×3.7cm×3.7cm。

2 第2面の遺構と出土遺物（図3・6）

第2面は海拔約18.8mで検出した。発見した遺構は土坑2基・ピット30穴である。遺構は狭い範囲ながら、密に切りあって検出された。第2面上面は、第1面上面よりも硬化した面であった。また、第1面同様に点線で示したラインから東側に緩やかな傾斜が始まる。第1面同様に分けて報告はしていないが、第2面で検出した遺構も凡そ2時期に分けられる。砂質土を多く含み、褐鉄を含む含土を持つ遺構がやや新しく、粘性の強い炭化物を含む含土を持つ遺構がやや古くなるようである。第2面の構成土は明褐色弱粘質土。粘性は弱く、砂質土・土丹粒・微量の褐鉄・炭化物を含む。

出土遺物は実測した遺物の他に、破片で青磁皿1点・白磁口元皿1点・白磁碗3点・瀬戸褐釉1点・瀬戸皿1点・瀬戸鉢3点・瀬戸擂鉢1点・常滑甕17点・常滑Ⅱ類鉢1点・手焙り2点・ロクロ成型かわらけ（大）23点・ロクロ成型かわらけ（小）64点・器厚の厚い、内外面に炭素吸着の黒彩の甕1点・長胴系の甕1点を含む土師器甕5点・外面赤彩の土師器杯1点・土師器高杯2点・土師器器形不明1点・弥生甕1点・馬遺体の歯1点。

遺構34（図3）

ピットである。平面で51cm×56cm、深さ30cmを測る。暗褐色弱粘質土。炭化物を含み、粘性の強い含土。

出土遺物（図6）

1はロクロ成型のかわらけ。底部回転糸切り・スノコ痕あり。内底横ナデの後、見込みにナデ赤褐色を呈し、貝状骨針・雲母・小石粒を含む。口径(7.2)cm・底径4.0cm・器高2.2cm。

2・3は銭。2は祥符通寶（北宋 初鑄1009年）。3は咸平元寶（北宋 初鑄998年）。

遺構36（図3）

不整形の土坑である。平面で長軸102cm、短軸87cm、深さ42cmを測る。暗褐色弱粘質土。多量の炭化物・褐鉄・砂質土を含む。

出土遺物（図6）

4はロクロ成形かわらけ。底部回転糸切り・スノコ痕あり。内底ナデ有り。胎土橙色を呈し貝状骨針を含む。口径(7.4)cm・底径(3.6)cm・器高(2.5)cm。

遺構38（図3）

楕円形を呈するピットである。50cm×31cm、深さ19cmを測る。暗褐色弱粘質土。砂質土・微量の炭化物を含む。

出土遺物（図6）

5は土器師甕口縁部片。外面縦位のハケナデが残る。内面横位のハケナデ。

遺構50（図3）

円形を呈する土坑である。平面で57cm×68cm、深さ26cmを測る。暗褐色弱粘質土。炭化物・砂質土を含む。

出土遺物（図6）

6はロクロ成形かわらけ。底部回転糸切り・スノコ痕あり。内底ナデ不明。口唇部、内外面に油煤痕あり。胎土褐色を呈する。口径(9.8)cm・底径(7.0)cm・器高(2.5)cm。

ピット列<遺構43・遺構48・遺構56>（図6）

調査区東側点線で示したラインに沿って検出した。遺構43には砂質凝灰岩の礫石が遺存していた。それぞれの遺構含土は暗褐色弱粘質土。砂質土・炭化物・褐鉄を含む。遺物は出土していない。

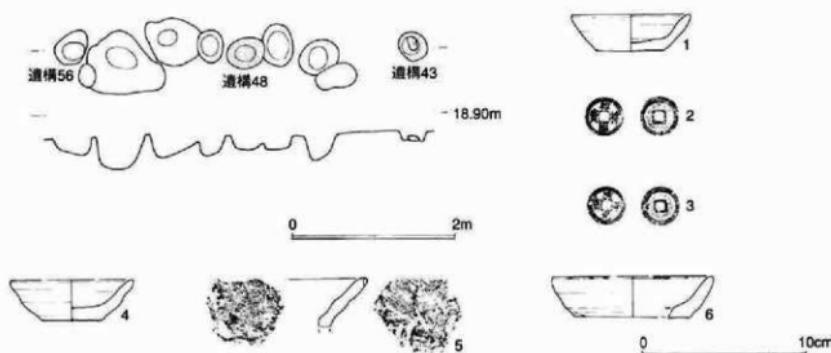


図6 第2面ピット列個別遺構図・出土遺物

第2面構成土出土遺物（図7）

1は青磁蓮弁文碗。外側面・内側面に線刻で蓮弁文。内面蓮華文の型押し。見込みに浅い沈線が巡る。底径(6.2)cm。胎土灰白色を呈する。2・3はロクロ成形かわらけ。2は底部回転糸切り。内底ナデあり。口唇部、内外面ともに油煤痕残る。胎土、黄褐色を呈し小石粒を含む。口径7.6cm・底径3.2cm・器高2.1cm。3は底部回転糸切り。内底ナデあり。胎土黄褐色を呈し雲母・小石粒を含む。口径(11.2)cm・底径(7.2)cm・器高(3.1)cm。4・5は石製品・鳴滌産系砥石。4は残存長(7.2)cm・幅2.4cm

・厚さ1.4cm。5は小口に切り出し痕残る。残存長(6.2)cm・幅(2.7)cm・厚さ(1.0)cm。6は土師器壺。傾き不明。7は土師器杯、底部。外面ヘラ削り。内面ナデ。古墳後期。8は弥生甕。弥生後期。9は弥生甕。外面豎位のハケメ。内面横位のハケメ。口唇部ヘラ状工具による刻みが入る。胎土褐色を呈し、密である。10は弥生甕。弥生後期。

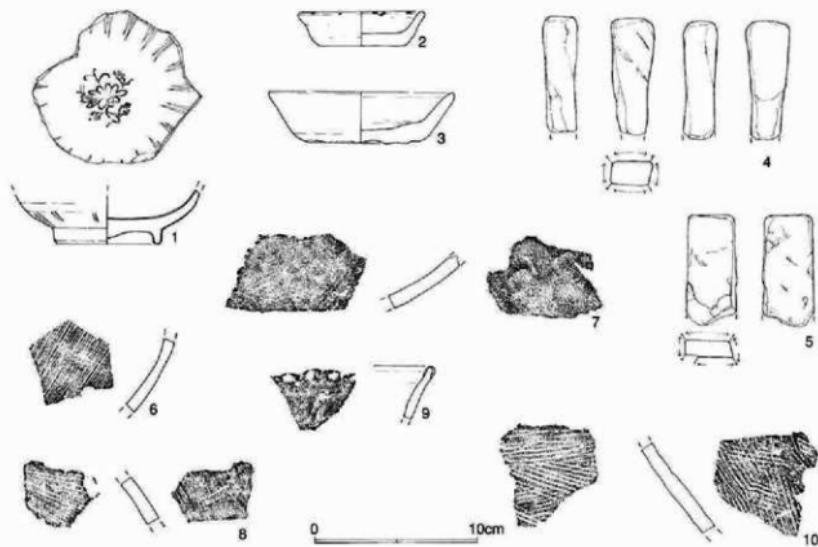


図7 第2面構成土出土遺物

3 第3面の遺構と出土遺物（図3・8）

第3面で検出した遺構はピット3穴である。第3面構成土は暗褐色粘質土。砂質土がわずかに混入する箇所もあるが、全体に粘性は高い。調査区西側の第3面構成土上層には微量ではあるが、小粒の砂質凝灰岩と軽石が平面的に堆積していた。点線で示したラインから東に向かって緩やかな傾斜を呈する点では、第1面からこのラインが踏襲されているが、若干東にずれる。

出土遺物は実測した遺物の他に、破片で青磁蓮弁文碗2点・常滑甕1点が出土している。第3面以下は、掘削進度の規制により掘り下げていないため、以下で提示した遺物以外の発見はなかった。調査区北でやや深く掘削した水抜き坑の土層堆積を観察すると、第3面は中世の地山層であると考えられる。

遺構63（図3）

円形を呈するピットである。ピット底面には常滑胴部片・安山岩・砂質凝灰岩片が遺存していた。平面で43cm×46cm、深さ16cmを測る。含土は暗褐色粘質土。土丹粒を含み粘性高い。

出土遺物（図8）

常滑II類鉢、口縁部片。胎土は粘性弱く、小石粒混入。内面磨耗不明。

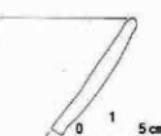


図8 第3面遺構出土遺物

表土出土遺物（図9）

重機による表土掘削時に出土した遺物である。

1は青磁蓮弁文碗。内底に不鮮明だが蓮弁文の型押し。外底、脛み付けまで施釉される。外側面、蓮弁文は線刻である。底径（5.0）cm。2は瀬戸入れ子。ロクロ成型。底部ヘラ整形。内底ナデなし。胎土は黄褐色を呈し、均質で精良。底径（4.4）cm。3はロクロ成型かわらけ。底部回転糸切り。内底ナデあり。外側面口唇部辺が一部剥離している。胎土黄褐色を呈し雲母・小石粒を含む。口径（9.0）cm・底径（5.6）cm・器高（2.6）cm。4・5は銭。4は紹聖元寶（北宋 初鑄1094年）。5は寛永通寶（初鑄1636年）。6は瀬戸擂鉢。条痕単位不明。底部回転糸切りの後、ヘラによる成型。内面火熱のためか剥離。底径（8.4）cm。7は石製品砥石。側面に切り出し痕残る。残存長（4.3）cm・幅（2.7）cm・厚さ（2.4）cm。8は石製品硯。陸部が一部遺存する。残存長（8.0）cm・残存幅（3.0）cm・厚さ（1.5）cm。9は鉄製品釘。残存長（3.0）cm・幅（0.4）cm・厚さ（0.4）cm。10は弥生焼か。胎土明褐色を呈し金雲母含む。傾き、器形不明。11は弥生甕。二段の沈線区画の中にL R網文を配す。弥生後期。

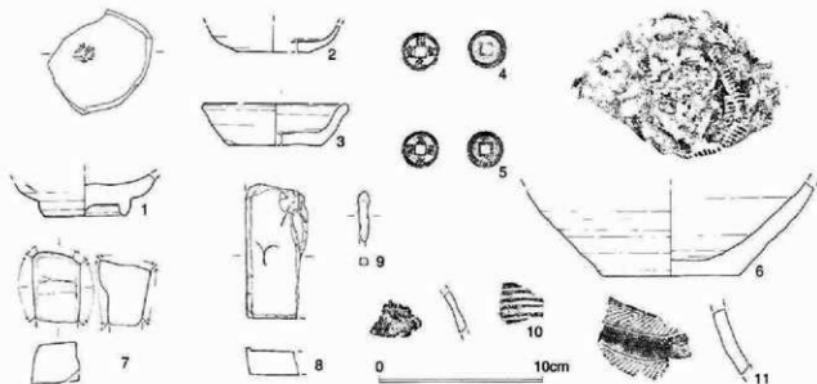


図9 表土・擾乱出土遺物

第4章 まとめ

本遺跡地の所在する台山遺跡では、これまでに11地点（図1）の発掘調査が実施され、調査地南の丘陵の緩斜面では、弥生・古墳・中世の遺構と遺物が発見されている。又、調査地南西の「台山藤源治遺跡」（図1地点10～12）では縄文から中世にかけての遺構・遺物が発見され、特に弥生時代から平安時代にかけて台地上に集落が形成され、濃密に遺跡が分布することを確認している。本調査地は通称「台山」と呼ばれる丘陵の北東斜面に位置する。

今回の調査では、3面にわたる遺構面と、土坑・ピット・ピット列等の遺構を検出した。検出した遺構それぞれの関係および、建物等の建造物を狭小な面積の調査区内で推定することは難しく、遺跡の規模などを確認することは出来なかった。しかし、出土した遺物から15世紀中葉から15世紀後葉にかけて調査地点で生活が営まれていたと考えられる。また、これまでの発掘調査成果で明らかのように調査地南の丘陵上及び丘陵斜面に弥生時代から、平安時代にかけての集落が形成されていたことを裏付けると思われる、弥生時代前期から中世後期にかけての遺物が破片ではあるが出土している。

調査区の約2.5m上方の敷地には現在も建物が建っており、雑壇状に造成されている。敷地西は丘陵の斜面となる。時代的なものは不明であるが、斜面にはやぐら状の横穴と斜面岩盤面を掘りぬいた横穴式の井戸が残存していた。調査中に敷地内、庭園造成時に調査者が実見したところ、現在の敷地標高より約0.5m下で岩盤が露出し、造成痕を観察している。雑壇上の段幅は、調査区設定時に段の立ち上がりを確認できなかったことから、現在の幅よりも若干狭くなると考えられる。遺跡地から約100m南に現在も残る、調査地と同一の壇上に所在する「光照寺」の敷地内にはやぐらが数基残存し、やぐら内には墓所を整理したときに、やぐら及び周辺に散在していた五輪塔が集められている。「光照寺」造営時には雑壇の造営が成されていたのではないかと考えられ、同一壇上の調査地は寺領の内であったのかもしれない。

調査地の北に走る山ノ内道と調査地の標高差は約6mある。前述したように調査地は雑壇状に形成され、壇上と壇下の標高差は約2.5mである。小道が壇下に沿って走っているが、この小道から北に約1m下がって現在の住宅が建築され、調査地と同様に壇が形成される。現況では調査地を上段にして、山ノ内道まで概ね3段の壇が形成されていることを確認した。遺跡地の所在する小袋谷戸では中世以降の谷戸内の様相は、調査例も少ないために具体的な状況は明らかになっていないが、中世後期には、調査地辺は山ノ内道に沿って、雑壇状に造成した土地利用をしていたと考えられる。

参考文献

- 「日本歴史大系第14巻」「神奈川県の地名」1984年 平凡社刊
- 「鎌倉麻寺事典」1980年 有隣堂
- 「鎌倉市史」「考古編」1953年 吉川弘文館
- 「鎌倉市史」「社寺編」1953年 吉川弘文館

図版1



▲調査開始前状況



▲第1面全景



▲第2面全景



▲第3面全景

調査地全景（第1面～第3面）



出土遺物

ささめいせき
篠目遺跡 (No.207)

篠目町330番11外地点

例　　言

1. 本報は、筆目遺跡（No.207）の所在する遺跡内の鎌倉市筆目町330番11外における個人専用住宅の新築に伴う緊急発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、地盤の柱状改良部分となる調査面積43.50m²を対象に平成14年4月1日から同年4月22日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査体制は以下のとおりである。

調査担当者 原 広志

調査員 須佐直子・須佐仁和・早坂伸市・中川建二・久保田裕美

調査補助員 宇都洋平（鶴見大学）・原考史・橋本和之（以上国士館大学）

協力機関名 株鎌倉市シルバー人材センター・鎌倉考古学研究所

調査協力者 石井清司・多田徳蔵・藤枝正義・吉本脩三（鎌倉市高齢者事業団シルバーセンター）

4. 本報の執筆は、第1章・第2章・第3章を久保田、第4章を原が分担執筆し、編集も行った。資料整理作業は執筆者の他、太田・須佐（仁）・早坂・中川があたった。

5. 本報掲載の写真は、遺構を須佐（仁）・原・久保田が、遺物を須佐（仁）・久保田が撮影した。

6. 発掘調査における出土遺物・図面・写真等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

7. 本報の凡例は以下の通りである。

・挿図縮尺 全測図 1/50

遺構個別 1/40

出土遺物 1/3

・遺構図版 遺構のレベルは海拔標高の数値を示す。

・遺物図版 一・一是釉薬の範囲を示し、黒塗りは灯明皿に付着した油煙煤、また漆器椀・皿類では、文様を朱漆で表現した部分である。

8. 現地調査及び資料整理を通じて、多くの方々や機関からご助言並びにご援助を賜った。記して感謝の意を表します（敬称略・五十音順）。

大三輪龍彦・岡 陽一郎・小野正敏・河野眞知郎・小林康幸・佐藤仁彦・汐見一夫・宗基秀明・宗基富貴子・玉林美男・雜 実・手塚直樹・福田 誠・松方宣方・馬淵和雄

本文目次

| | | |
|-----|-------------|-----|
| 第1章 | 遺跡の位置と歴史的環境 | 172 |
| 1. | 遺跡の位置 | 172 |
| 2. | 歴史的環境 | 172 |
| 第2章 | 調査の概要 | 176 |
| 1. | 調査の経過 | 176 |
| 2. | 測量軸の設定 | 176 |
| 3. | 層序と生活面 | 177 |
| 第3章 | 検出遺構と出土遺物 | 179 |
| 1. | 検出遺構と共に伴遺物 | 179 |
| a) | 中世第1面 | 179 |
| b) | 中世第2面 | 180 |
| c) | 中世第3面 | 183 |
| d) | 中世第4面 | 187 |
| 2. | 面上及び包含層出土遺物 | 187 |
| 第4章 | まとめ | 190 |

挿図・表目次

| | | | | | |
|----|---------|-----|-----|---------|-----|
| 図1 | 調査地点周辺図 | 173 | 図7 | 第2面建物1 | 182 |
| 図2 | グリット配置図 | 177 | 図8 | 第3面全測図 | 183 |
| 図3 | 土層堆積模式図 | 178 | 図9 | 第3面建物1 | 184 |
| 図4 | 第1面全測図 | 179 | 図10 | 出土遺物(1) | 185 |
| 図5 | 第1面ピット | 180 | 図11 | 出土遺物(2) | 186 |
| 図6 | 第2面全測図 | 181 | 表1 | 出土遺物観察表 | 188 |

図版目次

| | | |
|-----|---------------------------------|-----|
| 図版1 | 第1面全景(北から・東から)・第1面検出ピット | 191 |
| 図版2 | 第1面ピット2・第1面かわらけ出土状況・第1面金環出土状況 | 192 |
| 図版3 | 第2面全景(北から・東から)・第2面土廣1 | 193 |
| 図版4 | 第2面建物1柱穴(建物1-2-5) | 194 |
| 図版5 | 第3面全景(北から・東から) | 195 |
| 図版6 | 第3面建物1柱穴(建物1-1-2)・第3面上廣1・第3面上廣2 | 196 |
| 図版7 | 調査区北側崩落状況・調査区東壁セクション | 197 |
| 図版8 | 出土遺物 | 198 |

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置

笹目遺跡は、鎌倉市街の南西寄り、市内中心部を東西に貫く長谷小路（現国道134号線）から北側に位置し、桔梗山から派生する尾根によって形成された南北に細長くのびる支谷に位置する。笹目ヶ谷（佐々目谷）と呼ばれるこの谷は比較的大きな支谷であり、「玉船和尚鎌倉記」では、鎌倉七谷の一つとして数えられている。谷戸内では、中世に行われたと思われる尾根掘の掘削、造成の痕跡が観察できる。

調査地点は、この笹目遺跡の遺跡包蔵地内、笹目ヶ谷の開口部中央に位置し、JR鎌倉駅からは南西に約800m、由比ガ浜の海岸線より北方約750mの距離にある。本調査地点の西隣には島津邸遺跡があり（図1-2）、佐々目ヶ谷奥の西側山腹には佐々目ヶ谷桜並木内横穴、佐々目ヶ谷齊藤邸内横穴群（一部やぐらにも転用）が知られており、ほか周辺にもやぐら群と横穴群が広く分布している（註1）。

2. 歴史的環境

本遺跡の南方約250mを走る長谷小路は、鎌倉の中央部を南北にはしる若宮大路の下馬から、長谷觀音・大仏を経て藤沢方面に東西に抜けている。長谷小路の南側周辺（長谷小路周辺遺跡）は、由比ヶ浜の後背地に形成された砂丘帯の北際に立地し、古代・中世の遺構・遺物が多く検出・確認され、平安期には葬送の地であった様相が、中世期に入ると、葬送の地としての性格を引き継ぎつつも、道路で区画された敷地内に方形堅穴建墓址が建ち並び、埴輪、とりべ、鋳型、薦の羽口、加工途中の骨製品等の出土から鎌倉時代等の工人の存在などについて広く言及されている（註2）。

長谷小路の北側に位置する安達泰盛邸跡では、屋敷を区画すると思われる木組みの大溝や舶載・国産の大甕を埋設した遺構などの他、多様な遺物・遺構が発見されている（註3）。甘縄神明社付近の長谷小路の北側一帯は、安達泰盛以降安達氏一族の屋敷があったとされ（註4）、さらに広く長谷小路の北側（道路沿いを除く）には安達氏を含め御家人の屋敷の存在していたものと思われる（註5）。

「笹目（佐々目）」という地名は、「吾妻鏡」や「金沢文庫古文書」中の鎌倉期の文書などに見られ、古くからの名称である。中世期では「佐々目」と記され、近世期では「佐々目」と「笹目」が併用され、現在の行政上の名称は「笹目」に統一されている。現在の谷戸内は住宅地が広がっているが、中世には遣身院・長楽寺などの寺院があったとされる（註6）。

遣身院の名は、「金沢文庫古文書」に「佐々目遣身院」とみえている。遣身院は鶴岡八幡宮の別当寺で、仁和寺の頼助・益助・益性らが住した寺院であったとい（註7）。また聖教類の奥書に名を記したもののが多いことから学問所であったとも言われ（註8）、『随文私記』に永仁五年（1297）閏十月七日に聖教等を運び出して焼失したある甘縄宿坊との関係も示唆される。

本調査地点の西隣では、島津邸遺跡の発掘調査が昭和63年に実施されている。礎石建物や溝などの遺構が確認され、遣身院との関連が示唆された（註9）。

長樂寺は『新編鎌倉志』（巻之五）佐佐目谷の項に「此谷に昔寺有、長樂寺と号す。法然の弟子隆觀住せとなり」と見え、「鎌倉攬勝考」（巻之七）長樂寺跡の項では「佐々目谷にあり。浄土宗。法然上人の弟子隆觀といふ僧住せし由。正元2年4月29日焼亡の事『東鏡』に見へ、此寺の門前より亀谷の人家に至るまで、悉く焼失とあり。其後何の年にか廃跡となれり。此寺もとは北条経時が為に建立せし寺

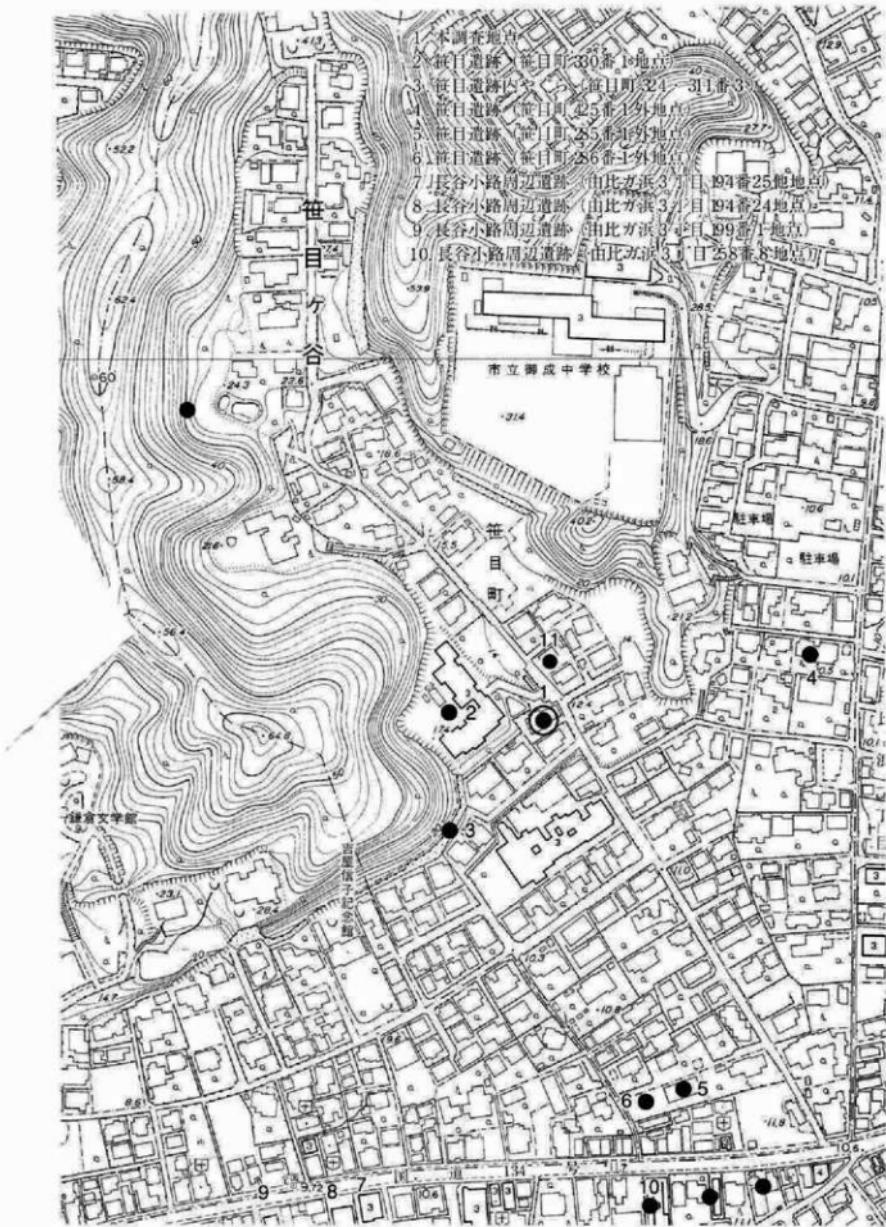


図1 調査区地点周辺図

なり」と記される。以上の2点の近世地誌では長楽寺は佐々目谷にあったとされる。また享保3年(1718)の『諸嗣宗脈記』には「鎌倉住佐佐目谷有律師」とあり、これも「筆目ヶ谷」にあったことを示唆している(註10)。ただし、現在「長楽寺ヶ谷」と伝えられる場所は佐々目谷の一つ西側に位置する鎌倉文学館のある谷戸であり、現在では「長楽寺ヶ谷」所在を採用する意見が多い(註11)。長楽寺の名は中世期の史料では、「北条貞顯書状」(文暦2年(1235))(註12)・「日蓮聖人御遺文」・「日蓮聖人註画譜」に見え、また『吾妻鏡』文応元年(1260)4月29日条に「丑魁。鎌倉中大焼亡。自長楽寺前。至龜谷入屋」と記される。開創は法然の弟子隆觀とされるが、さらにその弟子の智慶が京都長楽寺に学んだ後、鎌倉で長楽寺を開創したとも伝えられる(註13)。存続年代は不明。

- (註1) 赤星直忠 1966「古代の鎌倉」「鎌倉市史」考古編
- (註2) 斎木秀雄他 1986『長谷小路南遺跡』長谷小路南遺跡発掘調査団
馬淵和雄 1994「長谷小路周辺遺跡ー由比ガ浜三丁目1175番2外地点ー」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」10 鎌倉市教育委員会
- 宗藤秀明 1994「長谷小路周辺遺跡ー由比ガ浜三丁目228・229番他(№236)」「長谷小路周辺遺跡発掘調査団
はか多数。
- (註3) 松尾宣方 1983「伝安達泰盛邸跡」「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報」I
- (註4) 白井永二編 1976『鎌倉事典』東京堂出版より「安達盛長」・「甘繩」・「甘繩神明神社」の項。
- (註5) 『見聞私記』に「永仁五年(1297)閏十月七日未時、自佐々目谷口火出来、甘繩等焼亡、千葉(胤宗カ)屋形已下兵部大輔(甘繩頼実)、駿河守(北条政長)、近江守(?)等屋形悉焼了」の記載がある。
- (註6) 1987「日本歴史地名大系・神奈川県の地名」平凡社より。
- (註7) 1988『鎌倉の寺院図』神奈川県金沢文庫
1988『金沢文庫史料全書』第9巻 寺院指図篇 神奈川県立金沢文庫
- (註8) 貴達人・川副武胤 1989『鎌倉廃寺事典』有隣堂より「はじめに(第三部)」の項。
- (註9) 大河内勉 1991「筆目遺跡発掘調査団報告書」-鎌倉市筆目町330番-1地点-筆目遺跡発掘調査団
前掲「日本歴史地名大系・神奈川県の地名」「長楽寺跡」の項。
- (註10) 前掲「鎌倉廃寺事典」「長楽寺」「鎌倉廃寺図」・前掲「日本歴史地名大系・神奈川県の地名」「長楽寺跡」原廣志・田代郁夫 1990「筆目遺跡内やぐら」「昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
- (註12) 『金沢文庫文書』(1964) 神奈川県立金沢文庫 所収。
- (註13) (註10)に同じ。

【参考・引用文献】

- 田代郁夫 1994 「篠目遺跡（No.207）篠目町425番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10（第2分冊）
- 伊丹まさか 2001 「篠目遺跡（No.207）篠目町285番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17（第2分冊）
- 大河内勉 1991 「篠目遺跡発掘調査団報告書」～鎌倉市篠目町330番-1地点～篠目遺跡発掘調査団
- 原廣志・田代郁夫 1990 「篠目遺跡内やぐら」『昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
- 天保3年（1832）「扇ヶ谷村絵図」（1969『鎌倉の古絵図』2（鎌倉国宝館図録16）所収）

第2章 調査の概要

1. 調査の経過

本調査地点は、市内中心部南西寄りにあたり、笹目遺跡（県道跡古帳No207）の一角に位置する鎌倉市笹目町330番11地点における個人専用住宅で実施された。

平成13年12月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、工事計画が地盤の柱状改良を伴うものであったため、確認調査を実施した。この調査で現地表下180cm以下に中世遺物包含層及び遺構面の存在が確認され、当該土木工事による埋蔵文化財への影響が避けられないことが判明した。これにより発掘調査の実施について事業主との数度にわたる協議を重ねた結果、文化財保護法第57条の2に基づく届け出手手続きを行ない、現地調査の実施方法などの話し合いを経て、平成14年4月1日から調査面積43.50m²を対象として発掘調査を実施した。

調査地の現在の海拔高は12.5m前後を測り、調査前の確認調査の結果から現地表下約180cmは近現代の遺物を含む客土層であることを確認していたため、重機による表土掘削を行ない、その後人力による掘削、遺構の検出、記録保存、写真撮影を行なった。

当調査地点は谷戸部という立地条件のために湧水が非常に多く、排水作業を行ないつつ安全に留意しながら調査を行なったが、同年4月22日、大雨によって調査区壁面が崩落し、これ以上の調査は危険と判断し、調査を中止した。

調査の結果、鎌倉時代後期～南北朝時代にかけて、4時期の中世生活面と、それに伴う遺構・遺物が発見された。第4面については精査前に現場が崩落したため、土丹地業による生活面の広がりは確認したが、遺構については未調査である。調査経過については、以下のように調査日誌の抜粋を記しておく。

調査日誌抄

- 4月1日 小屋設営。第1面の遺構検出へ向けての調査開始。鎌倉市4級基準点を基に測量用方眼杭設定、原点・レベル移動。
- 4月9日 第1面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図作成。
- 4月13日 第2面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図作成。
- 4月19日 第3面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図作成。
- 第4面に向けての調査開始。第4面からは崩落の危険があるため、調査区はこれまでの北側半分のみとなる。
- 4月22日 現場雨のため崩落。危険なため調査中止。かろうじて残った調査区東壁一部のセクション図を実測・写真撮影。現場崩落状況を撮影。各方面に連絡ののち、完全撤収。

2. 測量軸の設定

調査にあたって使用した測量軸の設定は図2に図示したように国土座標を用いて実施した。調査地東側を南北に走る道路上に鎌倉市道路管理課が設置した鎌倉市4級基準点D205及びD206が確認されたので、この2点を基準として国土座標を測定、調査敷地内にD-5杭を設置した。ここから調査区の東辺に沿って4m北の方向へ延ばした位置にB-5杭を設置した。これを調査基準点としてD-5杭とB-5杭を結ぶ直線と90°の角度で西に8mの位置に見返りとなるB-1杭を設置した。その後、図2のように東西軸にアルファベットを北からA～D、南北軸に算用数字を西から1～5を附し、それぞれ2m

方眼によりグリッド設定を行なった。

市4級基準点(D205・D206)及びB-1・B-5・D-5杭の国土座標の数値は、以下の通りである。

D205: [X=-76.182.150; Y=-25.189.765]

D206: [X=-76.211.489; Y=-25.176.260]

B-1: [X=-76.194.758; Y=-25.197.774]

B-5: [X=-76.191.368; Y=-25.190.528]

D-5: [X=-76.194.989; Y=-25.188.834]

方位はすべて真北を使用しており、南北軸方位はN $-20^{\circ}54'18''$ -Eである。

標高については、調査地点より南東約300mの国道134号線上にある鎌倉市3級基準点(No.53123=10.73m)を調査区内に移動した。文章中及び図の数値はすべてその海拔標高で示している。

3. 層序と生活面

調査地点は現地表の海拔標高約12.5mに位置した平坦な宅地となっている。表土は現代の搅乱が50cm程堆積し、その下に近代の水田耕作土が厚く70cm程堆積している。水田耕作土の底面には宝永の火山灰(宝永4年(1707)11月に起こった富士山の噴火により発生した火山灰)を含む粗砂が堆積し、その下に10~15cmの厚さで中世遺物包含層がある。さらにその下、海拔標高10.8m前後で細かい土丹を突き固めて整地した地業層があり、この地業層を構成する厚さ約20cmの整地層と遺物包含層を除去すると、現地表下約190cm、海拔標高10.6m前後で第1面の地業層の広がりが確認された。この層は厚さ約20cm程あり、土丹粒・炭化物などを含んだ暗茶褐色粘質土によって構築されている。

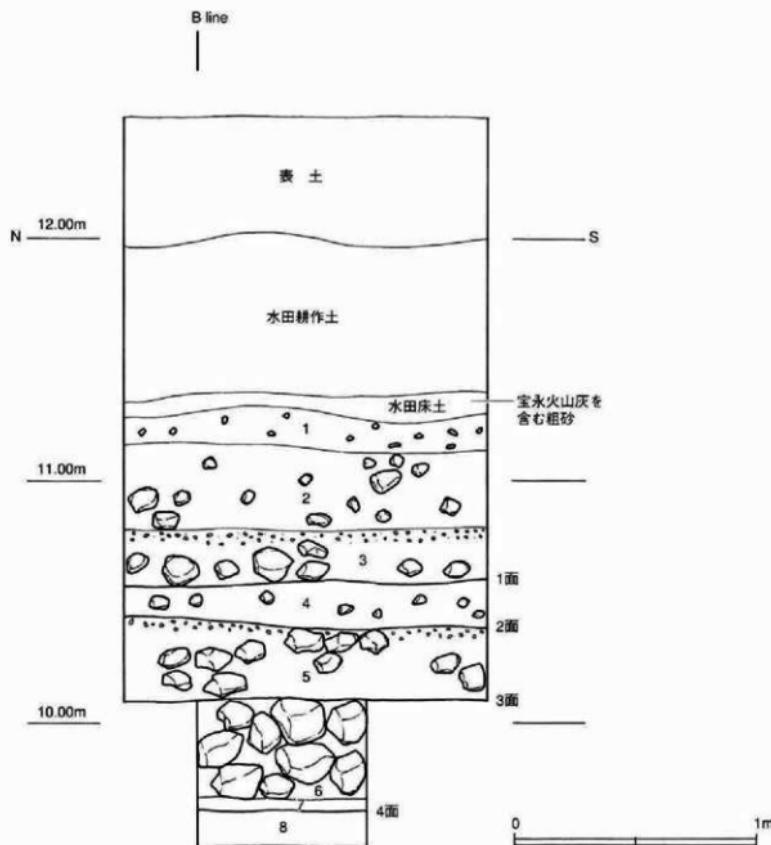
第2面は海拔標高10.45m前後で確認された。この層は厚さ30cm程あり、人頭大・拳大土丹による基礎地業で上面には細かい土丹版築が施されている。

第3面は、人頭大の大型土丹を投げ入れて構築された、厚さ約40cmの粗い地業で、海拔標高は10.10m前後である。

第4面は、厚さ約5cmの粘性が強く遺物を多く含む暗灰褐色土の下から表れた非常にしまった細かい土丹版築の面で、海拔標高は10.65m前後である。炭化物・木器を含み、貝砂が混じる。



図2 グリッド設定図



土層注記

- | | | | |
|------------|---|------------|---------------------------------------|
| 1. 茶灰色粘質土 | しまりやや有、土丹・炭粒多く含む (遺物包含層) | 5. 暗茶褐色粘質土 | 上部は細かい土丹で版築 下部は人頭大・拳大土丹による基礎地業 |
| 2. 暗茶灰色粘質土 | 人頭大・拳大・土丹・炭・まばらに含む 非常にしまり有 北壁側では厚さ10~20cm程の根屈が この上で確認された | 6. 暗茶褐色粘質土 | 大型土丹塊による粗い地業(多量に入る) |
| 3. 暗茶灰色粘質土 | 上部は細かい土丹で版築 下部は人頭大・拳大土丹で粗い基礎地業 | 7. 暗茶褐色粘質土 | 4面上遺物包含層 |
| 4. 暗茶褐色粘質土 | 土丹・炭をやや多めに含む 2面の包含層か? | 8. 暗茶褐色粘質土 | 炭化物、木器、貝砂混じる 上面は細かい土丹版築 非常にしまり有 |

図3 土層堆積模式図

第3章 検出遺構と出土遺物

1. 検出遺構と共に出土遺物

a) 第1面(図4・5、図版1・2)

現地表下約190cm、海拔標高10.6m前後で土丹粒・炭化物などを含んだ暗茶褐色粘質土を突き固めて整地した地業層が確認されたので、この生活面を第1面として調査を実施した。この面で検出した遺構は、土壤2基、柱穴11口などである。遺物は面上から、かわらけ、舶載陶磁器、手焼り、銅製品、北宋銭などが出土したが、土壤内・柱穴内など遺構に伴う形では出土しなかった。

土壤(図4、図版1)

土壤1

調査区南西角の壁際(D-2グリット)で検出され、西側南側は調査区外に拡がる。平面はほぼ円形を呈し、確認できた規模は南北軸46cm、東西軸40cm、深さ35cm、断面が逆台形状の土壤である。覆土は人頭大・拳大の土丹、炭をまばらに含む、しまりのやや弱い暗茶灰色粘質土である。

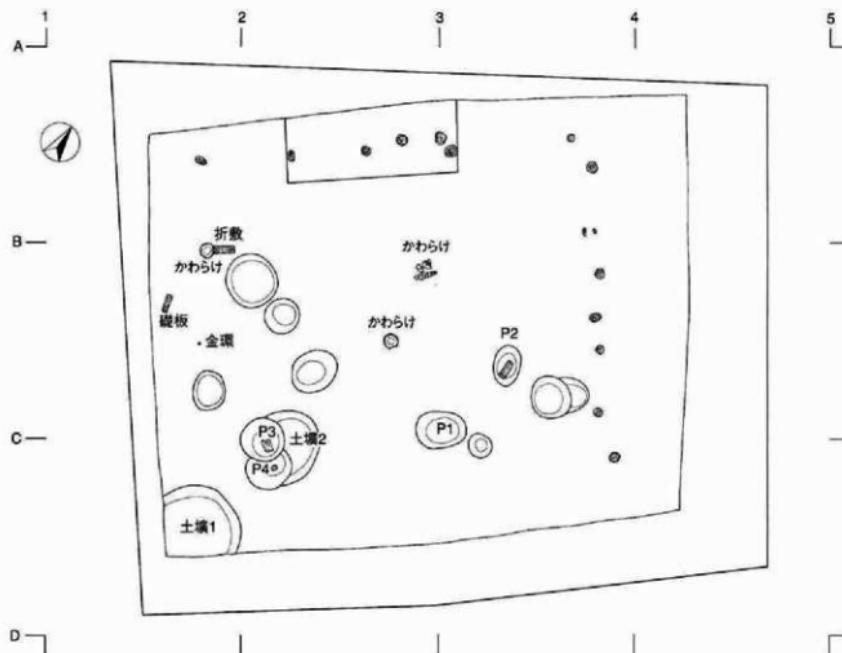


図4 第1面全測図

土壤 2

C-2 杭からやや東寄りの地点で検出され、西側を柱穴3・4に切られている。平面は円形を呈し、直径36cm、深さ12cmの浅い土壤である。覆土は、小土丹塊・炭粒を多く含み、しまりのない暗茶灰色粘質土である。

柱穴 (図5、図版1・2)

柱穴 1

C-3 杭地点に位置する。形状は梢円形で、大きさは長径52cm、短径38cm、深さ11cmの浅い柱穴で、断面が逆台形を呈する。覆土は炭化物、拳大土丹を多めに含んだしまりのない暗茶灰色粘質土である。

柱穴 2

C-4 グリットに位置する。形状は梢円形で、大きさは長径42cm、短径28cm、深さ26cm、断面が逆台形の掘方をもつ。覆土は炭化物、拳大土丹を多めに含んだしまりのない暗茶灰色粘質土である。底部に縦18cm、横7cm、厚さ5cmの礎板を伴う。

柱穴 3

C-2 杭付近に位置する。形状は円形で、大きさは直径45cm、深さ5cmの浅い柱穴である。覆土は炭化物、小土丹塊をまばらに含んだしまりのやや弱い暗茶灰色粘質土である。底部に縦12cm、横8cm、厚さ6cmの礎板を伴う。

柱穴 4

C-2 杭付近に位置する。形状は円形で、大きさは直径45cm、深さ8cmの浅い柱穴である。覆土は炭化物、拳大土丹を多めに含んだしまりのない暗茶灰色粘質土である。中央に木杭が刺さる。北側部分を柱穴3に切られる。

b) 第2面 (図6・7、図版3・4)

第1面を構成する厚さ約20cmの整地層と遺物包含層を除去すると、海拔標高10.45m前後で細かい土丹版築を施した面の広がりが確認された。断面で確認すると、人頭大・拳大土丹による厚さ30cm程の基礎地盤の上面であることが分かり、これが第2面である。この生活面で検出した遺構は、掘立柱建物1軒、土壤2基、柱穴18口である。出土遺物はわずかに面上及び土壤より、かわらけが数点みられた。

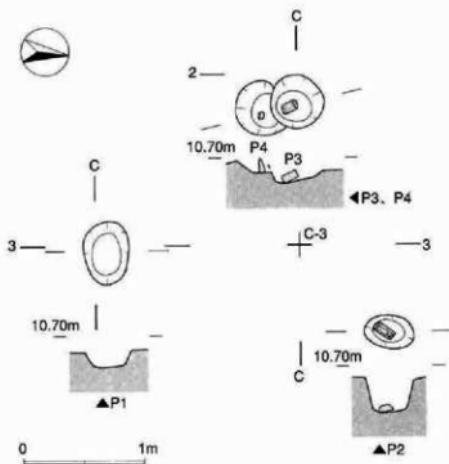


図5 第1面ピット

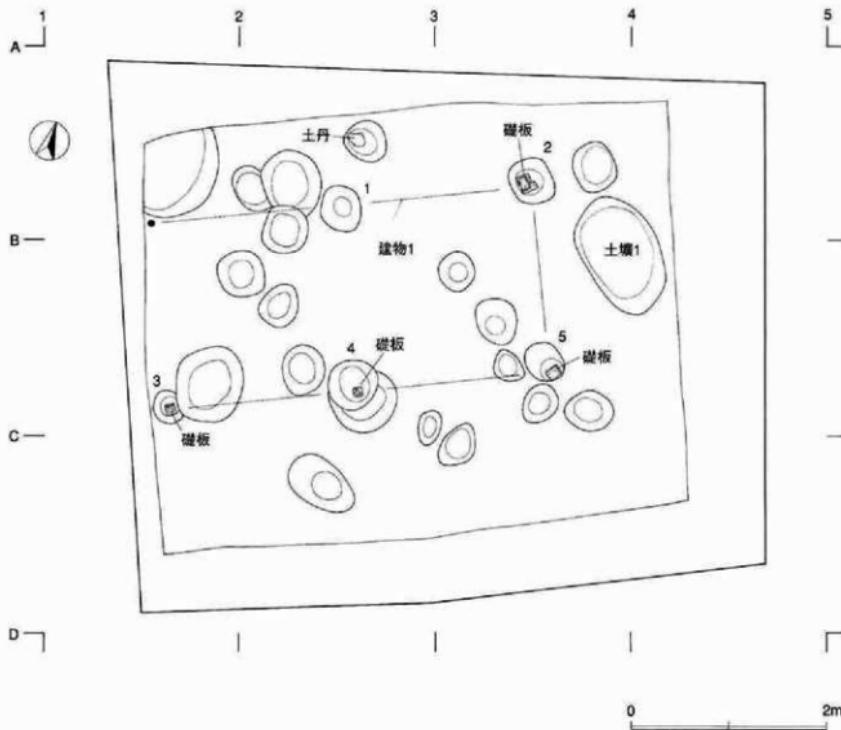


図6 第2面全測図

掘立柱建物

建物1 (図7、図版3・4)

調査区中央よりやや北西寄りに位置する。B・C-2~4グリットの範囲で東西2間=3.9m、南北1間=1.95mが検出され、柱間寸法は東西・南北ともに195cm(6.5尺)を測る。調査区内に湧水が多く、周囲に排水のための側溝を巡らせていたため、北西隅の柱穴掘方が確認されなかったが、南西隅にて礎板を伴う柱穴が、同じ柱間距離で検出されたため、東西2間と判断した。この建物が東西南北にさらに延びるか否かは、それぞれ調査区外となるため確認できていない。南北の柱並びの軸方位はN-13°-Eを示している。

各柱穴の掘方は、平面形状が円形または隅丸方形を呈し、径34~50cm程、断面形状は逆台形を呈し、確認面からの深さ約40~50cmである。柱穴1(図7)を除く、ほかすべての柱穴底面に、礎板が据えられていた。礎板は平面形状がおおむね正方形で、厚さ2~4cmと比較的薄く、柱穴2では厚さ2cmの薄い礎板を2枚並べた上に、もう一枚2cmのものを重ねて据えられていた。

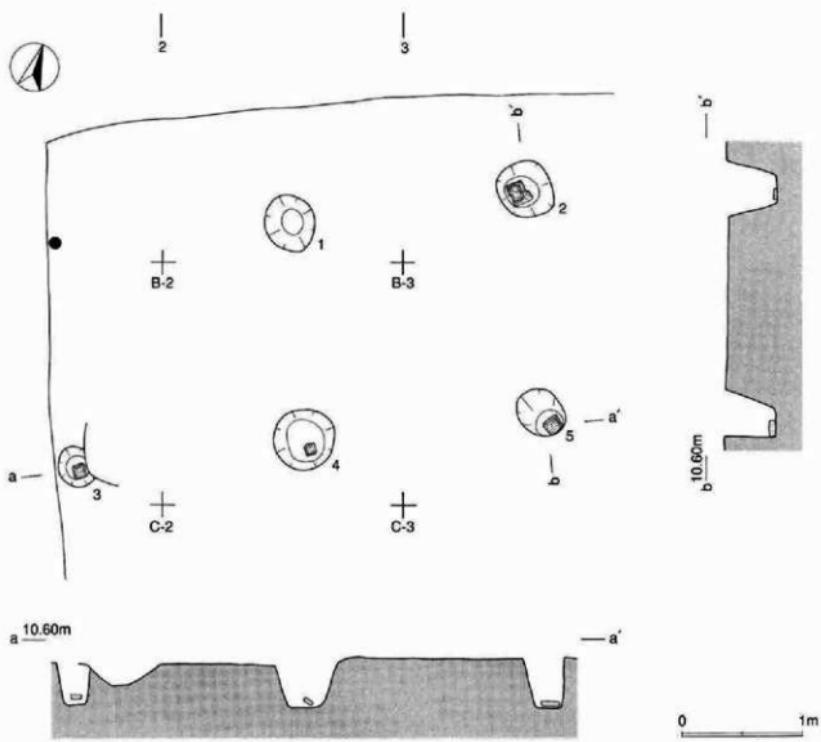


図7 第2面建物1

土壤

土壌1 (図6、図版3)

調査区東端のB-4杭地点で検出され、平面形状は橢円形を呈し、長軸約120cm、短軸約80cm、掘方は逆台形を呈し、深さ28cmである。覆土は土丹塊・炭粒をやや多めに含む、しまりのない暗茶褐色粘質土である。

出土遺物は(図10-26・27)、ろくろ成形の大小かわらけが各1点であった。

c) 第3面(図8・9、図版5・6)

第3面は、人頭大の大型土丹を投げ入れて構築された、厚さ約40cmの粗い地業土の上面であり、海拔標高は10.10m前後である。

この生活面で検出された遺構は、掘立柱建物1軒、土壙5基、柱穴9口である。出土遺物は、かわらけをはじめ、船載陶磁器、常滑捏鉢、鉄製品、木製品などがみられた。

掘立柱建物

建物1(図9、図版5・6)

西端(B～D-2グリット)に位置し、調査区西壁に沿って南北に3口の柱穴列が検出された。そのうち2口の底部には礎板が据えられ、柱間の距離からみて掘立柱建物の一部を構成した柱穴列と推定される。これを建物1とした。柱間寸法は、柱穴1～3が芯々距離1.90m、1.80mをそれぞれ測り、南北の柱並びの軸線方向はN-16°-Eを示す。調査区西際での検出のため、建物の規模等の性格は不明である。各柱穴の掘方は、平面形状が円形を呈し、径42～56cm程、断面形状は逆台形を呈し、確認面からの深さ約36～45cmである。柱穴1・2(図9)は底面に礎板が据えられていた。礎板は平面形状が長方

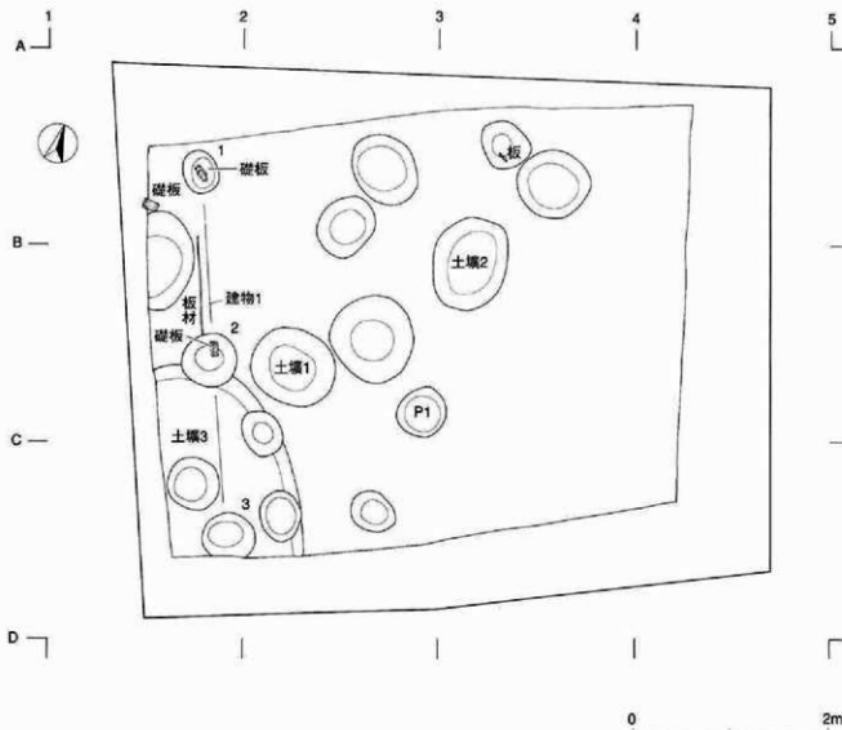


図8 第3面全測図

形、厚さは4~5cm程である。柱穴2では厚さ4cmの礎板の上に、厚さ3cmの礎板が重ねて据えられていた。上の礎板は、短辺の側面が凸字状に加工されており、束材を再利用したものであろうか。2面・3面の両生活面において、建物は各面わずか1軒ずつの検出であり、点数も少ないが、2面と3面では礎板の形態に違いがみられた。

出土遺物は(図11-34・35)、図11-34がろくろ成形のかわらけの小皿、図11-35が用途不明の木製品で、ともに建物1-1(図9)覆土より出土。

土壤(図8、図版6)

土壤1(図版5・6)

C-3グリットに位置する。平面形状は円形を呈し、直径約80cm、掘方の断面は梢円形を呈し、深さ39cmである。覆土は拳~人頭大土丹で、間に粘質土が入り、底部は砂質土。

出土遺物は(図11-36)、ろくろ成形の大型のかわらけが1点出土している。

土壤2(図版5・6)

C-4グリットに位置する。平面形状は梢円形を呈し、長軸95cm、短軸76cmを測る。掘方断面は逆台形状を呈し、深さ47cmである。覆土は拳~人頭大土丹で、間に粘質土が入り、底部は砂質土。

出土遺物は(図11-37)、船載陶磁器(龍泉窯系青磁蓮弁文碗)1点。

土壤3(図版5)

調査区の南西隅で検出され、グリットはC-D-2・3に位置する。南側・西側が調査区外に拡がっており、全体の規模や平面形態は不明である。確認できた規模は南北軸2m、東西軸1.36m、確認面からの深さ約4cmで断面が浅い皿状を呈する。

出土遺物は(図11-38・39)、鉄製の平根鐵1点と、漆塗りの木製品(たて櫛)1点である。たて櫛は頭部丸く、全体を丁寧に削り、黒漆を厚く塗ったもので、頂部に穴が開いていたかは不明である。

柱穴

柱穴1(図8、図版5)

C-3グリットに位置する。平面形状は円形を呈し直径50cm、掘方断面は逆台形状を呈し、深さ35cmを測る。覆土は拳~人頭大土丹で、間に粘質土が入り、底部は砂質土。

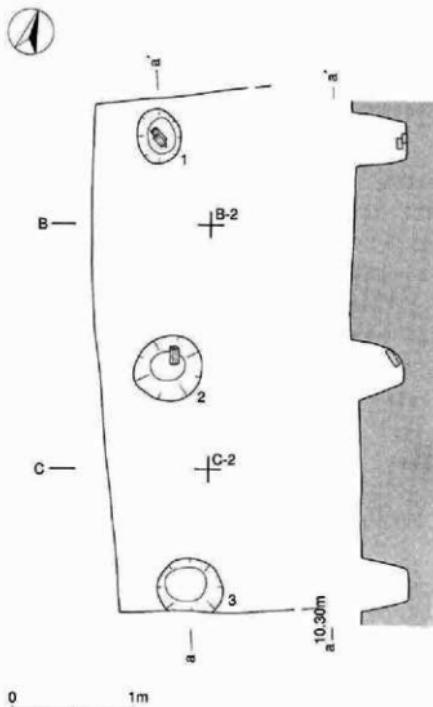
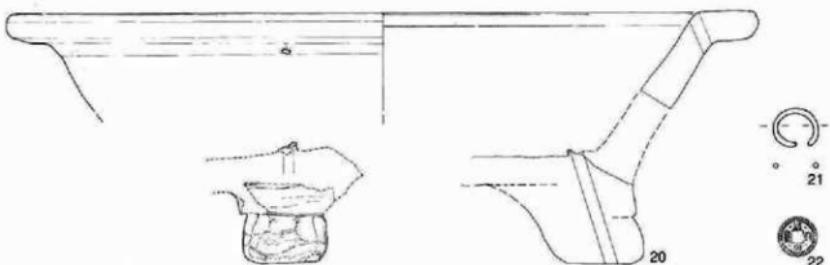
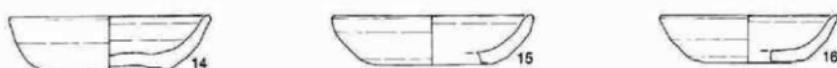
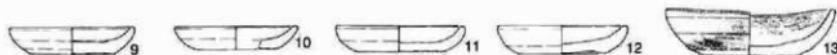


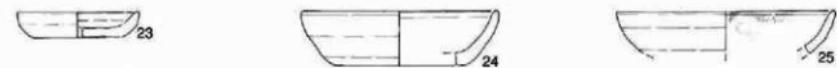
図9 第3面建物1



▲第1面包含層



▲第1面上



▲第1面下～第2面



▲第2面 土壙1



▲第2面下～第3面

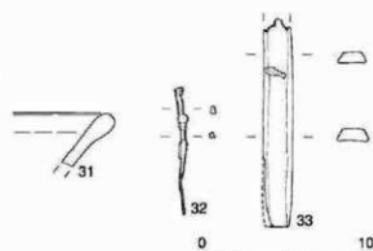


図10 箕目遺跡出土遺物(1)

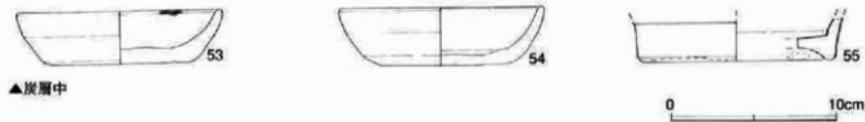
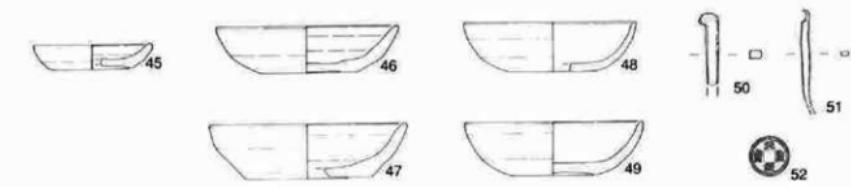
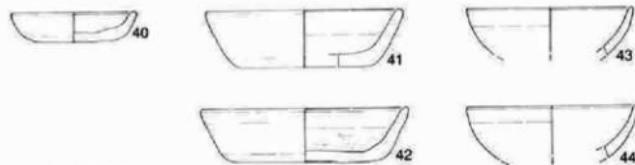
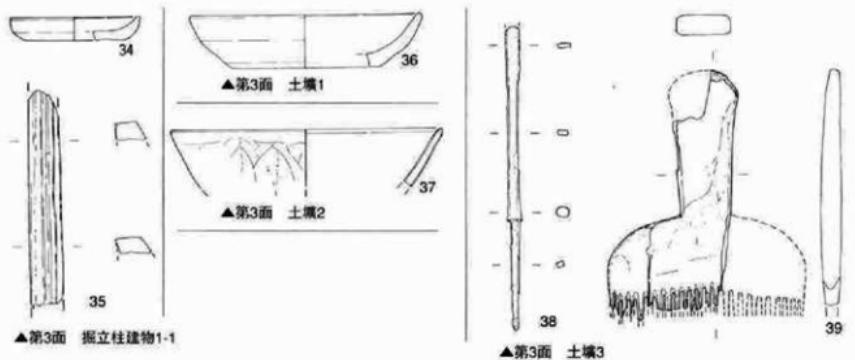


図11 筑目遺跡出土遺物（2）

d) 第4面

第4面からは、掘削深度が深く、湧水が非常に多いため、調査区の面積をこれまでの北半分とし、調査を行なった。第3面を構築していた大型土丹の地業層を掘り下げるに、厚さ約5cmの粘性が強く遺物を含む暗灰褐色土の下から非常にしまった細かい土丹版築の面が現れ、これを第4面として調査を開始した。この面では本製品が良好に残り、前面までと比べて多くの遺構プランを検出し、遺物も出土していたが、大雨と湧水によって調査区の壁が崩落し、危険のため調査は中止となったため、精査・測量・全景写真撮影にまで至らなかった。ここでは、それまでに取り上げた遺物のみの記述となることをご了承いただきたい。出土遺物には、かわらけをはじめ、鉄製品・宋銭などがある。

建物

調査区西壁付近にて、建物に伴うと思われる束材と、柱穴のプランが検出された。遺構について詳しく述べることが分かっていないが、その上面から出土した遺物（図11-45～52）は、45～49がろくろ成形の大小かわらけである。50・51は鉄製の角釘、52は北宋銭（天聖元寶）である。

2. 面上及び包含層出土遺物（詳細は観察表を参照のこと）

a) 第1面及び包含層出土遺物（図10-1～22、図版8）

第1面包含層（図10-1～8）

1～7は、ろくろ成形のかわらけ。4は口縁部に片口が付く。8は竈泉窯系の青磁無紋碗。

第1面面上（図10-9～22）

9～19は、ろくろ成形のかわらけ。13は灯明皿で、胎土は紺質の精良土。口縁部から体部にかけ、煤が厚く付着している。20は手焼きである。21は金銅製品で輪形を呈する。22は北宋銭（皇宋通寶）である。

b) 第2面及び包含層出土遺物（図10-23～25、図版8）

23～25は、ろくろ成形の大小かわらけで、25は口縁部に煤が付着している。

c) 第3面及び包含層出土遺物（図10-28～33、図版8）

28～30は、ろくろ成形の大小かわらけ。31は常滑こね鉢（I類）の口縁部片。32は鉄製の角釘。33は漆塗の木製品である。断面が台形状で、長い棒状を呈する。表と思われる3面に黒漆が塗られ、裏の1面は生地のままである。部材か。

d) 第4面及び包含層出土遺物（図11-40～44、図版8）

40～44は、ろくろ成形の大小かわらけである。稜線のやや強いものと、薄手で丸深のものに分かれ る。

| 擇団番号 | 出 土 地 | 器 種 | 口径 (cm) | 底径 (cm) | 器高 (cm) | 胎土色調・成形・整形・備考 |
|-------|-----------|----------|----------------------|------------|------------|---|
| 国10-1 | 第1面包含層 | かわらけ | (7.5) | (5.5) | 1.5 | 胎土は微細・雲母・白針を含む 棕色 ロクロ成形 |
| 2 | 第1面包含層 | かわらけ | (7.9) | (6.1) | 1.5 | 胎土は微細・雲母・白針を含む にぶい棕色 ロクロ成形 |
| 3 | 第1面包含層 | かわらけ | (8.0) | (5.3) | 1.5 | 胎土は微細・雲母・白針を含む にぶい棕色 ロクロ成形 |
| 4 | 第1面包含層 | かわらけ | (7.7) | (6.3) | 1.6 | 胎土は微細・白針を含む にぶい棕色 ロクロ成形 片口が付く |
| 5 | 第1面包含層 | かわらけ | (10.7) | (5.8) | 3.2 | 胎土は微細・雲母・白針を含む にぶい棕色 ロクロ成形 |
| 6 | 第1面包含層 | かわらけ | (12.2) | (7.7) | 3.3 | 胎土は微細・雲母・白針を含む にぶい棕色 ロクロ成形 |
| 7 | 第1面包含層 | かわらけ | (14.0) | (9.7) | 3.3 | 胎土は微細・雲母・白針を含む 棕色 ロクロ成形 |
| 8 | 第1面包含層 | 青磁 無文鏡 | / | (4.0) | / | 素地は黒色微粒を含む灰白色土 塗成堅致、硬質 色調は緑灰色半透明で厚く施釉 真口あり 内外面施釉 龍泉窓型 |
| 9 | 第1面面上 | かわらけ | (7.4) | (5.0) | (1.7) | 胎土は微細・白針・赤色粒・土丹粒を含む 明褐灰色 ロクロ成形 |
| 10 | 第1面面上 | かわらけ | (7.4) | (4.8) | (1.4) | 胎土は微細・金雲母・赤色粒・小石を含む 明褐褐色 ロクロ成形 |
| 11 | 第1面面上 | かわらけ | (7.6) | (5.4) | (1.6) | 胎土は微細・白針・赤色粒・土丹粒・小石を含む 明褐灰色 ロクロ成形 |
| 12 | 第1面面上 | かわらけ | (7.8) | (5.2) | (1.7) | 胎土は微細・白針・土丹粒・小石・輝跡を含む 明褐灰色 ロクロ成形 |
| 13 | 第1面面上 | かわらけ 灯明皿 | / | 6.0 | (2.9) | 胎土は微細・雲母・白針を含む明肌色而粉質且真土 口縁・体部にかけ内外面に厚く焼付着 |
| 14 | 第1面面上 | かわらけ | 12.2 | 7.6 | 3.4 | 胎土は微細・白針・赤色粒・土丹粒・小石を含む 棕色 ロクロ成形 |
| 15 | 第1面面上 | かわらけ | (12.1) | (7.0) | (3.0) | 胎土は微細・白針・赤色粒・土丹粒・小石を含む 棕色 ロクロ成形 |
| 16 | 第1面面上 | かわらけ | (10.8) | (5.7) | (2.9) | 胎土は微細・白針・赤色粒を含む 棕色 精良土 ロクロ成形 |
| 17 | 第1面面上 | かわらけ | (12.2) | (7.4) | (3.1) | 胎土は微細・雲母・白針・赤色粒・小石を含む 棕色 ロクロ成形 体部に現付着 |
| 18 | 第1面面上 | かわらけ | (12.8) | (7.6) | (3.2) | 胎土は微細・白針・赤色粒・土丹粒を含む 明褐色 ロクロ成形 |
| 19 | 第1面面上 | かわらけ | (12.7) | (8.0) | (3.2) | 胎土は微細・白針・土丹粒・小石を含む 褐灰色 ロクロ成形 |
| 20 | 第1面面上 | 上器質火鉢 | (45.0) | / | / | 胎土は微細・白針・赤色粒・土丹粒を含む精良土 脈の有無が黑色を、器表には黄褐色を呈す 体部に脚部を張り付けた後、0.6~0.7 cm の溝を二つ軸突孔を側面から器底に貫通 脚はハラで丸みをつける 口縁部に現付着 |
| 21 | 第1面面上 | 調整 糸状製品 | 太さ0.25 | 長2.5 | | 胎状を押して直線にすると8.8 cm |
| 22 | 第1面面上 | 銭 | | | | 「宋通寶」北宋 1058年初鋤 葦書 |
| 23 | 第1面下~第2面 | かわらけ | (7.2) | (5.2) | (1.5) | 胎土は微細・金雲母・白針・赤色粒・土丹粒を含む 棕色 ロクロ成形 |
| 24 | 第1面下~第2面 | かわらけ | (12.0) | (8.0) | (3.3) | 胎土は微細・白針・赤色粒・小石を含む 明褐灰色 ロクロ成形 |
| 25 | 第1面下~第2面 | かわらけ | (13.6) | / | / | 胎土は微細・雲母・赤色粒・小石を含む 天黄褐色 ロクロ成形 口縁部に現付着 |
| 26 | 第2面土廣1 | かわらけ | (7.0) | (4.6) | (2.1) | 胎土は微細・白針・土丹粒を含む精良土 棕色 ロクロ成形 |
| 27 | 第2面土廣1 | かわらけ | (13.8) | (9.0) | (3.5) | 胎土は微細・白針・赤色粒・土丹粒を含む 棕色 ロクロ成形 |
| 28 | 第2面下~第3面 | かわらけ | 7.4 | 5.0 | 1.7 | 胎土は微細・白針・赤色粒・土丹粒を含む 棕色 ロクロ成形 |
| 29 | 第2面下~第3面 | かわらけ | 7.3 | 5.4 | 1.9 | 胎土は微細・白針・赤色粒を含む 棕色 ロクロ成形 |
| 30 | 第2面下~第3面 | かわらけ | (13.0) | (8.0) | (3.1) | 胎土は微細・白針・赤色粒・土丹粒を含む 棕色 ロクロ成形 口縁部に現付着 |
| 31 | 第2面下~第3面 | 唐清 緋袋 丁加 | / | / | / | 胎土は微細を含む精良土 褐色 口縁部小片 |
| 32 | 第2面下~第3面 | 鉄釘 | 長8.0×幅0.3×厚0.4 | | | 角鉤 |
| 33 | 第2面下~第3面 | 漆唐籠本製品 | 残存長12.7×幅1.8×厚0.7 | | | 部材? |
| 国11-1 | 第3面遮れ物1~1 | かわらけ | (7.8) | (6.0) | (1.4) | 胎土は微細・赤色粒を含む 黑褐色 ロクロ成形 |
| 35 | 第3面遮れ物1~1 | 粗造不明本製品 | 残存長13.2×幅2.0×厚1.1 | | | |
| 36 | 第3面土廣1 | かわらけ | (14.0) | (8.8) | (3.2) | 胎土は微細・白針・赤色粒・土丹粒を含む 棕色 ロクロ成形 |
| 37 | 第3面土廣2 | 青磁 紙蓋弁文碗 | (16.4) | / | / | 胎土は微細・白針・赤色粒を含む精良土 明褐色 やや厚く内外面施釉 口縁部少片 龍泉窓型 |
| 38 | 第3面土廣3 | 鉄瓶 | 残存長18.7×幅2.0×厚1.1 | | | 平根頭 頭身部は尖端欠損のため詳細不明 頭部有 頭部は直線状を呈し台形開 台形部は断面前方形を呈す |
| 39 | 第3面土廣3 | たて飾 | 残存長16.6×最幅(7.1)×厚1.2 | | | 漆取り本製品 頭部丸く、全体を丁寧に削り、黒漆を厚く塗る |
| 40 | 第3面下~第4面 | かわらけ | (7.4) | (4.4) | (1.3) | 胎土は微細・白針・土丹粒を含む精良土 褐褐色 ロクロ成形 |
| 41 | 第3面下~第4面 | かわらけ | (11.8) | (8.0) | (3.5) | 胎土は微細・白針・赤色粒・小石を含む 明褐灰色 ロクロ成形 |
| 42 | 第3面下~第4面 | かわらけ | (12.4) | (9.4) | (3.3) | 胎土は微細・白針・小石を含む精良土 明褐灰色 ロクロ成形 塗付着 |
| 43 | 第3面下~第4面 | かわらけ | (10.1) | / | / | 胎土は微細・金雲母・白針を含む精良土 にぶい棕色 ロクロ成形 |
| 44 | 第3面下~第4面 | かわらけ | (10.2) | / | / | 胎土は微細・雲母・白針・赤色粒を含む精良土 明褐色 ロクロ成形 |

| 博国番号 | 出土地 | 器種 | 口径 (cm) | 底径 (cm) | 高さ (cm) | 胎土色調・成形・整形・備考 |
|--------|--------|--------|-------------------|------------|------------|---|
| 国11-45 | 第4面建物内 | かわらけ | (7.0) | (5.0) | (1.5) | 胎土は微緻・白針を含む稍良土 灰褐色 ロクロ成形 |
| 46 | 第4面建物内 | かわらけ | (11.0) | (5.8) | (2.8) | 胎土は微緻・金雲母・白針を含む 灰褐色 ロクロ成形 |
| 47 | 第4面建物内 | かわらけ | (11.8) | (7.6) | (3.3) | 胎土は微緻・雲母・白針・土丹粒・粘土ブロックを含む 明黄褐色 ロクロ成形 |
| 48 | 第4面建物内 | かわらけ | (10.2) | (5.4) | (3.0) | 胎土は微緻・白針を含む稍良土 棕色 ロクロ成形 |
| 49 | 第4面建物内 | かわらけ | (10.8) | (5.5) | (3.2) | 胎土は微緻・雲母・泰色粒を含む稍良土 棕色 ロクロ成形 |
| 50 | 第4面建物内 | 鉄釘 | 残存長4.3×幅0.7×厚0.45 | | | 角釘 |
| 51 | 第4面建物内 | 鉄釘 | 残存長5.0×幅0.45×厚0.2 | | | 角釘 |
| 52 | 第4面建物内 | 銛 | | | | 「天保元寶」 北宋 1023年初鑄 葉裏 |
| 53 | 武居中 | かわらけ | (12.4) | (9.0) | (3.2) | 胎土は微緻・白針・赤色粒・土丹粒・小石を含む 明褐灰色 ロクロ成形 口縁部に縦付着 |
| 54 | 武居中 | かわらけ | (12.2) | (7.4) | (3.5) | 胎土は微緻・雲母・白針・赤色粒・七月松を含む 明灰褐色 ロクロ成形 |
| 55 | 武居中 | 青白磁 梅瓶 | / | (11.5) | / | 胎土は黑色粒を含む白色稍良土 壁成堅紙・梗質 胎裏は水青色で微気泡により半透明の灰釉 内外面施釉 施釉内無物で若干の砂・粘土・胎裏付着 外部下位に0.1~0.2cm幅の周回する沈線を施す 底部片 |

第4章 まとめ

調査の結果、鎌倉時代後期～南北朝時代にかけて少なくとも4時期の生活面と、それに伴う遺構・遺物が発見された。第4面については、面上の精査前に大雨と多量の湧水によって調査区壁が崩落したため、早速関係各機関と協議を行なった。その結果、調査続行は危険と判断されたので調査を中止することになった。従って、この面では土丹版築による地業層の生活面の拡がりと遺構プランの一部を確認しただけで残念ながら未発掘である。

本調査地点は、笹目遺跡地内の笹目ヶ谷（佐々目ヶ谷）の開口部に位置しており、現在の谷戸内は住宅地が広がっているが、中世には遣身院・長薬寺などの寺院があったことが知られ、また周辺にはやぐら群が存在したり、中世以前に遡る横穴墓群や弥生時代後期から平安時代にかけての遺構・遺物も発見されている。以下、調査成果から得られた各面の年代観について若干述べてまとめたい。

第1面：この面は海拔標高10.60mで暗茶褐色粘質土を突き固めた整地した生活面で土壤・柱穴などの遺構を検出した。面上及び包含層に伴う遺物でロクロ成形かわらけの特徴は、薄手丸深型とやや厚手浅めの器形で体部上方に弱い屈曲をもつもので概ね14世紀中頃までに納まるものと考えられる。

第2面：この面は海拔標高10.45m前後で上面に細かい土丹版築を施して整地した生活面で獨立柱建物・土壤・柱穴などの遺構が検出された。出土遺物の組成から概ね13世紀末葉～14世紀前葉頃と考えられる。

第3面：この面は海拔標高10.10m前後で人頭大の大型土丹塊により構築された生活面で獨立柱建物・土壤・柱穴などの遺構が検出された。出土遺物の組成から第2面に近い時期が推定され、概ね13世紀末葉頃と考えられる。

第4面：この面は海拔標高9.65m前後で検出された細かい土丹版築の地業を施した堅牢な生活面である。遺構や面上包含層に伴う遺物は、その組成から概ね13世紀後葉と考えられる。

ところで平成15年11月に調査を実施した図1-11地点では本調査地点の北側を走る道路面（海拔標高約12.60m）とは同じ高さで14世紀代の堅牢な土丹版築による生活面が検出され、本調査地点とは顕著な標高差が認められる。生活面にそれ程の時間的な隔たりがないにも係わらず著しい比高差が生じている点は疑問を残しており、今後の周辺調査成果が待たれるところである。

【引用・参考文献】

- 大河内 勉 1991「笹目遺跡発掘調査報告書－鎌倉市笹目町330番1地点－」
笹目遺跡発掘調査団
木村美代治・1995「甘繩神社遺跡群発掘調査報告書 鎌倉消防署・長谷出張所改築に伴う緊急調査報
佐藤仁彦ほか 告書一鎌倉市長谷一丁目271番10-1」甘繩神社遺跡群発掘調査団
宗基秀明 2002「鎌倉出土の14世紀代かわらけ」「かながわの中世～鎌倉から小田原へ～ 一土器
様相を中心として」神奈川考古学会 平成13年度考古学講座
田代郁夫・ 1990「笹目遺跡内やぐら」『昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査
原 廣志 報告書』
「笹目遺跡内やぐら発掘調査団編」



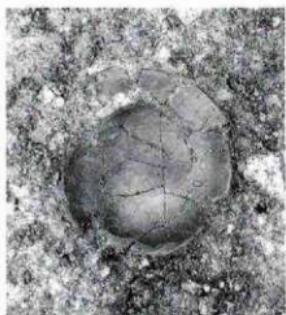
図版2



▲第1面 Pit2（東南から）



▲第1面上かわらけ出土状況（東から）



▲第1面上かわらけ出土状況（東から）



▲第1面上かわらけ出土状況（東から）

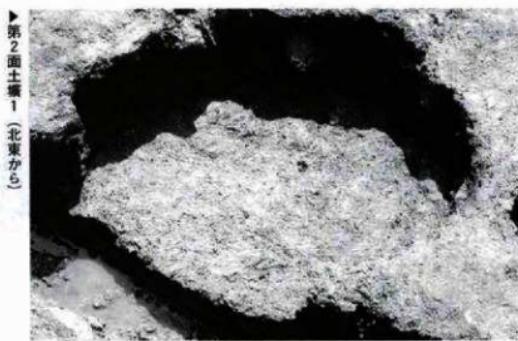
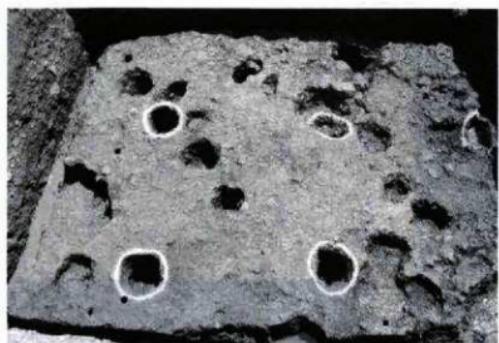


▲同上（手前は折敷）（東から）



▲第1面金環出土状況（北から）

図版3



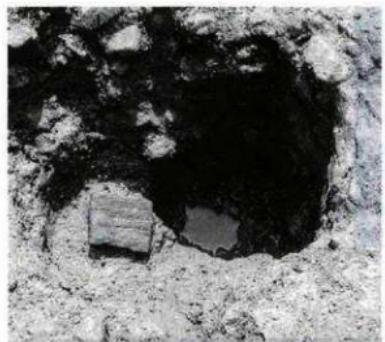
図版4



▲第2面建物1-2（東から）



▲同上-3（西から）



▲同上-4（東から）



▲同上-5（東から）



▲第3面全景（北から）



▲同上（東から）

図版6



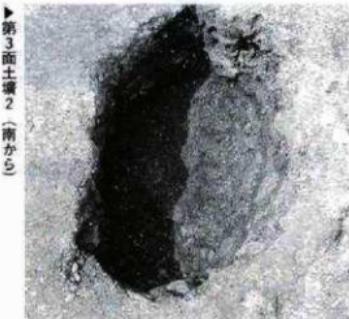
▲第3面建物1-1（南から）



▲同左-2（南から）



▲第3面土壙1-1（南から）



▲第3面土壙2-1（南から）

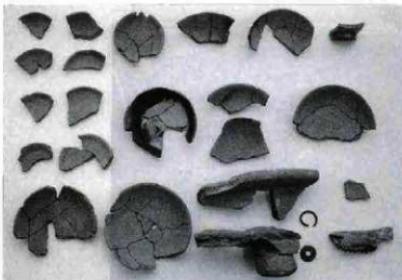


▲調査区北側崩落状況（南から）

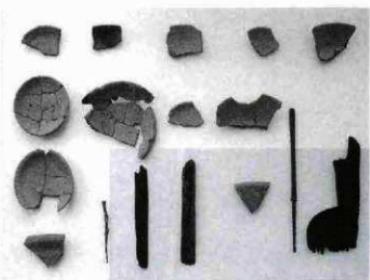
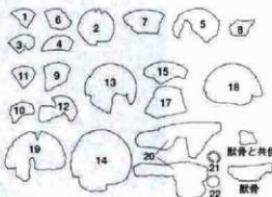


▲調査区東壁セクション（西から）

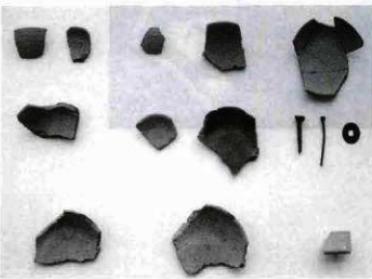
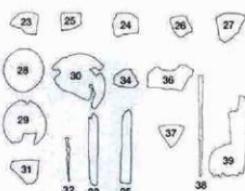
図版8



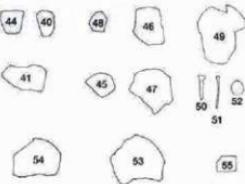
▲第1面



▲第2面、第3面



▲第4面、灰層



(番号は出土遺物実測図及び観察表の番号と対応)

おおくらばく ふ しょうへん い せきぐん
大倉幕府周辺遺跡群 (No.49)

雪ノ下四丁目567番 7 地点

例　　言

1. 本報は大倉幕府周辺遺跡群（No.49）内、雪ノ下四丁目567番7地点における埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査期間 平成14年6月25日～同年7月22日
3. 調査面積 25m²
4. 調査体制

担当者 馬淵和雄
調査員 伊丹まどか・鍛治屋勝二（資料整理）
調査補助員 石元道子・沖元道・松原康子（資料整理）・吉田智哉（同）
作業員 宮崎明・柴崎英輔・沼上三代治
5. 本報作成分担

遺構図整理 伊丹・鍛治屋・松原
遺物実測・図版作成 松原・沖元・吉田
遺物写真撮影 沖元・吉田
原稿執筆・編集・総括 馬淵
6. 報文中の「（土師器）T種」・「（同）R種」は、手づくね成形種・ロクロ成形種の略である。

目　　次

| | |
|--------------|-----|
| 第1章 調査地点について | 201 |
| 第2章 調査概要 | 204 |
| 第3章 調査成果 | 206 |
| 1. 近世 | 206 |
| 2. 鎌倉時代前期 | 206 |
| 3. 古代～平安時代末期 | 207 |
| 4. 弥生時代 | 207 |
| 第4章まとめ | 207 |

挿図目次

| | | | |
|------------------|-----|-----------------|-----|
| 図1 調査地点と近辺の遺跡・旧跡 | 202 | 図5 溝状遺構 | 207 |
| 図2 調査区設定図 | 204 | 図6 河道1出土遺物 | 208 |
| 図3 土層図 | 205 | 図7 中世以前・遺構外採集遺物 | 209 |
| 図4 遺構全図 | 206 | | |

表　　目　　次

| | | | |
|---------------------|-----|-------------|-----|
| 表1 河道1出土遺物観察表（1） | 209 | 表4 土師器技法別構成 | 210 |
| 表2 河道1出土遺物観察表（2） | 210 | 表5 器種別構成 | 211 |
| 表3 河道2および遺構外出土遺物観察表 | 210 | 表6 産地別構成 | 211 |

図版目次

| | | | |
|-----------------|-----|----------------|-----|
| 図版1-1 調査地点鳥瞰 | 212 | 図版2-2 河道（西から） | 213 |
| 1-2 調査地点近景 | 212 | 2-3 調査区全景（西から） | 213 |
| 1-3 調査区西壁土層断面 | 212 | 図版3 出土遺物 | 214 |
| 図版2-1 調査区東壁土層断面 | 213 | | |

第1章 調査地点について

位置 大倉幕府跡は、六浦道（県道金沢鎌倉線）が鵠岡八幡宮東の筋違橋交差点から旧「岐れ道」交差点（関取橋）まで約350m直線をなす、その北側一帯とされる。神奈川県遺跡台帳に「大倉幕府周辺遺跡群（No49）」とされているのは、「大倉幕府跡」に指定された場所の東・西・南側の一帯である。調査地点は幕府跡東南角から20~30mという至近の位置にあり、六浦道南側に面している。地番は鎌倉市雪ノ下四丁目567番7。なお、県道跡台帳で大倉幕府西限が横浜国大付属小学校校庭の東縁になっているのは、「鎌倉市史 総説編」（高柳1959）以来の明白な間違いである。これは明治時代の節税学校設置時に敷設された道であり、それ以前に存在した筋違橋から北上する道が幕府西限を示す。

地勢 一帯は滑川右岸の崖線上にあり、現況の河岸までの距離12~13mという至近の場所に位置する。地勢上からみれば、この付近は朝比奈峠から下ってきた川が狭い谷間を抜け、それにいくつかの支流が合流して市内中心部の沖積平野を形成し始めるあたりである。調査地点の東180mで北から二階堂川が、同じく東60mで南から大御堂川が流れ込み、さらにすぐ西側で、北から東御門川が流れ込む。調査地点の現地表標高は10.2m前後で、前面の六浦道の現況路面より30cmほど高い。また、この付近の滑川の河床が5.2m程度なので、5m前後の比高差があることになる。

歴史的環境 近在の崖線上には弥生時代中期後半~後期の大きな集落があり（地点7ほか、馬淵1998・同1999）、また律令期の集落も指呼の距離で発見されている（地点58・5、馬淵ほか1985・馬淵1993）。绳文時代の遺物も、若干高い場所になる荏柄天神社の前面で採集されている（赤星1959）。

鎌倉時代に入ると、この付近は鎌倉の中心となる。治承四年（1180）年、源頼朝の「新亭」が大倉の地に造られ、以後「大倉幕府」と呼ばれた。南北朝時代の歴史書『保暦問記』は、そこは先祖の頼義がはじめて鎌倉に居宅をかまえたところだといっているが、真偽は不明である。幕府が若宮大路の東側に移転した鎌倉時代中期以後は記事が減るが、大倉幕府東南角は、本来の二階堂大路が六浦道から分岐する地点でもあり（現在の大塔宮行きのバス通りは明治にできた道）、かつて「大倉辻」と呼ばれた場所であった可能性がある。「大倉辻」とは、鎌倉幕府が『吾妻鏡』建長三年（1251）12月3日・同文永二年（1265）3月5日の二度、「鎌倉中」の商業地区を指定したときに現れる地名である（『吾妻鏡』同日条）。鎌倉後期に調査地点一帯がかなり繁華な場所であったことがうかがえる。

また、滑川をはさんだ調査区東南の谷には、頼朝が父義朝および義朝と同時に死んだ鎌田正清追福のために建立した勝長寿院があった。谷の名称はそれにちなんで「大御堂ガ谷」という。大倉御所の南にがあるので、「南御堂」ともいう。寺の造営は元暦元年（1184）11月26日に「地曳始」がおこなわれて始まり、文治元年（1185）10月24日の「供養」で完成をみている（『吾妻鏡』同日条）。魔絶時期についてはよくわかっていないが、『快元僧都記』天文九年（1540）9月23日条に、遷宮のときの「簾中方の社參のこと、勝長寿院に尋ねられ」とあるのを最後に健在を示す記事は見当たらなくなる。調査区のすぐ東の滑川にかかる橋を「大御堂橋」という。

大倉幕府東南角の関取橋西詰には、天文十七年（1548）、北条氏康により荏柄社造営料徵収のための閻所が置かれた（「荏柄天神社造営閻定書案」『神奈川県史 資料編』3-6863）。以来この地には「関取場」の名がついた。賦課の対象は「商人方」と「道者方」に分けられ、荷物や馬に閻銭がかけられている。また他国への飛脚からも徵収しているが、往来の道俗や地元民には課していない。関取場については、発掘調査でもそれらしき礎石建物が発見されている（地点18、馬淵ほか1990）。

その他近辺の発掘調査地点については、図1を参照してほしい。



図1 調査地点と近辺の遺跡・旧跡（網目内が大倉幕府周辺遺跡群）

図1 調査地点名

調査地点名の「地點」「道路」は省略。発行者が鎌倉市教育委員会の場合を省略。調査団の名称が道路名と同じ場合は「調査団」とのみ記す。

略称はつきのとおり

「市緊急報告書」—「鎌倉市理歴文化財緊急調査報告書」

「急傾斜地報告書」—「鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」

- 大倉幕府周辺遺跡群 (No.49)** 1. 雪ノ下四丁目567番7 (本地点) 2. 雪ノ下字大倉耕地562番16 (菊川英1991「市緊急報告書」17-2) 3. 雪ノ下字天神前562番29 (福田はか1996「市緊急報告書」12-1) 4. 雪ノ下字大倉耕地565番4 (菊川英1991「市緊急報告書」7) 5. 二階堂字花柄38番1 (馬瀬1993「市緊急報告書」9-2) 6. 二階堂字花柄58番4 (原はか2002「市緊急報告書」18-1) 7. 雪ノ下四丁目2-23 (1980-1981年調査、未報告) 8. 雪ノ下四丁目620番5 (馬瀬1998「市緊急報告書」14-2/同1999「大倉幕府周辺遺跡群一雪ノ下四丁目620番5地点一」調査団) 9. 大倉南御門 (1980年河野真知郎調査、未報告) 10. 雪ノ下四丁目620番4 (1984年市教委立会い調査、未報告) 11. 大倉南御門B (1983年市教委立会い調査、未報告) 12. 雪ノ下四丁目610番2 (1983-1984年玉林美男調査、未報告) 13. 大倉南御門 (1980年手塚直樹調査、未報告) 14. 雪ノ下三丁目606番1 (菊川英1991「市緊急報告書」9-3) 15. 雪ノ下三丁目1607番はか (菊川英1994「市緊急報告書」10-1) 15b. 雪ノ下四丁目580番101はか (原はか2001「市緊急報告書」17-2)

- 大倉幕府跡 (No.253)** 16. 雪ノ下三丁目618番 (沙見はか2002「市緊急報告書」18-1) 17. 雪ノ下三丁目1651番8はか (沙見1999「市緊急報告書」15-2) 18. 雪ノ下字大倉耕地569番1 (馬瀬はか1990「大倉幕府周辺遺跡群一雪ノ下字大倉耕地569番1地点一」調査団) 19. 雪ノ下四丁目707番1 (1990年宮田真調査、未報告)

- 政所跡 (No.247)** 20. 雪ノ下三丁目965番1 (瀬田1992「市緊急報告書」8) 21. 雪ノ下三丁目966番1 (瀬田1992「市緊急報告書」8) 22. 雪ノ下三丁目970番2 (1991年手塚直樹調査、未報告) 23. 雪ノ下三丁目970番2はか (野本1999「市緊急報告書」15-2) 24. 雪ノ下三丁目987番1・2 (手塚はか1991、調査団) 25. 雪ノ下三丁目987番 (手塚はか1993「市緊急報告書」9-3) 26. 雪ノ下三丁目989番4 (宗義秀はか2001「市緊急報告書」17-1)

- 鶴岡八幡宮旧境内 (No.56)** 27. 宿泊棟用地 (1991年齊木秀雄調査、未報告) 28. 研修道場用地 (齊木はか1983、調査団)

29. 真幸用地 (齊木はか1983、調査団) 30. 国宝御厨成楽用地 (松尾はか1985)

- 北条小町跡 (No.282)** 31. 雪ノ下一丁目1395番はか (菊川英1989「市緊急報告書」5) 32. 雪ノ下一丁目401番5 (馬瀬はか2003「市緊急報告書」19) 33. 雪ノ下一丁目400番1 (馬瀬はか2002「市緊急報告書」18-2) 34. 雪ノ下一丁目432番2 (菊川英1989「市緊急報告書」5)

- 北条高時跡 (No.281)** 35. 小町三丁目426番3 (原はか1996「市緊急報告書」12-1)

- 東勝寺跡 (No.246)** 36. 小町三丁目468番10 (宮田2002「市緊急報告書」18-1) 37. 第1・2次調査 (赤星はか1977「東勝寺跡」調査団) 38-40. 第3次調査 (菊川英はか1998「東勝寺跡」) 41. 小町三丁目523番14 (沙見はか2001「市緊急報告書」17-2)

- 田麻辻子周辺遺跡 (No.33)** 42. 清明寺宇佐道堂621番はか (手塚はか1989「清明寺宇佐道堂ヶ谷遺跡」調査団) 43. 船通堂ヶ谷 (1970年奥田直栄調査、未報告) 44. 清明寺田若王子道跡 (手塚はか1990「船通堂田楽王子道跡-清明寺宇佐道堂658番地点一」調査団) 45. 清明寺一丁目661番はか (森2000「市緊急報告書」16-1) 46. 清明寺宇宅間562番33 (大上1992「市緊急報告書」8)

- 淨妙寺旧境内遺跡 (No.408)** 47. 清明寺三丁目6番3はか地点 (大河内1996「市緊急報告書」12-2) 48. 清明寺三丁目16番1地点 (宗義秀2002「市緊急報告書」18-2)

- 杉本寺周辺遺跡 (No.158)** 49. 杉本寺前ポンプ場 (1985年市教委立会い調査、未報告) 50. 二階堂字杉本912番1はか地点 (馬瀬はか2002「杉本寺周辺遺跡」) 51. 杉本寺境内 (未報告) 52. 杉本寺周辺遺跡内やぐら (田代1988a「昭和62年度急傾斜地報告書」調査団) 53. 杉本寺周辺遺跡内やぐら (田代はか1996「平成6年度急傾斜地報告書」調査団) 54. 杉本寺跡内やぐら (継はか1991「平成元年度急傾斜地報告書」調査団)

- 横小路周辺遺跡 (No.259)** 55. 二階堂字花柄9番1 (菊川英1990「市緊急報告書」6) 56. 二階堂字花柄10番6はか (福田はか2000「市緊急報告書」16-2) 57. 雪ノ下五丁目11557番1地点 (野本1998「市緊急報告書」14-2) 58. 向莊柄遺跡 (馬瀬はか1985「向莊柄遺跡発掘調査報告書」) 59. 向莊柄遺跡第2地点 (馬瀬はか1985「向莊柄遺跡発掘調査報告書」) 60. 二階堂字横小路11番3地点 (宗義秀はか1996「横小路周辺遺跡-永福寺開闢遺跡の調査」調査団) 61. 二階堂字横小路89番11地点 (野本はか1999「市緊急報告書」15-2)

- 理智光寺跡 (No.265)** 62. 二階堂字福業越802番7地点 (大河内はか1991「市緊急報告書」7)

- 報国寺境内 (No.)** 63. 報国寺境内やぐら (田代1988「昭和62年度急傾斜地報告書」調査団) 64. 報国寺境内やぐら (田代1994「平成5年度急傾斜地報告書」調査団) 報国寺旧境内 (1979年齊木秀雄調査、未報告)

第1章引用・参考文献（上記以外）

- 赤星直忠1959 「鎌倉市史 考古編」吉川弘文館
高柳光寿1959 「鎌倉市史 能編」吉川弘文館

第2章 調査概要

調査にいたる経緯 平成14年4月、個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、基礎工事に際して地盤の柱状改良をおこなうものであったため確認調査を実施したところ、現地表下40cm以下に中世遺物包含層および遺構面の存在が確認され、これにより当該土木工事による埋蔵文化財への影響が避けられないことが判明した。建築主との協議において工事計画の変更は困難との意向が示されたため、文化財保護法第57条の2の届出手続きを行い、施工者との工程調整および発掘調査の準備が整った平成14年6月25日から7月22日まで現地での発掘調査を実施した。

測量方眼の設定 基準線は測量の便宜を優先し、調査区壁方向に平行または直交させた。まず調査区外北西の任意点を基準1-Aとし、そこから東に算用数字を付した南北軸を、南にアルファベットを付した東西軸を5mおきに派生させた。ただし調査区が狭いため、実際に中を通過するのは2軸とB軸のみである。交点2-Bの座標成果はつぎのとおり。

【AREA A9】 X-75 407.800 Y-24324.900 (鎌倉市4級 No.176・183を使用)

X系と2軸の偏差 N-36° 52' -E

調査経過 調査は平成14年6月25日から7月22日まで実施した。その間のおもな経過はつぎのとおり。

- 6月25日 作業開始
- 7月2日 河道掘削開始
- 7月6日 中世河道写真撮影と平面実測
- 7月10日 台風
- 7月15日 中世以前河道写真撮影
- 7月16日 台風
- 7月18日 全景写真撮影と深掘り
- 7月22日 機材撤収

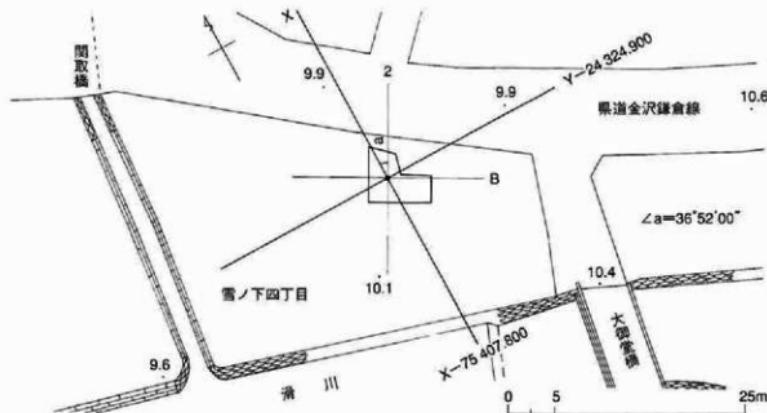


図2 調査区設定図

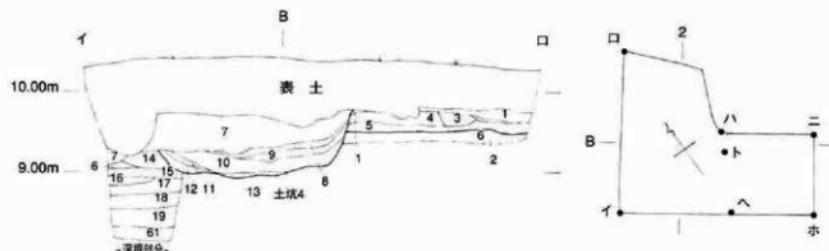


図3 土層図

第3章 調査成果

1. 近世

表土は50~70cmの厚みがあり、それを除くと近世面がある。この面は暗褐色粘質土または灰褐色砂質土で構成され、西半部が一段落ちる。この落ちた線以西の1・2-Bに、円形土坑2基（土坑3・4）が検出された。なお土坑1・2は近・現代の擾乱坑であり、省略した。

土坑3（図3調査区中央部南北土層断面および図4近世遺構全図参照、個別図は省略）

位置：1・2-B 大きさ：直径3m（推計）・深さ52cm

平面形：円形 断面形：逆台形 主軸方位：不明

充填土：図3参照 出土遺物：なし

土坑4（図3調査区西壁土層断面および図4近世遺構全図参照、個別図は省略）

位置：1-A・B 大きさ：直径2.22m・深さ80cm

平面形：円形 断面形：逆台形 主軸方位：不明

充填土：図3参照 出土遺物：なし

2. 鎌倉時代前期

近世層は20~25cmの厚みがあり、その直下に中世基盤層の灰黄褐色粘土がはやくも現れる。このことは、調査地点が近世に基盤層まで削り取られたことを示すものだろう。この層からは、調査区東南部の2-Bで急傾斜の壁を持つ東西方向の大型の落込みを、また、西南角の1-Bで溝状の遺構を検出した。前者は、位置からみて旧滑川の岸（右岸）の可能性が高い。

河道1（図3調査区北・東・中央部南北土層断面図および図4鎌倉時代前期遺構全図参照、個別図は省略）

位置：2-B 規模：幅1.5m（調査区内現況）以上・深さ1.9m（同前）以上 平面形：やや西南方向に曲がり、非直線的 主軸方位：N-80°-W（上流からみて）前後 充填土：図3参照 出土遺物：図6・表1・2参照

特記事項：堆積土中に3枚の厚い炭化層があり、それぞれが一時期の川床だったとみられる。底面を入れると4期の変遷がたどれる。いずれの炭化層にも相当量の遺物が含まれていたが、いずれも手づくねの京都系土師器皿が多くみられ、鎌倉時代前期までにおさまるとみてよい。

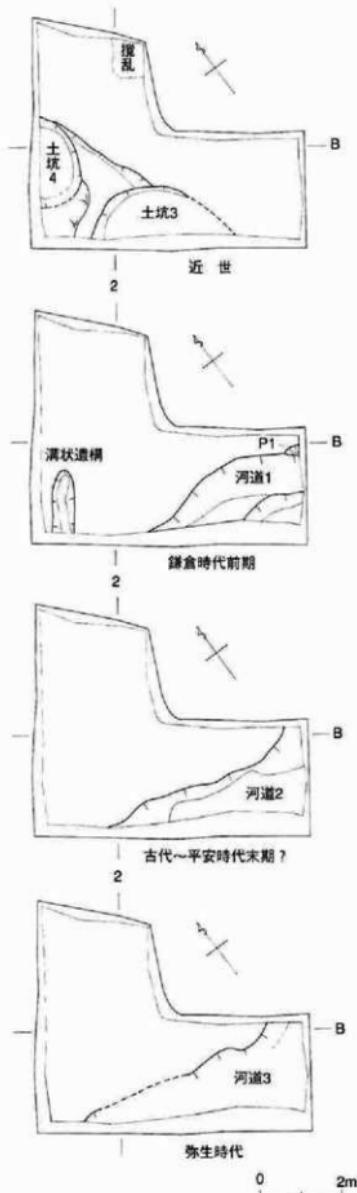


図4 遺構全図

3. 古代～平安時代末期

河道1を除くと、下にあらたな落込みが出現する。これもまた河岸だと考えられる。

河道2（図3調査区北・東土層断面図および図4古代～平安時代末期遺構全図参照、個別図は省略）

位置：2-B 規模：幅1.8m（調査区内現況）

以上・深さ0.98m（同前）以上 平面形：やや北東方向に曲がり、非直線的 主軸方位：N=85°-W

（上流からみて）前後 充填土：図3参照 出土遺物：図7・表3参照

特記事項：河道1に切られる。詳細な年代は不明だが、古代もしくは平安時代末期の中世に属する遺構であろう。図7-1は弥生時代中期後半～後期の高坏。

4. 弥生時代

河道らしき落込みを検出した。位置は上記2条の河道とさほど変わらない。

河道3（図3調査区北・東土層断面図および図4弥生時代遺構全図参照、個別図は省略）

位置：1・2-B 規模：幅2m（調査区内現況）以上・深さ0.9m（同前）以上 平面形：やや北東方向に曲がり、非直線的 主軸方位：N=82°-W（上流からみて）前後 充填土：図3参照 出土遺物：図化可能なものなし

特記事項：図化し得なかったが、出土遺物には弥生時代中期後半～後期のものがみられる。当該期の集落は調査地点の西側に広く確認されている。

第4章 まとめ

滑川旧流路について簡単に触れておきたい。

調査区東南部を斜めによぎる急傾斜の大きな落込みが検出された。第3章でも指摘したとおり、位置からいってまずは滑川の古い右岸とみてよい。弥生時代中期後半に始まり、鎌倉時代前期まではほぼ同じ場所にあった。以後はこの地から現在の滑川により近い方向（南）に移っていったのだろう。いずれの時代にも護岸らしき施設はない。

鎌倉時代前期の流路は、この時代のみでも4時期に分かれ、底面を除く3時期に炭化層が堆積していた。中期以後現況河川寄りに移行する契機として何らかの人為を想定するしかないが、あるいは北条泰時がおこなったという朝比奈切通し開鑿（実際には改良か=石井1986・馬淵1994など）にともなう六浦道整備があったのかもしれない。

この地は近世に、中世遺構がほとんど残らないほど削り取られている。天文十七年（1548）の北条氏康による閑取場造営に関連しているのだろうか。

注

石井進1986「中世六浦の歴史」「三浦古文化」第40号 三浦古文化研究会

馬淵和雄1994「武士の都鎌倉 一その成立と構想をめぐってー」「都市鎌倉と坂東の海に答る」新人物往来社

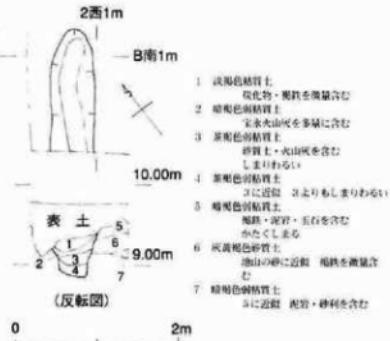
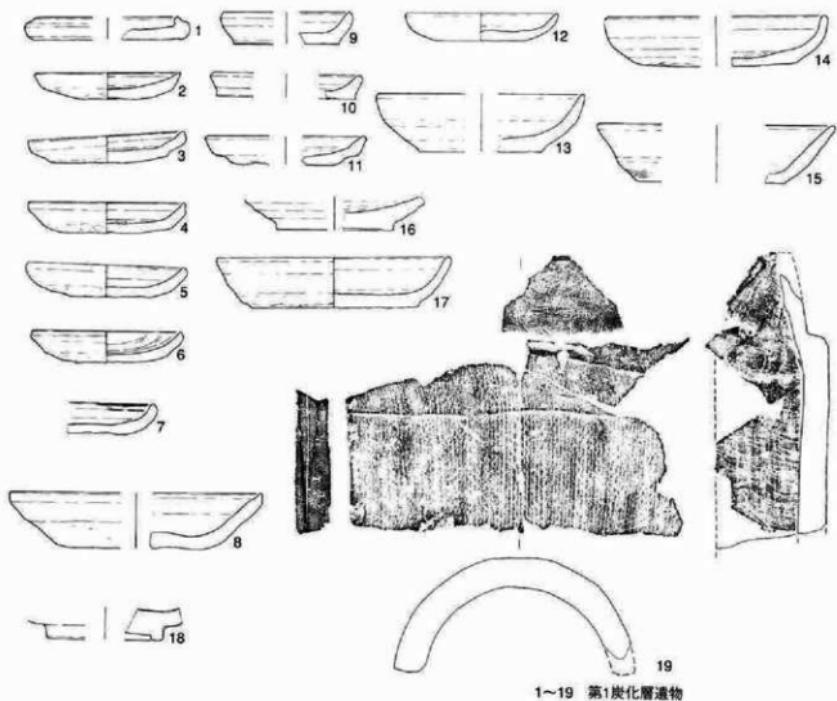
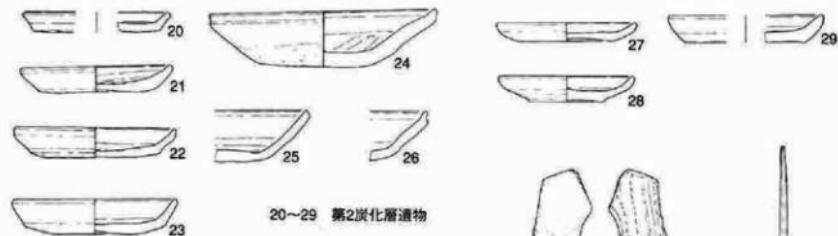


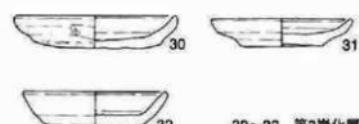
図5 溝状遺構



1~19 第1炭化層遺物

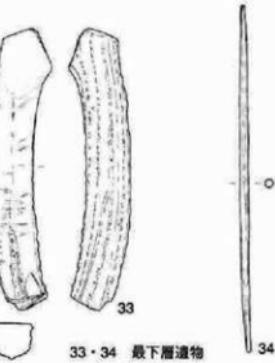


20~29 第2炭化層遺物



30~32 第3炭化層遺物

0 10cm



33·34 最下層遺物

図6 河道1出土遺物

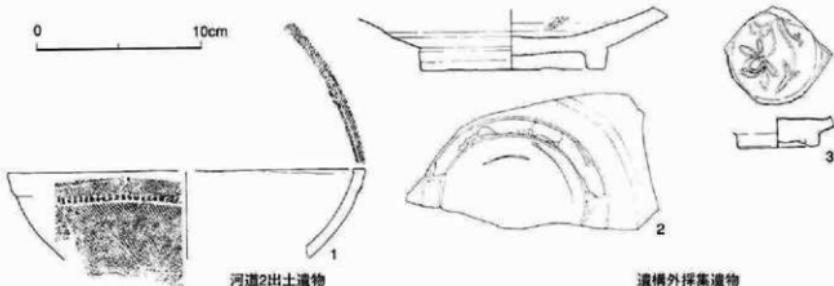


図7 中世以前・遺構外採集遺物

| 番号 | 種別 | 大きさ | せいけい | 墓地・胎土 | その他特徴など |
|-------|--------------|-----------------------|--|-------|---------|
| 第1文化層 | 1 土師器 T種内折小型 | 口径(10.2cm) 底径(9.2cm) | 器高1.4cm 手づくね後内底部口縁部ナダ 胎土は淡褐色で黒雲母細片、白色針状物質を含む 焼成良好 | | |
| | 2 土師器 T種小型 | 口径8.8cm 底径3.4cm | 器高1.65cm 手づくね後内底部口縁部ナダ 外底面に擦痕あり 胎土は淡橙色(表面)～灰黑色(胎芯)で白色針状物質を含む 焼成さわめて良好 | | |
| | 3 土師器 T種小型 | 口径9.5cm 底径4.1cm | 器高1.7cm 手づくね後内底部口縁部ナダ 外底面板状圧痕 胎土は淡橙色(表面)～灰黑色(胎芯)で黒雲母細片、白色針状物質を含む 焼成良好 | | |
| | 4 土師器 T種小型 | 口径9.5cm 底径4.4cm | 器高1.9cm 手づくね後内底部口縁部ナダ 胎土は淡橙色(表面)～灰褐色(胎芯)で黒雲母細片を含む 焼成さわめて良好 | | |
| | 5 土師器 T種小型 | 口径(9.5cm) 底径(4.2cm) | 器高2.0cm 手づくね後内底部口縁部ナダ 外底面に擦痕あり 胎土は淡橙色(表面)～灰褐色(外底面)で黒雲母細片、白色針状物質を含む 焼成良好 | | |
| | 6 土師器 T種小型 | 口径9.15cm 底径3.9cm | 器高1.95cm 手づくね後内底部口縁部ナダ 胎土は赤橙色(表面)～灰褐色(胎芯)で黒色粒子を含む 焼成さわめて良好 | | |
| | 7 土師器 T種小型 | 手づくね後内底部口縁部ナダ | 11縁と内底面中央に油膜付着 胎土は淡橙色(表面)～灰褐色(胎芯)で黒雲母細片、白色針状物質を含む 焼成良好 | | |
| | 8 土師器 T種大型 | 口径(15.6cm) 底径(7.6cm) | 器高3.4cm 手づくね後内底部口縁部ナダ 胎土は淡褐色(表面)～暗灰色(胎芯)で黒雲母細片、白色針状物質を含む 焼成良好 | | |
| | 9 土師器 R種小型 | 口径(7.8cm) 底径(6.4cm) | 器高2.0cm 右回転ロクロ 底部回転糸きり 内底部ナダ 胎土は淡褐色で黒雲母細片、白色針状物質を含む 焼成良好 | | |
| | 10 土師器 R種小型 | 口径(9~0cm) 底径(8.4cm) | 器高1.5cm 右回転ロクロ 底部回転糸きり 内底部ナダ確認できず 胎土は淡橙色で白色針状物質を含む 焼成良好 | | |
| | 11 土師器 R種小型 | 口径(9.6cm) 底径(5.7cm) | 器高1.8cm 右回転ロクロ 底部回転糸きり 内底部ナダ 外底面板状圧痕 胎土は淡褐色(表面)～灰黑色(内底部中央)で黒雲母細片、白色針状物質を含む 焼成良好 | | |
| | 12 土師器 R種小型 | 口径(9.1cm) 底径(5.4cm) | 器高1.7cm 右回転ロクロ 底部回転糸きり 内底部ナダ 胎土は淡褐色(表面)～灰黑色(内底部中央)で黒雲母細片、白色針状物質を含む 焼成良好 | | |
| | 13 土師器 R種大型 | 口径(12.6cm) 底径(7.6cm) | 器高3.6cm 右回転ロクロ 底部回転糸きり 内底部ナダ 外底面板状圧痕 胎土は淡褐色で黒雲母細片、白色針状物質を含む | | |
| | 14 土師器 R種大型 | 口径(13.4cm) 底径(9.1cm) | 器高3.1cm 右回転ロクロ 底部回転糸きり 内底部ナダ 外底面板状圧痕 胎土は淡褐色で黒雲母、白色針状物質を含む | | |
| | 15 土師器 R種大型 | 口径(14.4cm) 底径(8.9cm) | 器高3.6cm 右回転ロクロ 底部回転糸きり 内底部ナダ確認できず 胎土は淡橙色(表面)～灰褐色(胎芯)で黒雲母細片、赤色粒子、白色針状物質を含む 焼成良好 | | |
| | 16 土師器 R種大型 | 底径(7.2cm) | 右回転ロクロ 底部回転糸きり 内底部ナダなし 胎土は明淡橙色で黒雲母細片、赤色粒子を含む 焼成さわめて良好 | | |
| | 17 土師器 R種大型 | 口径(14.3cm) 底径(10.1cm) | 器高3.1cm 右回転ロクロ 底部回転糸きり 内底部ナダ 外底面板状圧痕 胎土は淡褐色(表面)～赤橙色(胎芯)で黒雲母細片、白色針状物質を含む 焼成良好 | | |
| | 18 龍泉窯青釉碗 | 底径(6.8cm) | ロクロ成型 切り出し高台 胎土は灰褐色で緻密 軸部は灰緑色で透明 外底面は滑脂 | | |
| | 19 丸瓦 | 長径18.2cm 幅(14.8cm) | 高さ7.1cm 最大厚1.9cm 凸面觸目 凹面布目 腹面ヘラ削り 胎土は灰褐色(表面)～明褐色(胎芯)で黒雲母細片、小石片を含む | | |

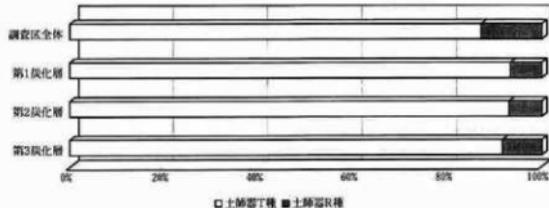
表1 河道1出土遺物観察表(1)

| 番号 | 種別 | 大きさ | せいけい | 葉地・胎土 | その他特徴など |
|------|-----------------------------|----------------------------|------------------|----------------|------------------|
| 146 | 上師器皿 | 口径(8.8cm) 底径(5.2cm) | 高さ1.25cm | 手づくね後内底部口縁部ナデ | |
| 20 | T種小型 | 胎土は淡褐色(表面)～明褐色(胎芯) | で黒雲母細片、白色針状物質を含む | | |
| 21 | 上師器皿 | 口径9.2cm 底径6.0cm | 高さ1.6cm | 手づくね後内底部口縁部ナデ | |
| T種小型 | 胎土は淡褐色(表面)～灰褐色(胎芯) | で黒雲母細片、白色針状物質を含む | 燒成さわめて良好 | | |
| 22 | 上師器皿 | 口径9.8cm 底径6.0cm | 高さ1.8cm | 手づくね後内底部口縁部ナデ | 外底面板状正直 |
| T種小型 | 胎土は明褐色(表面)～灰褐色(胎芯) | で黒雲母細片、白色針状物質を含む | 燒成さわめて良好 | | |
| 23 | 上師器皿 | 口径9.9cm 底径5.9cm | 高さ2.15cm | 手づくね後内底部口縁部ナデ | |
| T種小型 | 胎土は明褐色(表面)～灰褐色(胎芯) | で黒雲母細片、白色針状物質を含む | 燒成さわめて良好 | | |
| 24 | 上師器皿 | 口径(13.8cm) 底径(4.2cm) | 高さ(3.4cm) | 手づくね後内底部口縁部ナデ | 外底面板状正直 |
| T種大型 | 胎土は淡褐色(表面)～明褐色(胎芯) | で黒雲母細片、白色針状物質を含む | 燒成さわめて良好 | | |
| 25 | 上師器皿 | 手づくね後内底部口縁部ナデ | | | |
| T種大型 | 胎土は明褐色で黒雲母細片を含む | 燒成さわめて良好 | | | |
| 26 | 上師器皿 | 手づくね後内底部口縁部ナデ | | | |
| T種大型 | 胎土は明褐色(表面)～明灰褐色(胎芯) | で黒雲母細片を含む | 燒成さわめて良好 | | |
| 27 | 上師器皿 | 口径(8.4cm) 底径(5.8cm) | 高さ1.65cm | 右回転ロクロ 底部回転糸きり | 内底部ナデなし |
| T種小型 | 胎土は明褐色で黒雲母細片を含む | 燒成さわめて良好 | | | |
| 28 | 上師器皿 | 口径(8.1cm) 底径(4.6cm) | 高さ1.6cm | 右回転ロクロ 成形回転糸きり | 内底部ナデなし |
| T種小型 | 胎土は淡褐色で黒雲母細片、白色針状物質を含む | 燒成さわめて良好 | | | |
| 29 | 上師器皿 | 口径(9.4cm) 底径(7.4cm) | 高さ1.7cm | 右回転ロクロ 底部回転糸きり | 内底部ナデ |
| T種小型 | 胎土は明褐色で黒雲母細片を含む | 燒成良好 | | | |
| 30 | 上師器皿 | 口径9.8cm 底径4.3cm | 高さ2.0cm | 手づくね後内底部口縁部ナデ | 外底面に擦痕あり |
| T種小型 | 胎土は明褐色で黒雲母細片、白色針状物質を含む | 燒成さわめて良好 | | | |
| 31 | 上師器皿 | 口径(8.5cm) 底径(5.0cm) | 高さ(1.7cm) | 右回転ロクロ 底部回転糸きり | 内底部ナデなし 口縁部に油漬付着 |
| R種小型 | 胎土は明褐色で黒雲母細片、赤色粒子、白色針状物質を含む | 燒成さわめて良好 | | | |
| 32 | 上師器皿 | 口径(8.6cm) 底径(5.2cm) | 高さ2.3cm | 右回転ロクロ 底部回転糸きり | 内底部ナデなし |
| R種大型 | 胎土は明褐色で小石片を含む | 燒成良好 | | | |
| 33 | 鹿角未製品 | 長さ17.8cm 最大幅2.2cm 最大厚2.8cm | 両端及び平坦な面にノコギリ痕 | | |
| 34 | 著 | 残長21.4cm 幅0.5cm 厚さ0.5cm | 両口 | ほぼ完形 | |

表2 河道1出土遺物観察表(2)

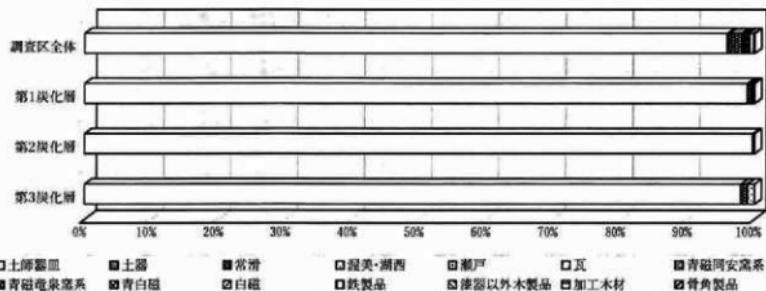
| 番号 | 種別 | 大きさ | せいけい | 葉地・胎土 | その他特徴など |
|-----|-------------------|--------------------------|-----------------------------|-----------------|-------------------------------------|
| 河道2 | 1 赤生土器 高 | 口径(22.0cm) | 外面及び口縁部に羽状捲文 内面にはミガキのち赤彩 | | |
| | | 胎土は明褐色で黒雲母細片、赤色粒子、小石片を含む | | | |
| 道構外 | 2 唐津 鉢 | 底径(11.1cm) | 左口クロ回転 溝り出し高台 高台に移行する剥離が4ヶ所 | 内面にも4ヶ所の砂目積みの痕跡 | 内底部ナデなし 口縁部に油漬付着 |
| | | 胎土は淡褐色で緻密 | 燒成良好 | 1610~17世紀第3四半期 | 二彩手唐津 |
| 3 | 蓮泉窯青磁 西花文 碗 | 底径4.6cm | ロクロ成形 刻り出し高台 | 胎土は明灰色で緻密 | 胎釉は灰緑色で透明 外底面露胎 高台内に窓クソ付着 内底面に蓮華唐草文 |

表3 河道2および遺構外出土遺物観察表



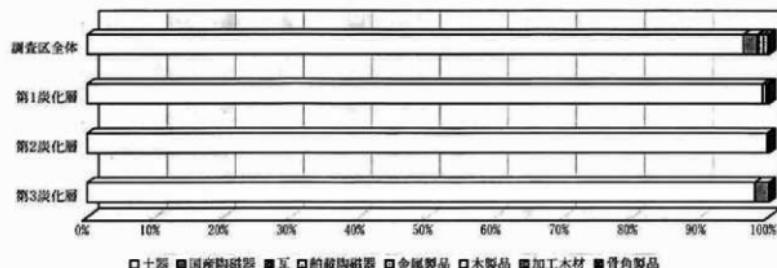
| 調査区 | 土師器工種 | 土師器器種 | 計 |
|-------|-------------|------------|------|
| 調査区全体 | 1999 87.06% | 297 12.94% | 2296 |
| 第1炭化層 | 1348 93.29% | 97 6.71% | 1445 |
| 第2炭化層 | 345 92.99% | 26 7.01% | 371 |
| 第3炭化層 | 87 91.58% | 8 8.42% | 95 |

表4 土師器技法別構成



| | I面 上層 | I面 下層 | II面 | 調査区全体 |
|--------|-------------|------------|------------|-------------|
| 土器 | 1445 58.90% | 371 99.73% | 95 97.94% | 2296 95.87% |
| 土器 | 2 0.14% | 0 0.00% | 0 0.00% | 8 0.33% |
| 常滑 | 7 0.48% | 0 0.00% | 1 1.05% | 43 1.80% |
| 瀬戸・瀬戸 | 1 0.07% | 0 0.00% | 1 1.05% | 5 0.21% |
| 白磁 | 0 0.00% | 0 0.00% | 0 0.00% | 1 0.04% |
| 五 | 3 0.21% | 0 0.00% | 0 0.00% | 6 0.25% |
| 青磁同安窯系 | 1 0.07% | 0 0.00% | 0 0.00% | 3 0.13% |
| 青白磁 | 1 0.07% | 0 0.00% | 0 0.00% | 8 0.33% |
| 青白磁 | 0 0.00% | 0 0.00% | 0 0.00% | 2 0.08% |
| 白磁 | 1 0.07% | 0 0.00% | 0 0.00% | 2 0.08% |
| 鐵製品 | 0 0.00% | 1 0.27% | 0 0.00% | 16 0.67% |
| 木製品 | 0 0.00% | 0 0.00% | 0 0.00% | 3 0.13% |
| 加工木材 | 0 0.00% | 0 0.00% | 0 0.00% | 1 0.04% |
| 骨角製品 | 0 0.00% | 0 0.00% | 0 0.00% | 1 0.04% |
| 計合 | 1461 100% | 372 100% | 97 100.00% | 2295 100% |

表5 產地別構成



| | I面 上層 | I面 下層 | II面 | 調査区全体 |
|-------|-------------|------------|------------|-------------|
| 土器 | 1447 99.04% | 371 99.73% | 95 97.94% | 2304 96.20% |
| 国産陶磁器 | 8 0.56% | 0 0.00% | 2 2.06% | 49 2.05% |
| 五 | 3 0.21% | 0 0.00% | 0 0.00% | 6 0.25% |
| 韓製陶磁器 | 3 0.21% | 0 0.00% | 0 0.00% | 15 0.63% |
| 金属製品 | 0 0.00% | 1 0.27% | 0 0.00% | 16 0.67% |
| 木製品 | 0 0.00% | 0 0.00% | 0 0.00% | 3 0.13% |
| 加工木材 | 0 0.00% | 0 0.00% | 0 0.00% | 1 0.04% |
| 骨角製品 | 0 0.00% | 0 0.00% | 0 0.00% | 1 0.04% |
| 計合 | 1461 100% | 372 100% | 97 100.00% | 2305 100% |

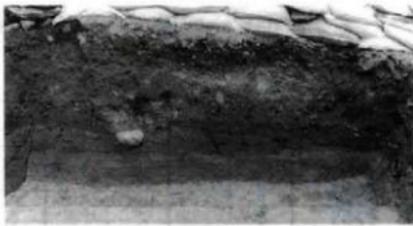
表6 器種別構成

図版1



1. 調査地点鳥瞰 (白い丸印)

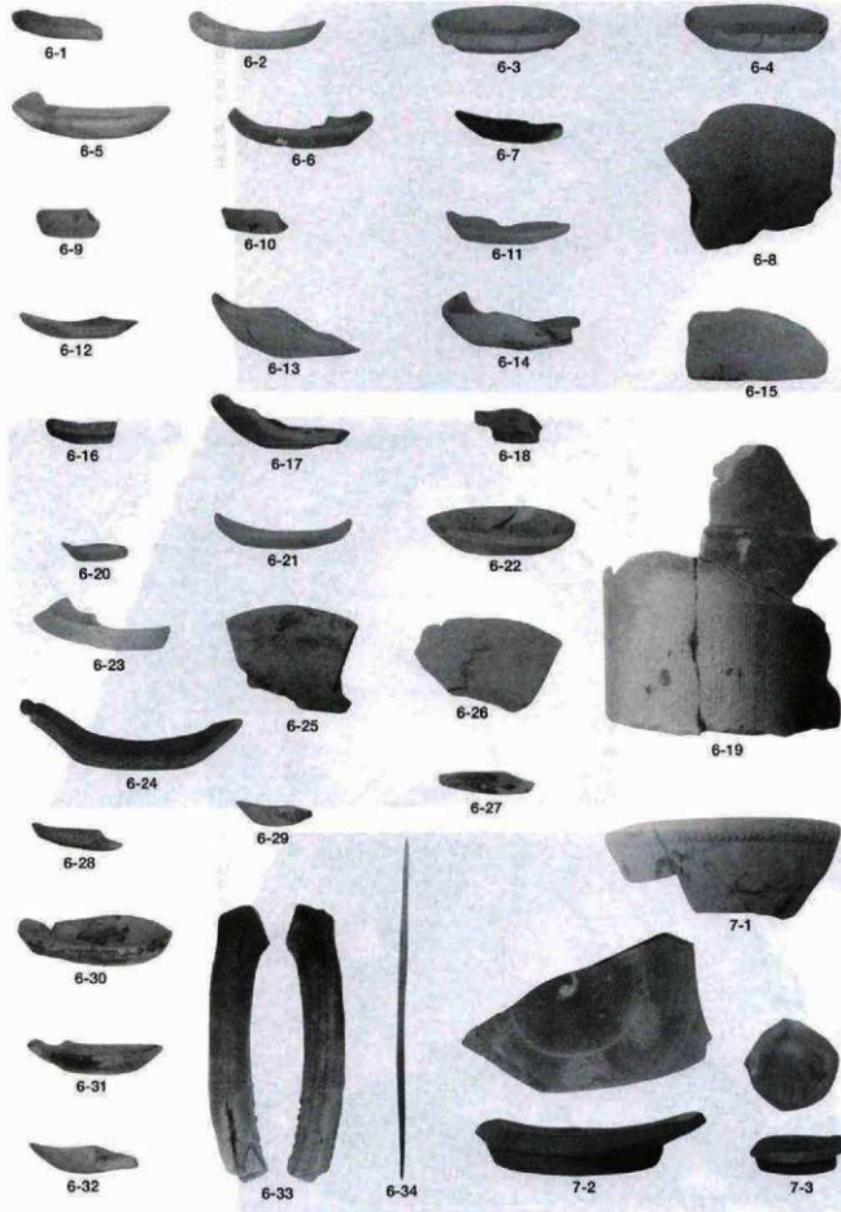
2. 手前の道路が六浦道
調査地点近景



3. 調査区西壁土層断面



図版3



はせこうじしきうへんいせき
長谷小路周辺遺跡 (No.236)

由比ガ浜三丁目194番50地点

例　　言

1. 本報文は、長谷小路周辺遺跡（神奈川県遺跡台帳No.236）内、鎌倉市由比ガ浜三丁目194番50地点に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、個人専用住宅建設に先立ち平成14年7月1日から7月25日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は51.75m²。
3. 調査体制は以下の通り。

調査員 沙見 一夫 鎌治屋勝二 松原 康子

調査補助員 沖元 道 鈴木 弘太

調査協力者 中須 洋二 町田 義一 渡邊 毅彦

4. 本報文の整理作業は、主に遺構図の整理を沙見が、遺物の実測及び全挿図のトレースと版組みを小泉衣理が行った。中世以前の遺物は、実測から原稿に至るまでの全てを押木弘巳氏（鎌倉遺跡調査会）が行った。原稿執筆は第1章・第2章・第3章の遺構を沙見が、第3章の1・2の遺物は小泉が、第3章の3は押木が、第4章は執筆者討議の上沙見が文責を負い全体の編集を行なった。又、本報文に使用した写真は遺構関係を沙見と鎌治屋が、遺物を小泉・押木が撮影した。
5. 発掘調査から本報文作成に至るまでに、以下の各氏及び機関から御教示と御協力を賜った。
田鎌倉市シルバー人材センター 鎌倉考古学研究所 東国歴史考古学研究所
6. 本報文に関わる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目 次

| | |
|-------------------|-----|
| 第1章 環境と立地 | 218 |
| 第2章 調査の概要 | 222 |
| 第3章 遺構と遺物 | 224 |
| 1. 1面の遺構と遺物 | 225 |
| 2. 2面の遺構と遺物 | 227 |
| 3. 中世以前の遺物 | 229 |
| 第4章 調査成果 | 233 |

挿図・表目次

| | | | |
|------------------------|-----|-------------------|-----|
| 図1 長谷小路周辺遺跡と調査地点 | 218 | 表1 出土銅錢一覧 1 | 234 |
| 図2 國土座標とグリッド配置 | 222 | 表2 出土銅錢一覧 2 | 235 |
| 図3 グリッド配置と堆積土層 | 223 | 表3 出土銅錢一覧 3 | 236 |
| 図4 1面の遺構 | 224 | 表4 出土銅錢一覧 4 | 237 |
| 図5 1面出土遺物 | 226 | 表5 出土銅錢一覧 5 | 238 |
| 図6 2面の遺構 | 227 | 表6 出土銅錢一覧 6 | 239 |
| 図7 2面の出土遺物 | 228 | 表7 出土銅錢一覧 7 | 240 |
| 図8 採集遺物 | 228 | 表8 出土遺物計測表 | 241 |
| 図9 中世以前の出土遺物 | 230 | 表9 出土遺物数 | 242 |
| 図10 周辺の遺構軸方向 | 233 | | |

写真図版目次

| | |
|----------------------|-----|
| 図版1 遺構写真 1 | 243 |
| 図版2 遺構写真 2 | 244 |
| 図版3 遺構写真（中世） | 245 |
| 図版4 遺構写真（中世以前） | 246 |

第1章 環境と立地

長谷小路周辺遺跡は鎌倉市の南縁、現六地蔵交差点から長谷観音交差点に至る国道134号線に沿った東西に広い範囲が呼称されている。本遺跡範囲内ではこれまでに本調査地点を含めて23地点で調査が行われており（図1）、その成果から、遺跡地北側の丘陵と海岸線との間には弥生・古墳時代以降に形成された砂丘が少なくとも3列東西方向に横たわり、砂丘間には海退時の名残と考えられる低湿地状の弱粘質砂が不規則に堆積している。国道134号線は北側の砂丘列のはば頂部を通り、現車道に面した南側の調査地点では中世飛砂下層にこの弱粘質砂が地点により厚く堆積し、下層には中世以前の遺構・遺物を内包する。中世期の遺構群は方形堅穴と土坑が主体で、地点に依り井戸・溝状土坑・墓址が複雑に重複して発見されることが多い。方形堅穴の構造は、堆積土が乾燥した砂層の為に木質が遺存せず不明な点が多いと言わざるを得ないが、土台に鎌倉石や伊豆石を利用するものの、柱穴建てのもの、杭で壁板を支える簡易なもの等多種多様である。溝状土坑や通路状の空閑地からはある程度の街区が看取され、方形堅穴の主軸は現車道に直交するように発見されているが、道路面は顯著に発見されていない（図10）。一方、現況及び中世遺構面の検出レベルが2m程低い地点7・12では中世期の硬化面が発見され、地点15・16及び本調査地点の遺構軸方向はこの硬化面を意識しており、国道134号線から分岐した現小車道が中世の道路面を踏襲していると思われる。由比ヶ浜中世集団墓地遺跡内地点29の調査区北端の遺構軸は地点28・30で発見された中世道路面を意識し、この道路面は地点15・16の硬化面とはほぼ同軸であることから觀ても、この地域では中世鎌倉中心部の若宮大路に中心とする街区割とは異なり、鎌倉期以前から形成されてきた砂丘や海岸線等の自然地形に沿う様に道路が通され、街区が定っていったのであろう。



図1 長谷小路周辺遺跡と調査地点

引用・参考文献

- 高柳光寿『鎌倉市史 総説編』 1959年 吉川弘文館
赤星直忠『鎌倉市史 考古編』 1959年 吉川弘文館
高柳光寿・貴達人他『鎌倉市史 社寺編』 1959年 吉川弘文館
貴達人・川瀬武風『鎌倉廃寺事典』 1980年 有斐堂
白井永二『鎌倉事典』 1976年 東京堂出版
「神奈川県の地名」「日本歴史地名体系14」 平凡社

長谷小路周辺遺跡 (No.236)

1. 由比ガ浜三丁目 1978年調査 未報告
2. 由比ガ浜三丁目202番2地点 1984年調査「長谷小路南遺跡 鎌倉市由比ガ浜3丁目202番2外所在遺跡の発掘調査報告書」1992年2月 長谷小路南遺跡発掘調査団
3. 長谷一丁目284番1地点 1987年調査「長谷小路周辺遺跡(長谷一丁目284番1地点)」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4 昭和62年度発掘調査報告」1998年3月 鎌倉市教育委員会
4. 由比ガ浜三丁目194番25他地点 1987年調査「長谷小路周辺遺跡(由比ガ浜三丁目194番25他地点)」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5 昭和63年度発掘調査報告」1989年3月 鎌倉市教育委員会／「由比ヶ浜三丁目194番25外道跡調査報告 長谷小路周辺遺跡群内、秋山ビル建設に伴う緊急発掘調査」1990年3月 長谷小路周辺遺跡発掘調査団
5. 由比ガ浜三丁目199番1地点 1987年調査「由比ガ浜三丁目199番1地点遺跡調査報告 長谷小路周辺遺跡群内、福地ビル建設に伴う緊急発掘調査」1990年7月 由比ガ浜三丁目199番1地点所在遺跡発掘調査団
6. 由比ガ浜三丁目258番8地点 1987年調査「長谷小路周辺遺跡(由比ガ浜三丁目258番8)」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6 平成元年度発掘調査報告」1990年3月 鎌倉市教育委員会
7. 由比ガ浜三丁目258番8地点 1987年調査「長谷小路周辺遺跡 由比ヶ浜三丁目258番1地点」1995年6月 長谷小路周辺遺跡発掘調査団
8. 長谷二丁目252番1地点 1989年調査「長谷小路周辺遺跡(No.236)(長谷二丁目252番1地点)」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7 平成2年度発掘調査報告」1991年3月 鎌倉市教育委員会
9. 由比ガ浜三丁目254番25地点 1988年調査 未報告
10. 由比ガ浜三丁目223番11地点 1989年調査 未報告
11. 由比ガ浜三丁目194番24地点 1989年調査「長谷小路周辺遺跡(No.236)(由比ガ浜三丁目194番24地点)」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8 平成2年度発掘調査報告」1991年3月 鎌倉市教育委員会
12. 由比ガ浜三丁目194番40地点 1990年調査「長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書 由比ヶ浜三丁目194番40地点」1997年6月 長谷小路周辺遺跡発掘調査団
13. 由比ガ浜三丁目229番他地点 1991年調査「長谷小路周辺遺跡(由比ガ浜三丁目229番外)(No.236)」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9 平成4年度発掘調査報告(第2分冊)」1993年3月 鎌倉市教育委員会／「長谷小路周辺遺跡 由比ヶ浜三丁目228・229番外(No.236) 中世前期の地割を伴う工芸職人居住地の調査」1994年7月 長谷小路周辺遺跡発掘調査団
14. 由比ガ浜三丁目228番2地点 1996年調査「長谷小路周辺遺跡(No.236)由比ガ浜三丁目228番2の一部外」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14 平成9年度発掘調査報告(第2分冊)」1998年3月 鎌倉市教育委員会
15. 由比ガ浜三丁目1175番2地点 1992年調査「長谷小路周辺遺跡(No.236)(由比ガ浜三丁目1175番2外地点)」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10 平成5年度発掘調査報告(第2分冊)」1994年3月 鎌倉市教育委員会
16. 由比ガ浜三丁目2番200地点 1995年調査「長谷小路周辺遺跡群発掘調査報告書 一由比ヶ浜3丁目2番200地点(No.236)」1997年9月 長谷小路周辺遺跡群発掘調査団
17. 長谷一丁目33番3地点 1997年調査「長谷小路周辺遺跡(No.236)長谷一丁目33番3外地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15 平成10年度発掘調査報告(第2分冊)」1999年3月 鎌倉市教育委員会／「長谷小路周辺遺跡13 長谷1-33-3地点発掘調査報告書」1998年8月 長谷小路周辺遺跡発掘調査団／鎌倉遺跡調査会
18. 由比ガ浜三丁目1262番2外地点 1998年調査「東国歴史考古学研究所調査研究報告第31集 長谷小路周辺遺跡(No.236)由比ガ浜三丁目1262番2、1251番1・2地点発掘調査報告書 一弥生中期～平安時代葬送地から中世方形堅穴建物群地域へ」2002年7月 長谷小路周辺遺跡発掘調査団／東国歴史考古学研究所

- 由比ガ浜三丁目1262番6地点 1999年調査「長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書」一錦倉市由比ガ浜三丁目1262番6外地点(No.236)一 2000年6月 長谷小路周辺遺跡発掘調査団／宮田事務所
- 由比ガ浜三丁目1173番3地点 1999年調査「錦倉遺跡調査会調査報告第21集 長谷小路周辺遺跡 第20地点発掘調査報告一」 2001年3月 錦倉市長谷小路周辺遺跡発掘調査団／錦倉遺跡調査会
- 由比ガ浜三丁目254番15地点 1999年調査「長谷小路周辺遺跡(No.236)由比ガ浜三丁目254番15外2筆地点」錦倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告(第1分冊) 2001年3月 錦倉市教育委員会
- 長谷一丁H205番12地点 2000年調査「長谷小路周辺遺跡(No.236)長谷一丁目205番12地点」錦倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 平成12年度発掘調査報告(第2分冊) 2002年3月 錦倉市教育委員会
- 長谷一丁目204番外地点 2000年調査 未報告
- 本調査地点

由比ガ浜中世集団墓地遺跡(No.372)

- 由比ガ浜四丁目1181番地点 1977年調査「38.材木座中世集団墓地遺跡」「錦倉市埋蔵文化財発掘調査年報1」 1983年3月 錦倉市教育委員会
- 由比ガ浜四丁目1142番1地点 1982年調査「錦倉市山比ガ浜四丁目由比ガ浜中世集団墓地遺跡(特殊養護老人ホーム錦倉静養館建設予定地)」発掘調査報告書 1984年3月 錦倉静養館建設予定地内所在遺跡発掘調査団／錦倉市教育委員会
- 由比ガ浜四丁目1134番1地点 1986年調査「由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書(第1分冊・古代編)」錦倉市山比ヶ浜四丁目1134番地点における古代および中世遺跡の埋蔵文化財調査報告 1996年11月 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団
- 由比ガ浜四丁目1171番3地点 1986年調査「錦倉遺跡調査会調査報告第22集 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡 第5地点1次・2次発掘調査一」 2001年5月 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団／錦倉遺跡調査会
- 由比ガ浜四丁目1136番11地点 1991~92年調査「由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書 由比ガ浜四丁目1136番地点(K.K.R.錦倉若宮庭)」 1997年2月 由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団
- 由比ガ浜四丁目1170番1地点 1992年調査「由比ガ浜4~6~9地点発掘調査報告書 大蔵省印刷局錦倉宿泊所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 1994年3月 由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団
- 由比ガ浜四丁目1130番外地点 1993年調査「貿易陶磁研究会錦倉大会資料集一相模園」錦倉市街地における中世前期の貿易陶磁の出土様相一 1999年6月 貿易陶磁研究会／錦倉市教育委員会／錦倉考古学研究所
- 由比ガ浜四丁目1142番12地点 1994~95年調査「由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書 由比ガ浜四丁目4番地30号地点」 1996年11月 由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団
- 由比ガ浜四丁目1015番23地点 2000年調査「由比ガ浜中世集団墓地遺跡の調査」「第12回錦倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨」 2002年8月 錦倉考古学研究所
- 由比ガ浜四丁目1133番地点 2002年調査 未報告

由比ヶ浜南遺跡(No.315)

- 長谷二丁目122番9、10地点 1989年調査 未報告。
- 長谷二丁目118番2地点 1994年調査「由比ヶ浜南遺跡(長谷二丁目118番2外地点)」錦倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度発掘調査報告(第1分冊) 1995年3月 錦倉市教育委員会
- 由比ガ浜四丁目1102番2外地点 1995~97年調査「由比ヶ浜南遺跡」 2002年3月 由比ヶ浜南遺跡発掘調査団／錦倉遺跡調査会
- 長谷二丁目 2002~03調査 未報告。

長谷觀音堂周辺遺跡(No.296)

- 長谷三丁目41番イ地点 1992年調査「長谷觀音堂周辺遺跡(No.296)(長谷三丁目41番イ地点)」錦倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10 平成5年度発掘調査報告(第2分冊) 1994年3月 錦倉市教育委員会
- 長谷三丁目97番4地点 1993年調査「長谷觀音堂周辺遺跡(長谷三丁目97番4地点)」錦倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度発掘調査報告(第2分冊) 1995年3月 錦倉市教育委員会

桑ヶ谷療病院跡(No.294)

- 長谷三丁目630番1地点 1990年調査「桑ヶ谷療病院跡(No.294)(長谷三丁目630番1地点)」錦倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7 平成2年度発掘調査報告 1991年3月 錦倉市教育委員会
- 長谷三丁目630番17地点 1990年調査「桑ヶ谷療病院跡(No.294)(長谷三丁目630番17地点)」錦倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7 平成2年度発掘調査報告 1991年3月 錦倉市教育委員会

高徳院周辺遺跡（No.327）

43. 長谷一丁目290番1地点 1988年調査「長谷一丁目190-1地点遺跡 高徳院周辺遺跡群内、グラントフォルム 鎌倉建設に伴う中世遺跡の発掘調査報告書」 1989年12月 高徳院周辺遺跡発掘調査団

甘繩神社周辺遺跡（No.177）

44. 長谷一丁目227番地地点 1978年調査「43. 伝安達泰盛邸跡」[鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ] 1983年3月 鎌倉市教育委員会
45. 長谷一丁目236番1地点 1991年調査 未報告。
46. 長谷一丁目271番10地点 1992年調査 「甘繩神社遺跡群発掘調査報告書 鎌倉消防署・長谷出張所改築に伴う緊急調査報告書 鎌倉市長谷一丁目271番10」 1995年7月 甘繩神社遺跡群発掘調査団
47. 長谷一丁目 2003年調査 未報告。

笹目遺跡（No.207）

48. 笹目町330番1地点 1988年調査「笹目遺跡（笹目町330番1地点）」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6 平成元年度発掘調査報告」 1990年3月 鎌倉市教育委員会／「笹目遺跡発掘調査報告書 鎌倉市笹目町330番1地点」 1991年7月 笹目遺跡発掘調査団
49. 笹目町425番1地点 1993年調査 「笹目遺跡（No.207）（笹目町425番1外地点）」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10 平成5年度発掘調査報告（第2分冊）」 1994年3月 鎌倉市教育委員会
50. 笹目町302番5地点 1993年調査 「笹目遺跡（No.207）（笹目町302番5地点）」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度発掘調査報告（第1分冊）」 1995年3月 鎌倉市教育委員会
51. 笹目町285番1地点 1999年調査 「笹目遺跡（No.207）（笹目町285番1外地点）」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告（第2分冊）」 2001年3月 鎌倉市教育委員会
52. 笹目町286番1外地点 1999年調査 「笹目遺跡（No.207）（笹目町286番1外地点）」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告（第2分冊）」 2001年3月 鎌倉市教育委員会
53. 笹目町302番11地点 2000年調査 「笹目遺跡（No.207）（笹目町302番11外地点）」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 平成13年度発掘調査報告（第2分冊）」 2002年3月 鎌倉市教育委員会
54. 笹目町 2002年調査 未報告（原・国庫）
55. 笹目町 2003年調査 未報告（田代・民間）

今小路西遺跡（No.201）

56. 由比ガ浜一丁目213番3地点 1991年調査「今小路西遺跡
由比ガ浜一丁目213番3地点」 1993年7月 今小路西遺跡発掘調査団
57. 由比ガ浜一丁目183番1地点 2000年調査「今小路西遺跡（No.201）由比ガ浜一丁目183番1地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 平成13年度発掘調査報告（第2分冊）」 2002年3月 鎌倉市教育委員会

若宮大路周辺遺跡群（No.242）

58. 由比ガ浜一丁目129番5地点 1993年調査「若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書 由比ヶ浜一丁目129番5地点」 1995年5月 若宮大路周辺遺跡群発掘調査団

下馬周辺遺跡（No.200）

59. 由比ガ浜二丁目107番1地点 1995年調査「下馬周辺遺跡（No.200）（由比ガ浜二丁目107番1地点）」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13 平成8年度発掘調査報告（第2分冊）」 1997年3月 鎌倉市教育委員会
60. 由比ガ浜二丁目106番6、7外地点 2000年調査「下馬周辺遺跡（No.200）由比ガ浜二丁目106番6、7地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 平成13年度発掘調査報告（第1分冊）」 2002年3月 鎌倉市教育委員会

註
・各調査地点・報告書は、長谷小路周辺遺跡（No.236）は全ての、他の遺跡は図1の範囲内の調査地点を、各遺跡毎に調査年順に番号を付した。
・報告書は2003年8月末現在。
・小泉衣理と渡邊美佐子の協力に掲り筆者調べに拠る。

第2章 調査の概要

・調査経緯から結果に至る概要

本調査は個人専用住宅の建設にあたり、建物基礎設置範囲を対象として確認調査と諸協議を経て実施された。調査区は2箇所に分れ、東側をI区、西側をII区とした。II区の南端は表土掘削時に現地表下2m以上が近現代に擾乱されているのが確認された為、掘り上げ後の調査区壁の安全上、又、敷地内で処理する残土量の問題等を考え併せ調査区外と見なした。

調査では、遺構面の整合を考えI・II区を平行して進めるべく予定したが、I区の上層は広範囲に擾乱されていた事と調査に伴う残土置場に難渋した事から、2面までは平行して調査した後、I区を無遺物層まで先行して掘り上げて記録保存し、II区の下層を調査した残土でI区を埋め戻す方法を探らざるを得なかつた。期間中台風の直撃を受け、調査区壁を養生しながら酷暑の中で作業を進め、遺構面3時期を併せて方形窓穴4基・土坑40基を発見し、一括性は低いものの銅錢60余枚多くの遺物が出土し成果を得られた。全ての記録保存終了後に関係各方面に連絡の上、出土遺物と諸器材を撤収し調査終了とした。

・グリッド配置(図2)

調査に際しては国土座標から座標点を移動し調査区内のグリッドを設定することを試みたが、調査地付近の基準点は多くが遺存しておらず、やむを得ずI・II区を囲む2mグリッドを調査区の方向と形状に合わせ任意に設定し、I区を南北に通る主軸4ラインと4級基準点E108(X:-76595.539 Y:-26239.337)から光波測定器を用いて計測した。主軸4ラインは磁北に対してN-27°40' -Eである。E146は現地に鉛は遺存するが、座標点位置図データとは合致しない。参考までに示した。

・堆積土層

図3には調査時に設定したグリッド配置と、下層堆積土確認の為に掘り下げたI・II区のトレチ位置図を含めた調査終了時の最終状況を示した。II区の確認調査域の範囲は、本調査の際に崩落した部分を法面をつけて再度土層観察を行った結果を図示している。

0層は近世以降の堆積土で、II区では部分的に現地表下2m以上、遺構面・遺構覆土を擾乱している。

1層は土壤化した暗茶褐色砂質土で、土丹粒・土器粒・年度粒を含む中世遺物包含層。

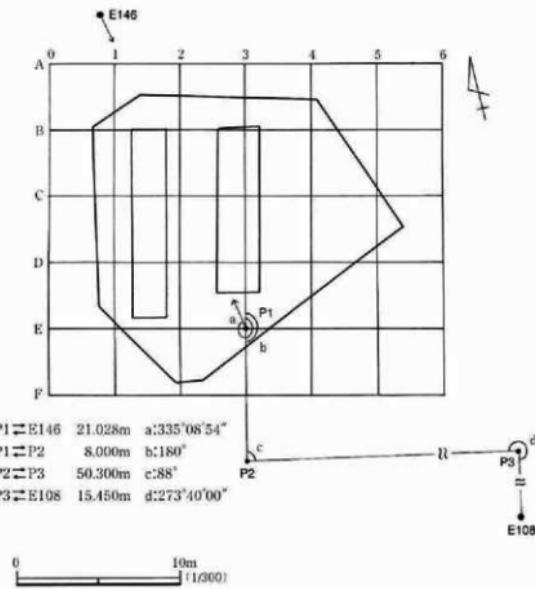


図2 國土座標とグリッド配置

- 土層注記**
- 近赤以降の堆積土。
 - 暗褐色土・砂質土に粘土・貝殻・小砾が混在。
 - 暗褐色砂質土・炭化物・貝殻・粘土を含む。1面遺構確認剖面。
 - 暗褐色砂質土・貝殻や粗い貝殻を含む。2面遺構確認剖面。
 - 暗褐色砂質土・砂質土とやや粗い貝殻の混合層。

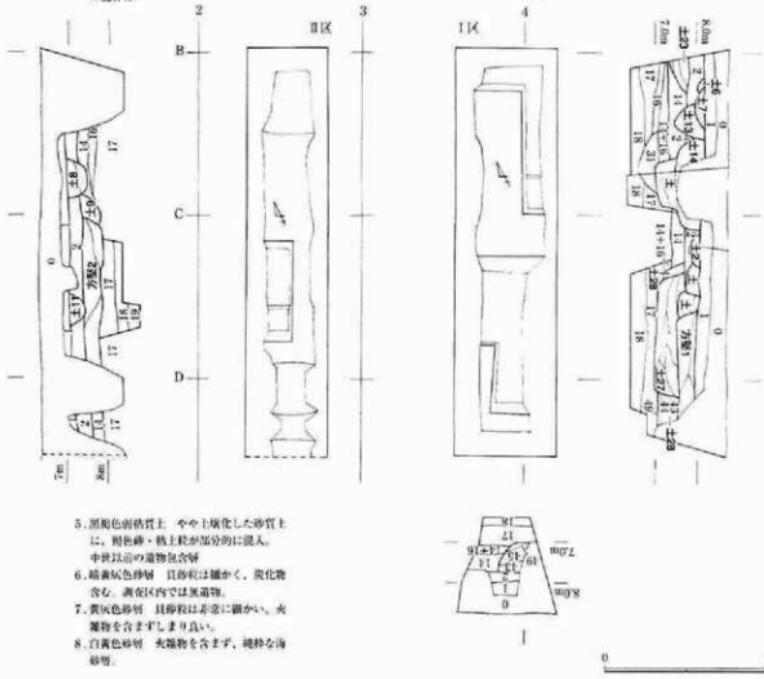


図3 グリッド配置と堆積土層

2層は調査開始面で、若干土壤化した暗褐色砂質土。市街地遺跡の遺構面の様に版築・整地されてはないが、遺構確認面でありこの2層上面を1面とした。3層は灰褐色砂質土。貝粒子が全体に多量含まれしまりは良い。1面の遺構との重複関係等からこの3層上面を2面とした。

4層は、上層3層から下層5層への漸移層で砂粒・貝粒子共にやや粗いが、若干粘性がある。5層は細砂がかなり土壤化した黒褐色弱粘質砂層。微かな観察範囲ではあるが地点4・5・10に顯著な砂丘間低地に堆積する湿地状の堆積土と判断した。6層・7層は微細貝粒子と極細砂から成る砂層で、付近の調査成果と披見して中世飛砂と思われる。6層は暗黃灰色で微かに炭化物粒が観られるが本調査範囲内では無遺物、7層は黄灰色で部分的に粗い貝粒子が混交し、本調査範囲内では無遺物。同様な堆積土中から、地点2・6・7他では奈良・平安期の遺構と遺物が、地点18では弥生期の墓址が遺物を伴って発見されているが、本調査範囲内では遺構は確認されず、遺物も全く出土しなかった。9層は、著しい湧水の為部分的な観察ではあるが、夾雜物を全く含まない黄灰色の砂層。

第3章 遺構と遺物

調査では確認調査の成果を基に、I・II区共に現地表下70cmまでの表土と近現代の埋め土である搅乱坑を重機に運び掘削した。その後人力で遺構面及び遺構を掘り下げ、最終的には現地表下約2m、海拔6.0mの無遺物自然堆積層まで確認した。以下、調査順通り上層の遺構と遺物から述べていく。尚、本調査では遺構内外から多量の銅鏡が出土している。何れも一括廃棄とは考え難く、儀礼の如く埋置・埋納した様相もない為、第4章末に原寸の拓本で図示し表形式に纏めた。又、本調査では中世以前の遺構面は顕著には把えられなかつたが、中世層中に多量の古墳期～古代の遺物が出土している。これらは各出土層位遺構から切離し、中世層出土の古代遺物として本章末に纏めた。

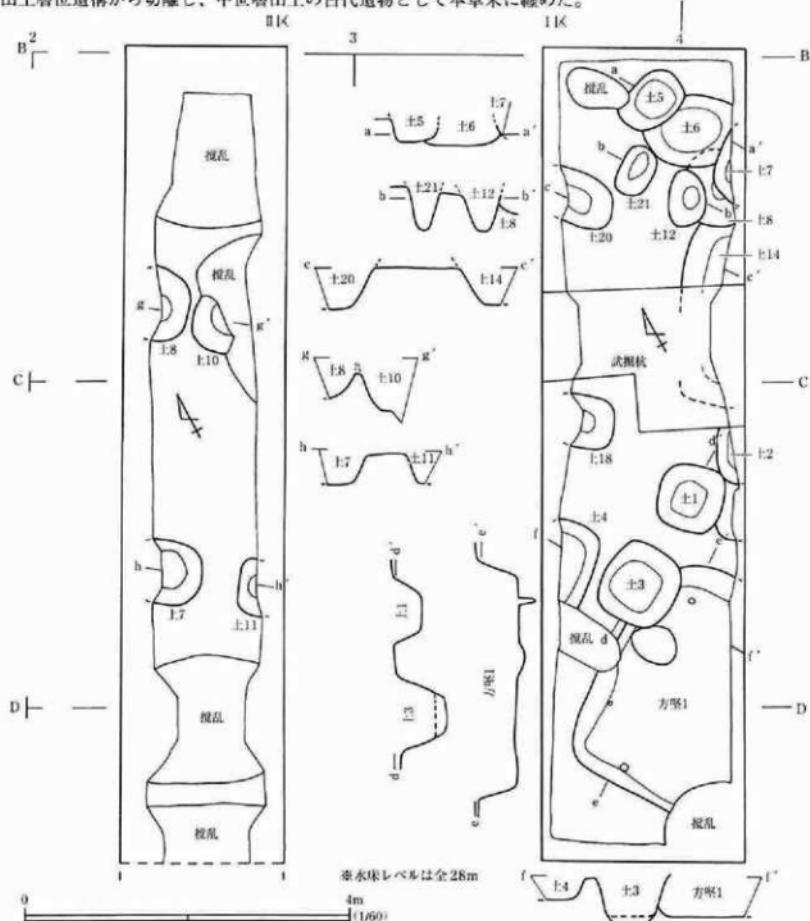


図4 1面の遺構

1面の遺構（図4）

図4にはI・II区の1面全測図。平面図は設定された調査区の位置関係そのままに、断面図は基準レベル全て8.0mで示している。現地表下約50~70cmの海拔8.1m前後、図3の2層上面を1面とした。発見された遺構は、方形竪穴1軒・土坑18基である。I・II区に跨る遺構はない判断している。II区は攪乱が広範囲に及んでいる事もあるが遺構は希薄、I区では確認調査塙の壁が崩落し結果的に土坑1基の範囲を想定線で示した。

方形竪穴はI区の南寄りで発見された。覆土は土丹粒・炭化物粒を混交するしまりの悪い茶褐色砂質土。確認された規模は南北2.1m×東西2.9m、壁高最大値60cm、底面はほぼ平坦、底面の遺構は各壁直下に径10~20cmで深さ20cmの杭穴が1ヶ所ずつと、北壁下に微かな窓みがあるだけで、出土遺物の様相を観ても構造や用途は不明である。確認範囲から観る遺構軸はN-35°前後-Wで、地点7・12で発見された道路状の硬化面と直交に近い方向。方形竪穴周囲で発見された平面形方形に近い土坑1・3・4や、I区北端で発見された土坑群の軸方向や並びもほぼ同軸である。

土坑1・3の覆土は、部分的に白色砂・炭化物粒・土丹粒の混じる暗茶褐色土。土坑3は検出の際に底面を掘り過ぎており、第4章末に図示した銅鏡は2面土坑17最上層の可能性もある。北寄りの土坑群の覆土は概ね炭化物粒を含みしまりのない暗茶褐色砂質土。確認調査塙壁の崩落により、範囲不明瞭となった土坑14は方形竪穴の可能性がある。

1面出土遺物（図5）

1~6は1面上、概ね図3の1層中の出土遺物。1は大型糸切り底かわらけで器壁が薄く、やや内湾する。胎土は肌色を呈する弱粉質土だが、二次焼成により全体的に若干黒く変色している。2は瀬戸窯折縁深皿口縁部片。胎土はやや粘性の欠ける淡黄味灰白色を呈する。淡灰緑色の釉が全体的に薄く刷毛塗りされるが、二次焼成により内外面とも部分的に剥落する。中Ⅱ期の製品。3~5は常滑窯諸製品。3~4は片口鉢Ⅱ類口縁部片。器表・胎土共に3は暗茶褐色土、4は焼成不良な暗茶色土を呈し、夾雜物を多く含む。4は内面体部の指頭痕、外面上位のナデや下位のハケ調整が明瞭に残る。ともに第6~7型式の製品。5は壺胴部片の拓影。格子文の押印が捺される。6は加工痕が残る鹿の角。表探り出土している鹿の角と対になるのだろうか。

7~22は遺構内出土遺物。7・15・18・21~22は土壙21、8は土壙2、9は土壙12、10~11・13~14は土壙1、12・16・19~20は方竪1、17は土壙18出土。

7~11は小型、12~15は大型糸切り底かわらけ。小型は外面体部中位に稜をもち、開きながら立ち上るものと器壁が薄く、碗型に近い形状のものが混じる。大型は外面体部中位に稜をもち、器壁が薄く口縁が開きながら立ち上るものが多い。概ね肌色~淡橙色を呈する弱粉質土。16は瀬戸窯瓶子肩部片。胎土はやや粘性の欠ける淡黄味灰白色を呈し、灰緑色の釉が全体的に薄く刷毛塗りされる。器壁が非常に薄い。中期後半~後期の製品。

17~20は常滑窯諸製品。17は山茶碗底部片。胎土は夾雜物を多く含む灰褐色土。内面に摩滅痕はみられない。高台のつかない第8型式の製品。18~19は片口鉢Ⅱ類口縁部片。胎土・器表ともに暗茶褐色~黒褐色を呈し、夾雜物を多く含む。第7~8型式の製品。20は壺口縁部片。断面N字状の口縁部形態をとる。胎土は夾雜物を多く含む灰色土、器表は茶褐色を呈し、口縁部に降灰がかかる。第8型式の製品。21は瓦器質火鉢Ⅲ類。輪花状を呈し、外面体部上位に菊花文スタンプを配する。器表は黒色処理され、内面体部の口唇部や下位のナデ調整以外は内外面共に綫方向の磨き、外底面は砂底。

22は鹿の骨。加工の際の刃物痕が残る。

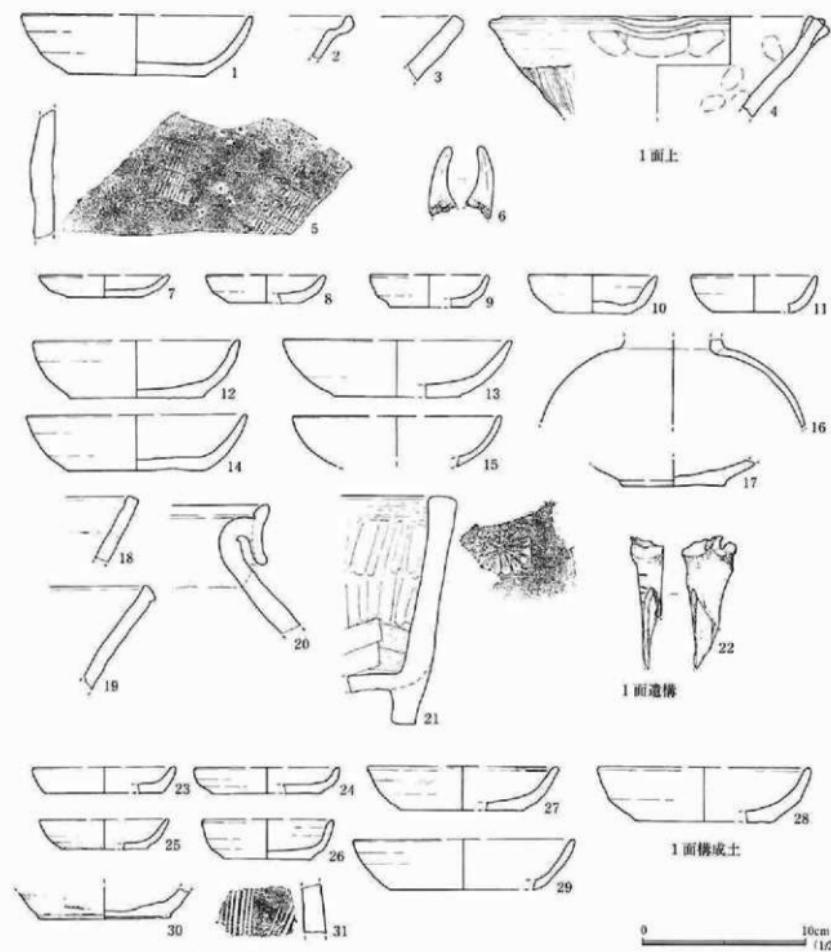


図5 1面出土遺物

23~31は1面構成土出土遺物。23~26は小型、27~29は大型糸切り底かわらけ。概ね肌色~淡橙色を呈する弱粉質土。小型は口径底径比が小さく、器壁がやや内湾するものと器壁が薄く、器高の高い碗に近い形状のものが混じる。大型は体部中位に稜をもち、器壁が直線的に立ち上るものが多い。

30は常滑窯山茶碗底部片。胎土は夾雜物を多く含む灰褐色土。つけ高台はあるものの非常に貧弱なため、摩滅した可能性も考えられる。内面に摩滅痕はみられない。第7型式の製品。31は備前窯捏鉢胴部片。拓本で確認できる範囲では条線は7本以上。

土坑3及び上記層位から出土した銅鏡は第4章末に、土坑8・9・10及び上記層位から出土した土師器は本章末に図示した。

2面の遺構(図6)

図6はI・II区の2面全測図。平面図は設定された調査区の位置関係そのままで、断面図は基準レベル全て8.0mで示している。現地表下約100cmの海拔7.8m前後、図3の3層上面を1面とした。発見された遺構は、方形竪穴2軒・土坑8基である。土坑8基の内2基(土坑27・28)は平面形状及び遺構断面の観察から方形竪穴の可能性があるものの、調査中に台風が来襲し確認前に崩落し想定線で示している。

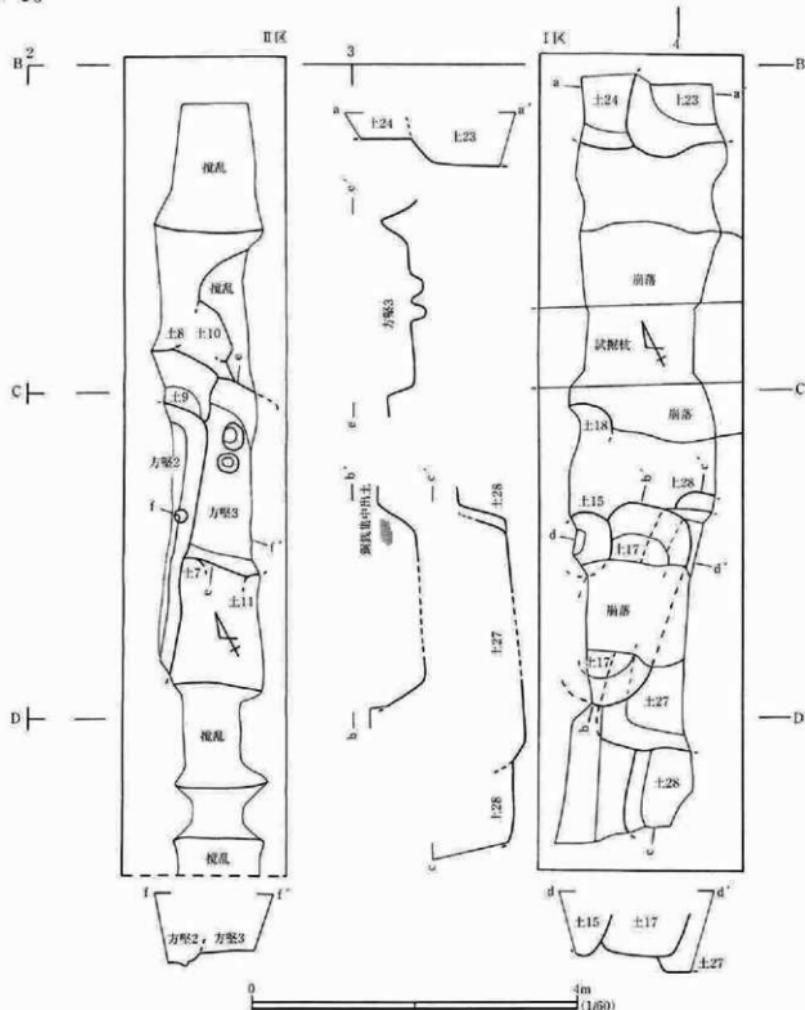


図6 2面の遺構

方形堅穴はⅡ区で2基発見された。方形堅穴3は造構下場の検出様相から調査区東壁付近で回り込むと思われる。覆土は炭化物粒の混じる茶褐色砂層。確認された規模は南北0.8m×東西2.2m、壁高最大値40cm、底面はほぼ平坦、底面の造構は東壁下に径20~30cmで深さ約20cmのピットが2箇所。出土遺物を併せ観ても構造・用途は不明。この方形堅穴3と重複しより新しい方形堅穴2は、確認された規模は南北0.5m×東西3.2m、壁高は調査区壁の断面から約40cm、底面はほぼ平坦でピットが1口発見されたが、出土遺物を併せ観ても構造・用途は不明。又、造構平面検出時には土坑番号を付したが、その後土層断面の観察や完掘後の様相から土坑27・28も方形堅穴と思われる。覆土は何れも炭化物・土丹粒を多く含む暗茶褐色砂質土。この土坑27より新しい土坑17は、東西に長い不整長方形で、覆土は粘土粒・炭化物粒・焼土粒を含む茶褐色砂質土。東寄りの覆土上層から多量の銅錢が出土している。

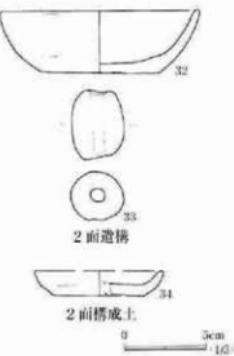


図7 2面出土遺物

2面出土遺物 (図7)

32~33は造構内出土遺物。32は土壤15出土の大型糸切り底かわらけ。器壁が薄く、器高の高い瓶に近い形状を呈する。胎土は肌色を呈する弱粉質土。33は土壤16・17出土の土錘。

34は2面構成土、概ね図3の14層中の出土遺物。34は小型糸切り底かわらけ。外面体部中位に稜を持ち、器壁が外側に開く。胎土は肌色を呈する弱粉質土。土坑15・16・17及び上記層位から出土した銅錢は第4章末に、方形堅穴2・3及び上記層位から出土した土師器・須恵器は本章末に図示した。

表探 (図8)

35~37は舶載品。35は同安窯系青磁盤様碗底部片。逆台形状の厚い削り出し高台を有し、内面に飾彫文が施される。素地は粘性が強く、堅密な淡黄灰色を呈する。黄色味緑色の釉が外面体部下位を除いて薄く施される。底部はヘラ切り。36は龍泉窯系青磁碗底部片。素地はやや粘性の欠けた灰色を呈する。不透明な灰青緑色の釉を全面に施した後に高台端部周辺の釉を掻き取り、その露胎部分が赤く発色する。37は白磁口兀皿底部片。素地は灰白色微密土、釉調は乳白色を呈し、外面体部下位から底部にかけて施釉されていない。38~40は常滑窯諸製品で、38は片口鉢II類口縁部片、39は堀口縁部片。断面N字状の口縁部形態をとる。胎土・器表とともに暗茶褐色~黒褐色を呈し、夾雜物を多く含む。口縁部に降灰がある。38は内面に指頭痕、外面にハケ調整が明瞭に残る。ともに第7型式の製品。40は堀口縁部片の拓影。格子に斜線文の押印が捺される。41~42は土製品。41は土製円板。42は蓋。両方ともかわらけ質で、端部が精巧に磨かれている。43は鹿の角。1面上より出土している鹿の角のような加工痕はみられない。

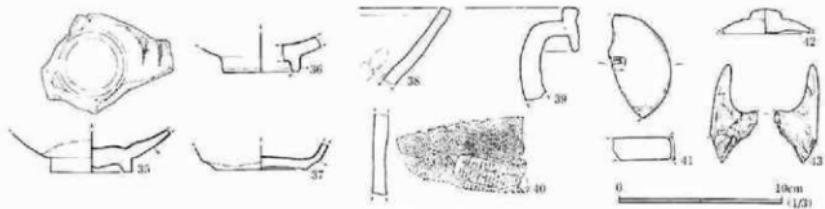


図8 採集遺物

3. 中世以前の出土遺物

本地点では中世以前に遡る遺物として、整理箱約1箱分が出土し、このうち実測可能なものは27点を数えた。時期的に主体となるのは奈良・平安時代の土器類で、これより一段階以前の、古墳時代末期の土器も認められた。また、図示には至らなかったが、外器面にヘラミガキを施した古墳時代前期頃の所産と見られる壺もしくは鉢形土器の胴部片なども若干量が出土している。

今回の調査ではこれら遺物の所産時期に属する造構は検出しておらず、出土状況としては中世造構への混入品、或いは中世砂層下の包含層出土として捉えられたもののみとなる。以下、各出土遺物について説明を加える。

1～8は土師器壺。1は有稜壺の系譜を引き、扁平気味の丸底を呈すると見られる。古墳末～奈良初頭、7世紀末葉～8世紀初頭の所産か。2も有稜壺の名残を僅かながら留めているが、かなり扁平な作りとなっている。ヘラケズリ方向の差による体・底部の作り分けは不十分で、相模型壺成立の直前段階に位置付けられようか。奈良時代初頭、8世紀前葉頃の所産か。

3～5は相模型壺。体部は横方向のヘラケズリ、底部は定方向のヘラケズリによって仕上げられる。3・4は口径が大きく丸底気味の形態を呈しており、相模型でも成立段階の資料となろう。胎土は淡黄褐色を呈し、金雲母を少量含み精良。3は内外面ともやや摩滅・剥離し、器面の調整痕は不明瞭である。4の内外面には赤彩が薄く残る。5は明確な平底化、法量値の減少といった点で前二者より後出的な様相を備えている。胎土は淡橙褐色を呈し、金雲母を少量含み精良。相模編年では、期に主体となる形式で、8世紀末～9世紀初頭前後の所産かと考えられる。

6は体部横ヘラケズリであるが、胎土は相模型壺とは異なり、どちらかというと後述する武藏型壺に近い印象を受ける。外面に黒色処理を施している。

7は甲斐型壺の口縁部小片。体部外面斜め方向のヘラケズリ、内面の口縁部から体部にかけて山形状の暗文が施される。胎土は赤褐色を呈し、白色微砂粒を含み精良である。8も甲斐、もしくは駿東方面の壺であろうか。底部のみの小片で、内面に放射状暗文が施され、外面の体部から底部にかけて黒色処理が施される。外面の体部は横ナデ、底部はヘラケズリ調整。胎土は淡赤褐色を呈し、白色微砂粒少量を含み精良。

9～21は土師器壺。9のみ古墳時代後期の所産で、他は奈良・平安時代の所産。9は胴部外面が縱方向のヘラナデ・ヘラケズリ調整、内面横ヘラナデ調整。6世紀後半頃の所産か。10は相模型壺。口縁部内外面横ナデ、胴部内外面ナデによって丁寧に仕上げられる。外面頭部には、ヘラ状工具による刺突痕数ヶ所が見て取れる。胎土には細砂粒がやや多く、金雲母と白色針状物が少量含まれる。

11～17は在地産の短頸壺、「三浦型壺」との仮称もある。碎片化した資料のみで、法量等を復元しうる個体はなかった。ここでは同型式の特徴を端的に示す口縁部のみを掲げたが、底部資料については相模型壺も含め、本調査での出土例は皆無であった。全体の特徴としては口頭部が短く、口縁端部が面取りされることが言える。面取りの顕著なものには、粘土の内・外方へのみ出しが看取される(11・16)。口頭部は直立もしくは内傾気味となるもの(11・12・16)と、外傾するもの(13～15)とがある。16のように極端に短い口頭部を持つものもあるが、より短いものが年代的に下るとされ、年代判別の指標となっている。総体としては、9・10世紀代の所産となろう。胎土に多くの粗砂粒・角閃石粒を含み、相模型より全体的にざらついた感がある。器面調整は内外面ともハケもしくはナデ(ハケ後)を基調とする。概して被熱により黒変し、器面が剥離するもの(13・17)もある。17は外反する口縁部で端部の面取りはないが、胎土の特徴から本型式に含めた。18・19は武藏型壺で、台付きになるものであろう。口縁部内外面横ナデ、胴部外面横ケズリ調整。いずれも内面口縁部に煤が付着している。胎土は赤褐色

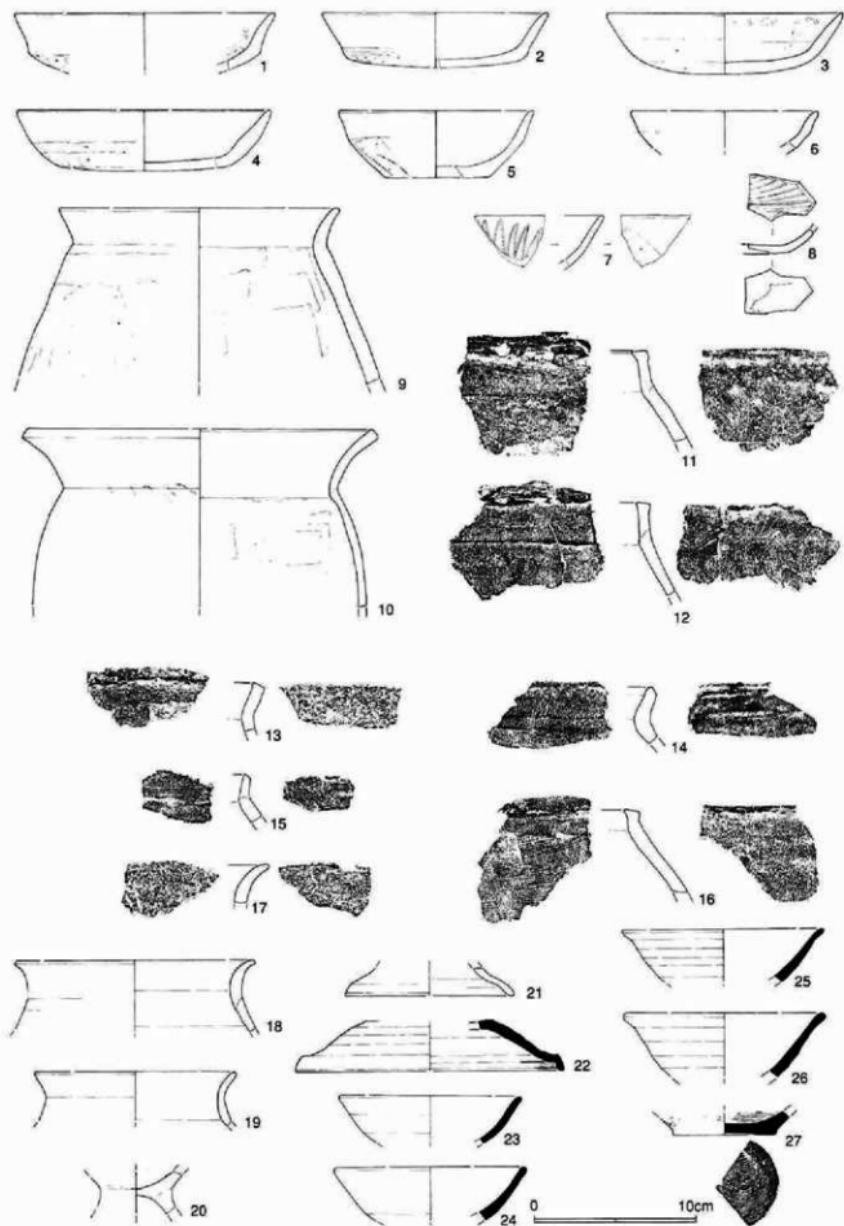


図9 中世以前の出土遺物

を呈し、精良である。20・21は台付壺の脚部。武藏型であろう。20は脚基部。21は脚端部が内碗気味に開く。胎土・色調は18・19と同質。

22~27は須恵器。22は蓋。天井部は平坦で端部が下方に強く屈曲・垂下する。胎土には白色針状物の混入が目立つ。23~26は坏口縁部の小片。口縁端部の形状がそれぞれ異なり、直線気味に外傾するもの(23・24)、外反するもの(25)、やや肥厚するもの(26)があり、年代的なばらつきが見られる。27も坏で底部片。外底面回転糸切り後無調整。坏類に関しては、全体の形状・法量が把握できる個体がなかったため詳細は明らかでないが、概ね御殿山59号窯~同25号窯式の範疇で捉えられるものと見ている。従って、年代としては9世紀中葉~10世紀初頭前後の資料が主体となる。

以上のように、本地点出土の古代遺物は7世紀末から10世紀代までの時間幅を持つもので、これは由比ヶ浜砂丘一帯における集落の消長期間の中で捉えられるものである。その意味では、周辺調査地での遺物の出土傾向と同様の在り方を示しているといえるだろう。

「三浦型壺」については、近年報告された葉山町三ヶ岡遺跡における立地や出土状況などから、製塙土器として使用された蓋然性が示されている。一方で、海浜部以外の遺跡から出土する例も少なくない点から、使用法に限定性を持たない煮沸具としての見方もある。本地点ではよく焼けた小片のみの出土であったが、図3-地点9・10では遺存率の高い個体も多くあり、被熱度・破砕度の差異といった点も用途の多様性を示唆しているのかもしれない。更に、上記の二地点では口縁端部への面取りを施さない8世紀後半代の短頸壺も出土しており、三浦型壺の祖形となる可能性が指摘されている(大河内1996、大河内・菊川他1997)。これと似た資料は、横須賀市北西部の久留和遺跡で7世紀末~8世紀代の堅穴状遺構から出土しており、系譜上、三浦半島の相模湾岸北西部において相模型壺の製作技法をもとに短頸壺の成立があり、次いで半島全域に定型化した「三浦型壺」の展開があったとの見解も示されている(中三川他2003)。中三川氏の指摘にあるように、その出現から展開、そして消費形態の上でも結論を見ない遺物であり、今後も詳細な検討が必要であろう。

今回の調査では、標高7.25mで古代の遺物包含層が検出され、層厚は30cmほどを持つものであった。その下位の砂層では遺物の出土ではなく、この無遺物層が古代遺構の掘り込み層となる可能性も考えられる。ただし、本地点の東方60mに位置する地点20では、標高8~8.5mで9世紀代の堅穴住居址が検出しているし、同様に西方50mの地点16でもこれよりやや高いレベルで古代遺構が確認されている。こうした点を考えた場合、本地点における古代包含層の検出レベルはいかにも低く、その意味付けには注意が必要である。上本進二氏は鎌倉・逗子市域における地形発達史について、様々なデータをもとに検討を試みているが、古墳時代後期~奈良・平安時代の復元図では、本地点付近からちょうど江ノ電線に沿った形で砂丘間低地の延びる様子が示されている(上本2000)。中世段階にはこの低地帯も飛砂によって覆われ、現在では殆ど起伏を感じることのない状態にまで至っている。これには、中世を中心とする大規模な人為的土改もあったことは述べるまでもないが、中世以前には現在目にする以上に地形の起伏が顕著であり、それに伴う土地利用の制限があったことも想像される。本地点における古代包含層の在り方も古代の微地形を窺わせる好例といえるかもしれないが、如何せん狭い中での検出であるため、ここではその可能性を提示するに留めておきたい。

引用文献

- ・大河内勉 1996『由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書—鎌倉市由比ヶ浜四丁目1134番地点における古代および中世遺跡の埋蔵文化財調査報告—(第1分冊・古代編)』由比ヶ浜集団墓地遺跡発掘調査団
- ・大河内勉・菊川英政・小林康幸・汐見一夫 1997『由比が浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書—由比が浜四丁目1136番地点(KKR若宮莊)—<第1次調査>(第1分冊・古代編)』由比が浜中世集団墓地遺跡発掘調査団
- ・大河内勉 1997『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書—由比ヶ浜三丁目194番40地点—』長谷小路周辺遺跡発掘調査団
- ・宮田真・森孝子 1997『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書—由比ヶ浜3丁目2番200地点(№236)—』長谷小路周辺遺跡発掘調査団
- ・上本進二 2000 「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」「池子桟敷戸遺跡(逗子市№100)」(仮称)
医療保健センター建設地内埋蔵文化財発掘調査団・東国歴史考古学研究所
- ・長谷川厚・櫻井真貴・林原利明 2001『三ヶ岡遺跡I—県立近代美術館建設にともなう発掘調査—』財團法人かながわ考古学財團
- ・長谷川厚・林原利明・宮井 香 2001『三ヶ岡遺跡II—県立近代美術館建設にともなう発掘調査—』財團法人かながわ考古学財團
- ・中三川昇・岩橋英子 2003『久留和遺跡発掘調査報告—店舗兼共同住宅建築工事に埋蔵文化財発掘調査』横須賀市教育委員会

第4章 調査成果

遺物まとめ

遺物はかわらけが半分以上を占め、その他に舶載品や常滑、瀬戸、渥美、備前等の国内諸窯製品、火鉢、土製品、鉄製品、石製品、自然遺物などが出土している（図 参照）。層位的な時期的変化はほとんどみられず、かわらけは精良胎土が出土する以前の器壁が薄く、碗型に近い形状のタイプが主体となる。その他の常滑窯諸製品は第7～8型式、瀬戸窯諸製品は中・期以降など概ね13世紀後葉～14世紀前葉の年代と考える。

本調査地点周辺の長谷小路周辺遺跡群では、これまでの調査成果からは鋳造・鍛冶関連品や骨角製品が多く出土し、13世紀中頃～15世紀初頭には職能集団が活動していた地域であったと考えられる。本調査では、浜地の特徴でもある自然遺物（表9）の比率は高いものの、この地域に居住していたであろう職商人に直接関係するような遺物はほとんど出土していない。これとは別に注目されるのが、銅錢の出土である。銅錢は遣構・層位内より24種類66枚が出土した。銅錢の出土状況としては半数に近い29枚が土坑17、10枚が土坑1より出土しているものの、その出土状況は遣構内に埋納或は一括廃棄とは言い難い。そのため出土場所ではなく、初鑄年・書体の順に一覧表として示した（図 参照）。今回の調査面積は から単位面積あたりの銅錢出土枚数は となり、非常に密な印象をうける。単に落し物やゴミとしての廃棄とは片付けられない出土数と思われる。長谷小路（現国道134号線）を挟んだ今小路西遺跡（由比ヶ浜一丁目213番3地点）では鎌倉が都市機能を失い始める15世紀初頭に位置付けられる井戸の底から、摸鋳錢鋳造敗品とその鋳型などが発見されている。調査地内に鋳造施設等は発見されていないものの、職能集団が活動していた地域という点をふまえると両者の遺跡地は非常に密接な関係であり、このことからも銅錢の出土が多いのも理解できる。



表1 出土銅錢一覧-1

| 1 | 2 | 3 | 4 |
|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| | | | |
| 銭種開元通寶 | 銭種開元通寶 | 銭種開元通寶 | 銭種開元通寶 |
| 国名唐 | 国名唐 | 国名唐 | 国名唐 |
| 初鑄年621年 | 初鑄年621年 | 初鑄年621年 | 初鑄年621年 |
| 書体楷書 | 書体楷書 | 書体楷書 | 書体楷書 |
| 背文 | 背文 | 背文 | 背文 |
| 出土地点土坑17上層 | 出土地点土坑17上層 | 出土地点土坑17上層 | 出土地点土坑17上層 |
| 径23.1mm 厚さ1.1mm | 径23.1mm 厚さ1.1mm | 径22.7mm 厚さ1.0mm | 径22.4mm 厚さ1.0mm |
| 備考表面擦り | 備考 | 備考 | 備考錆振り |

| 5 | 6 |
|-----------------|-----------------|
| | |
| | |
| 銭種開元通寶 | 銭種開元通寶 |
| 国名唐 | 国名唐 |
| 初鑄年621年 | 初鑄年621年 |
| 書体楷書 | 書体楷書 |
| 背文右上月 | 背文上月 |
| 出土地点土坑17上層 | 出土地点1面上 |
| 径25.5mm 厚さ1.5mm | 径23.5mm 厚さ1.5mm |
| 備考縛・混む | 備考縛 |

| 7 | 8 |
|-----------------|-----------------|
| | |
| | |
| 銭種開元通寶 | 銭種開元通寶 |
| 国名唐 | 国名唐 |
| 初鑄年621年 | 初鑄年845年 |
| 書体楷書 | 書体楷書 |
| 背文 | 背文上月 藍か? |
| 出土地点表様 | 出土地点1面下 |
| 径24.6mm 厚さ1.1mm | 径23.5mm 厚さ1.5mm |
| 備考孔欠け・縛 | 備考会昌開元銭 |

表2 出土銅錢一覧－2

| | | | |
|---|--|--|--|
| | | | |
| 錢種 錢名 初鑄年 書體 背文 出土地點 徑 備考 | 錢種 錢名 初鑄年 書體 背文 出土地點 徑 備考 | 錢種 錢名 初鑄年 書體 背文 出土地點 徑 備考 | 錢種 錢名 初鑄年 書體 背文 出土地點 徑 備考 |
| 太平通寶 北宋 976年 楷書 文 土坡3 24.6mm 備考 | 淳化元寶 北宋 990年 楷書 文 1面下 24.8mm 備考 | 咸平元寶 北宋 998年 楷書 文 土坡17上層 24.9mm 備考 | 咸平元寶 北宋 998年 楷書 文 1面下 25.0mm 小孔空く 備考 |
| | | | |
| 錢種 錢名 初鑄年 書體 背文 出土地點 徑 備考 | 錢種 錢名 初鑄年 書體 背文 出土地點 徑 備考 | 錢種 錢名 初鑄年 書體 背文 出土地點 徑 備考 | 錢種 錢名 初鑄年 書體 背文 出土地點 徑 備考 |
| 景德元寶 北宋 1004年 楷書 文 土坡1 25.0mm 備考 | 祥符元寶 北宋 1008年 楷書 文 土坡17上層 25.3mm 備考 | 天聖元寶 北宋 1023年 楷書 文 土坡17上層 25.3mm 備考 | 天聖元寶 北宋 1023年 楷書 文 土坡17上層 25.3mm 備考 |
| | | | |
| 錢種 錢名 初鑄年 書體 背文 出土地點 徑 備考 | 錢種 錢名 初鑄年 書體 背文 出土地點 徑 備考 | 錢種 錢名 初鑄年 書體 背文 出土地點 徑 備考 | 錢種 錢名 初鑄年 書體 背文 出土地點 徑 備考 |
| 天聖元寶 北宋 1023年 楷書 文 1面下 25.2mm 備考 | 祥符元寶 北宋 1008年 楷書 文 方形穿穴1 24.9mm 備考 | 景德元寶 北宋 1004年 楷書 文 土坡17上層 25.6mm 表面攏り 備考 | 景德元寶 北宋 1004年 楷書 文 1面下 23.1mm 縁攏り 備考 |

表3 出土銅錢一覽—3

| | | | | | | | |
|------|---------|------|--------|------|--------|------|--------|
| 21 | | 22 | | 23 | | 24 | |
| 錢種 | 景德元寶 | 錢種 | 皇宋通寶 | 錢種 | 皇宋通寶 | 錢種 | 皇宋通寶 |
| 國名 | 北宋 | 國名 | 北宋 | 國名 | 北宋 | 國名 | 北宋 |
| 初鑄年 | 1034年 | 初鑄年 | 1038年 | 初鑄年 | 1038年 | 初鑄年 | 1038年 |
| 書體 | 楷書 | 書體 | 楷書 | 書體 | 楷書 | 書體 | 楷書 |
| 背文 | 背文 | 背文 | 背文 | 背文 | 背文 | 背文 | 背文 |
| 出土地點 | 表採 | 出土地點 | 土坑1 | 出土地點 | 土坑1 | 出土地點 | 1面下 |
| 徑 | 25.5mm | 厚さ | 1.0mm | 徑 | 24.1mm | 厚さ | 1.3mm |
| 備考 | 鉢 | 備考 | | 備考 | | 備考 | |
| 25 | | 26 | | 27 | | 28 | |
| 錢種 | 皇宋通寶 | 錢種 | 皇宋通寶 | 錢種 | 皇宋通寶 | 錢種 | 皇宋通寶 |
| 國名 | 北宋 | 國名 | 北宋 | 國名 | 北宋 | 國名 | 北宋 |
| 初鑄年 | 1038年 | 初鑄年 | 1038年 | 初鑄年 | 1038年 | 初鑄年 | 1038年 |
| 書體 | 篆書 | 書體 | 篆書 | 書體 | 篆書 | 書體 | 篆書 |
| 背文 | 背文 | 背文 | 背文 | 背文 | 背文 | 背文 | 背文 |
| 出土地點 | 方形堅穴1 | 出土地點 | 土坑17上層 | 出土地點 | 土坑17上層 | 出土地點 | 土坑17上層 |
| 徑 | 23.70mm | 厚さ | 1.1mm | 徑 | 24.3mm | 厚さ | 1.3mm |
| 備考 | 備考 | 孔加工 | | 備考 | | 備考 | |
| 29 | | 30 | | 31 | | 32 | |
| 錢種 | 皇宋通寶 | 錢種 | 皇宋通寶 | 錢種 | 皇宋通寶 | 錢種 | 至和元寶 |
| 國名 | 北宋 | 國名 | 北宋 | 國名 | 北宋 | 國名 | 北宋 |
| 初鑄年 | 1038年 | 初鑄年 | 1038年 | 初鑄年 | 1038年 | 初鑄年 | 1034年 |
| 書體 | 篆書 | 書體 | 篆書 | 書體 | 篆書 | 書體 | 楷書 |
| 背文 | 背文 | 背文 | 背文 | 背文 | 背文 | 背文 | 背文 |
| 出土地點 | 土坑17上層 | 出土地點 | 1面下 | 出土地點 | 1面下 | 出土地點 | 土坑17上層 |
| 徑 | 25.3mm | 厚さ | 1.5mm | 徑 | 23.1mm | 厚さ | 1.4mm |
| 備考 | 孔加工 | 備考 | | 備考 | | 備考 | |

表4 出土銅錢一覧－4

| | | | | | | | |
|------|--------|------|-------|------|--------|------|-------|
| 33 | | 34 | | 35 | | 36 | |
| 錢種 | 嘉祐通寶 | 錢種 | 嘉祐通寶 | 錢種 | 治平元寶 | 錢種 | 治平元寶 |
| 國名 | 北宋 | 國名 | 北宋 | 國名 | 北宋 | 國名 | 北宋 |
| 初鑄年 | 1056年 | 初鑄年 | 1056年 | 初鑄年 | 1064年 | 初鑄年 | 1064年 |
| 書體 | 楷書 | 書體 | 楷書 | 書體 | 楷書 | 書體 | 篆書 |
| 背文 | | 背文 | | 背文 | | 背文 | |
| 出土地點 | 土坑1 | 出土地點 | 1面下 | 出土地點 | 1面下 | 出土地點 | 表採 |
| 徑 | 21.8mm | 厚さ | 1.9mm | 徑 | 24.0mm | 厚さ | 1.4mm |
| 備考 | | 備考 | | 備考 | | 備考 | |

| | | | | | | | |
|------|--------|------|--------|------|--------|------|-------|
| 37 | | 38 | | 39 | | — | |
| 錢種 | 熙寧元寶 | 錢種 | 熙寧元寶 | 錢種 | 熙寧元寶 | | |
| 國名 | 北宋 | 國名 | 北宋 | 國名 | 北宋 | | |
| 初鑄年 | 1068年 | 初鑄年 | 1068年 | 初鑄年 | 1068年 | | |
| 書體 | 楷書 | 書體 | 楷書 | 書體 | 楷書 | | |
| 背文 | | 背文 | | 背文 | | | |
| 出土地點 | 土坑3 | 出土地點 | 土坑17上層 | 出土地點 | 1面下 | | |
| 徑 | 24.5mm | 厚さ | 1.4mm | 徑 | 23.9mm | 厚さ | 1.6mm |
| 備考 | | 備考 | | 備考 | | 背面錯范 | |

| | | | | | | | |
|------|--------|------|-------|---|--|------|--------|
| 40 | | 41 | | — | | 42 | |
| 錢種 | 熙寧元寶 | 錢種 | 元豐通寶 | | | 錢種 | 元豐通寶 |
| 國名 | 北宋 | 國名 | 北宋 | | | 國名 | 北宋 |
| 初鑄年 | 1068年 | 初鑄年 | 1078年 | | | 初鑄年 | 1078年 |
| 書體 | 篆書 | 書體 | 行書 | | | 書體 | 行書 |
| 背文 | | 背文 | | | | 背文 | |
| 出土地點 | 土坑1 | 出土地點 | 土坑1 | | | 出土地點 | 土坑1 |
| 徑 | 24.0mm | 厚さ | 1.4mm | | | 徑 | 24.2mm |
| 備考 | | 備考 | | | | 備考 | 1.3mm |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |

表5 出土銅錢一覽—5

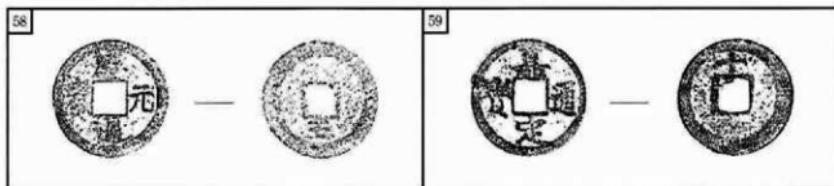
| 43 | 44 | 45 | 46 |
|----------------|----------------|----------------|----------------|
| | | | |
| 錢種元豐通寶 | 錢種元豐通寶 | 錢種元豐通寶 | 錢種元豐通寶 |
| 國名北宋 | 國名北宋 | 國名北宋 | 國名北宋 |
| 初鑄年1078年 | 初鑄年1078年 | 初鑄年1078年 | 初鑄年1078年 |
| 書體行書 | 書體行書 | 書體行書 | 書體篆書 |
| 背文 | 背文 | 背文 | 背文 |
| 出土地點土坑17上層 | 出土地點土坑17上層 | 出土地點表採 | 出土地點1面下 |
| 徑24.4mm厚さ1.5mm | 徑23.7mm厚さ1.5mm | 徑25.7mm厚さ1.2mm | 徑25.4mm厚さ1.3mm |
| 備考 | 備考 | 備考 | 備考 |

| 47 | 48 | 49 |
|----------------|----------------|----------------|
| | | |
| 錢種元祐通寶 | 錢種元祐通寶 | 錢種元祐通寶 |
| 國名北宋 | 國名北宋 | 國名北宋 |
| 初鑄年1086年 | 初鑄年1086年 | 初鑄年1086年 |
| 書體行書 | 書體行書 | 書體行書 |
| 背文 | 背文 | 背文 |
| 出土地點土坑17上層 | 出土地點土坑17上層 | 出土地點表採 |
| 徑24.7mm厚さ1.3mm | 徑24.9mm厚さ1.4mm | 徑24.4mm厚さ1.4mm |
| 備考 | 備考 | 備考 |

| 50 | 51 | 52 | 53 |
|----------------|----------------|----------------|----------------|
| | | | |
| 錢種元祐通寶 | 錢種紹聖元寶 | 錢種紹聖元寶 | 錢種紹聖元寶 |
| 國名北宋 | 國名北宋 | 國名北宋 | 國名北宋 |
| 初鑄年1086年 | 初鑄年1094年 | 初鑄年1094年 | 初鑄年1094年 |
| 書體篆書 | 書體行書 | 書體篆書 | 書體篆書 |
| 背文 | 背文 | 背文 | 背文 |
| 出土地點土坑17上層 | 出土地點土坑17上層 | 出土地點土坑17上層 | 出土地點表採 |
| 徑24.8mm厚さ1.7mm | 徑24.0mm厚さ1.6mm | 徑23.1mm厚さ1.3mm | 徑25.0mm厚さ1.3mm |
| 備考 | 備考 | 備考 | 備考 |

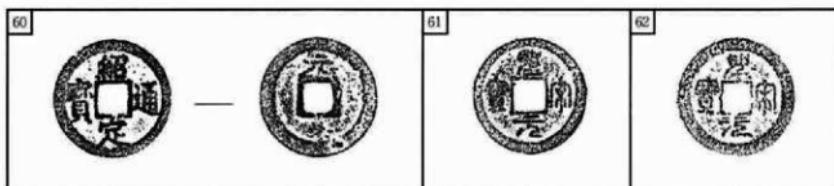
表6 出土銅錢一覽-6

| 54 | 55 | 56 | 57 |
|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| | | | |
| 錢種元行通寶 | 錢種聖宋元寶 | 錢種政和通寶 | 錢種政和通寶 |
| 國名北宋 | 國名北宋 | 國名北宋 | 國名北宋 |
| 初鑄年1096年 | 初鑄年1101年 | 初鑄年1111年 | 初鑄年1111年 |
| 書體行書 | 書體行書 | 書體篆書 | 書體篆書 |
| 背文 | 背文 | 背文 | 背文 |
| 出土地点表採 | 出土地点土坑17上層 | 出土地点土坑17上層 | 出土地点1面下 |
| 径23.8mm 厚さ1.3mm | 径24.9mm 厚さ1.4mm | 径24.6mm 厚さ1.4mm | 径24.0mm 厚さ1.2mm |
| 備考 | 備考孔加工 | 備考 | 備考 |



| |
|-----------------|
| 錢種慶元通寶 |
| 國名南宋 |
| 初鑄年1195年 |
| 書體楷書 |
| 背文五 |
| 出土地点土坑17上層 |
| 徑24.5mm 厚さ1.4mm |
| 備考 |

| |
|-----------------|
| 錢種嘉定通寶 |
| 國名南宋 |
| 初鑄年1208年 |
| 書體楷書 |
| 背文十 |
| 出土地点1面下 |
| 徑24.2mm 厚さ1.1mm |
| 備考 |



| |
|-----------------|
| 錢種紹定通寶 |
| 國名南宋 |
| 初鑄年1228年 |
| 書體楷書 |
| 背文元? |
| 出土地点土坑17上層 |
| 徑24.4mm 厚さ1.4mm |
| 備考 |

| |
|-----------------|
| 錢種皇宋元寶 |
| 國名南宋 |
| 初鑄年1253年 |
| 書體篆書 |
| 背文 |
| 出土地点土坑1 |
| 徑24.0mm 厚さ1.6mm |
| 備考 |

表7 出土銅錢一覧－7

| | | | | | |
|----------------|-------------|----------------|-------------|--------------|-------------|
| 63 | | 64 | — | 65 | |
| 錢種 皇宋元寶 | | 錢種 皇宋元寶 | | 錢種 皇宋元寶 | |
| 國名 南宋 | | 國名 南宋 | | 國名 南宋 | |
| 初鑄年 1253年 | | 初鑄年 1253年 | | 初鑄年 1253年 | |
| 書體 篆書 | | 書體 篆書 | | 書體 篆書 | |
| 背文 | | 背文 | | 背文 | |
| 出土地點 上坑17上層 | | 出土地點 上坑17上層 | | 出土地點 1面上 | |
| 径 24.0mm | 厚さ 1.6mm | 徑 24.0mm | 厚さ 1.4mm | 徑 22.9mm | 厚さ 1.3mm |
| 備考 | | 備考 | 背面錯范 | 備考 | |
| 66 | | — | | | |
| 錢種 文久永寶 | | | | | |
| 國名 江口初鑄 | | | | | |
| 年 1863年 | | | | | |
| 書體 楷書 | | | | | |
| 背文 波紋 | | | | | |
| 出土地點 上坑17上層 | | | | | |
| 徑 26.6mm | 厚さ 1.4mm | | | | |
| 備考 重む | | | | | |

表8 出土遺物計測表

| 団 No. | 遺物 No. | 層位 | 種別 | 計測値 単位:cm | | | 35 | 表採 | 船載品 同安窓青磁碗 | — | 5.0 | — |
|----------|-----------|----------------|--------|-----------|------|----|----|-------|----------------|--------|--------|--------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | | |
| 1 | 1面上 | 上器 かわらけ・糸 | (14.0) | (8.4) | 3.7 | | 36 | 表採 | 船載品 龍泉窓青磁碗 | — | (4.6) | — |
| 2 | 1面上 | 土師器 环 | — | — | — | | 37 | 表採 | 船載品 白釉口无盖 | — | 5.6 | — |
| 3 | 1面上 | 常滑 片口鉢II型 | — | — | — | | 38 | 表採 | 常滑窓 片口鉢II型 | — | — | — |
| 4 | 1面上 | 常滑 片口鉢II型 | (20.7) | — | — | | 39 | 表採 | 常滑窓 片口鉢II型 | — | — | — |
| 5 | 1面上 | 常滑 押印文 | 文様:格子 | | | | 40 | 表採 | 常滑押印文 土内製品板 | — | — | — |
| 6 | 1面上 | 加工骨 度の角 | | | | | 41 | 表採 | 土内製品板 | — | — | — |
| 7 | 土壤21 | 土器 かわらけ・糸 | (7.9) | (4.6) | 1.35 | | 42 | 表採 | 土内製品板 | (6.0) | | 1.5 |
| 8 | 土壤2 | 土器 かわらけ・糸 | (7.2) | (4.4) | 1.7 | | 1 | 1面上 | 土師器 | (15.8) | — | [3.5] |
| 9 | 土壤12 | 土器 かわらけ・糸 | (7.2) | (4.8) | 2.0 | | 2 | 土坑10 | 土師器 | (13.8) | (10.8) | 3.4 |
| 10 | 土壤1 | 土器 かわらけ・糸 | (7.8) | (4.6) | 2.3 | | 3 | 方堅3 | 土師器 | 14.4 | 10.1 | 3.8 |
| 11 | 土壤1 | 土器 かわらけ・糸 | (7.6) | (5.0) | 2.2 | | 4 | 土坑9 | 土師器 | (15.5) | (10.7) | [3.8] |
| 12 | 方堅1 | 土器 かわらけ・糸 | (12.5) | (8.2) | 3.5 | | 5 | 2面構成土 | 土師器 | (11.8) | (6.4) | 4.2 |
| 13 | 土壤1 | 土器 かわらけ・糸 | (14.0) | (7.7) | 3.45 | | 6 | 表採 | 土師器 | (11.2) | — | [2.3] |
| 14 | 土壤1 | 土器 かわらけ・糸 | (13.4) | (8.4) | 3.4 | | 7 | 1面上 | 土師器 | — | — | [3.2] |
| 15 | 土壤21 | 土器 かわらけ・糸 | (12.6) | — | — | | 8 | 1面構成土 | 土師器 | — | — | [1.6] |
| 16 | 方堅1 | 瀬戸窓 瓶 | — | — | — | | 9 | 土壤14 | 土師器 | (17.0) | — | [10.8] |
| 17 | 土壤18 | 常滑 山茶窓 瓶 | — | (6.2) | — | | 10 | 土坑23 | 土師器 | (21.3) | — | [10.9] |
| 18 | 土壤2 | 常滑 片口鉢II型 | — | — | — | | 11 | 2面構成土 | 土師器 | — | — | [5.5] |
| 19 | 方堅1 | 常滑 片口鉢II型 | — | — | — | | 12 | 古代層 | 土師器 | — | — | [5.8] |
| 20 | 方堅1 | 常滑 窓 瓶 | — | — | — | | 13 | 2面構成土 | 土師器 | — | — | [3.0] |
| 21 | 土壤1 | 瓦器 質 火鉢 | — | — | — | | 14 | 古代層 | 土師器 | — | — | [3.5] |
| 22 | 土壤1 | 加工骨 度 | | | | | 15 | 表採 | 土師器 | — | — | [3.0] |
| 23 | 1面構成土 | 土器 かわらけ・糸 | (8.7) | (7.2) | 1.6 | | 16 | 2面構成土 | 土師器 | — | — | [5.1] |
| 24 | 1面構成土 | 土器 かわらけ・糸 | (8.7) | (6.6) | 1.6 | | 17 | 2面構成土 | 土師器 | — | — | [2.3] |
| 25 | 1面構成土 | 土器 かわらけ・糸 | (7.8) | (5.5) | 1.85 | | 18 | 2面構成土 | 土師器 | (14.6) | — | [4.4] |
| 26 | 1面構成土 | 土器 かわらけ・糸 | (7.9) | (5.2) | 2.4 | | 19 | 土坑8 | 土師器 | (12.2) | — | [3.3] |
| 27 | 1面構成土 | 土器 かわらけ・糸 | (11.4) | (7.4) | 2.7 | | 20 | 2面構成土 | 土師器 | — | — | [2.6] |
| 28 | 1面構成土 | 土器 かわらけ・糸 | (13.0) | (8.5) | 3.3 | | 21 | 2面構成土 | 土師器 | — | (10.3) | [1.7] |
| 29 | 1面構成土 | 土器 かわらけ・糸 | (13.4) | (8.2) | 3.1 | | 22 | 古代層 | 須恵器 | (16.4) | — | [3.1] |
| 30 | 1面構成土 | 常滑 窓 瓶 | — | (8.0) | — | | 23 | 古代層 | 須恵器 | (11.0) | — | [2.9] |
| 31 | 1面構成土 | 瀬戸 前 鉢 | | | | | 24 | 1面構成土 | 須恵器 | (10.6) | — | [3.3] |
| 32 | 土壤15 | 土器 かわらけ・糸 | 12.0 | 7.4 | 3.85 | | 25 | 表採 | 須恵器 | (12.2) | — | [3.2] |
| 33 | 土壤17 | 土器 かわらけ・糸 | (7.7) | (5.4) | 1.5 | | 26 | 方堅2 | 須恵器 | (12.0) | — | [3.9] |
| 34 | 2面構成土 | 土器 かわらけ・糸 | | | | | 27 | 2面構成土 | 須恵器 | — | (6.4) | [1.4] |

表9 出土遺物数

| 層位 | 遺物 | 舶 | | | | 載 | | | | 品 | | | | 國内産 | | | | 諸窯 | | | | 火鉢 | 土製品 |
|-------|------|-------------|--------|-------|------|-------|----------|--------|-------|--------|-------------------|-----|-----|---------|-------|--|--|------|--|--|---|----|-------|
| | | かわらけ 系切引 | 青磁 | 白磁 | 青白磁 | 褐釉 | 釉 | 瀬戸 | 常滑 | 配 | 美濃 | 備前 | | | | | | | | | | | |
| 1面上 | 140 | | | | | 1 | | | 5 | | 22 | | | | | | | | | | | 2 | |
| 1面造構 | 177 | | | | | | | 1 | 1 | 20 | 1 | | | | | | | | | | 1 | 7 | |
| 1面構成土 | 27 | | | | | | | | | 18 | | | | | | | | | | | | 1 | |
| 2面上 | 3 | | | | | | | | | | 3 | | | | | | | | | | | 1 | |
| 2面造構 | 31 | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | 1 | |
| 2面構成土 | 27 | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | 1 | |
| 表様 | 122 | 2 | 1 | | | | | | 3 | 19 | | | | | | | | | | | | 3 | |
| 古代器 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 計 | 528 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 9 | | 84 | 1 | 1 | | | | | | | | | | 4 | 13 | |
| % | 37.8 | 0.1 | 0.1 | 0.1 | 0.1 | 0.1 | 0.6 | 6.0 | 0.1 | 0.1 | 0.1 | 0.1 | 0.3 | 0.9 | | | | | | | | | |
| 層位 | 遺物 | 鐵製品 | | | | 石製品 | | | | 中世以前 | | | | 近世 | | | | 自然遺物 | | | | 計 | % |
| | | 銭 | 釘 | | | 土師器 | 須恵器 | 灰陶器 | | 骨 | | | | 貝 | | | | 貝 | | | | | |
| 1面上 | 3 | 3 | 1 | | 3 | 4 | 1 | | 6 | | 18 | | | | 207 | | | | | | | | 14.8 |
| 1面造構 | 14 | 1 | | | 21 | 6 | 1 | | 17 | | 137 | | | | 404 | | | | | | | | 28.9 |
| 1面構成土 | 13 | | 1 | 5 | 4 | | | | 2 | | 19 | | | | 96 | | | | | | | | 6.9 |
| 2面上 | | | | 1 | 2 | 12 | 4 | | | | 5 | | | | 11 | | | | | | | | 0.8 |
| 2面造構 | | 1 | | 1 | 13 | 9 | | | 2 | | 26 | | | | 82 | | | | | | | | 5.9 |
| 2面構成土 | 29 | | | 5 | 7 | | | | 1 | | 72 | | | | 154 | | | | | | | | 11.0 |
| 表様 | 7 | | | | | | | | 9 | | 25 | | | | 202 | | | | | | | | 14.4 |
| 古代器 | | | 2 | 4 | | | | | | | 3 | | | | 10 | | | | | | | | 0.7 |
| 計 | 66 | 5 | 7 | 64 | 36 | 2 | 1 | | 37 | | 305 | | | | 1,398 | | | | | | | | 100.0 |
| % | 4.7 | 0.4 | 0.5 | 4.6 | 2.6 | 0.1 | 0.1 | 2.6 | 2.6 | 21.8 | | | | | | | | | | | | | |
| 層位 | 貝 | 干潟群集 | | | | 内湾底群集 | | | | 内湾砂底群集 | | | | 干潟外砂底群集 | | | | 干潟群集 | | | | 貝 | シ |
| | | アサリ | シオワキガイ | カガミガイ | アカニシ | バイガイ | イチヨウトリガイ | | イボキサゴ | フメタガイ | チヨウセンダンベイイケベンケイガイ | | | ハマグリ | サゴ | | | | | | | | |
| 1面上 | | | | 2 | 1 | 2 | | | 1 | 1 | 5 | | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| 1面造構 | | 1 | 1 | 2 | 4 | | | | 76 | 4 | 24 | | | | 6 | | | | | | | | 1 |
| 1面構成土 | 1 | | 2 | | | | | | 1 | 1 | 6 | | | | 1 | | | | | | | | |
| 2面上 | | | | | | | | | | | 3 | | | | | | | | | | | | |
| 2面造構 | 3 | | | 1 | | | | | 1 | 1 | 5 | | | | 2 | | | | | | | | 2 |
| 2面構成土 | 19 | 2 | 1 | 2 | 2 | | | | 3 | 1 | 19 | | | | 1 | | | | | | | | 2 |
| 表様 | 1 | | 1 | | 2 | 1 | | | 1 | | 9 | | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| 古代器 | | | | | | | | | | | 3 | | | | | | | | | | | | |
| 計 | 24 | 3 | 7 | 6 | 10 | 1 | | | 82 | 9 | 74 | | | | 13 | | | | | | | | 1 |
| 層位 | 貝・骨 | 岩礁 | | | | 礁 | | | | ほ乳類 | | | | ほ乳類 | | | | シ | | | | 貝 | シ |
| | | アワビ | イワガキ | サザエ | バティラ | コシダガガ | ツノマタナガ | ボクシオウガ | | 中足骨 | 歯骨 | 指骨 | その他 | ウ | | | | | | | | | |
| 1面上 | | 1 | 3 | | | 8 | 2 | 2 | | 1 | | | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| 1面造構 | | 5 | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | |
| 1面構成土 | 2 | 3 | 1 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | |
| 2面上 | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2面造構 | 2 | 4 | 6 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2面構成土 | 5 | 7 | 6 | 1 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 6 |
| 表様 | 1 | 4 | 3 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 古代器 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 計 | 16 | 21 | 26 | 4 | 5 | 1 | | | 2 | 2 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | 6 |
| 層位 | 骨 | 二ホンシカ | | | | イヌス | | | | ヒト | | | | イルカ | | | | 鳥類 | | | | 骨 | シ |
| | | 角 | その他 | 上腕骨 | 指骨 | 頭骨 | 頭骨 | | 上腕骨 | その他 | 椎骨 | その他 | | | | | | | | | | | |
| 1面上 | | 1 | | | | | | | 1 | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | 1 |
| 1面造構 | | 2 | 1 | 8 | | | | | 1 | | 2 | | | | | | | | | | | | 3 |
| 1面構成土 | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | |
| 2面上 | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 2面造構 | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | |
| 2面構成土 | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | |
| 表様 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 古代器 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 計 | 1 | 2 | 1 | 8 | 3 | 1 | | | 2 | 3 | 2 | 3 | | | | | | | | | | | 3 |



▲ 土坑17（南東から）



▲ 土坑23・24（北東から）



▲ 土坑27・28（南から）



▲ 方溝2・3（南から）



▲ II区調査最終状況（南西から）



▲ I区調査最終状況（南西から）

造構写真 1

図版2



▲ 調査前現況



▲ 表土掘削終了後



▲ I区I面全景（南西から）



▲ I区方壁1（南から）

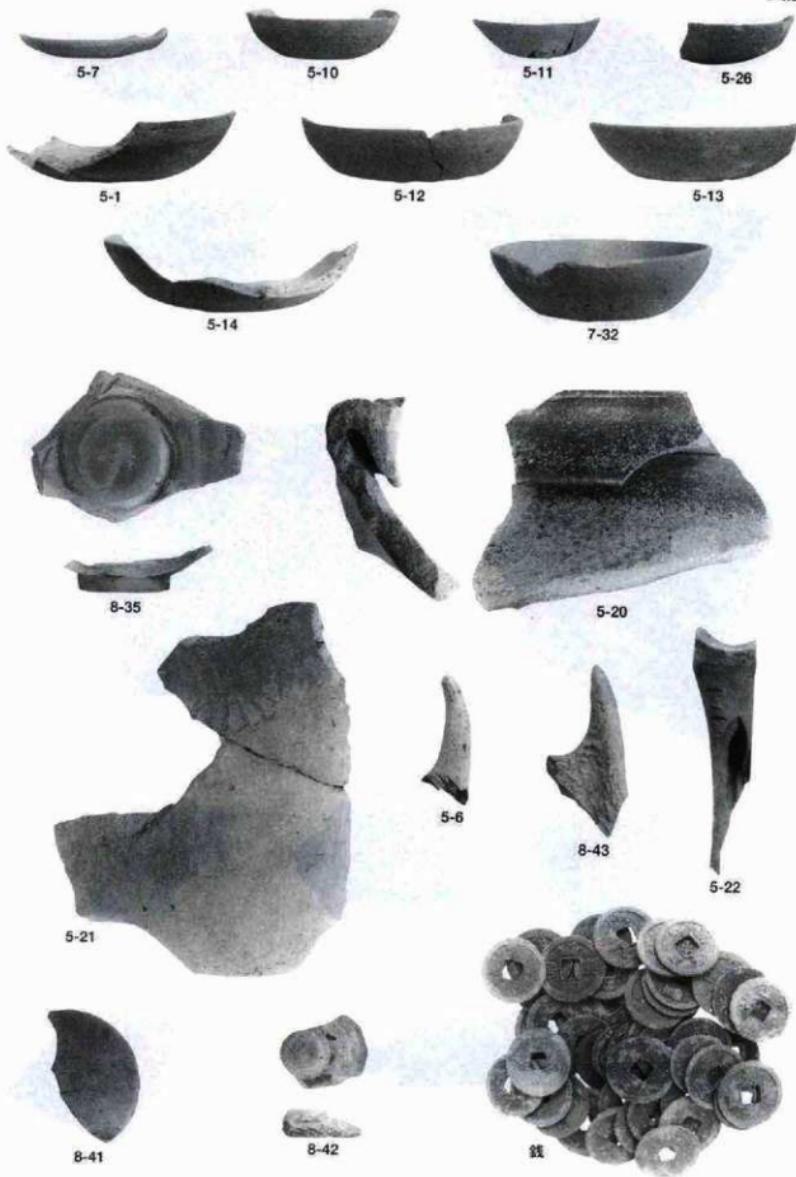


▲ 土坑5・6（北東から）



▲ 土坑9・10（東から）

図版3

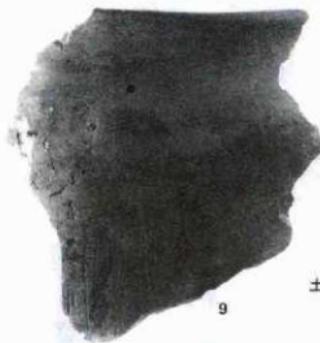


遺物写真（中世）

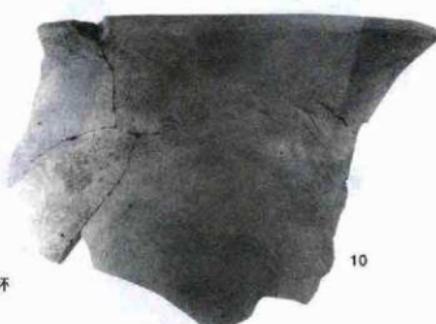
图版4



7 (内面)



9



10

土師器 环



11



12



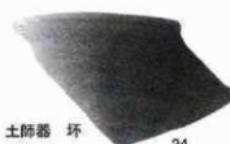
16

土師器 瓢



22

須恵器 蓋



24

土師器 环

ほうじょうまさむら や しきあと
北条政村屋敷跡 (No.131)

常盤字常松下1005番 2 地点

例　　言

1. 本報は、北条政村屋敷跡（Na.131）内、鎌倉市常盤字常松下1005番2地点における個人専用住宅新築にともなう発掘調査の報告である。
2. 調査期間 平成14年7月23日～同年8月9日
調査面積 28.19m²
3. 調査体制
担当者 馬淵和雄
調査員 伊丹まどか・石元道子（現地調査）
　　鍛治屋勝二・松原康子（資料整理）
調査補助員 沖元道・吉田智哉
作業員 柴崎英輔・沼上三代治・宮崎明
4. 本報作成成分
図版作成 伊丹・鍛治屋・松原・沖元
表作成 伊丹・沖元
写真撮影 馬淵（遺構）・伊丹（遺物）
執筆・編集 伊丹
総括・補綴 馬淵
5. 発掘調査にかかる資料は鎌倉市教育委員会が保管している
協力機関 （社）鎌倉市シルバー人材センター・（株）高野建設・（有）秋元組

凡　　例

1. 図中の方位はすべて座標北を示す。
2. 挿図縮尺は次のとおり
遺構全図 80分の1
土層図 60分の1
出土遺物 3分の1
3. 遺構図の高度は海拔を示す。
4. 土師器皿の呼称のうち「R種」はロクロ成形種を、「T種」は手づくね成形種を示す。
5. 元号年および史料中の条文を示す日付は漢数字を、地の文中での日付は算用数字を用いた。
6. 引用・参考文献は第4章末尾に一括した。

目 次

| | |
|---------------------|-----|
| 第1章 調査地点について | 250 |
| 第2章 調査の概要 | 252 |
| 1 調査にいたる経緯 | 252 |
| 2 調査の方法と経過 | 252 |
| 3 堆積土層 | 254 |
| 第3章 検出遺構と出土遺物 | 254 |
| 1 上層遺構面 | 254 |
| 2 下層遺構面 | 255 |
| 第4章 まとめ | 256 |

挿 図 目 次

| | |
|----------------------|-----|
| 図1 調査地点と周辺の遺跡 | 251 |
| 図2 調査区設定図 | 252 |
| 図3 調査区壁土層図 | 253 |
| 図4 上層面・下層面遺構全図 | 254 |
| 図5 出土遺物 | 255 |

表 目 次

| | |
|-------------------|-----|
| 表1 出土遺物観察表 | 257 |
| 表2 出土遺物破片点数 | 257 |

図 版 目 次

| | |
|------------------------|-----|
| 図版1-1 調査地点近景 | 258 |
| 1-2 西壁土層断面 | 258 |
| 1-3 上層遺構面（北から） | 258 |
| 図版1-4 泥岩地行面（南から） | 258 |
| 1-5 土坑1 | 258 |
| 1-6 出土遺物 | 258 |

第1章 調査地点について

調査地点は、JR鎌倉駅から西に約1900mの、常盤と呼ばれる谷戸内に位置している。常盤は東西約900m、南北約300mを測る広い谷戸である。現在はJR鎌倉駅と県道藤沢鎌倉線を結ぶ新道が谷戸内のほぼ中央を縦断しているが、中世では鎌倉市中から大仏坂切通しを西に越えた北東部、化粧坂切通しを西に越えた南西部に位置し、両切通しの監視・防衛拠点としての要地であった可能性がある。谷戸内には多くの支谷があり、調査地点は谷口（西）から一つ目の南側の、幅100m（谷口）、奥行120mの規模がある支谷の谷口部に位置する。現在の地番は鎌倉市常盤字常盤下1005番2外地点。この支谷内にはかつて「仲ノ坂」という道が通じていたという。現在、南の山稜に向かって谷戸内東側の山裾を縱走する狭い道がある。この道自体は昭和の前半頃まで小川であったというが、すぐ近くを並行して旧仲ノ坂が走っていた可能性は少なくないであろう。谷尻の山上には大仏坂切通しが旧状を留めている。

谷戸内には般若・御所ノ内・法華堂・一向堂・車坂・中坂（仲ノ坂）・たちん台（館の台？）等の小字名が残り、常盤は「常葉」とも記される。調査地から東に約200mの距離にある、現在「御所の内」と称される一帯の支谷には、北条泰時の弟で連署・執権を務めた北条政村の「常盤亭」があったとされる。

政村常盤亭は、「常葉ノ別業」・「常葉ノ第」・「常盤ノ御亭」・「常盤の山莊」とも記される。「吾妻鏡」によると、康元元年（1286）8月、將軍宗尊親王が「常葉別業」に赴いたと記され、歌合が行なわれた記録も残る（同月二十・二十一日条）。「金沢貞顕書状」（年月日未詳）には「さてあまなハのやけて候程ニ、ときハヘうつり」とみえる（『神奈川県史 資料編』2-1623）。谷戸内には重時流北条氏の時茂（重時四男）から時範（時茂の息とも、北条義政の息ともいう）まで山荘があったと伝える（『新編鎌倉志』）。重時の息で、連署・評定衆をつとめた信濃塙田北条氏の祖、北条（塙田）義政もこの地にいた可能性がある（阿部1971）。当地一帯は北条氏一族が別邸を設けた地であったことが窺われる。また、鎌倉幕府滅亡直後の元弘三年（1333）六月三日の「政綱施行狀」（『神奈川県史 資料編』2-3102）で曾我右衛門太郎入道に宛て、「曾我人々相共、常葉可警護」と命じており、鎌倉防衛の要地であったことを示している。

谷戸内に広がる複数の支谷では多くの「やぐら」の存在も確認されている。調査地の南東400m付近には、一向堂という小字名が残る。『新編相模国風土記』所載の「大谷遺跡録」には、延慶二年（1309）唯善坊が如信上人の彫像、親鸞の真影、遺骨を持し、鎌倉に下りて常盤村に居住し念佛の宣布に努めたとある。この唯善坊の草庵は、戦国期に兵火にかかり「魔庵」となった。現在では宗旨未詳とされるが、浄土真宗（一向宗）の布教所が所在していた地であろう。

谷戸内での発掘調査は、これまで次のようなものがある。

1971年に法華堂と称される支谷でおこなわれた調査では、地山を幅広く掘り切って「入り口」とした遺構を検出した（地点8、奥田1972）。1977年には法華堂東の支谷の調査が行なわれ、鎌倉期から室町期前半にわたる三時期の遺構面を確認し、井戸・礎石建物・溝などを検出した。遺物は中世土器（「土器皿」）・常滑窯・舶載磁器・銭などの他に、金銅製水滴・骨製賽子・滑石製スタンプ・硯などが出土している（地点6、未報告）。この地は、現在は国指定史跡「北条政村邸跡」となる。史跡「北条政村邸跡」の北側に広がる丘陵部は地山加工により山城の特徴が認められ、県遺跡台帳で桔梗山城と呼ばれている（No.387）。調査地点と殿入川を挟んで近接する地点3・4・5では、中世の遺構・遺物とともに、奈良・平安時代の水田が検出された（斎木ほか1994）。調査地の南側、同支谷内での調査では、鎌倉時代後半の遺構・遺物とともに、9世紀中葉から後半に比定される堅穴住居や、8～10世紀に属する遺物が出土している（地点2、馬淵1999）。

（引用・参考文献は第4章末尾に一括）

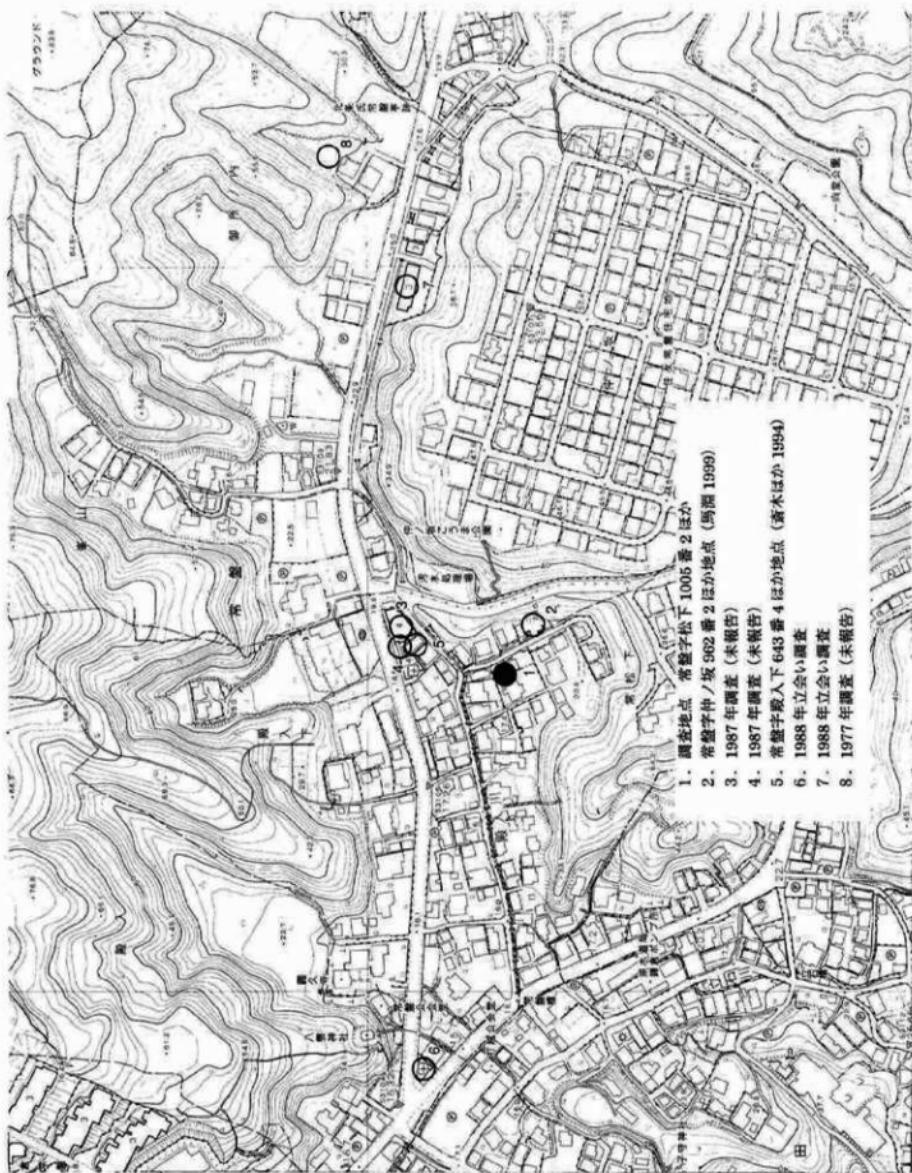


図1 調査地点と周辺の遺跡

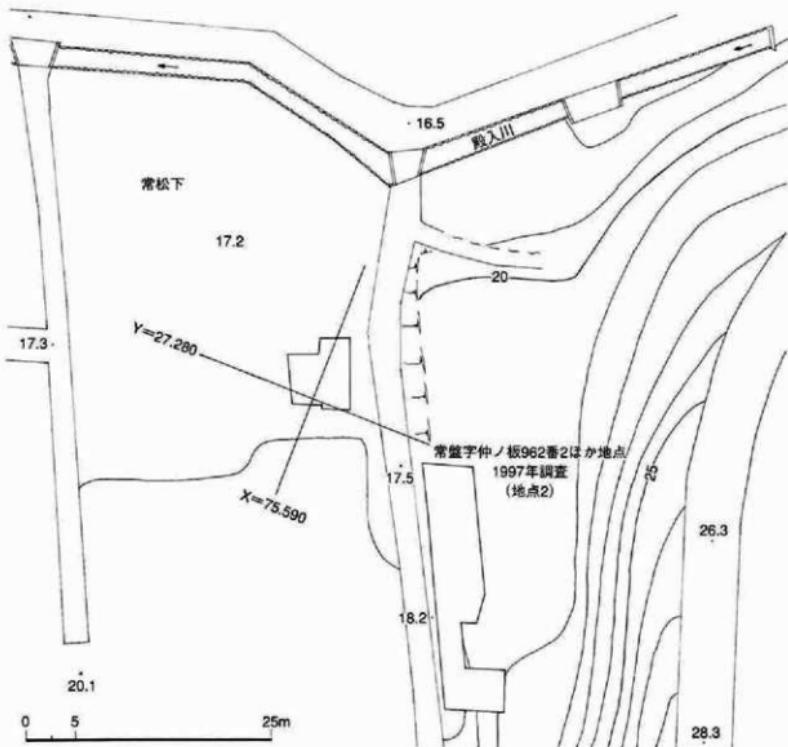


図2 調査区設定図

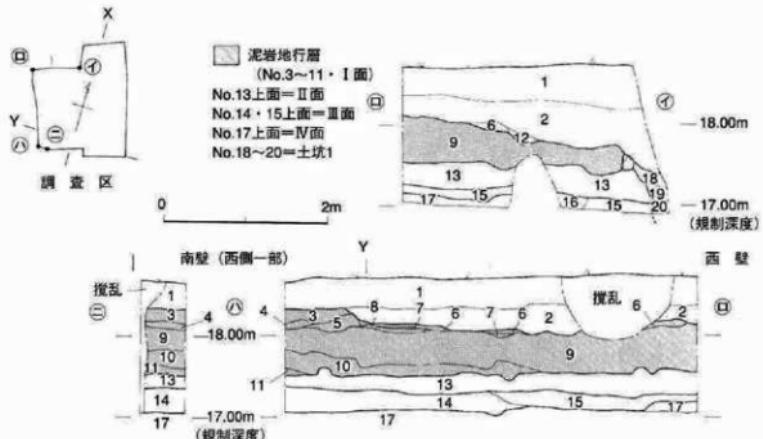
第2章 調査の概要

1. 調査にいたる経緯

平成14年5月に地下室の築造を含む個人専用住宅の建設に係る事前相談がもたらされた。地下室の築造に係る掘削深度から勘案して、埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断されたため、確認調査を実施したところ、現地表下60cm以下に中世遺構面の存在が確認された。これにより事業者との協議を経て、文化財保護法第57条の2の届出手続きを行い、施工者との工程調整および発掘調査の準備が整った平成13年7月23日から8月9日まで現地での発掘調査を実施した。

2. 調査の方法と経過

調査は平成14年7月22日～同年8月9日にかけて実施された。調査対象面積は28.19m²である。平成14年5月28日～30日に行なった確認調査の結果から、地表下60cmまでは近・現代の整地層であることが判明していたので、重機によりそれを取り除いたのち、人力で掘り下げ、遺構確認を行なった。調査区内には大きな搅乱坑があったうえ、直径80cmのコンクリート製の基礎杭が12本埋設されていたた



1. 表土
2. 茶褐色弱粘質土・近畿耕作土。
3. 奉太の泥岩・砂質土を含む。
4. 小石の大泥岩・炭化物を含んだ暗褐色粘質土。
5. 奉太の泥岩・炭化物を含んだ暗褐色粘質土。
6. 小石・奉太の泥岩・炭化物を含んだ暗褐色粘質土。
7. 黒色粘土層
8. と同質
9. 奉太・人頭大的大型泥岩・炭化物・砂質土を含む。
10. 9と同質・より堅密に泥岩が占有する。
11. 奉太・人頭大的泥岩層
12. 茶褐色粘質土・2と同質。砂質土混入。
13. 暗茶褐色粘質土・褐鉄を多く含む。炭化物・遺物を多く含む。
14. 暗褐色粘質土
15. 喀斯特粘質土・13に比べ粘性が強い。褐鉄量は13と同じが多い。
16. 暗褐色粘質土・褐鉄を多く含む。粘性強。
17. 黒色粘土・炭化物・遺物を含む。褐鉄微量。
18. 茶褐色弱粘質土・炭化物・遺物を含む。褐鉄微量。
19. 茶褐色弱粘質土・粘性弱い。褐鉄・炭化物を含む。
20. 茶褐色弱粘質土・炭化物・泥岩粒を後景に含む。

図3 調査区壁土層図

め、平面的な調査が非常に困難であった。また、調査区内に設定した測量用方眼の2軸以東は旧地表が下がっていくが、海拔17.0mまでという掘削深度規制により、以下の確認はできなかった。

測量にあたっては、調査区内の南寄りにある国土座標交点X=-75.590.460/Y=27.278.880(area 9)を基準とした。座標成果は調査地点北約20mにある鎌倉市4級基準点(C073)から算出した。

調査の結果、破碎泥岩による地行や土坑を検出した。出土遺物には中世のもののはか、破片ではあるがそれ以前のものも含まれている。出土遺物については、報文末に一覧表で示した。

日誌抄

- 7月23日 調査開始。機材搬入。調査区の設定。重機による表土掘削。
- 24日 標高原点移動。測量基準線を設定。試掘坑位置確認、掘り上げ。
- 25日 上層面検出および遺構確認。
- 29日 精査と並行して、全側図、個別遺構図の作成。
- 8月1日 上層遺構面全景写真撮影。
- 2日 上層遺構面で検出した、泥岩地行部分を重機によって掘り下げ開始。
- 3日 上層遺構面と下層遺構面の間層で精査、遺構面でないことを確認。全景写真撮影。
- 7日 下層遺構面確認、精査。調査区壁の土層堆積図実測。
- 8日 下層遺構全景写真撮影。全側図、個別遺構図の作成。機材清掃。
- 9日 現地調査終了。機材撤収。

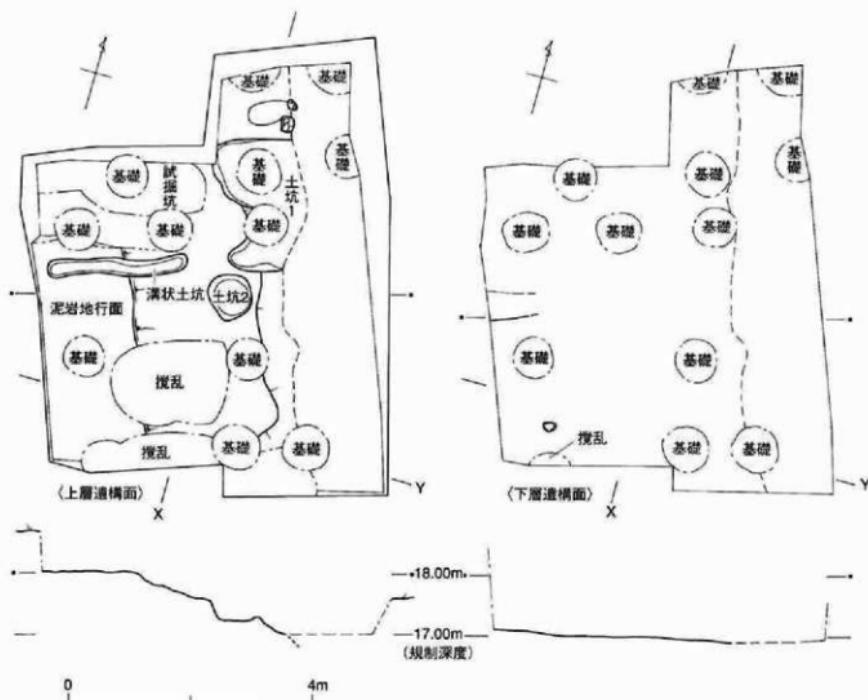


図4 上層面・下層面造構全図

3. 堆積土層

調査開始前の地表高は海拔18.7m、前面道路の標高は調査地点あたりで海拔17.2m前後なので、約1.5mの比高差がある。近・現代の層が地表下約60cmにおよんでおり、これを剥がすと直下に大・小の破碎泥岩によって構築された版築地行層が現れ、中世上層面とした。海拔高は18.1~18.3mである。この地行層は堅く突き固められ、約80cmの厚さがある。調査区西端から東に約80cmの辺りまで、壁に平行する形でひろがり、西および南北は調査区外にある。破碎泥岩による地行層下には、調査規制深度の海拔17.0mにいたるまでに、褐鉄を多く含む硬く締まった暗褐色粘質土層が、約40cmの厚さで堆積する。

中世下層とした、規制深度以下は黒色粘土が堆積する。泥岩による地行が切れる辺りから東に向かって落ち込みが形成される。この落ち込みは、道路をはさんだ東南側で1997年に実施された調査でも、「道路に面したところが急斜面の崖となる」という報告がなされており、道路東側にあたる本調査地も同様の様相を示すと考えたが、規制深度のために崖、あるいは斜面の確認は出来なかった。

第3章 検出遺構と出土遺物

1. 上層造構面（図4）

調査区西壁沿いで、現地表下40cm、海拔18.3mで泥岩による地行面を検出した（図4）。泥岩による

地行は約80cmの厚さがあり、堅固で平坦であるが、生活面を造成した確かな痕跡を確認することはできなかった。地行の東側は、東に向かってややなだらかに傾斜するが、後世に上部が削平を受けた可能性もある。泥岩の地行は確認できた範囲で、南北に490cm、東西に380cmを測った。東西幅は傾斜面も含み、平坦な部分で幅80cmを測る。地行の北・西・南側は調査区外に延びてしまっていたため、正確な形状、範囲は不明である。この地行は「道路」ではないかと想定して作業を進めていたが、全容がうかがえずはっきりとした性格は不明であり、可能性がある、というにとどめたい。

検出した遺構は、泥岩地行のほぼ中心近くに、浅い溝状の土坑一基がある。幅30cm、長さ220cm、深さ5~18cmを測り、溝というより、浅い落ち込みといった感がある。遺物は出土していない。土坑1は不整形で、遺構埋土は褐色土。焼土、大・小泥岩、炭化物を含む。出土遺物には土師器(図5-9)がある。土坑2は円形を呈する。地行の傾斜面で検出したが、土坑上層は削平された可能性もある。埋土は茶褐色土。焼土、炭化物を多く含む。遺物は出土していない。

2. 下層遺構面(図4)

厚い泥岩地行を重機によって取り除くと、褐鉄を含む暗茶褐色粘質土層(図3土層番号13)が厚さ約5~20cmの堆積で広がる。その下層には、上層に比べて、粘性の高い暗褐色粘質土(図3土層番号14)の堆積が広がる。この層の上面では、調査区の西、ほぼ中央付近から北に向かって落ち込みを確認したが(図3土層番号15)、削平を受けたためか、平面的に確認する事は困難であった。この落ち込みからは、破片ではあるが遺物が多く出土した。調査区の東方に下層面遺構全図(図4)で点線で示したラインから以東は落ち込むと思われるが、掘削深度の限界があるために確認は出来なかった。

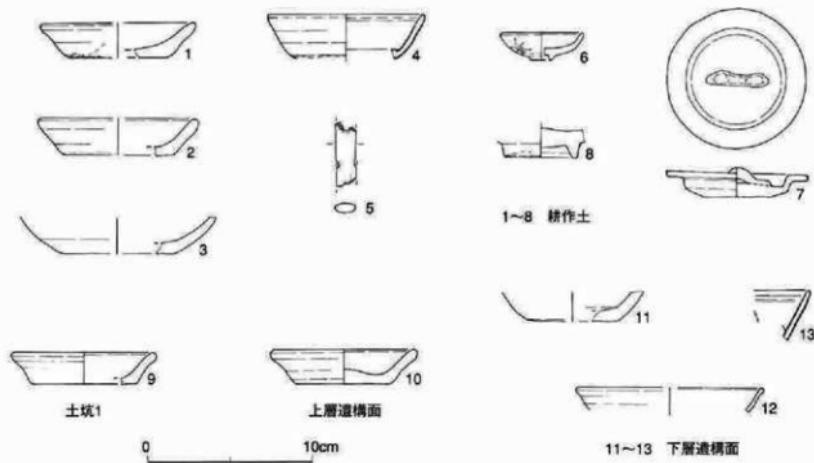


図5 出土遺物

第4章　まとめ

本調査では、調査範囲が狭く、出土遺物も少なかったために、遺構の規模、性格などを明確にすることはできなかった。上層遺構面検出の泥岩版築を中心に、調査成果を簡単にまとめておきたい。

遺跡の年代について 遺物の出土量が少ないために、上層・下層とも年代比定をするのは困難であるが、遺跡全体についていえば、近隣の地点2と同様律令期にはじまり、12世紀末から15世紀の中世を中心として、近世まで続いているとみてよい。

下層遺構面は、基盤層に近いことから、大きく鎌倉時代前期以前とみておきたい。

上層遺構面については、土坑1で出土した土師器皿を指標にすれば、おおむね13世紀中葉から後半の年代が考えられる。

地形と泥岩地行層について 地点2の結果と合わせてみれば、調査地点東沿いにある現在の道路に向かって地形が落ち込むことになる。これは現況地形が、中世からその位置、形状を留めていることの証左となりうる。ただし第1章で触れたように、この道は昭和のある時期まで小川であったということなので、道路までが古くからのものを踏襲しているということはできない。

今回の調査の上層遺構面で検出された泥岩版築層は、現況道路の西側の一段高いところに位置し、非常に厚く、堅牢に突き固められている。存続年代については大きく中世といつておく。この遺構が何であるか、範囲が狭く簡単に決めるることはできないものの、上面に柱穴等の落込みではなく、生活臭が薄い点は例えば、現況道路をはさんだ地点2上層遺構面の状況とはまったく異なる。すなわち、後者の場合、面上には建物の存在を窺わせるピットが多数検出されており、遺物にも常滑片口鉢（I・II類）が多く含まれるなど、生活性を強く感じさせる要素があった（馬瀬1999）。このような要素と版築の強固さを勘案すれば、今回検出の泥岩地行層が道路である可能性を視野に入れておく必要があろう。もしそうだとすれば、それが「仲ノ坂」である可能性もまた高いと考える。いずれにせよ、この地行層に関しては、今後も注意しておきたい。

古代その他 本調査地点では、古代の遺構を確認することは出来なかった。遺物は、別表で示した「実測遺物外出土遺物」を見て頂ければわかるように、破片ではあるが8~10世紀の土師器・須恵器等が出土している。地点2では9世紀中葉から後半と考えられる堅穴住居址が検出され、出土遺物は8~10世紀に属する遺物が発見されている。地点3・4では、中世以前の水田跡・道路・側溝・構列が確認されているとの担当者の報告があり、地点5では遺構の確認は出来なかったが、6~11世紀の遺物が多く出土している。出土遺物だけで判断するのは困難であるが、調査地点周辺は、奈良・平安期から中世にかけて集落の存在する地であったのだろうと考えられる。

引用・参考文献（第1~4章に共通）

- 幸氣直志1959「鎌倉市史 孝古編」吉川弘文館
阿部正道1971「埴生義政とその墓跡について」「神奈川県博物館協会会報」第26号 神奈川県博物館協会
奥田直榮1972「北条政村の常盤羽柴について」「神奈川県文化財調査報告書」第34集 神奈川県教育委員会
貫入人・川副武雄1980「鎌倉庵寺事典」有斐閣
平凡社1981「日本歴史地名大系14 神奈川県の地名」
齐木秀雄ほか1991「北条政村屋敷跡 一常盤字段入F643番4外地点一」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」10 鎌倉市教育委員会
馬瀬和雄1999「北条政村邸跡 一常盤字仲ノ坂F62番2ほか地点一」北条政村邸跡発掘調査団
岩田直樹ほか2001「第3編 大仏坂地区の調査」「古都鎌倉」を取り巻く山後部の調査(財)かながわ考古学財團ほか

| | 番号 | 種別 | 大きさ | せいいけい | 着地・胎土 | その他特徴など |
|-------|----|----------------|---|-------|-------|---------|
| 近世耕作土 | 1 | 土師器皿 R種 小型 | 口径(9.3cm) 底径(6.0cm) 器高2.1cm 右回転ロクロ 底部回転糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母細片、白色針状物質、赤色粒子を含む | | | |
| | 2 | 土師器皿 R種 小型 | 口径(9.5cm) 底径(6.9cm) 器高2.3cm 右回転ロクロ 底部回転糸切り 内底部ナデ確認できず 胎土は橙色で白色針状物質、赤色粒子を含む | | | |
| | 3 | 土師器皿 R種 大型 | 底径(7.1cm) 右回転ロクロ 底部回転糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母細片、赤色粒子を含む | | | |
| | 4 | 白磁 口はげ皿 | 口径(9.5cm) ロクロ成形 口縁部削取りにより釉をぬぐう 素地は淡灰色で胎鉄を含む 軸部は透明 | | | |
| | 5 | 骨製品 用途不明 | 最大長(4.0cm) 幅1.3cm 厚さ0.6cm 破損部に僅約0.5cmの穿孔あり | | | |
| | 6 | 伊万里 染付 小皿 | 口径(5.0cm) 底径(1.2cm) 器高1.7cm ロクロ成形 削り出し高台 素地は淡黄灰色 外面下部から高台張み付きにかけて露胎 文様不明 | | | |
| | 7 | 瀬戸・美濃 広口小壺蓋 | 口径8.6cm 器高1.8cm ロクロ成形 捕み部貼り付け 素地は淡白色 | | | |
| | 8 | 伊万里 白磁 碗 | 底径(4.3cm) ロクロ成形 削り出し高台 素地は灰白色 外底部露胎 | | | |
| 土坑 | 9 | 土師器皿 R種 小型 | 口径(8.6cm) 底径(6.5cm) 器高2.0cm 右回転ロクロ 底部回転糸切り 内底部ナデ確認できず 胎土は橙色で黒雲母細片、白色針状物質、砂粒を含む | | | |
| 中間層 | 10 | 土師器皿 R種 小型 | 口径(8.6cm) 底径(5.8cm) 器高1.1cm 右回転ロクロ 底部回転糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母細片、白色針状物質、赤色粒子、砂粒を含む | | | |
| 下層遺構 | 11 | 須恵器 壊 | 底径(5.6cm) ロクロ成形 底部回転糸切り 胎土は灰褐色 | | | |
| | 12 | 灰釉陶器 壺 or 皿 | 口径(11.3cm) ロクロ成形 灰釉ハケ塗り 胎土は灰色 | | | |
| | 13 | 意象唐青磁 画花文 瓶 | 口径6.4cm ロクロ成形 素地は灰白色 軸部は青緑色 内面口縁部下に二本の沈縫をめぐらす | | | |

表1 出土遺物観察表

| | 耕作土 | 上層遺構面 | 中間層 | 下層遺構面 |
|------------|-----|-------|-----|-------|
| 土師器皿 R種 大型 | 14 | | 1 | 4 |
| 土師器皿 R種 小型 | 4 | | 1 | |
| 土師器皿 T種 横小 | | 1 | | |
| 常陸窯 滑 | 5 | | | |
| 青白磁 梅瓶 | | | 1 | |
| 土師器 | | 2 | | 51 |
| 土師器 | | | | 32 |
| 土師器 壊 | | | | 1 |
| 須恵器 壊 | | | 1 | 4 |
| 須恵器 壊 | | 1 | | 1 |
| 須恵器 壊 | | | | 1 |
| 灰釉陶器 | | | | 1 |
| 砥石 | | | | 1 |
| 伊万里 磁碗 | | | 1 | |
| 近・現代陶器 | 3 | | | |

表2 出土遺物破片点数

図版1



1. 調査地点近景



2. 西壁土層断面



4. 泥岩地行面（南から）



3. 上層遺構面（北から）



5. 土坑1



5-4



5-6



5-5



5-7



5-9



5-12



5-13

6. 出土遺物

な ごえ が やつ い せき
名越ヶ谷遺跡 (No.231)

大町六丁目1708番 4 地点

例　　言

- 本報文は、名越ヶ谷遺跡（神奈川県遺跡台帳No.231）内、鎌倉市大町六丁目1708番4地点に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告である。
- 発掘調査は、駐車場の造成に先立ち平成14年7月26日から8月20日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は27.29m²。
- 調査体制は以下の通り。

調査員 沙見一夫 鍛治屋勝二 松原康子 小泉衣理
調査補助員 沖元道
調査協力者 中須洋二 町田義一 渡邊輝彦
- 整理作業は、遺構関係を主に沙見が、遺物関係を主に小泉衣理が行なった。原稿執筆は第1・2章と第3章の遺構を沙見が、第3章の遺物を小泉が、第4章は両名の討議を基に沙見が文責を負い全体の編集を行なった。又、本報文に使用した写真は遺構を沙見が、遺物を小泉が撮影した。
- 発掘調査から本報文作成に至るまでに、以下の各氏及び機関から御教示と御協力を賜った。

鎌倉市シルバー人材センター 鎌倉考古学研究所 東国歴史考古学研究所
- 本報文に関わる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

| | |
|-----------------|-----|
| 第1章 環境と立地 | 261 |
| 第2章 調査の概要 | 264 |
| 第3章 遺構と遺物 | 266 |
| 第4章 調査成果 | 271 |

挿図目次

| | |
|-------------------------|-----|
| 図1 名越ヶ谷遺跡の範囲と調査地点 | 261 |
| 図2 調査地点周辺図と国土座標 | 262 |
| 図3 国土座標上の位置と堆積土層 | 265 |
| 図4 中世包含層出土遺物 | 266 |
| 図5 1面の遺構と遺物 | 267 |
| 図6 2面の遺構と遺物 | 269 |
| 図7 3面の遺構と遺物 | 270 |
| 図8 4面の遺構と遺物 | 271 |
| 表 出土遺物計測表 | 272 |

写真図版目次

| | |
|----------------------|-----|
| 図版1 1面までの遺構 | 273 |
| 図版2 2面～4面までの遺構 | 274 |
| 図版3 調査区壁面堆積土層 | 275 |
| 図版4 出土遺物 | 276 |

第1章 環境と立地

名越ヶ谷遺跡（No.231）は鎌倉市の南東部、大小の谷戸が複雑に入り組んだ衣張山（標高120m）の西山裾一帯で、逆川が流下する平地部分ほぼ全域に付されている。逆川が源を発する北側の积迦堂口切通しを越えれば六浦道に至り、遺跡地の南端を限る大町大路から鎌倉七口の一つ名越切通しを越えれば三浦へと通じる。『吾妻鏡』には、建久三年（1192）「名越御館」に北条政子が赴いたとあるのをはじめとして、名越の様相を記した記事が多い。建永元年（1206）には北条義時の名越山辺の山荘で將軍実朝の和歌会が催され、承元三年（1209）「重書井問注記以下焼失」の記事から、名越文庫を備えた問注所執事三善善信邸が焼失した事が推定される。承久元年（1219）「鎌倉中焼亡」の時に「名越山際」まで延焼し、寛喜三年（1231）の大火では「名越辺」が焼失し、「越後四郎時幸、町野加賀守康俊宿所」が被害を受けている。町野加賀守康俊は三善善信の子孫にあたり、同じく子孫の町野康持や頼朝に仕えた武田信光入道の屋敷も延応元年（1239）の記事から名越に在り、先の「名越御館」は北条時政・義時から名越氏を称した朝時・時章・公時と相伝されたことが記されている。さらに建長年間以降の火災の記事から「名越辺」や「名越山王堂」「名越高御倉」が罹災している。発掘調査に掘り礎石が発見された名越山

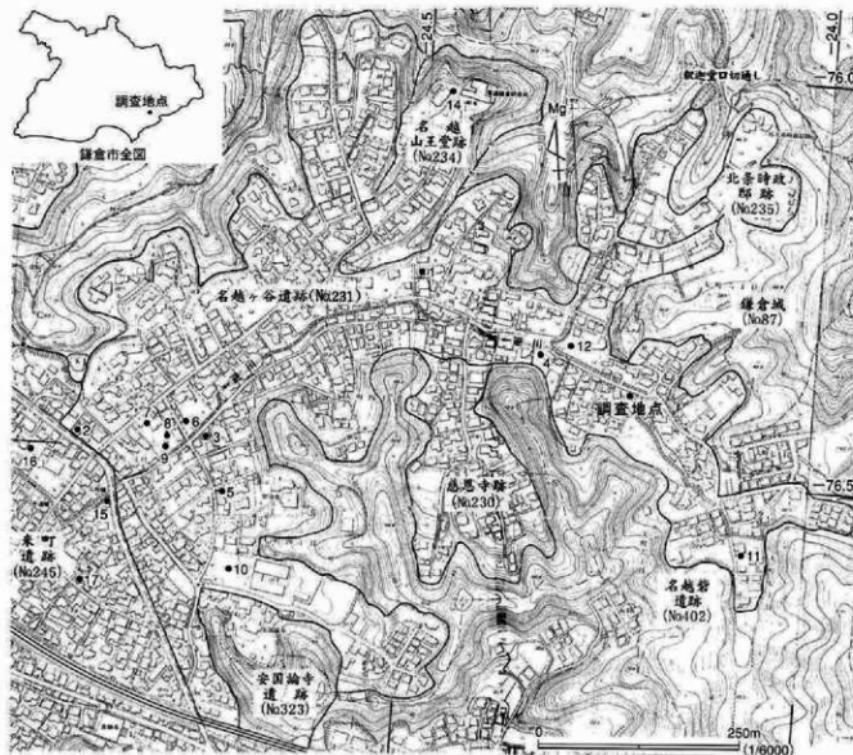


図1 名越ヶ谷遺跡の範囲と調査地点

王堂以外は、それぞれが何處に在ったかは明らかではない。名越の地は交通の要所であるばかりではなく、早くから開発され幕府の機能や要人に関わる重要な地域であった。

本遺跡内では2003年3月末日現在で、本地点を含め14地点が調査されている。大町大路に近い遺跡南縁に集中し、地点2・10を除けば調査面積は80m²以下である。地点毎に調査し得た深度が異なり下層の様相が不明な点もあるが、発見された遺構群と出土した遺物から年代と様相を概観する。地点6では逆川旧流路と13世紀代に3回以上組み直された護岸施設、中世以前の落込みを発見している。この旧流路の延長は地点8・9でも確認され、地点7で発見された掘立柱建物はこの流路方向を意識して建てられている。この建物に係わるかわらけ窓の年代は13世紀前半である。この4地点は、上層が近世以降に削平されているのか遺構面は2~3面と少ない。地点2では5時期以上の生活面と大町大路と軸方向を同じくする掘立柱建物・井戸・通路等が発見され、地点5でも5時期以上の土丹地業面と掘立柱建物、最下層で鎌倉初期の南北方向の落込みを発見し、両地点共に出土遺物の年代は13世紀初頭~15世紀代と幅広い。これらの成果から、付近は逆川両岸の平地を鎌倉初期には開発し利用していたことが窺える。

本地点付近では、調査面積約150m²前後の地点4・14が調査されている。地点4は三善信駒跡に比定され、5時期以上の生活面を確認している。調査の深度規制に因り下層までは調査されていないが、13世紀後半は庶民的居住が想定され、14世紀代以降は谷戸内を大規模に造成した一角で、時期に依り掘立柱建物やかわらけ窓が発見されている。丘陵側に土塁を構えている事や調査地点の占地等から、寺院や幕府要人の敷地内と想定されている。地点14では現地表面は直下に数時期の土丹地業面と掘立柱建物・土坑・井戸が、駿迎堂口切通しに源を発する逆川旧流路が地点西端で発見されている。

本調査地点は地点4・14からさらに東側小支谷内を流れる小河川の左岸で、現況でも南北の山肌に露出した岩盤間は80m強しかない。宅地化されたときに流路が付け変えられ平地も削平されてはいるだろうが、現況は山裾で海拔20m、調査地は海拔16.40m前後、河川底は海拔13.60m程である。

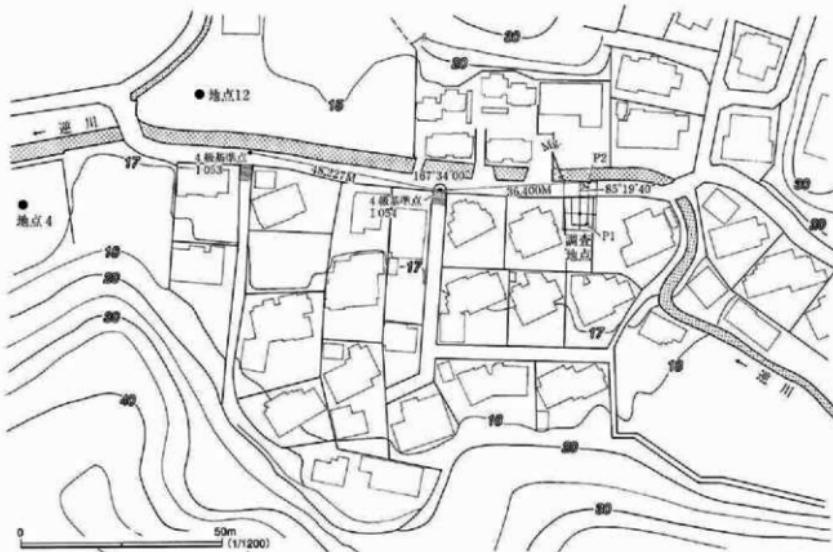


図2 調査地点周辺図と国土座標

引用・参考文献

- 高柳光寿『鎌倉市史 総説編』1959年 吉川弘文館
赤星直忠『鎌倉市史 考古編』1959年 吉川弘文館
高柳光寿・貫達人他『鎌倉市史 社寺編』1959年 吉川弘文館
貫達人・川副武胤『鎌倉廃寺事典』1980年 有斐堂
白井永二『鎌倉事典』1976年 東京堂出版
「神奈川県の地名」「日本歴史地名体系14」 平凡社

名越ヶ谷遺跡（No.231）

1. 大町三丁目1367番4地点 1985年調査「名越ヶ谷遺跡（大町三丁目1367番4地点）」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書2 昭和60年度発掘調査報告」1986年3月 鎌倉市教育委員会
2. 大町三丁目1217番1地点 1993年調査「名越ヶ谷遺跡（大町三丁目1217番1地点）」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度発掘調査報告（第1分冊）」1995年3月 鎌倉市教育委員会
3. 大町四丁目1880番6地点 1993年調査「名越ヶ谷遺跡（大町四丁目1880番6外地点）」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度発掘調査報告（第1分冊）」1995年3月 鎌倉市教育委員会
4. 大町四丁目1736番2地点 1996年調査「名越ヶ谷遺跡（No.231）大町四丁目1736番2外」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14 平成9年度発掘調査報告（第1分冊）」1998年3月 鎌倉市教育委員会
5. 大町四丁目1888番地点 1998年調査「名越ヶ谷遺跡（No.231）大町四丁目1888番地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16 平成11年度発掘調査報告（第2分冊）」2000年3月 鎌倉市教育委員会
6. 大町三丁目1826番9地点 2000年調査「名越ヶ谷遺跡（No.231）大町三丁目1826番9地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 平成13年度発掘調査報告（第2分冊）」2002年3月 鎌倉市教育委員会
7. 大町三丁目2356番3地点 2000年調査
8. 大町三丁目2356番11地点 2001年調査「名越ヶ谷遺跡（No.231）大町三丁目2356番11地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19 平成14年度発掘調査報告」2003年3月 鎌倉市教育委員会
9. 大町三丁目2356番10地点 2001年調査「名越ヶ谷遺跡（No.231）大町三丁目2356番10地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19 平成14年度発掘調査報告」2003年3月 鎌倉市教育委員会
10. 大町四丁目1901他16等地点 2001年調査「名越ヶ谷遺跡（No.231）」「第12回鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨」 2002年8月 鎌倉考古学研究所
11. 大町六丁目1708番4地点 2001年調査
12. 大町六丁目1494番1地点 2002年調査
13. 本報文調査地点
14. 大町四丁目2395番2の一部地点 2003年調査
15. 大町三丁目1356番外地点 2003年調査

名越山王堂跡（No.234）

14. 大町三丁目1340番地点 1986年調査「名越・山王堂跡発掘調査報告書 電通鎌倉研修所改築に伴う中世寺院跡の発掘調査報告」1990年3月 山王堂跡発掘調査団

米町遺跡（No.245）

15. 大町二丁目2411番2地点 1988年調査「米町遺跡（大町二丁目2411番2地点）」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5 昭和63年度発掘調査報告」1988年3月 鎌倉市教育委員会
16. 大町二丁目2338番1地点 1997年調査「米町遺跡発掘調査報告書 鎌倉市大町二丁目2338番1」 1999年9月 米町遺跡発掘調査団／宮田事務所
17. 大町二丁目2404番地点 1999年調査「米町遺跡（No.245）大町二丁目2404番の一部地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16 平成11年度発掘調査報告（第2分冊）」2000年3月 鎌倉市教育委員会

註

- ・ 名越ヶ谷遺跡（No.231）と名越山王堂跡（No.234）は全調査地点を調査年順に地点Noを、米町遺跡（No.245）は全12調査地点の内図1の範囲に含まれるものに地点Noを付した。
- ・ 調査地点及び刊行報告書は2003年3月末日現在。渡邊美佐子協力の基、筆者調べに拠る。

第2章 調査の概要

・調査経緯から結果に至る概要

本調査は個人専用駐車場造成にあたり、道路面まで切下げる範囲を対象に、確認調査と諸協議を経て実施された。調査深度は現況調査地から車道面に比高差2m強のスロープ状に設定されたが、協議に提り調査区ほぼ中間から奥の調査深度を現地表から約1mまで、手前を現況車道面までとした。確認調査の成果から現地表下40cmまでの表土を重機で、以下をそれぞれの規定深度まで人力に依り掘り下げる。酷暑の中、調査に伴う残土を人力で敷地内に盛上げながらの作業であったが良好な地盤面を4時期発見し、全ての記録保存終了後に関係各方面に連絡の上、出土遺物と諸器材を撤収し調査終了とした。

・調査の方法

調査に際して、敷地と調査範囲に合せて4・のグリッド方眼を設定した。国土座標値は調査グリッド2ラインから1・東の延長点P2と、4級基準点I053(X-76356.118 Y-24306.921)・I054(X-76377.789 Y-24263.842)を計測し、グリッドC-2との位置関係及び真北方向を図2・3に示した。但し、計測に際しては光波測定器が使用できず、調査員がトランシットとスティールメジャーで計測したため、明示すべきグリッド交点の国土座標値は得られなかった。調査軸は磁北に対してN-25°40'20"Eである。

・堆積土層

図3は調査区壁面の堆積土層図。東面の土層図には確認調査坑の土層図も併せて図示した。確認調査時には海拔レベルに拘らず測図しているが、現地表面高と確認調査坑の最下部及び土層の連続性から判断して合成している。各土層には、確認調査坑の堆積土層にはa~i、本調査の堆積土層には1~23、同一土層には同番号を付し本報文に共通して使用する。

確認調査ではa・d・f層上面を造構面、h層が中世地山とされていたが、本調査では次第で述べる様にd層までは近現代の造成土であり、e層=5層上面が1面、f層=6層上面が2面、g層上面は測図されている様な土層の歪みではなく11層上面で調査3面。各造構面の上面は平坦ではあるが、間層の堆積土と共に北から南へ緩やかに傾斜する。h・i層(15~18層)中には確認調査坑壁面からも中世遺物が出土し、16層上面は調査では造構面として捉えている。15~18層は上層各層に比べ北に向って傾斜が強く、砂質分を含む類似する土層が互層状に堆積し、出土した遺物点数は少ないものの摩耗した破片が観られたことから、河川の氾濫等による自然土層の再堆積層と思われる。各土層には共通して粒子乃至拳大の土丹が含まれ、狭い小谷戸の中で山肌を崩しながら土砂を移動し、湿地状の斜面地を克服する様に平坦な造構面を南北へと拡張しながら構成している。東西方向では調査区幅が狭く顯著には捉えがたいが、若干東から西への傾斜が観られる。又、調査区北側下層の土層断面には地震の痕跡であろうか、下層から上層へ縦方向の亀裂状に褐鉄の浸み込んだ異質な土層が観察されている。

今回の調査地点は付近で発掘調査が行われていないことや、確認調査時に出土遺物が少ない等の問題はあったが、海拔高の記入されていない土層図が基で表土掘削深度の判断に苦しんだ結果、近世以降の造成土を人力で掘り上げる事から調査を開始せざるを得なかった。また、年に数十ヶ所行われる確認調査の成果も報告されず、確認調査の際に立会い調査員が1人ではレベル原点からの海拔高測量もままならない。今後の課題であろうか。

土層注記

- a. 近現代底土。
- b. 桧大土丹層。
- c. 暗基褐色粘質土。
- d. 大小土丹層。
- e. 土丹地表面。
- f. 暗褐色粘質土。土丹粉・炭化物粒含む。
- g. 暗褐色粘質土 上面に
炭化物粒含む。
- h. 黑褐色粘土。
- i. 暗青灰褐色土。
- j. 黑褐色粘質土。土丹粉・炭化物粒・鐵錫を含む。
- k. 黑褐色粘質土。土丹粉多量に含み、鐵錫を含む。
- l. 黑褐色粘質土。土丹粉かに含む。
- m. 黑褐色粘質土。土丹粉・炭化物粒・鐵錫を含む。
- n. 黑褐色粘質土。土丹粉・炭化物粒を僅かに含む。
- o. 黑褐色粘土。粘性強い。
- p. 黑褐色粘土。調査区北寄りでは砂質粘土(5')。
- q. 黑褐色粘土。粘性弱いが堅くしまる。上面を3面。
- r. 黑褐色粘土。やや砂質で鐵錫を含む。
- s. 暗青灰褐色粘質土。砂粒はやや粗い。
- t. Pt. 1。
- u. Pt. 7。
- v. Pt. 8。
- w. Pt. 9。
- x. Pt. 38。

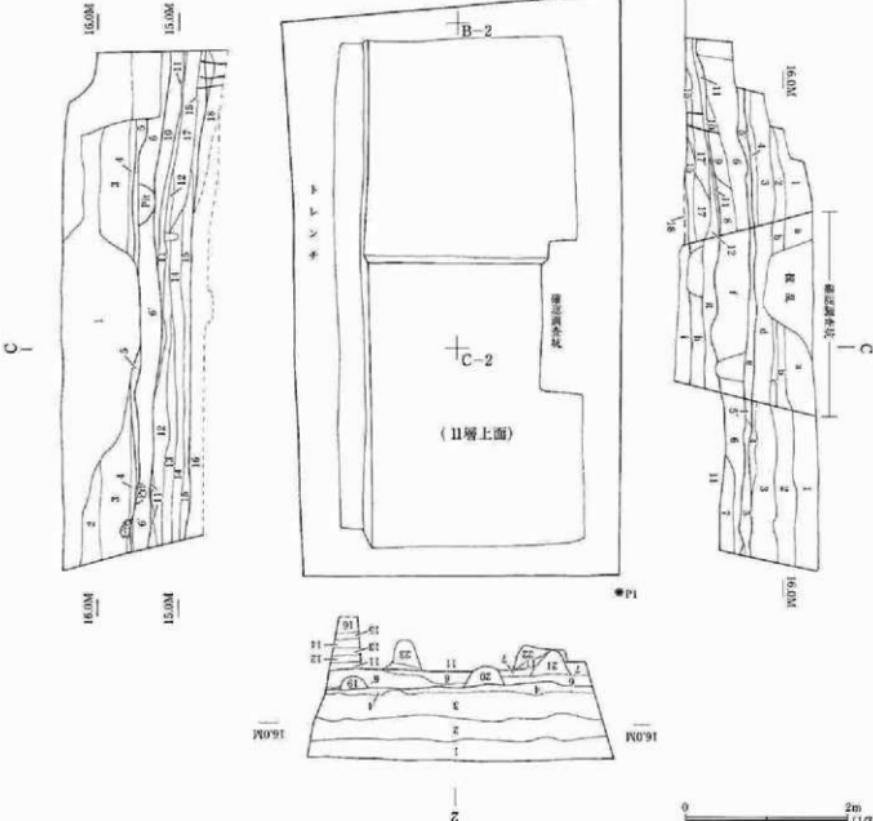


図3 國土座標上の位置と堆積土層

第3章 遺構と遺物

確認調査の成果を基に、現地表下40cmの2層上面までを重機に依り掘り下げこの面上を精査したが、遺構は皆無で近代以降の遺物が出土した。更に現地表下60cmの3層上面までを引き続き人力で掘り下げ精査を試みたが、このレベルでも遺構は何ら発見されず近世以降の遺物が混在した。調査ではこの面を1面としたが、調査区壁や掘り下げ土の観察から1～3層は近現代造成に伴う版築土と判断し、本報文から平面精査の様相や出土遺物については割愛する。結局、現地表下80cmの5層上面が中世1面であり、調査した遺構面は整理作業時に改めて1～4面とした。遺構番号は遺物が出土している等報文中で触れたもののみを調査時の遺構名と番号をそのままに使用し、土層は図3の堆積土層図中のNo.を記した。尚、挿図中ではピットはPの略号を用い、レベルは海拔高度を記す。

1面

現地表下80cmの4層上面、海拔15.7m前後の暗褐色粘質土及びその上面に部分的に土丹地業された上面を1面とした。土丹地業は南側1/3が破碎土丹で強く版築され（5層）、中央付近は拳大の土丹が混じりやや粗く微かに高まり、それより北はしまりは良いが粘質土に土丹粒が混じる程度（5'層）で、現況河川に向って微かに傾斜する。遺構はピット4口と極く浅い土坑を一基発見した。C-2周辺からは多くの遺物が出土している。出土遺物は、概ね4層中の遺物を中世包含層、土丹地業面（5層上面）検出時に出土したものと1面上、地業層中にめり込む様に発見されたものを1面直上、土丹層（5層・5'層）のみを剥がした時に出土したものを1面構成土中として採り上げた。

出土遺物

1・2は中世包含層（4層）出土遺物。1は小型の糸切り底かわらけ。器壁が厚く、底径口径比の差が小さい。胎土は橙色を呈する弱粉質土。2は龍泉窯系青磁無文碗。内面に蓮弁文が施される。素地は混入物を若干含む灰白色、釉調は不透明な灰緑色を呈する。

3・4は1面上より出土した小型糸切り底のかわらけ。3はやや内弯し、胎土が肌色を呈する弱粉質土。4は器壁が開きながら立ち上がり、胎土は橙色を呈する弱砂質土。

5～12は1面構成土中に出土したかわらけ。出土状況は6・10が表向き、その他は裏向き。5は小型の手捏ね底。平底状で、器壁は開きながら立ち上がる。胎土は淡橙色を呈する夾雜物を多く含む弱砂質土。6～9は小型の糸切り底で、体部外面中位に稜があり屈曲するものや、器壁が開きながら立ち上がるものが混じる。10～12は大型の糸切り底で、器壁が直立気味に立ち上がるるものや、口唇がやや内弯するものが混じる。概ね肌色～淡橙色を呈する弱粉質土。8は口唇部に煤が付着。なかには表面が剥離してナデが不明瞭なものがある。

13は1面構成土中に出土した大型の手捏ね底かわらけ。器高の高い平底状で、体部外面中位に稜が残る。胎土は肌色を呈した弱粉質土。

14～23は1面構成土中に出土したかわらけ。14は大型の手捏ね底で13と同様の器形と胎土。15・16は小型の手捏ね底。平底状で、器壁が開きながら立ち上がるものや口唇が内弯するものが混じる。胎土は肌色を呈する弱砂質土。16は内面全体的に煤が付着。17～23は小型の糸切り底。17が内折れの他は、器壁が厚くて口径底径比の小さいものや、器壁が直立気味に立ち上がるものが混じる。胎土は概ね肌色～淡橙色を呈する弱粉質土。20は口唇部を中心に内外面に煤が付着。

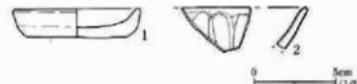


図4 中世包含層出土遺物

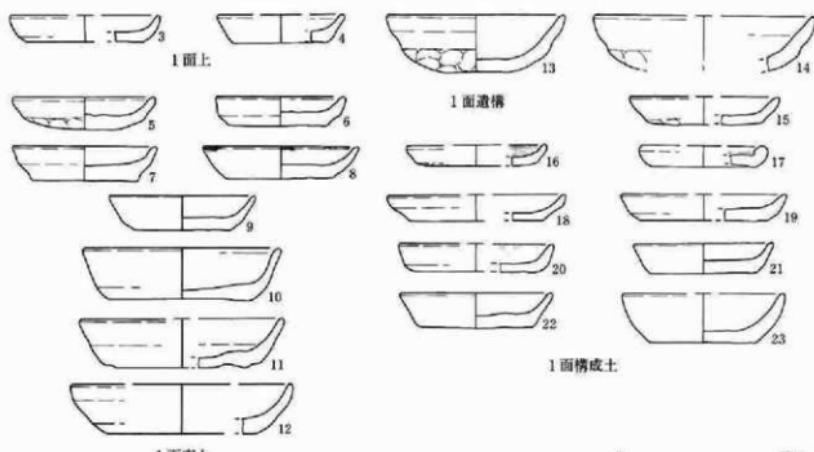
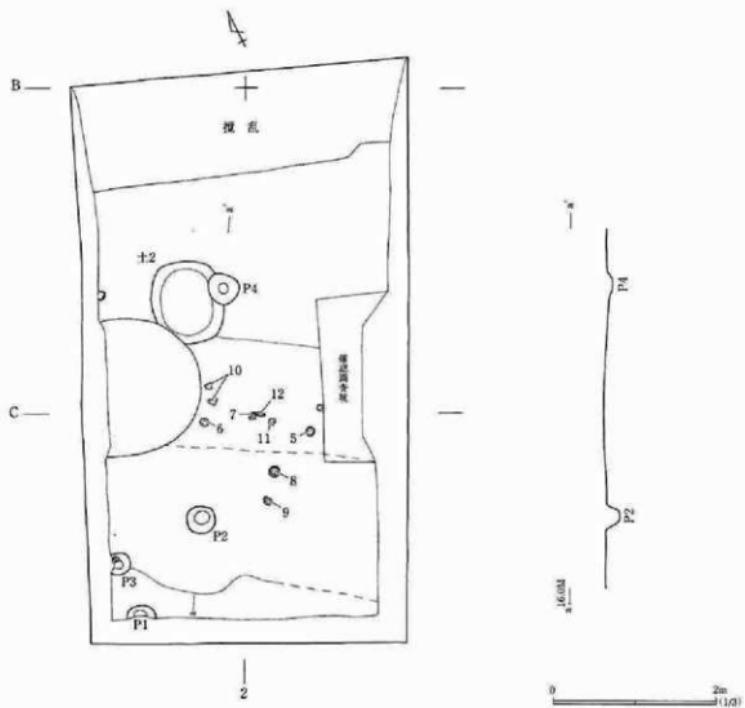


図5 1面の遺構と遺物

1面の土丹層除去後、海拔15.55m前後の暗褐色粘土面上（6層）を2面とした。断面図a・bの中間辺及びピット17より北側は、造構面のしまりが弱く北に向って若干傾斜する。造構はピット11口を発見した。1面の土丹構築の際に地均しでもして造構面を削平したのか、妙に浅いピットが多い。覆土はピット11～16がしまりの無い暗褐色粘質土、他は炭化物を多く含む暗褐色粘（質）土。ピット17の底面には柱痕らしき15・内外の窪みがあり、ピット10には縦板と柱が遺存している。縦板は2枚敷かれ、寸法は8寸×3寸5分で厚さ1寸強と8寸強×3寸5分寸で厚さ1寸強。柱は4寸5分寸×4寸強で面取りされ、長さ約14寸が遺存し、1面の土丹層直下で折られたと考えられようか。縦板上の柱の根元からかわらけ（図5-40）が出土している。1面の土丹地業の方向とピット10内の柱の向きを参考に、断面a・bを図示しているが、ピット間は等間隔とは言い難い。造構面の様相から断面図aが殷地を限る横列、ピット17・10と調査区外の南・東に延びる建物を想定するのは無理があろうか。出土遺物は、暗褐色粘土面（6層）検出時に出土したものと2面上、造構面にめり込む様に出土したものと2面直上、下層への掘下げの際（6～10層）に出土したものを2面構成土として採り上げている。

出土遺物

24～33は2面上より出土したかわらけ。24～27は小型の手捏ね底。平底状で、器壁が開きながら立ち上がるるものや、体部外面中位に弱い稜を持つものがある。25の胎土は淡橙色を呈する粉質土だが、他は肌色を呈する弱砂質土～弱粉質土。24は外面に煤付着。28は大型の手捏ね底。平底状で、体部外面中位に弱い稜をもつ。口唇部の調整がやや尖り気味である。胎土は橙色を呈する弱粉質土。29～31は小型、33は大型の糸切り底。体部外面中位に稜をもち、やや内弯気味に立ちあがるものや、直立気味に立ち上がるものが混じる。31が橙色を呈する砂質土の他は、肌色を呈する弱粉質土。いずれも内底面ナデ不明瞭。

34～37は2面造構精査時に面直上より出土したかわらけ。出土状況は、34・36は表、35・37は裏向き。34・35は大型の手捏ね底。平底状で体部外面中位に稜を持つ。34は口唇部が面取され、外底部にはスノコ痕が残る。胎土はいずれも橙色を呈する弱粉質土。36は小型、37は大型の糸切り底。36は口径底径比の差が小さく、やや内弯気味に立ち上がる。胎土は淡橙色を呈する弱粉質土。37は器壁が厚く、内底面が広く直立気味に立ち上がる。胎土は肌色を呈する弱粉質土。

38～44は2面造構内より出土したかわらけ。38はピット16より出土した小型の手捏ね底。平底状で体部外面中位に弱い稜を持つ。胎土は淡橙色を呈する焼成良好な弱砂質土。39はピット11より出土した小型の手捏ね底。平底状で開きながら立ち上がり、口唇部がやや内弯する。胎土は肌色を呈する弱砂質土。40～43はピット10より出土したかわらけ。40・41は小型の糸切り底。40は器壁が薄く、口径底径比の小さい側面觀箱型。胎土は肌色を呈する弱粉質土。41は器高が高く、器壁が厚くて丸味を帯びながら内弯する。胎土は淡橙色を呈する弱粉質土。42・43は大型の糸切り底。体部外面中位に稜をもち、器壁はやや内弯する。胎土は淡橙色を呈する弱粉質土。42は内底面に煤付着。44はピット5より出土した大型の糸切り底かわらけ。器形は42・43と同様。胎土は肌色を呈する弱砂質土。

45～48は2面構成土より出土した遺物。45・46は小型、47は大型の手捏ね底かわらけ。45・46は平底気味で器壁が薄く、体部外面中位に強い稜を持つ。45の口唇部は面取され、沈線を作るよう段となす。46の外底部にはスノコ痕が強く残る。47は器高の高い丸底状で、口唇部が面取りされている。いずれも淡茶色～肌色を呈する弱粉質土。48は弥生時代後期もしくは古墳前期の土器器窓。全体的に刷毛目調整を施し、口唇部のみ横ナデ調整。頭部はゆるやかな「く」の字を呈している。

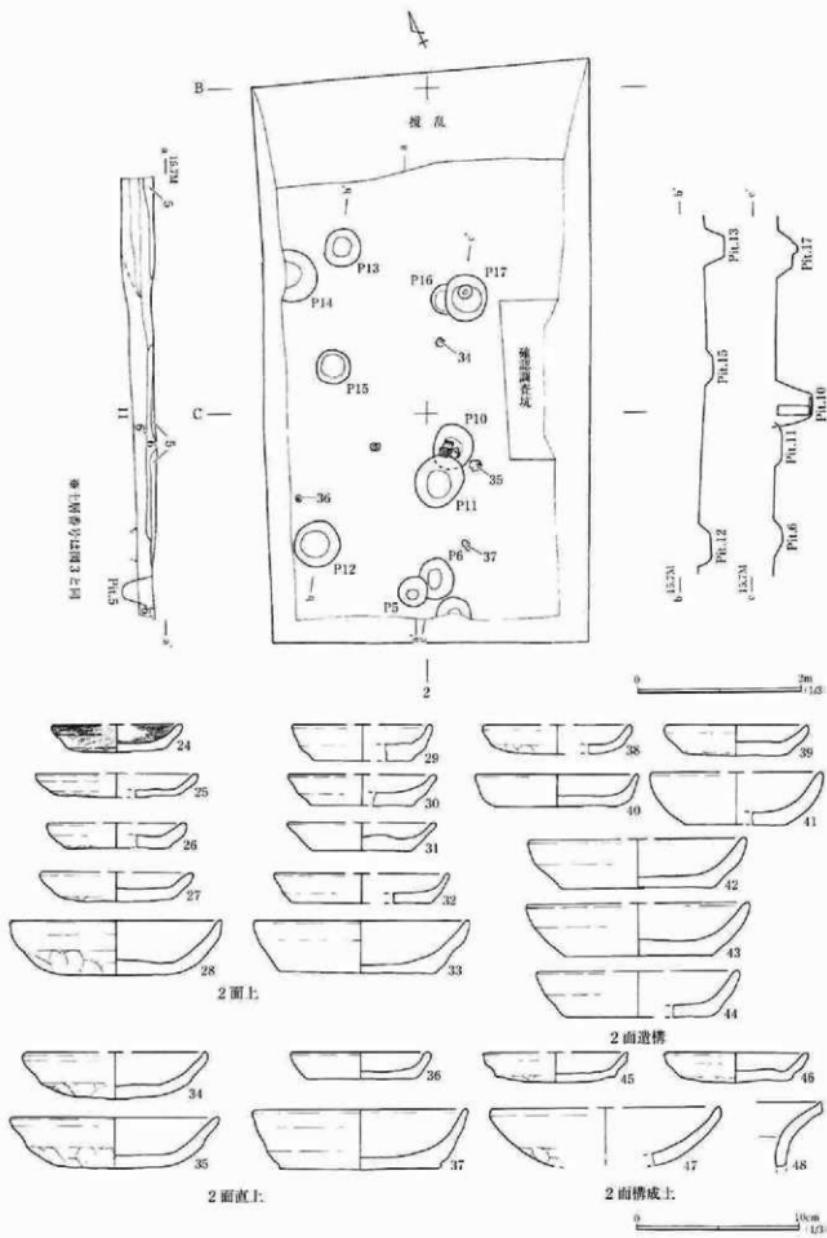


図6 2面の造構と遺物

3面

2面の暗褐色粘土の下層、海拔15.2m前後の全体に褐鉄分を含浸する黒褐色粘土（11層）上面を3面とした。造構面が明瞭な範囲は上層1・2面より更に狭まり、上面が硬化しているのはC-2周辺より南であり、その範囲は上層1・2面とやや異なって調査区とほぼ同軸になる。C-2周辺より北側では造構密度は希薄で、北に向っての傾斜が上層より若干きつくなる。造構はピット50口以上を発見した。柱や礎板が遺存しているものはない。各ピットの覆土の観察からは、土丹粒を含みしまりの無い暗褐色土、褐鉄分を含む黒褐色土に大別される。重複関係では概ね前者が新しく後者が古いことから、同一面が少なくとも2時期に利用されているのかもしれない。硬化面の方向を基に断面を3ヶ所図示しているが、断面図a・bが硬化面範囲の外側に沿うことから構列を想定する他は、建物址は推定し得ていない。出土遺物は、褐鉄面（11層）を検出する際に出土したものと3面上、造構面やピット底面を掘り過ぎた時に出土したものと3面構成土として採り上げた。

出土遺物

49・50は3面上より出土した小型手捏ね底かわらけ。49は器高の高い丸底状で、体部外面中位に強い棱を持つ。胎土は橙色を呈する弱粉質土。50は平底状で、底部中央が少し上げ底になる。器壁は開きながら立ち上がり、丸味のある口唇を持つ。内底面のナデは不明瞭。胎土は肌色から橙色を呈する弱砂質土。

51・52は3面造構内より出土した小型の糸切り底かわらけ。いずれも器壁は開きながら立ち上がり、丸味のある口唇を持つ。内底面のナデは不明瞭。胎土は肌色から橙色を呈した弱砂質土。

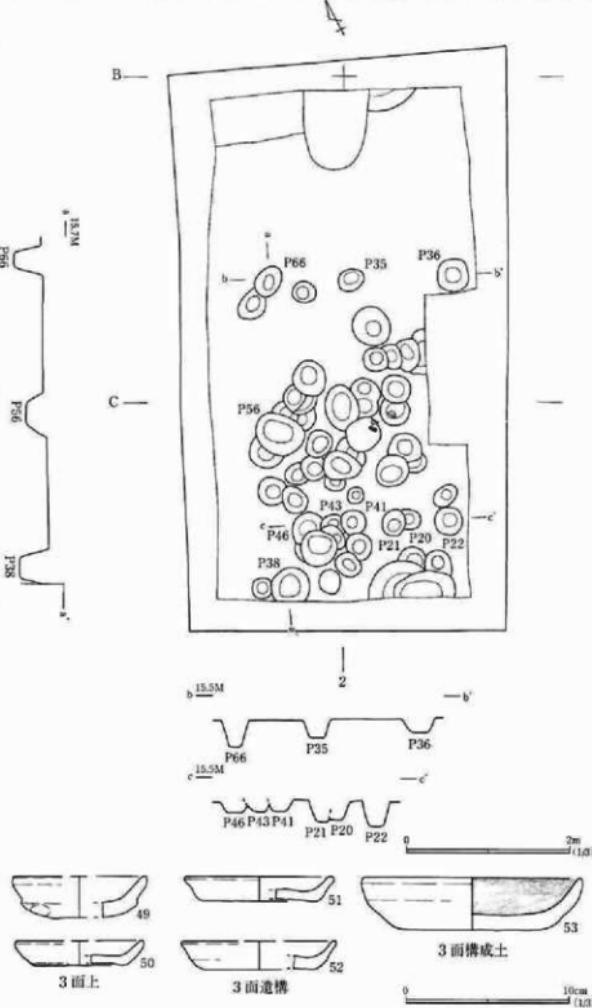


図7 3面の造構と遺物

53は3面構成土より出土した大型糸切り底かわらけ。器壁は厚く、丸味を帯びて内弯する。胎土は肌色を呈する弱粉質土。内外面共に全体的に煤付着。

4面

3面終了時点で調査区南半が調査前の協議で合意したレベルに達した為、堆積土層は西壁沿いのトレンチで観察することとし、平面調査は北半を道路面まで下げて下層の遺構面の確認と遺物を探集することとした。3面を構成する黒褐色粘土（11層）を遺物採り上げるに掘り上げ、その後調査区前面車道とほぼ同レベルの海拔14.7mまで掘り下げた。顯著な遺構面とは言い難いが概ね16層上面を4面とした。図8に遺構の如く表した4ヶ所は、上層の掘り残しではないことから、土層の窪みの可能性が高い。調査区北寄りには南北に走る地割れ状の筋を数条発見し、顯著なものを平面と土層断面に図示した。地割れ層1・2と共に中世地山と思われる16層を突抜けて吹き上がっているが、その上面及び層中に遺物は発見できなかった。より下層の状況は不明と言わざるを得ないが、中世以前の遺物は殆ど出土していない。

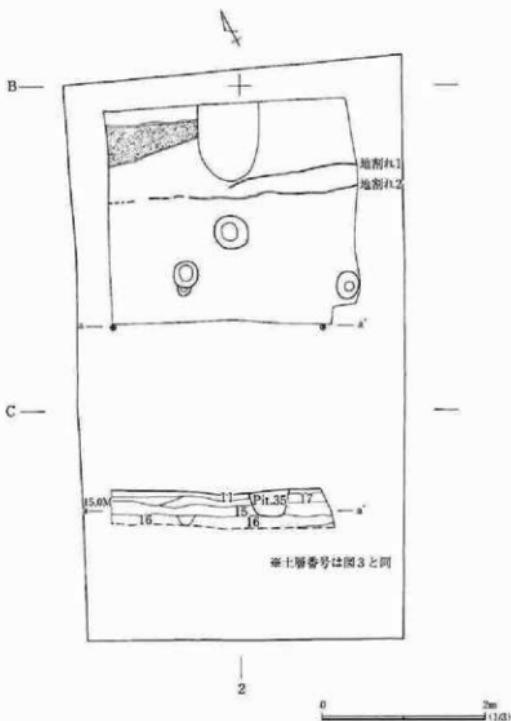


図8 4面の遺構と遺物

第4章 調査成果

本調査では、時期不明ながら地割れの痕跡と中世の生活面を3時期発見した。狭小な調査区故断片的ではあるが、付近の調査例も併せて観て調査地付近の変遷と年代観に触れまとめとしたい。調査深度の規制に因り無遺物自然堆積層は確認されなかつたが、地割れの痕跡から中世以前に付近では地面が激しく動き、土砂崩れであろうか、生活の痕跡が観られない粘（質）土が中世地山状に再堆積する。この頃の河川が在るとすれば現況河川より南とは考え難い。その後、地点4や12の様に山肌を崩しながら空間を確保し広範囲な地業を行なう程の大規模なものではないが、付近は名越ヶ谷遺跡内他の調査地点と同様に13世紀代には河川に向っての傾斜地を克服しながら居住地として開発されていく。遺構から観た調査地の状況は、地業の様相から北側に河川を控えた敷地の北側隅と考えられる。出土した中世

遺物からも調査地の性格を物語る資料には乏しく、青磁3点・常滑4点・本製品4点・滑石製品1点の他は、全体の96%がかわらけで供伴遺物も殆ど無い。かわらけの糸切り底と手捏ね底の割合は、若干手捏ねが多いもののほぼ半数である。各遺構面に依る年代差は殆どみられず、概ね手捏ね底は平底状で体部外面中位の棱も弱く器壁は開きながら立ち上がる。糸切り底の大型は器壁が直立気味に立ち上がり、小型は口径底径比の差が小さいものや、大型同様に器壁が直立気味に立ち上がるタイプである。本調査で出土した遺物から観た年代観は、概ね13世紀中葉～14世紀初頭と考えられる。周辺の調査地点で出土している薄手丸深のかわらけが本遺跡地でみられないのは、宅地造成に伴い中世遺構面が削平されて失われていると思われる。その際に道路も切り下げられ河川も現況流路に付け替えられたのであろう。本調査の成果から地点12で発見された中世河川に合流する流路は、現況よりも南ではない以上のこととは推定し難い。中世期には支谷の水が低地に集って流下するという自然発生的な流路なのかもしれない。

出土遺物計測表

| 図版 No. | 遺物 No. | 遺構名 | 種別 | 計測値 年代 (cm) () - 前次類 | | | 図6 | 27 | 2面上 | 土 かわらけ・手 器 | (9.2) | 7.0 | 1.8 | |
|-----------|-----------|-------|-------------------|-----------------------|--------|------|----|----|-------|------------------|--------|-------|------|-----|
| | | | | 口徑 | 底径 | 高さ | | | | | | | | |
| 図4 | 1 | 中世包含層 | 土 かわらけ・系 | 7.6 | 6.0 | 1.7 | | 28 | 2面上 | 土 かわらけ・手 器 | | 12.8 | 11.6 | 3.4 |
| | 2 | 中世包含層 | 船 青 磁 ・網 | — | — | — | | 29 | 2面上 | 土 かわらけ・手 器 | (8.4) | (6.0) | 2.2 | |
| 図5 | 3 | 1面上 | 土 かわらけ・系 | (9.0) | (7.2) | 1.6 | | 30 | 2面上 | 土 かわらけ・手 器 | (9.0) | (6.4) | 1.9 | |
| | 4 | 1面上 | 土 かわらけ・系 | (7.6) | (5.8) | 1.7 | | 31 | 2面上 | 土 かわらけ・手 器 | (9.0) | 6.0 | 1.7 | |
| 図5 | 5 | 1面直上 | 土 かわらけ・手 器 | 8.5 | 7.3 | 2.0 | | 32 | 2面上 | 土 かわらけ・手 器 | (10.6) | (8.6) | 1.8 | |
| | 6 | 1面直上 | 土 かわらけ・手 器 | 7.8 | 6.0 | 1.8 | | 33 | 2面上 | 土 かわらけ・手 器 | 13.2 | 9.0 | 3.2 | |
| 図5 | 7 | 1面直上 | 土 かわらけ・手 器 | (8.7) | 6.5 | 2.1 | | 34 | 2面直上 | 土 かわらけ・手 器 | (11.0) | (9.2) | 2.9 | |
| | 8 | 1面直上 | 土 かわらけ・手 器 | 9.5 | 6.6 | 2.0 | | 35 | 2面直上 | 土 かわらけ・手 器 | 12.6 | 10.8 | 3.1 | |
| 図5 | 9 | 1面直上 | 土 かわらけ・手 器 | (8.9) | 5.9 | 2.1 | | 36 | 2面直上 | 土 かわらけ・手 器 | 8.4 | 6.6 | 1.6 | |
| | 10 | 1面直上 | 土 かわらけ・手 器 | 11.8 | 8.8 | 3.1 | | 37 | 2面直上 | 土 かわらけ・手 器 | 13.0 | 9.8 | 3.7 | |
| 図5 | 11 | 1面直上 | 土 かわらけ・手 器 | (12.2) | (8.2) | 3.0 | | 38 | 2面造構 | 土 かわらけ・手 器 | (9.0) | (8.2) | 1.75 | |
| | 12 | 1面直上 | 土 かわらけ・手 器 | (13.4) | (9.2) | 3.0 | | 39 | 2面造構 | 土 かわらけ・手 器 | 8.5 | 6.5 | 1.9 | |
| 図5 | 13 | 1面造構 | 土 かわらけ・手 器 | (10.7) | (9.0) | 3.5 | | 40 | 2面造構 | 土 かわらけ・手 器 | 9.9 | 7.3 | 2.0 | |
| | 14 | 1面構成土 | 土 かわらけ・手 器 | (13.4) | (11.8) | — | | 41 | 2面造構 | 土 かわらけ・手 器 | (10.4) | (6.2) | 2.7 | |
| 図5 | 15 | 1面構成土 | 土 かわらけ・手 器 | (9.1) | (7.2) | 1.7 | | 42 | 2面造構 | 土 かわらけ・手 器 | (13.2) | (9.2) | 3.0 | |
| | 16 | 1面構成土 | 土 かわらけ・手 器 | (8.4) | (7.4) | 1.3 | | 43 | 2面造構 | 土 かわらけ・手 器 | (13.6) | (9.0) | 3.2 | |
| 図5 | 17 | 1面構成土 | 土 かわらけ・手 器 | (7.5) | (6.4) | 1.3 | | 44 | 2面造構 | 土 かわらけ・手 器 | (12.2) | (8.8) | 2.8 | |
| | 18 | 1面構成土 | 土 かわらけ・手 器 | (10.8) | (8.2) | 1.6 | | 45 | 2面構成土 | 土 かわらけ・手 器 | (8.8) | (7.4) | 1.8 | |
| 図5 | 19 | 1面構成土 | 土 かわらけ・手 器 | (10.0) | (7.8) | 1.6 | | 46 | 2面構成土 | 土 かわらけ・手 器 | 8.6 | 6.8 | 1.8 | |
| | 20 | 1面構成土 | 土 かわらけ・手 器 | (9.3) | (7.6) | 1.7 | | 47 | 2面構成土 | 土 かわらけ・手 器 | (14.0) | — | — | |
| 図5 | 21 | 1面構成土 | 土 かわらけ・手 器 | (8.5) | 6.5 | 1.3 | | 48 | 2面構成土 | 土 かわらけ・手 器 | — | — | — | |
| | 22 | 1面構成土 | 土 かわらけ・手 器 | 9.3 | 7.0 | 2.15 | | 49 | 3面上 | 土 かわらけ・手 器 | (8.0) | (7.0) | 2.5 | |
| 図5 | 23 | 1面構成土 | 土 かわらけ・手 器 | (9.8) | (6.4) | 3.0 | | 50 | 3面上 | 土 かわらけ・手 器 | (7.8) | (5.6) | 1.5 | |
| | 24 | 2面上 | 土 かわらけ・手 器 | (7.8) | (6.0) | 1.7 | | 51 | 3面造構 | 土 かわらけ・手 器 | 9.0 | 7.0 | 1.5 | |
| 図5 | 25 | 2面上 | 土 かわらけ・手 器 | (9.8) | (7.5) | 1.45 | | 52 | 3面造構 | 土 かわらけ・手 器 | (9.4) | (6.8) | 1.7 | |
| | 26 | 2面上 | 土 かわらけ・手 器 | (8.4) | (6.6) | 1.5 | | 53 | 3面構成土 | 土 かわらけ・手 器 | 13.2 | 9.4 | 3.2 | |



▲ 0層上面（南から）



▲ 1面全景



▲ 1面土丹地業・かわらけ出土状況（東から）

図版2



▲ 2面全景（東から）



▲ 2面 Pit.10（東から）



▲ 3面全景（東から）



▲ 4面全景（西から）



▲ 地割れ（東壁・部分）



▲ 地割れ（西壁・部分）



▲ 調査区東壁堆積土層

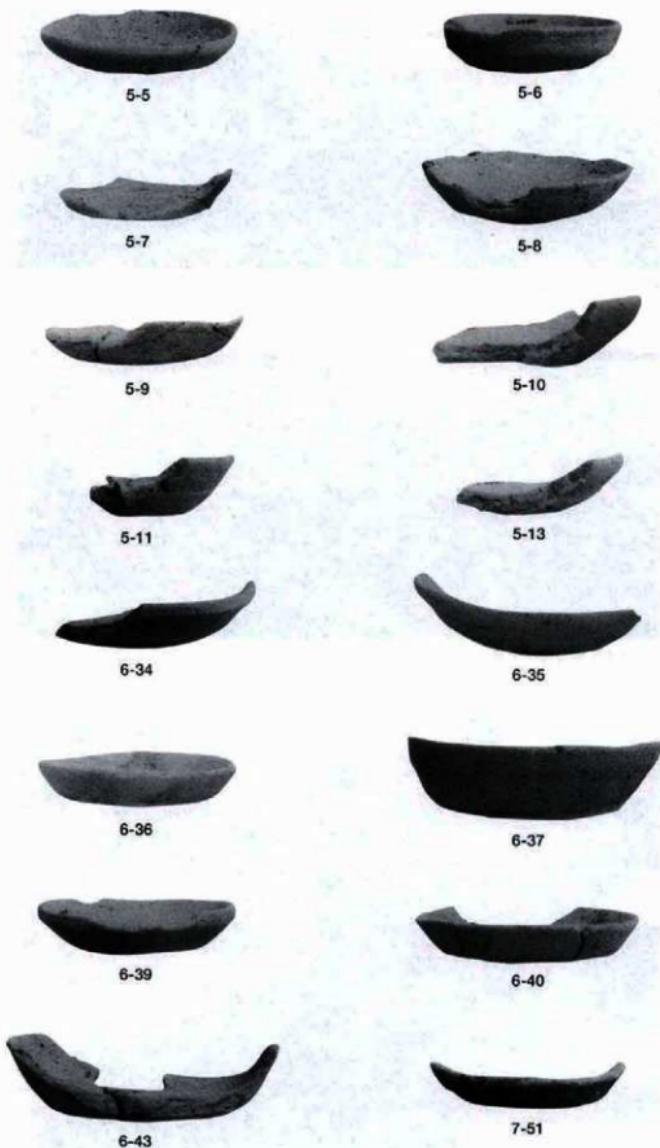


▲ 調査区南壁堆積土層



▲ 調査区西壁堆積土層

図版4



報告書抄録

| | | | | | | | |
|---------------------------|----------------------------------|------------------------------|--|--------------------------------|----------------------|--------|--------------------------|
| ふりがな | かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくし | | | | | | |
| 書名 | 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 | | | | | | |
| 副書名 | 平成15年度調査報告 | | | | | | |
| 巻次 | 20 (第2分冊) | | | | | | |
| シリーズ名 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | | | | | | | |
| 著者 | 降矢類子/福田誠/菊川泉/原廣志/伊丹まさか/馬西和雅/汐見一夫 | | | | | | |
| 編集機関 | 鎌倉市教育委員会 | | | | | | |
| 所在地 | 〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2004年3月31日 | | | | | | |
| ふりがな | ふりがな | | | | | | |
| 所取遺跡名 | 所取遺跡名 | | | | | | |
| 所在地 | 市町村 遺跡番号 | | | | | | |
| 北緯 | 東経 | | | | | | |
| 調査期間 | 調査面積 (m ²) | | | | | | |
| 調査原因 | | | | | | | |
| おおくらばくしゅうへいせき 大倉幕府周辺遺跡 | 神奈川県鎌倉市 雪ノ下三丁目 607番1 | 14204 49 | 35° 19° 13° 43° | 139° 33° 43° | 20011108 20011222 | 43.66 | 自己用店舗 使用住宅 (軒崩壊造成) |
| よここうじゅうへいせき 横小路周辺遺跡 | 神奈川県鎌倉市 神奈川丁目F 323番外 | 14204 259 | 35° 19° | 139° 34° | 20011217 20011227 | 15.00 | 個人専用 住宅 (軒崩壊造成) |
| みょうはんじゅうへいせき 妙本寺遺跡 | 神奈川県鎌倉市 大町一丁目 114番1号 | 14204 232 | 35° 18° 50° | 139° 33° 59° | 20020107 ~ | 105.00 | 個人専用 住宅 |
| みょうはんじゅうへいせき 妙本寺遺跡 | 神奈川県鎌倉市 大町一丁目 114番2号 | 14204 232 | 35° 18° 48° | 139° 33° 30° | 20020917 20020926 | 28.50 | 個人専用 住宅 (軒崩壊造成) |
| しんせんこうじゅうへいせき 新善光寺跡 | 神奈川県鎌倉市 材木町原丁目 573番1号外 | 14204 279 | 35° 18° 13° | 139° 33° 36° | 20020107 ~ | 45.00 | 個人専用 住宅 (軒崩壊造成) |
| だいやまいせき 台山遺跡 | 神奈川県鎌倉市 山ノ内下小路 819番1号外 | 14204 29 | 35° 20° 10° | 139° 32° 35° | 20020101 ~ | 12.00 | 個人専用 住宅 (廻廊及び井戸) |
| さきめいせき 坂目遺跡 | 神奈川県鎌倉市 坂町 330番1号外 | 14204 207 | 35° 18° 46° | 139° 32° 42° | 20020101 ~ | 43.50 | 個人専用 住宅 (軒崩壊造成) |
| おおくらばくしゅうへいせき 大倉幕府周辺遺跡 | 神奈川県鎌倉市 雪ノ下三丁目 567番7 | 14204 49 | 35° 19° 11° | 139° 33° 56° | 20020625 20020722 | 25.00 | 個人専用 住宅 (軒崩壊造成) |
| よここうじゅうへいせき 長谷小路周辺遺跡 | 神奈川県鎌倉市 山北町一丁目 191番50 | 14204 236 | 35° 18° 34° | 139° 32° 39° | 20020701 ~ | 51.75 | 個人専用 住宅 (軒崩壊造成) |
| ほうじょうまざむらわらしきと 北条政村屋敷跡 | 神奈川県鎌倉市 常盤台松下 1005番2 | 14204 131 | 35° 18° 05° | 139° 31° 59° | 20020723 20020809 | 28.19 | 個人専用 住宅 (地下室) |
| なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡 | 神奈川県鎌倉市 大町六丁目 1708番4号の延 | 14204 231 | 35° 18° 39° | 139° 31° 00° | 20020727 ~ | 27.29 | 車庫の築造 |
| 所取遺跡名 | 種別 | | | | | | |
| | 主な時代 | | | | | | |
| | 主な遺構 | | | | | | |
| | 主な遺物 | | | | | | |
| | 特記事項 | | | | | | |
| おおくらばくしゅうへいせき 大倉幕府周辺遺跡 | 都 市 | 13世紀中頃 15世紀 | 土塀、溝跡 井戸跡、柱穴 | かわらけ、瓦 瓦被陶瓦浴 国産瓦器 | | | |
| よここうじゅうへいせき 横小路周辺遺跡 | 都 市 | 鎌倉 時 代 | 土壤 | かわらけ、瓦 白磁 | | | |
| みょうはんじゅうへいせき 妙本寺遺跡 | 社 寺 | 鎌倉 時 代 | 建物跡、溝跡 | かわらけ、瓦 青磁、瓦 | | | |
| みょうはんじゅうへいせき 妙本寺遺跡 | 社 寺 | 空司 時 代 | 土壤、柱穴跡 | かわらけ、瓦 瓦被、瓦 | | | |
| しんせんこうじゅうへいせき 新善光寺跡 | 社 寺 | 鎌倉 時 代 | 土壤、溝跡 | かわらけ、瓦 瓦被、瓦 | | | |
| だいやまいせき 台山遺跡 | 集 落 | 15世紀 | 土壤、柱穴跡 | かわらけ、瓦 瓦被 | | | |
| さきめいせき 坂目遺跡 | 都 市 | 13世紀後葉 14世紀後葉 | 建物跡、土壤 | かわらけ、常滑、残 柱頭、青白磁、瓦被、 なた形 | | | |
| おおくらばくしゅうへいせき 大倉幕府周辺遺跡 | 都 市 | 弥生時代中・後期 13世紀中頃～ 15世紀代 | 土壤、柱穴跡、溝跡 井戸、かわらけ溝 井戸、瓦、瓦被、 瓦被、瓦子 | かわらけ上器、かわら け、瓦、瓦被、 瓦被、瓦子 | | | |
| よここうじゅうへいせき 長谷小路周辺遺跡 | 都 市 | 13世紀半頃 15世紀初頭 | 建物跡、土壤 | 土器窓、かわらけ、 瓦、骨董品 | | | |
| ほうじょうまざむらわらしきと 北条政村屋敷跡 | 城 館 | 律令制 12世紀末～ 15世紀代 | 土壤 | 土師器、埴輪器、白 瓦被、瓦被、漏斗、か わらけ | | | |
| なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡 | 都 市 | 13世紀中葉 14世紀初頭 | 土壤、柱穴 | かわらけ、青磁、常 滑、本瓦器、滑石器 品 | | | |

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20

平成15年度 発掘調査報告（第2分冊）

発行日 平成16年3月31日

編
発
行
集
行 鎌倉市教育委員会

印 刷 朝日オフセット印刷株式会社